

福井県埋蔵文化財調査報告 第88集

乗兼・坪江遺跡

— 県営担い手育成基盤整備事業に伴う調査 —

2006

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

この度、福井県坂井市（旧坂井郡丸岡町）に所在する乗兼・坪江遺跡の発掘調査報告書を、福井県埋蔵文化財調査報告 第88集『乗兼・坪江遺跡』として、刊行致します。

本遺跡の周辺には、古墳時代後期の越前において、継起した大首長の墓である椀袋山古墳や神奈備山古墳が近接して所在しています。また、古代には、東大寺領桑原荘が置かれた地域でもあります。そうした事実が如実に示すように、古くから坂井平野における水陸交通の要所でした。言い換えると、それは文物の移動や人びとの交流の舞台として開かれていた場所、とも表現できるかも知れません。

今回の発掘では、一部に縄文・室町時代を含み、奈良時代から平安時代を中心とする遺構・遺物が検出されるなど、複合遺跡であることが分かりました。とりわけ、古代の倉庫と思われる掘立柱建物跡群や、古代寺院に由来すると思われる瓦や水瓶・稜碗などの検出は、注目に値します。そのほか、県内ではなお発掘事例が稀な7世紀代の住居跡の存在も、見逃せません。

近年、坂井平野では、農業基盤整備事業に伴う各所の遺跡の発掘によって、考古資料が著しく充実しつつあります。今次調査もその一端を担うわけですが、各種の出土品が文化財の展示などで活用され、また、本書が地域史の調査などに広く利用されることを期待しています。同時に、そのことが多くの方がたに、郷土の歴史に対する興味をより一層深める契機となれば、誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、多大なご支援をいただいた福井県農林水産部、丸岡町の関係諸機関をはじめ、地元関係者の皆様がたに、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 中 司 照 世

例 言

1. 本書は、平成12年度に実施した坂井市（旧坂井郡）丸岡町乗兼および野江地区の担い手育成基盤整備事業に伴う乗兼・野江遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、福井県農林水産部坂井農村整備事務所（現坂井農林総合事務所）の依頼を受け、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した。調査は中川佳三（主査）・山本孝一（文化財調査員）・野澤雅人・持田透・深川義之（以上嘱託）が担当した。
3. 発掘調査は平成12年4月13日から平成13年3月31日まで実施した。また、出土遺物の整理作業は平成14年4月1日から平成18年3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
4. 本書の執筆は、中川・山本・田中勝之（主査）が分担し、編集は中川があたった。なお、執筆分担は本文目次および文末に記した。
5. 遺構の写真撮影は中川が、遺物写真は山本（縄文）・田中（石器および石製品）・中川（その他）が分担して撮影を行った。原色図版の遺物写真については、富山正明（主任）・鈴木篤英（主査）が撮影を行った。
6. 図面・写真等の資料は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。
7. 基本測量及び遺構空中写真は、株式会社イビソクに、遺構トレース業務については株式会社セビアスに委託して行った。
8. 本書の作成にあたって下記の方々にご指導・ご教示を賜った（敬称略）。
水野和雄（一乗谷朝倉氏遺跡資料館）・工藤俊樹（一乗谷朝倉氏遺跡資料館）・水村伸行（一乗谷朝倉氏遺跡資料館）・中野拓郎（敦賀市教育委員会）・中原義史（福井県立歴史博物館）
9. 発掘調査においては地元の方々のご協力を得た。また、遺物整理作業は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの作業員等がこれにあたったが、平成17年度の遺物整理は株式会社アイビックスに委託して作業を行った。

凡 例

1. 本書の挿図の縮尺は、挿図ごとに記す。
2. 本書における水系レベルの表示は海拔高を示し、方位は座標北（G・N）を用いた。また、X・Y座標値は国土方眼座標系第VI系に基づく。

3. 遺構実測図凡例

SB—掘立柱建物 SH—堅穴住居 SE—井戸 SK—土坑 SP—柱穴（柱穴と判別できない小遺構もこれを含む） SX—不明遺構

4. 遺物実測断面図凡例



— 須恵器



— 灰釉陶器



— 緑色陶器

それ以外の遺物実測断面は白抜き

5. 遺物実測図において、薄いスクリーントーンの表示は赤色顔料の塗布を、濃いスクリーントーンの表示は黒色土器を示す。
6. 遺物観察表中の遺物の色調については、農林水産省農林水技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を基準として用いた。
7. 遺物出土状況図の遺物取り上げ番号と出土遺物実測番号は一致するものではない。詳細な記載については遺物観察表を参照されたい。
8. 遺構土層観察文凡例

	A	B	C	D
しまり	強い	やや強い	やや弱い	弱い
粘性	強い	やや強い	やや弱い	弱い
鉄分	多い	やや多い	若干	
炭化物	多い	やや多い	若干	

9. 土器の器種名については、以下の文献に基づく。また、北陸古代土器研究会で使用するものも含む
 - ・田嶋明人「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』北陸古代土器研究会1988年
 - ・北野博司「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究』北陸古代土器研究会第8号1999年
10. 壺形土器・甕形土器などの表記に関しては、壺・甕などと省略する。

本文目次

頁

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	(中川) 1
第2節 調査の経過と概要	(#) 3
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	(中川) 7
第2節 歴史的環境	(#) 8
第3章 1区の調査	
第1節 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物	(中川) 11
第2節 飛鳥～平安時代の遺構と遺物	(#) 16
第3節 中世の遺構と遺物	(#) 21
第4節 その他の遺構と遺物	(#) 30
第4章 2区の調査	
第1節 縄文時代の遺構と遺物	(山本) 31
第2節 飛鳥～平安時代の遺構と遺物	(中川) 40
第3節 その他の遺構と遺物	(#) 78
第5章 3区の調査	
第1節 縄文時代の遺構と遺物	(山本) 79
第2節 弥生時代の遺構と遺物	(#) 86
第3節 飛鳥～平安時代の遺構と遺物	(中川) 88
第4節 その他の遺構と遺物	(#) 125
第6章 遺構と遺物の検討	
第1節 飛鳥時代～平安時代にかけての須恵器・土師器の編年的位置付け	(中川) 161
第2節 遺構の変遷	(#) 166
第3節 縄文式土器について	(山本) 169
第4節 石器と石製品	(田中) 177
第7章 まとめ	(中川) 179

原色図版目次

原色図版第1 航空写真

- (1) 調査区全景 (南から)
- (2) 調査区全景 (北から)

原色図版第2 出土遺物

- (1) 2区SK-21出土遺物
- (2) 2区・3区奈良時代～平安時代出土遺物

図版目次

図版第1 遺構 1区 (1)

- (1) 1区 調査区西側
- (2) 1区 調査区中央

図版第2 遺構 1区 (2)

- (1) 1区 調査区東側
- (2) SH-01 (西から)
- (3) SB-01 (西から)

図版第3 遺構 1区 (3)

- (1) 表土剥ぎ
- (2) 作業風景
- (3) SE-03 上層遺物出土状況
- (4) SE-03 下層遺物出土状況
- (5) SE-04
- (6) SK-35
- (7) SP-170
- (8) SP-359

図版第4 遺構 2区 (1)

- (1) 2区 調査区全景
- (2) 2区 下層遺構
- (3) SP-589 遺物出土状況
- (4) SP-590
- (5) SP-638 遺物出土状況

図版第5 遺構 2区 (2)

- (1) 2区 上層遺構
- (2) SB-09 (南から)
- (3) SB-08 (西から)

図版第6 遺構 2区 (3)

- (1) SB-10 (南から)
- (2) SK-30 遺物出土状況
- (3) SK-21・22・23・24・25
遺物出土状況
- (4) SD-01 遺物出土状況
- (5) SD-01 遺物出土状況
- (6) SD-01 遺物出土状況

図版第7 遺構 3区 (1)

- (1) 3区 調査区全景
- (2) SH-01 上層断面
- (3) SH-01 (南から)
- (4) SH-03 (南から)
- (5) SH-04 (南から)

図版第8 遺構 3区 (1)

- (1) SH-06・07 (南から)
- (2) SH-08 (北から)
- (3) SH-09 (東から)
- (4) SB-06 (北から)
- (5) 3区 調査区北側

図版第9 遺構 3区 (3)

- (1) 作業風景
- (2) SE-01
- (3) SE-01 井戸側出土状況
- (4) SK-03・07 遺物出土
状況

	(5) SK-26 遺物出土状況	図版第16 遺物 2区(3)
	(6) SK-39・40	図版第17 遺物 2区(4)
	(7) SK-41 遺物出土状況	図版第18 遺物 2区(5)
	(8) SK-34・35 遺物出土 状況	図版第19 遺物 2区(6)
図版第10	遺構 3区(4)	図版第20 遺物 2区(7)
	(1) SP-248 遺物出土状況	図版第21 遺物 2区(8)
	(2) SP-218 遺物出土状況	図版第22 遺物 2区(9)
	(3) SP-218 遺物出土状況	図版第23 遺物 2区(10)
	(4) SP-1139 遺物出土状況	図版第24 遺物 2区(11)
	(5) SD-01 土層断面	図版第25 遺物 3区(1)
	(6) SD-01 土層断面	図版第26 遺物 3区(2)
	(7) SD-02 土層断面	図版第27 遺物 3区(3)
	(8) SD-03 土層断面	図版第28 遺物 3区(4)
図版第11	遺物 1区(1)	図版第29 遺物 3区(5)
図版第12	遺物 1区(2)	図版第30 遺物 3区(6)
図版第13	遺物 1区(3)	図版第31 遺物 3区(7)
図版第14	遺物 2区(1)	図版第32 遺物 3区(8)・墨書土器
図版第15	遺物 2区(2)	図版第33 墨書土器・石器と石製品(1)
		図版第34 石器と石製品(2)

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図	2	第14図	SK-03(26)・08・09(35・41)・15 (45)・23(20・43)・38(42), SP-121 (44), SD-05(19・21~25・27~34・36~40) 出土遺物実測図	17
第2図	グリット配置図	3	第15図	包含層出土遺物実測図(1)	18
第3図	乗兼・坪江遺跡の位置図	7	第16図	包含層出土遺物実測図(2)	19
第4図	周辺における主要遺跡分布図	9	第17図	SE-02平面図・土層図	21
第5図	1区遺構配置図	12	第18図	SE-03, SK-23平面図・土層図	21
第6図	SH-01平面図・土層図	13	第19図	SE-03出土遺物実測図(1)	22
第7図	SH-01出土遺物実測図	13	第20図	SE-03出土遺物実測図(2)	23
第8図	SD-28, SK-35平面図・土層図	14	第21図	SE-04平面図・土層図	23
第9図	SK-35出土遺物実測図	14	第22図	SE-04出土遺物実測図	24
第10図	SP-359遺物出土状況・土層図	14	第23図	SK-01・02平面図・土層図	24
第11図	SP-359出土遺物実測図	14	第24図	SK-04平面図・土層図	25
第12図	SE-05(10), SK-34(9), SP-36 (6)・269(8)・290(11), SD-05(7・ 12・13)・27(14)・包含層出土遺物実測図	15	第25図	SK-01・02(93・94・96・98)・04(95・97)	
第13図	SB-01・02平面図・断面図	16			

	出土遺物実測図……………25	第55図	S K-13・17・18平面図・断面図…48
第26図	S K-05平面図・土層図……………25	第56図	S K-13出土遺物実測図……………48
第27図	S K-08・09平面図・土層図……………26	第57図	S K-21・22・23・24・25平面図・土層図……………49
第28図	S P-95平面図・土層図……………26	第58図	S K-21出土遺物実測図……………50
第29図	S P-95出土遺物実測図……………26	第59図	S K-21(237~243・245~247・249~261)・22(244・248・262)・23(263~266)出土遺物実測図……………51
第30図	S P-111平面図・土層図……………26	第60図	S K-29出土遺物実測図……………52
第31図	S A-01, S D-05平面図・土層図…27	第61図	S K-30平面図・断面図……………52
第32図	S K-16(120)・23(109), S P-96(114)・170(118・119・121)・171(111)・181(100)・184(101)・200(112)・207(113)・223(105)・267(107)・292(103), S D-04(108)・05(102・106・110・115・116)・15(117)・24(104)出土遺物実測図……………28	第62図	S K-30出土遺物実測図……………52
第33図	包含層出土遺物実測図……………29	第63図	S K-31平面図・土層図……………53
第34図	S D-04(151)・05(142~148・150)・16(149)・包含層出土遺物実測図……………30	第64図	S K-31出土遺物実測図(1)……………53
第35図	2区下層(縄文時代)遺構配置図……………32	第65図	S K-31出土遺物実測図(2)……………54
第36図	下層遺構(縄文時代)平面図・土層図…33	第66図	S K-32平面図・土層図……………54
第37図	その他の遺構出土遺物(1)……………34	第67図	S K-32出土遺物実測図……………54
第38図	その他の遺構出土遺物(2)……………35	第68図	S D-01遺物出土状況図・土層図…56
第39図	その他の遺構出土遺物(3)……………37	第69図	S D-01出土遺物実測図(1)……………57
第40図	その他の遺構出土遺物(4)・包含層出土遺物……………38	第70図	S D-01出土遺物実測図(2)……………58
第41図	2区上層遺構配置図……………39	第71図	S D-01出土遺物実測図(3)……………59
第42図	S B-01平面図・断面図……………40	第72図	S D-01出土遺物実測図(4)……………60
第43図	S B-01出土遺物実測図……………41	第73図	S D-01出土遺物実測図(5)……………62
第44図	S B-02平面図・断面図……………41	第74図	S D-01出土遺物実測図(6)……………63
第45図	S B-02出土遺物実測図……………41	第75図	S D-01出土遺物実測図(7)……………64
第46図	S B-03平面図・断面図……………42	第76図	S D-01出土遺物実測図(8)……………65
第47図	S B-03出土遺物実測図……………42	第77図	S D-01出土遺物実測図(9)……………66
第48図	S B-04・05平面図・断面図……………43	第78図	S D-01出土遺物実測図(10)……………68
第49図	S B-06平面図・断面図……………44	第79図	S D-01出土遺物実測図(11)……………69
第50図	S B-07平面図・断面図……………44	第80図	S D-01出土遺物実測図(12)……………70
第51図	S B-08平面図・断面図……………45	第81図	S D-01出土遺物実測図(13)……………70
第52図	S B-08出土遺物実測図……………45	第82図	S D-02土層図……………71
第53図	S B-09平面図・断面図……………46	第83図	S D-02出土遺物実測図……………72
第54図	S B-10平面図・断面図……………47	第84図	S D-03(513~516)・04(517~519)出土遺物実測図……………73
		第85図	S K-01(529)・03(526)・04(521)・07(523)・27(524)・36(530)・37(520)・S P-38(531)・80(532)・109(522)・396(527)・S D-06(525)・S P-

	114・115(528)出土遺物実測図……………73		719)出土遺物実測図……………108
第86図	包含層出土遺物実測図(1)……………74	第123図	S K-26平面図・土層図……………109
第87図	包含層出土遺物実測図(2)……………76	第124図	S K-26出土遺物実測図……………109
第88図	その他出土遺物実測図……………78	第125図	S K-28平面図・土層図……………110
第89図	3区遺構配置図……………80	第126図	S K-28出土遺物実測図……………110
第90図	S P-1139平面図・土層図……………81	第127図	S K-32平面図・土層図……………110
第91図	縄文時代の遺構出土遺物(1)……………82	第128図	S K-34・35平面図・土層図……………111
第92図	縄文時代の遺構出土遺物(2)……………83	第129図	S K-34(737・739・740)・35(736)出土遺物実測図……………111
第93図	縄文時代の包含層出土遺物……………84	第130図	S K-39・40平面図・土層図……………112
第94図	縄文時代・弥生時代の包含層出土遺物……………85	第131図	S K-41平面図・土層図……………113
第95図	弥生時代の遺構出土遺物……………86	第132図	S K-41出土遺物実測図……………113
第96図	S H-01平面図・断面図……………88	第133図	S P-218平面図・土層図……………114
第97図	S H-01出土遺物実測図……………89	第134図	S P-218出土遺物実測図……………114
第98図	S H-03平面図・断面図……………90	第135図	3区遺構配置図……………115
第99図	S H-04・05平面図・土層図……………91	第136図	S D-01・02・03土層図……………115
第100図	S H-06平面図・断面図……………92	第137図	S D-01(750~764・773)・02(765~770)・03(771-772-774~776)出土遺物実測図……………116
第101図	S H-07平面図・断面図……………93	第138図	S K-06(787)・27(784)・29(781・788)・37(790)・59(792)・S P-21(786)・129(778)・143(783)・501(785・791)・599(782・789)・792(780)・1236(777)・S D-23(779)出土遺物実測図……………117
第102図	S H-08平面図・断面図……………94	第139図	S K-05(796・798・799・805・806)・09(794)・37(795)・70(813)・72(821)・S D-09(793)・14(803)・23(818・820)・25(817)・26(819)・S P-34(808)・35(816)・45(797)・49(809)・104(811)・113(804)・147(807)・208(810)・261(800)・359(802)・501(801)・700(815)・876(814)・1318(812)出土遺物実測図……………118
第103図	S H-09平面図・断面図……………95	第140図	包含層出土遺物実測図(1)……………120
第104図	S H-09出土遺物実測図……………95	第141図	包含層出土遺物実測図(2)……………122
第105図	S H-10平面図・断面図……………96	第142図	包含層出土遺物実測図(3)……………123
第106図	S H-10出土遺物実測図……………96	第143図	立ち合い調査出土遺物実測図……………124
第107図	S B-01平面図・断面図……………97		
第108図	S B-01出土遺物実測図……………98		
第109図	S B-02平面図・断面図……………99		
第110図	S B-03平面図・断面図……………100		
第111図	S B-03出土遺物実測図……………101		
第112図	S B-04平面図・断面図……………101		
第113図	S B-05平面図・断面図……………102		
第114図	S B-05出土遺物実測図……………102		
第115図	S B-06平面図・断面図……………103		
第116図	S B-07・08平面図・断面図……………104		
第117図	S A-01平面図・断面図……………105		
第118図	S E-01平面図・土層図……………106		
第119図	S E-01出土遺物実測図(1)……………106		
第120図	S E-01出土遺物実測図(2)……………107		
第121図	S K-03・07平面図・土層図……………108		
第122図	S K-03(705・706・720・721)・07(707~		

第144図	S P-501(935)・1140(932)・S D-14(930)・S X-01(937)・その他包含層出土遺物実測図……………125	第149図	土師器・その他の土器編年……………164
第145図	S K-02(948)・S P-753(949)・1607(944)・その他包含層出土遺物実測図……………126	第150図	堅穴住居の方位……………166
第146図	須恵器編年(1)……………161	第151図	飛鳥時代の遺構変遷 (S=1:1,500)……………166
第147図	須恵器編年(2)……………162	第152図	掘立柱建物の方位……………167
第148図	須恵器編年(3)……………163	第153図	奈良時代～平安時代の遺構変遷 (S=1:1,500)……………168
		第154図	有文土器分類図……………171
		第155図	無文土器分類図……………172

表 目 次

第1表	1区掘立柱建物一覧……………17
第2表	2区掘立柱建物一覧……………42
第3表	3区堅穴住居一覧……………89
第4表	3区掘立柱建物一覧……………98
第5表	出土遺物観察表……………127
第6表	時期区分表……………161
第7表	縄文時代の石器組成表……………177
第8表	石器と石製品の観察表……………178

写 真 目 次

写真①	1・2区発掘調査……………4
写真②	3区発掘調査……………5

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

坂井市（旧坂井郡）丸岡町に所在する乗兼・坪江遺跡は、丸岡町の北側に位置し、竹田川の右岸に展開する遺跡である。本遺跡周辺には、越前地方の大首長墓にあげられる腕袋山古墳・神奈備山古墳を有する横山古墳群や発掘調査によって歴史的意義が長屋遺跡・河和田遺跡などの遺跡が数多く存在し、また、縄文時代から中世にわたる多くの遺物が表採されている場所でもある。

近年、ウルグアイ・ラウンド農業交渉を契機に、大規模圃場整備が全国的に行われるようになっていく。福井県内でも同様で、県内の穀倉地帯でもある坂井平野を中心とした地域で事業が実施されている。これらの状況をうけて、丸岡町坪江地区（乗兼・坪江・堀水・里竹田集落地区）でも、約387,330㎡にわたる範囲を対象に、県営担い手育成基盤整備事業の計画が進められた。この事業に先立ち、事業範囲内の埋蔵文化財の有無について確認された。その結果、『福井県遺跡地区』にある「乗兼・坪江遺跡」・「堀水遺跡、里竹田遺跡」が含まれていることが判明した。このことにより、福井県坂井農村整備事務所から県埋蔵文化財調査センターに試掘調査依頼があった。当センターではこれを受け、事業対象区における稲や麦などの作付けの影響を考慮し、平成11年6月8日～11日と平成11年10月12日～22日2期間に分けて試掘調査を実施することになった。1回目の6月8日～11日間で調査を行った対象区域は乗兼集落北側の約83,330㎡で、試掘調査箇所は55箇所を設定し調査を行った。ちなみに、1箇所の調査範囲は2m×2mの約4㎡で、重機による掘削を基本とした。1回目の試掘調査の結果、約83,330㎡のうち49,900㎡が本調査の必要があると判断された。また、10月12日～22日までの間行われた2回目の試掘調査では、前回試掘対象範囲以外の約304,000㎡が対象範囲で、試掘調査の結果、約53,000㎡の範囲について本調査が必要であると判断された。1回目と2回目の試掘調査が必要となった本調査面積は合わせて約102,900㎡となり、膨大な調査面積となった。これについて坂井農村整備事務所と当センターの間で協議・調整が行われることになり、102,900㎡もの範囲の本調査を行うことは時間的にも金銭的にも困難であると判断され、再度事業の計画の見直しが行われ、坂井農村整備事務所によって図られた。その結果、工事については、掘削範囲や深度を極力避け、遺構の削平がないように変更された。変更結果を受けて再度調査範囲の精査を行うことになり、以下のように調査範囲が取り決められた。本調査が約4,695㎡、立会い調査が約1,930㎡となった。立会い調査になった範囲は、遺構や遺物が希薄と判断された場所である。また、立会い調査は、諸事により本体工事を行う際に当センター調査員がその場に立会い、遺構及び遺物の有無を確認することになった。遺構・遺物が検出された場合には、一端工事を中止し調査員の指示に従い、然るべき対応をとることとなった(註1)。

調査期間については、工事や畑畑耕作の関係から平成12年4月に本調査を開始し、翌平成13年3月までに調査を終了するという事で調整が図られた。実質1年間の発掘調査期間となった。（中川）



第1図 調査区位置図

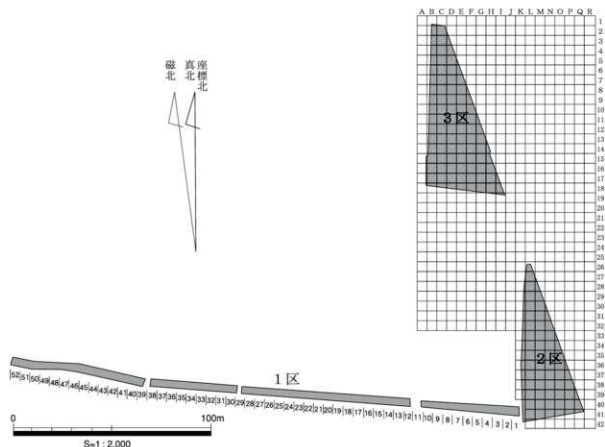
第2節 調査に至る経緯

平成11年度の試掘調査の結果をもとに平成12年4月13日～平成13年3月31日まで発掘調査を実施した。

調査地点は、第1節の協議・調整が図られた3つの地区について調査することとなった。それぞれを便宜上1・2・3区（第1図）と定めて調査を行った。調査面積は1区約770㎡、2区約1,275㎡、3区約2,650㎡の計約4,695㎡になった。調査は1区から順次開始した。ちなみに、表土剥ぎは重機を使用して除去した。

1区 4月13日から表土剥ぎ（田んぼの床土）を行った。グリッドの設定（第2図）は表土剥ぎの後、東西方向に長い調査区に沿って5m間隔でグリッドを設置していった。調査区東から1グリッドとし、調査区西側の53グリッドまでとなった。調査は東から西に向かって掘り進めていった。調査区中盤21～32グリッドにかけては湿地帯となっており、遺構・遺物は希薄であった。また、37グリッド以降は厚大の砂利層が堆積し、旧河川敷の様相を呈していた。1区は6月17日に航測写真撮影を行い、一部、残りの遺構掘削及び図面作成を行い6月22日をもって1区の調査を終了した。

2区 2区は1区の調査終盤（6月12日～14日）から表土剥ぎを開始した。1区と同様に表土剥ぎ終了後にグリッド杭の設置を行った。グリッドは国家座標に従って5m四方の設定を行った。グリッドは3区も同時に設定し、同様に国家座標に従った。北から南に1・2・3…42グリッドとなり、西から



第2図 グリッド配置図

東に向かってA・B・C…Rグリットとした。ちなみに、2および3区のグリットについては「A-5」グリットというように表記する。2区のグリットは東西列でK～Rグリット、南北で26～42グリットとなる。調査は北側から南側に向かって掘削作業を進めていった。調査区のほぼ中央に東方向から西方向に流れる旧河川（SD-01）が検出され、この河川を境に北側遺構と南側遺構の配置状況の相違が看取できた。また、SD-01からは多くの遺物が検出された。奈良・平安時代を中心とする上層遺構の調査は10月12日までにほぼ終了し、航測写真撮影を行った。2区は縄文時代を中心とする下層遺構がSD-01から南側に展開していることが判明し、急遽掘り下げ作業に入った。ちなみに、SD-01より北側の部分は大きく削平されており、下層遺構の有無は明確に確認することができなかった。下層遺構の遺構平面実測については（株）イビソクに3次元測量の委託を行った。11月6日をもって下層遺構の調査を終了した。

3区 3区の表土剥ぎは2区の表土剥ぎと同時進行で行った（6月12日～14日）。また、前述したようにグリットの設定においても2区と同様国家座標をもとに設置した。3区のグリットは東西列でA～Iグリット、南北で1～19グリットとなる。調査は2区同様に北側より掘削作業に入った。3区の遺構は予想していた以上に遺構密度が濃く、また、例年に無く雪や雨が多く降ったため、予定期間内に調査を終了させるのに困難を要した。3月14日に航測写真撮影を行い、一部残っていた遺構掘削を3月23日までに済ませ、この日をもってすべての作業を終了した。



(1) 1区 作業風景



(3) 1区 SE-04 作業風景



(2) 1区 SH-01 作業風景



(4) 2区 SD-01 作業風景

写真① 1・2区発掘調査

調査日誌（抄録）

平成12年

- 4月13日 1区 重機による表土（田んぼ床土）の除去作業（～14日）。
- 4月17日 この日から作業員を入れて調査区東側より包含層掘削作業を開始。
- 4月19日 1区 任意のグリット杭を打つ（後日正確な杭を設定し直す）。
- 4月24日 1区 SK-04・05を半載。
- 4月25日 1区 SD-05セクションベルト設定し、掘削作業開始。SK-04より硯出土。
- 5月17日 1区 1～4G内の遺構完掘。
- 5月19日 1区 SH-01、SB-01・02などの遺構検出。
- 5月29日 1区 17Gまでの遺構はほぼ完掘。22

- ～25G内の中世以降の素掘り溝の掘削。
- 6月1日 1区 SE-04完掘。
- 6月10日 1区 18～20Gまでの遺構半載。
- 6月16日 2・3区 グリット杭の設置及び基本測量。
- 6月17日 1区 SH-01完掘。航測写真撮影。
- 6月19日 2区 調査区北側から包含層掘削作業開始。
- 6月20日 1区 SH-01・SB-01・02図面作成。
- 6月21日 1区 SD-05完掘。
- 6月22日 1区 図面作成及び遺物取り上げ。1区作業終了。
- 7月7日 2区 調査区北側から遺構精査作業開始。



(1) 遺構検出作業



(3) SH-06



(2) SK-34・35 作業風景



(4) 実測作業風景

写真② 3区発掘調査

7月21日	2区	SD-01セクション畦を設定し、掘り下げ作業開始。	11月16日	3区	SD-01・02掘削開始。
7月31日	2区	SD-02掘削作業開始。	11月30日	3区	SB-01～03遺構検出確認。
8月3日	2区	SD-03完掘。SD-01より円面硯検出。	12月5日	3区	SK-03・07完掘。
8月29日	2区	SD-01遺物取り上げ。	12月9日	3区	SK-26、SH-03完掘。写真撮影。
9月6日	2区	SB-01～04の遺構平面及びエレベーション図作成。	12月21日	3区	SP-218出土遺物写真撮影。遺物取り上げ。
9月8日	2区	SD-01完掘。	12月22日	3区	SH-01完掘。写真撮影。
9月27日	2区	SK-21完掘。SB-05～10の遺構検出確認。	平成13年		
10月3日	2区	SD-02完掘。	1月22日	3区	SB-08、SK-39・40遺構検出。
10月5日	2区	丸岡町平草小学校生徒発掘体験。	2月14日	3区	SK-34・35完掘。写真撮影。
10月12日	2区	航測写真撮影。	2月19日	3区	SH-01・05完掘。写真撮影。
10月13日	3区	調査区北側から包含層掘削開始。	3月12日	3区	掘立柱建物及び堅穴住居の平板図作成。
10月17日	2区	SB-05～10完掘。	3月14日	3区	航測写真撮影。
10月19日	2区	下層遺構(縄文)検出作業開始。	3月19日	3区	SE-01完掘。写真撮影。井戸側取り上げ。
11月6日	2区	下層遺構(縄文)完掘。写真撮	3月23日	3区	遺構全景写真撮影。器材等を撤収し、すべての作業終了。

(中川)

(註)

- 1) 平成14年1月において、坂井農林総合事務所から丸岡町千田地区において県営園場整備工事を行うため、埋蔵文化財の確認調査依頼があった。工事範囲内に千田金附遺跡(遺跡番号13006)が該当するため、早急に協議が行われた。協議の結果、平成11年度において試掘調査を行った際に遺跡に該当する工事範囲の隣接地も調査を行っており、その試掘回答結果から遺構・遺物は希薄と判断されたため、千田地区においても立会い調査として取り扱うこととなった。

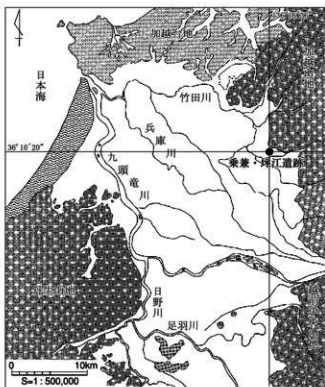
第2章 遺跡の位置と環境

兼兼・坪江遺跡は、福井県北部の坂井市（旧坂井郡）丸岡町兼兼および坪江地区に所在する。本章では、坂井平野および本遺跡周辺の地理的環境と、主要な遺跡の歴史的環境について概観する。

第1節 地理的環境

本遺跡がある嶺北地方は、周囲を山に囲まれており、唯一北西で日本海に面して開いている。その開かれた開口部を含む福井県の北部地域の平野が、福井平野である。福井平野は、福井県最大の平野でもあり、平野の北部地域には九頭竜川とその支流である竹田川、兵庫川、田島川流域が展開する沖積平野が存在し、特にその平野部を坂井平野と呼称される。坂井平野は大きく3つの地形区分により成り立っている。東縁一帯は、加越山地より流出する諸河川の複合扇状地帯となり、平野中央部は氾濫原、西部は三角州が形成されている。また氾濫原や三角州上には、諸河川により比高差約0.5～1mの自然堤防および後背湿地が形成されている場所が多く存在する。現在見られる自然堤防や後背湿地帯は、これまで構造改善事業、河川改修事業などにより自然堤防の削平、河川流域の変更などが行われ、本来の地形・景観は著しく損なわれている。そして、地図上で詳細に復元することはほぼできない事態となっている。そのため、遺跡の正確な立地条件として不具合な場合もあるが、現河川流域より隔たる地域に位置する現集落と範囲が重なるように多くの遺跡が確認されており、この場合はかつての河川やその支流による自然堤防や微高地であった可能性が窺える。

本遺跡は、坂井平野の北東部に位置し、竹田川右岸の扇状地に展開する遺跡である。遺跡の標高は今回発掘した遺構確認面で約8.5～9.5m前後を測り、山際にある扇状地帯とはいえ標高は意外と低い。遺跡のある地域一帯は平安時代の「和名類聚鈔」に記載されている坪江郷(註1)に含まれていたと考えられる。一説には坪江の「つば」は、「くぼみ」を意味し、この地域といったが水をたたえる川の「淵」から由来している(註2)とある。ちなみに、本遺跡の約500m西側に所在する式内社「横山神社」の社記によると現在の坪江集落周辺を「坪が瀬」(註3)といって、竹田川の浅瀬を渡る所であったらしい。また、現兼兼集落から約400m南西方向にいった竹田川付近の小字に「蕎麦河戸」という地名が残っており、蕎麦などの穀物を集積し川船で運んだ、流れが緩やかな場所であったことを示している。(中川)



第3図 兼兼・坪江遺跡の位置図

第2節 歴史的環境

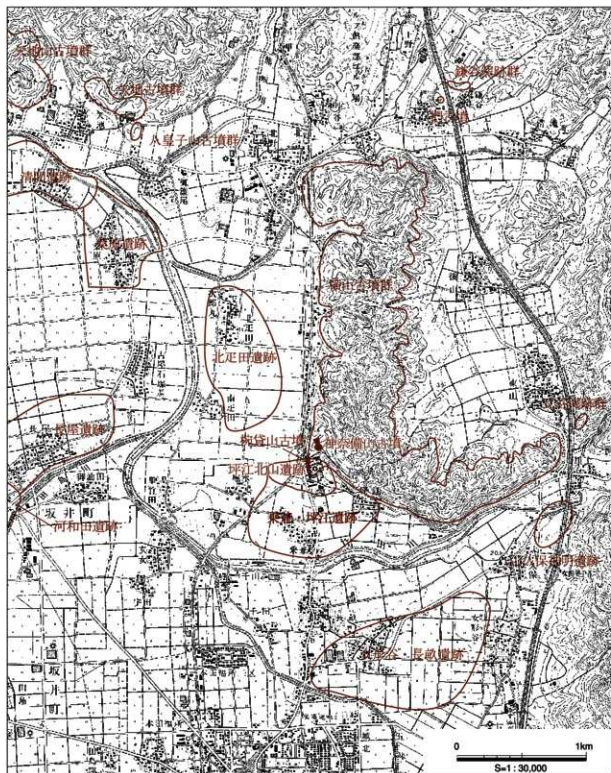
近年、福井県内において、開発行為に伴い遺跡の発掘調査が実施され、多くの資料が提示されてきている。しかし、各時代においてまだまだその様相は把握しがたい状況である。本節においては、本遺跡周辺の歴史的環境をこれまでの発掘調査事例を中心として概略していきたい。

乗兼・坪江遺跡（第3図）は、『福井県遺跡地図—平成4年度—』（註4）作成のために遺物採集調査が行われたときに、新たに確認された遺跡で、古墳時代から平安時代の遺物が採集されている。

縄文時代の発掘調査事例は本遺跡周辺ではないものの、山久保神明遺跡（註5）や的場遺跡（註6）・桑原西遺跡（註7）などで土器・石器などが採集されている。遺物は縄文時代中期以降に属するものである。

弥生時代の遺跡は、竹田川および田島川の自然堤防上を中心に営まれ、特に玉作り関連の遺物を伴う遺跡が多く確認されている。河和田遺跡（註8）は田島川の自然堤防上に所在し、早くから上田三平らによって遺物の収集・報告がなされている。本格的な発掘調査は昭和39年に國學院大學を中心に実施されている。調査の結果からは、弥生時代から古墳時代にかけての玉作り関連の遺物やそれに伴う土器などが検出されている。遺物は管玉および車輪石・石剣の未成品などが多数出土している。また、玉作り工房と考えられる遺構も検出されていて、北陸地方の玉作り関連遺跡として著名な遺跡である。河和田遺跡に連続する田島川の自然堤防上に長屋遺跡（註9）が所在する。長屋遺跡からは1985・1986年の発掘で弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての方形周溝墓群が検出されている。一方、竹田川の自然堤防上に位置する清間遺跡（註10）では、1995・1996年に金津町教育委員会によって発掘調査が行われている。調査結果から、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての遺物が多く検出されており、河和田遺跡同様に玉作り関連遺物も出土している。しかし、玉作り関連の工房跡については今回検出されていない。一方、この時期の墳丘墓は矢地山古墳群（註11）で確認できる。1998年に矢地山1号墳の調査が行われ、墳丘の径約30m、高さ約4mを測る弥生時代後期の円形墳丘墓であると想定されている。

古墳時代の遺跡は、長屋遺跡（註12）では、古墳時代後期～飛鳥時代にかけての住居とそれに伴う遺物が良好な状態で検出されており、この時期の基準資料になる遺跡である。また、遺物の中には手持勾玉や小玉・紡錘車・鉄鏃などが出土している。竹田川と五味川に挟まれた扇状地に位置する女形谷・長畝遺跡（註13）は、1999・2000年に県道改良工事に伴い発掘調査が実施されている。遺跡からは弥生時代後期～古墳時代前期の土師器や古墳時代終末～飛鳥時代にかけての須恵器・土師器が出土している。また、調査から掘立柱建物が3棟確認されている。そのうち布堀溝の基礎を有する建物1棟が弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての時期に該当する。一方、古墳については乗兼・坪江遺跡周辺で数多く確認されている。まず、県指定史跡の「横山古墳群」がある。総数310基前後を数える県内屈指の古墳群で、中でも越前地方の大首長墓と想定される梶袋山古墳（坪江1号墳）（註14）や神奈備山古墳（坪江4号墳）（註15）を擁している。梶袋山古墳は横山古墳群の南西端の山麓部平地に所在し、全長約45mで葺石・埴輪・周濠を有する前方後円墳である。埋葬施設は横穴式石室で石室内に遺骸安置施設の石屋形をもつ。古墳の所属時期は6世紀前半と考えられる。それと、梶袋山古墳の北方に位置し、横山丘陵の南西端頂部に所在する神奈備山古墳は、全長約60mを測る前方後円墳である。神奈備山古墳は2段築成で上段のみ葺石をもつ古墳である。また、丘陵上部に位置するため周濠はもたないものの墳丘下に基台部を備えていて、大首長墓にふさわしい外部施設をもつ。埋葬施設は梶袋山古墳同様に横穴式石室を呈し、また中部九州から北部九州系の地域色を有する石屋形も内蔵している。石室内からは多くの副葬品が検出されている。神奈備



第4図 周辺における主要遺跡分布図

山古墳に伴う遺物は、須恵器をはじめ小型銅鏡片・耳環・ガラス小玉・環頭大刀・鉄鏃・挂甲小札など豊富な内容のものである。築造年代は6世紀後葉に位置付けられる。上記の横山古墳群の北東方向の丘麓には、切石積み横穴式石室の埋葬施設を有する柵古墳(註16)がある。古墳は、県指定史跡で径約21mを測る古墳時代後期の円墳である。それと柵古墳の北東隣に所在する鎌谷窯跡(註17)が所在する。鎌谷窯跡の発掘調査はされていないが、須恵器や埴輪が採集されている。おそらく須恵器と埴輪の併焼窯と想定され、

6世紀前葉に操業されていたと考えられる。

律令時代は、長屋遺跡(註18)では弥生時代後期から連綿と続く遺跡で、律令時代においても、7世紀～9世紀代の遺物が確認されている。出土遺物の中には布目平瓦や葺椽などが報告されていて、注目に値する。長屋遺跡の北北東方向約2kmに桑原遺跡(註19)がある。遺跡は竹田川左岸の自然堤防上に位置し、東大寺領桑原荘の荘所に比定されている。桑原遺跡は圃場整備事業に伴って、1977年に発掘調査が実施されている。調査は限られた範囲の中で行われていることもあり、今回は桑原荘に関連する遺構や遺物は検出されていない。報告されている遺物からは、7世紀～9世紀にかけての遺物が少量出土している。女形谷・長畝遺跡からは、8世紀後半～9世紀初頭と9世紀後半～10世紀前半に属する大きく2時期に分かれる遺物が出土している。遺物は須恵器や土師器がその大半を占めるが、なかには布目瓦も出土していて、遺跡周辺に寺院跡が存在していたことを窺わせる。一方、律令時代における生産遺跡では瓦谷窯跡(註20)が、確認されている。窯跡は横山古墳群の東方山麓に所在し、乗兼・坪江遺跡からも直線距離で約2km東の方向に位置している。1～3号窯が確認されているが、そのうちの2号窯跡は、1970年に北陸自動車道建設工事に伴って緊急調査が行われた。窯体は、地下式無階無段宥窯で瓦陶兼業窯を呈する。遺物は、窯体内や灰原から出土していて、須恵器や瓦・鵜尾が確認されている。瓦は軒丸瓦や丸瓦・平瓦がある。2号窯は数回にわたって操業されていて、そのうち瓦は早い時期に焼かれたことが確認されている。その傍証として、窯体側壁の補修剤として瓦が使用されていたことで伺える。窯の操業時期は、概ね8世紀前半代に捉えられている。その他に律令時代における須恵器生産は、坂井平野の北側にある加越丘陵に多く存在し、大きく金津窯址群(註21)がとして括られている。操業時期は長く、概ね7世紀末～9世紀後葉まで生産が行われていた。おそらく、金津窯址群で生産された須恵器が乗兼・坪江遺跡を含む坂井平野に供給されていたと想定される。

以上、今回は律令時代までの遺跡について概略してきたが、中世以降も特に竹田川や田島川・五味川の自然堤防上を中心に遺跡が展開されていたと想起される。そのことについては、古墳を除き縄文時代から連綿と河川の自然堤防上に生活基盤が置かれていたことは想像に難くない。(中川)

(註)

- 1) 竹内理三 編 「角川日本地名大辞典」 1989年
- 2) 坂本豊 「金津町坪江の郷土史」 金津町教育委員会 1985年
- 3) 前掲註2
- 4) 『福井県遺跡地図—平成4年度—』 福井県教育委員会 1993年
- 5) 前掲註4
- 6) 木下哲夫他 「金津町埋蔵文化財調査概要 平成元年～五年度」 金津町教育委員会 1995年
- 7) 仁科章 「福井県における縄文時代の祭祀遺物資料集成(上)」 『福井県立博物館紀要』第7号 福井県立博物館 1998年
- 8) 寺村光晴 『福井県史』資料編13 考古福井県 1986年
- 9) 仁科章 『福井県埋蔵文化財調査報告13編 長屋遺跡』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1987年
- 10) 橋本久幸 『清間遺跡』『第11回発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1996年
- 11) 橋本久幸 『清間遺跡』『第12回発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1997年
- 12) 橋本久幸 『金津町埋蔵文化財調査報告書 第2集 遺跡発掘事前総合調査』 金津町教育委員会 2001年
- 13) 前掲註9
- 14) 田中勝之 『福井県埋蔵文化財調査報告68編 女形谷長畝遺跡』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003年
- 15) 青木豊明 『福井県史』資料編13 考古福井県 1986年
- 16) 中司照世 『腕袋山・神奈備山両古墳と横山古墳群』 『福井県立博物館紀要』第8号 福井県立博物館 2001年
- 17) 中司照世 『福井県史』資料編13 考古福井県 1986年
- 18) 中司照世 『腕袋山・神奈備山両古墳と横山古墳群』 『福井県立博物館紀要』第8号 福井県立博物館 2001年
- 19) 中司照世 『腕袋山・神奈備山両古墳と横山古墳群』 『福井県立博物館紀要』第8号 福井県立博物館 2001年
- 20) 久保智康 『越前・若狭における在地窯の出現』 『北陸古代土器研究』創刊号 1991年
- 21) 前掲註9
- 22) 仁科章 『桑原遺跡』 金津町教育委員会 1977年
- 23) 水野九右衛門・志田弥広 『瓦谷2号窯址発掘調査報告書(3)』 福井県教育委員会 1971年
- 24) 久保智康 『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題 報告編』 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988年

第3章 1区の調査

調査区は水路掘削工事によって破壊される部分を対象とし、東西方向に長さ約260m、南北方向に幅約4mの区域について調査を実施した。調査前の現状はそのほとんどが水田であったが、一部農道部分も含まれていた。1区の調査地は、表土（耕作土）を剥ぐとすぐに遺構が確認できた。このことは昭和30年代頃に行われた耕地整理時に、高地から低地に土砂の移動に伴う掘削工事が行われ、本調査区も掘削対象地であったためと考えられる。その一方で、22～32グリットにかけては若干の包含層が存在しており、本来この部分は湿地帯の低い箇所であったためと考えられる。ちなみに、22～32グリット間の主な遺構は、南北方向に流れる浅い溝であった。

1区の調査地は大きく4つの地域に分かれる。まず、1～21グリットまでは前述したように表土を剥ぐとすぐに遺構が確認できた。また、1～13グリット間は拳大の礫を多く含む層が遺構検出面になっており、おそらく1区の調査区のなかでも大量に掘削を受けた部分と考えられる。ちなみに、1～21グリットに関しては室町時代を中心とした遺構・遺物が検出された。14～18グリットで確認されたSD-05の河川は弥生時代から平安時代の間機能していたと考えられ、遺構・遺物の出土状況から室町時代には完全に埋まっていたと想定される。次に、22～32グリットにおいては、前述したとおり、湿地帯を呈し、遺構・遺物はほとんど確認することはできなかった。それから、33～36グリットでは遺構が集中して確認でき、おもに弥生時代～古墳時代と平安時代にかけての2時期の遺構・遺物が検出された。37グリットから西側地区に関しては、竹田川の旧河川敷と考えられ、拳大～人頭大の礫が堆積していた。上層には遺物が若干確認できたが、その下からは遺構・遺物の確認はできなかった。

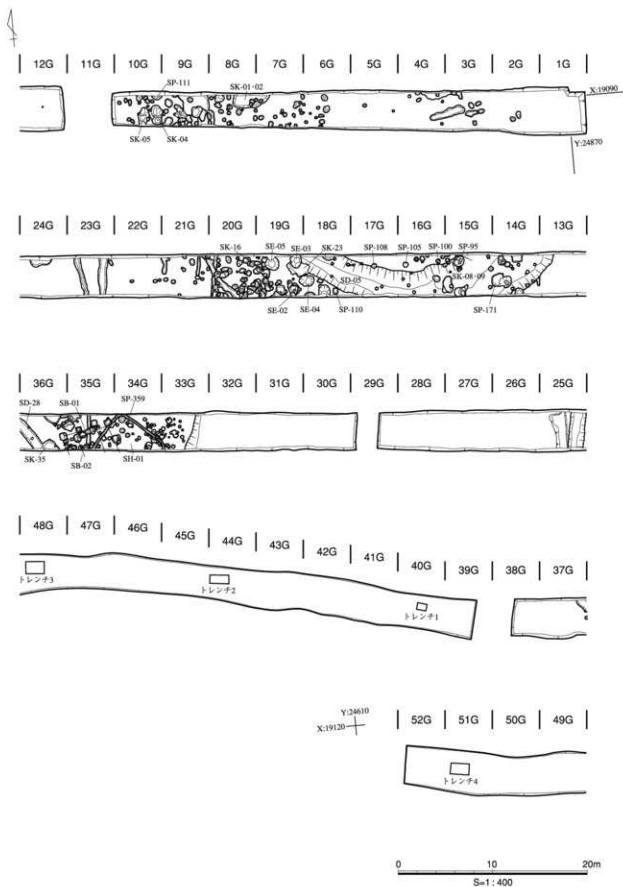
第1節 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

弥生時代～古墳時代に属する遺構は、33～37グリットにかけて多く認められた。遺物もその周辺を中心として出土しており、そのほとんどは弥生時代終末～古墳時代初頭に所属するものであった。この時期の集落も33～37グリットを中心とした地点に展開していたと推測される。

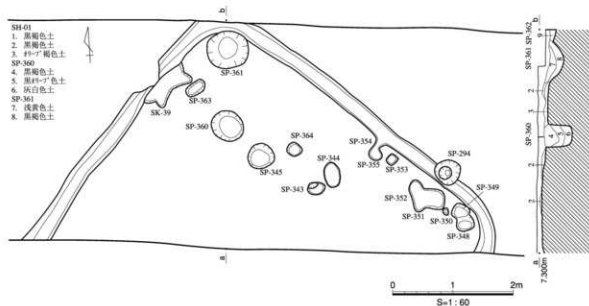
SH-01（第6・7図）

34・35グリットに位置しており、住居を含めた周辺には多くの小穴や浅い溝が検出された。平面形は隅丸方形を呈するが、南側半分が調査範囲外であるため住居の全容や規模は不明である。住居は北西～南東方向で6m前後を測る。壁の高さは検出面から0.1m前後あり、これに沿って幅0.25～0.3mの周壁溝が巡っている。住居内に大小の柱穴が確認できたが、明確な柱構成は不明であった。また、住居の硬化した床面は確認できなかったが、住居中央周辺に若干硬化した焼土が散在していた。これらの焼土跡は炉の痕跡であるかどうかは不明であった。住居の基本的な埋土は黒褐色土を呈する。図示できた遺物は1～3である。その他は小片のため図示できなかったが、埋土中には他の時代に属する遺物の混入はなかった。

1は口径約29.8cmを測る甕で、口縁部外面に擬凹線を施し、若干先細りさせる口縁部をもつ。2は底径約25.6cmを測る高坏の脚部である。受け部の可能性もある。3は玉作り関連遺物で、彫り段階の遺物である。石材は緑色凝灰岩である。



第5図 1区遺構配置図



第6図 SH-01平面図・土層図

上記以外の遺物も含めて、住居内から出土した遺物の所属時期は概ね弥生時代終末～古墳時代初頭の時期に相当する。

SK-35 (第8・9図)

36グリットで検出した土坑である。遺構の南側半分が調査区域外であるが、ほぼ円形を呈する。東西方向で約2m、深度は遺構検出面から0.3m前後を測る。遺構底部は平坦面を保つ。埋土は灰褐色のやや粘質の強い土が基本である。遺物の検出はほとんどみられなかったが、4が遺構最下層で出土している。

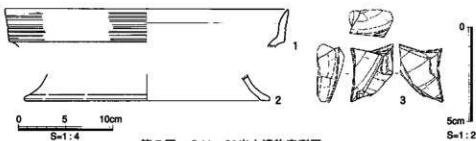
4は長さ約20.3cm、幅約11.8cmを測る、安山岩質の打製石斧である。打製石斧は隣接するSH-01の遺物と同時期であると考えられる。

SD-28 (第8図)

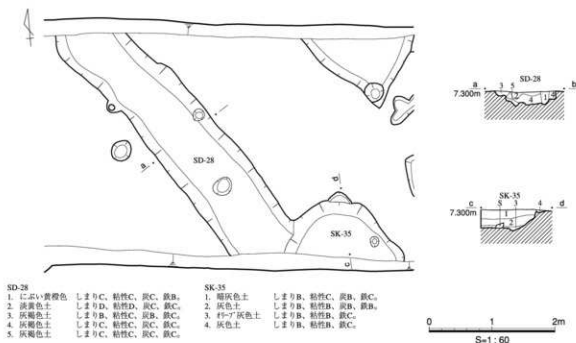
36グリットに位置し、北西～南東方向に流れをもつ溝である。溝の幅は1～1.2m前後を測り、やや浅いU字状の形状を有する。溝はSK-35にぶつかるが、遺構の新旧関係は不明であった。溝からは時期が判別できるような遺物は検出されなかった。

SP-359 (第10・11図)

34グリットに位置し、SP-358に隣接する。また、SH-01内の北側に存在する。遺構は径0.3～0.38mの楕円形を呈し、深さ0.1m前後を測る。埋土は黄灰色の若干粘性が強い土で、炭化物も少量含んでいた。遺物は埋土中層で検出され、脚部を欠いた状態の高坏が出土している。遺物5は、口径約24cmで内外面に赤彩が施されている。遺物の所属時期は、上記のSH-01で出土している遺物より新しく古墳時代前期に相当する。おそらく、



第7図 SH-01出土遺物実測図

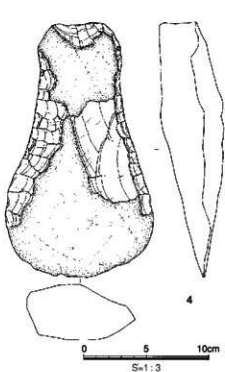


第8図 SD-28,SK-35平面図・土層図

SH-01の住居が廃絶した後にSP-359が構築されたと考えられる。

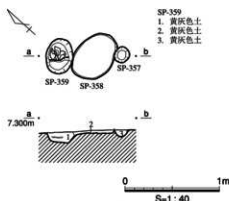
その他の遺構・包含層出土遺物 (第12図)

6~8は口縁外面に擬凹線を有する弥生土器の甕である。6は口径約15.6cmを測り、口縁端部を丸くおさめ直立する。擬凹線は4条確認できる。7は口縁端部がやや外方向に伸び先細りするものである。口径約15.8cmを測り、擬凹線は7条認められる。8は口径が約11.8cmで小さく、壺の可能性が考えら

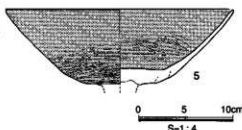


第9図 SK-35出土遺物実測図

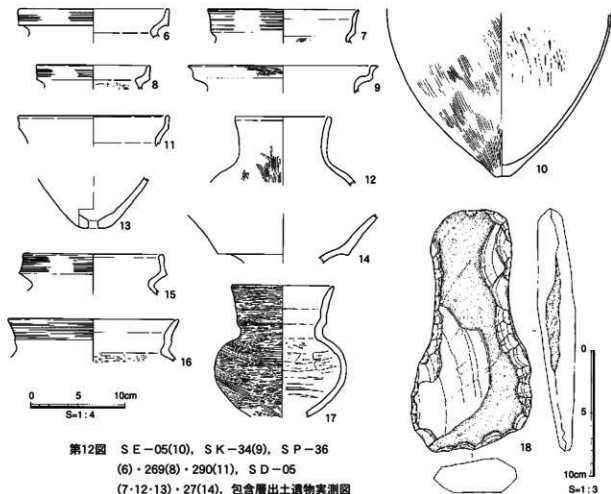
れる。9は口径約19.8cmを測る口縁端部が面をもつ受け口状の甕である。口縁外面には粗い横ハケの痕跡が認められる。10はおそらく擬凹線の口縁部を有する甕の胴部下半の遺物である。外面は細かなハケ調整を行い、内面を縦方向のケズリ調整が施されている。11は口径約15.6cmを測る有段状の口縁を有する壺である。口縁は直立に伸び、端部は丸く



第10図 SP-359遺物出土状況・土層図



第11図 SP-359出土遺物実測図

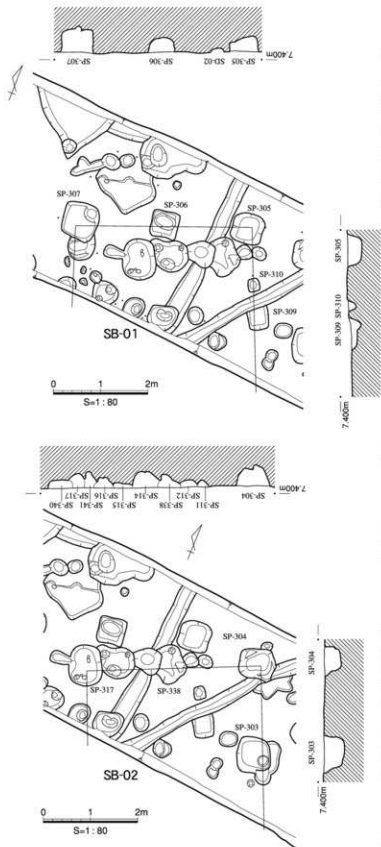


第12図 S E-05(10), S K-34(9), S P-36
 (6)・269(8)・290(11), S D-05
 (7-12-13)・27(14), 包含層出土遺物実測図

おさめる。12は口径約10.0cmを測り、口頸部が直立する壺である。外面はミガキ調整が施されている。13は焼成前に円孔を穿った底部をもつ甕と考えられる。摩滅が激しいため内外面の調整は不明である。14は高杯の受け部である。内外面の調整は不明である。15は口径約14.6cmを測る擬凹線の口縁部を有する甕である。口縁部はやや内傾し、頸部内面は「く」の字状に折れる。16は口径約17.4cmを測る擬凹線の口縁部を有する甕である。口縁端部はやや外反し、先細りする。17は小型精製の壺形土器である。外面は丁寧なミガキ調整を施し、内面はケズリ調整を行う。口径10.6cmを測る。18は打製石斧である。長さ19.3cm、幅9.6cmを測り、分銅形を呈する。

上記の遺物は、概ね弥生時代終末～古墳時代初頭の時期に所属すると考えられる。しかし、9の甕については外来系（近江系）の土器と考えられ、所屬時期においてもその他の時期とは違い、古墳時代前期に帰属するものであろう。（中川）

第2節 飛鳥時代～平安時代の遺構と遺物



第13図 SB-01・02平面図・断面図

飛鳥時代～平安時代にかけて明確に検出された遺構は35・36グリットであるが、この時期に含まれるその他の遺構や遺物は14～19グリットおよび36グリットから西側以降に多く出土している。しかし、明確に遺構に伴う遺物の検出はなく、所属時期のわかる遺構は検出されていない。

SB-01 (第13図)

35グリットに位置する。建物のほとんどが調査範囲外にあり、明確な規模などは不明であるが、おそらく桁行が2間以上、梁行が3.72m(2間)と考えられる。柱間距離は桁行が約1.8m、梁行も約1.8mを測る。各柱穴の深度は、SP-390が約0.2mと一番浅く、SP-307が約0.56mと一番深いものとなり、ばらつきが見られる。方位はN23°Wである。

SB-02 (第13図)

35グリットに位置し、SB-01同様に建物のほとんどが調査範囲外にある。明確な規模などは不明であるが、おそらく桁行が2間以上、梁行が3.68m(2間)と考えられる。柱間距離は桁行が約2.0m、梁行も約1.8～2.0mを測る。各柱穴の深度は、0.28～0.41mあり、やや深さのばらつきは認められる。方位はN25°Wである。SB-01とは、やや南側で重複する形で建てられている。また、SB-01同様にSH-01を切る。

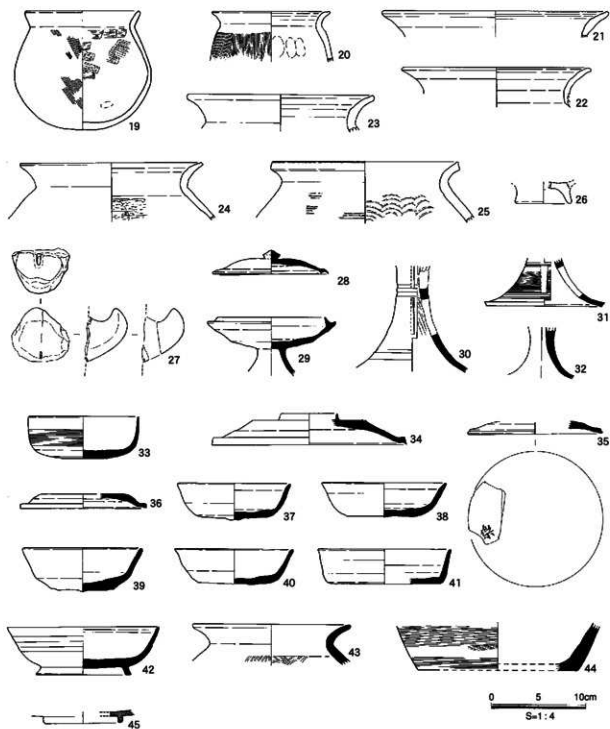
その他の遺構出土遺物 (第14図)

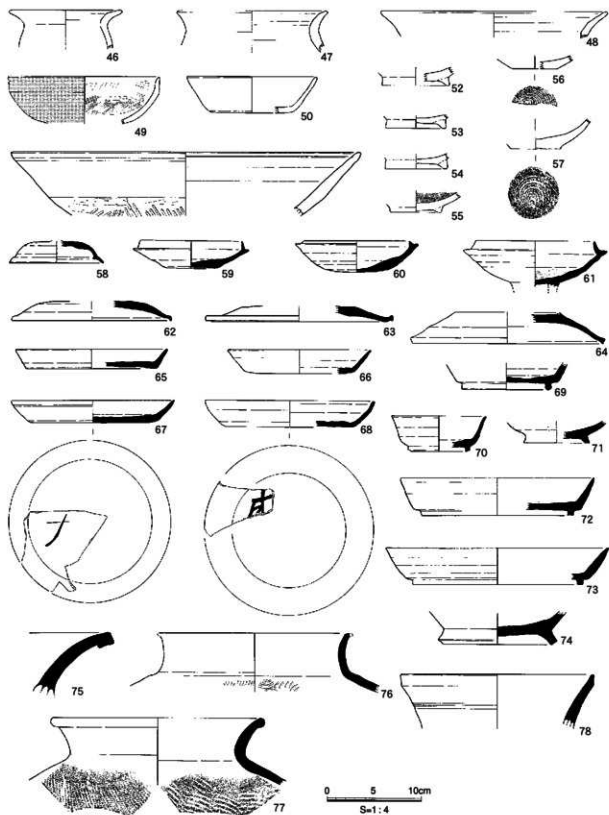
19・20は小型の土師器甕である。19は口径約11.8cm、器高12.6cmを測り、ほぼ球形を呈するがやや胴部下半に最

第1表 1区掘立柱建物一覧

建物番号	桁×梁	構造	桁行(m)	梁行(m)	面積(m ²)	方位	備考
SB-01	*2×2	側柱	*3.6	3.72	*13.39	N23° W	S H-01を切る
SB-02	*2×2	側柱	*4.00	3.68	*14.72	N25° W	S H-01を切る

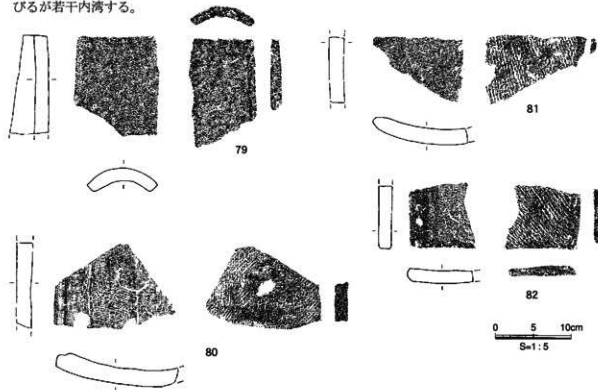
*は検出分の数値

第14図 S K-03(26)・08・09(35-41)・15(45)・23(20-43)・38(42), S P-121(44), S D-05
(19・21~25・27~34・36~40)出土遺物実測図



第15図 包含層出土遺物実測図(1)

大径がくる。外面はハケ調整を施し、内面はケズリを行う。20は胴部下半から欠損しており、全形は不明であるが胴部がやや伸びるものと考えられる。また、口縁内面は強いナデ調整によって整形された段を数段有する、いわゆる「段状口縁」を呈する。胎土はやや粗い粒子で橙色の色調をもつ。21～24は「段状口縁」をもつ土師器甕である。頸部は「く」字状に外反し、特に24は強く外反して開く。23はやや黄色を呈するが、その他の「段状口縁」甕は橙色の色調である。25はタタキ技法を有する土師器の甕である。口径約19.6cmを測り、口縁部は直線的に外反し、端部を三角形状におさめる。26は土師器碗の高台部分である。高台径は約5.8cmを測る。27は土師器甕もしくは鍋の把手部分である。上から下にむけて切れ込み状の孔が貫通する。このような把手部分に切れ込みを穿つ技法は、朝鮮半島系の技法と考えられる。28は須恵器坏G蓋である。口径は12.2cmで天井部はヘラ削り後ナデ調整を施している。29～32は須恵器の高坏である。29は有蓋高坏の受け部で、30は長脚2段2方透を有する須恵器高坏の脚部である。若干生焼け焼成品である。31は2方透を有するが、脚部の上部については不明である。33は須恵器坏身としたが壺か瓶の蓋の可能性もある。仏器か。体部外面から底部にかけてカキ目を施す。34は環状鈕をもつ須恵器蓋である。稜碗の蓋と考えられる。口径約20.6cmで、器高約3.3cmを測る。天井部から体部にかけてケズリ調整を施す。35・36は須恵器坏蓋で両方とも天井部は欠損している。35は口縁部に近い内面に「爽」？字の墨書が確認できる。37～41は須恵器坏Aとして取り上げたが、41は蓋の可能性も考えられる。37は口径約12.0cm、38は13.0cm、39は12.6cm、40は12.6cm、41は14.0cmを測る。また、37～40の底部はヘラ切り後不調整で、41はナデ調整を施す。42は須恵器坏B身で、口径16.0cmを測る。底部内面は使用された跡があり、磨り擦った状況が窺える。43は須恵器小型の甕で口径約16.6cmを測る。44は須恵器甕もしくは広口壺の底部か。底径約16.9cmを測り、体部および底部の一部にカキ目が施される。45は灰軸陶器碗の底部である。底径約8.0cmを測る。高台は直立気味に伸びるが若干内湾する。



第16図 包含層出土遺物実測図(2)

包含層出土遺物 (第15・16図)

46～48は「段状口縁」を有する土師器甕である。橙か赤褐色の色調を呈す。46は小型の甕で頸部の屈折がやや強い。47の胎土は細かな粒子が多いが、46・48はやや粗い粒子の胎土を含む。49・50は土師器坏である。49は口径約17.8cmで、外面の一部を赤彩するが、全体的に内外面を赤褐色に焼き上げている。内面は細かなミガキおよび暗文が施され、外面においては若干ミガキの痕跡が窺える。50は坏Aで口径約13.6cm、器高約3.8cm、底径約7.6cmを測る。51は土師器浅鍋である。体部外面はタタキ目の一部残る。52～55は土師器碗Bの底部である。すべて赤褐色の色調を呈する。53と54は同一個体と考えられる。すべての底部はナデ調整を行っている。55の内面は黒色処理が施されており、ミガキ調整も行われている。56・57は土師器碗Aの底部である。底部は糸切りを行っている。両方とも色調は黄褐色を呈する。58は須恵器坏G蓋である。口径約9.9cmで、天井部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。59・60は須恵器坏H身である。59は口径約10.6cm、60は口径約11.1cmを測る。底部調整は、60はヘラ切り後ナデ調整を施しているが、59は降灰の付着が多く調整は不明である。61は須恵器有蓋高坏の受け部である。口径約12.6cmを測る。62・63は須恵器坏蓋である。共に天井部が欠損している。64は須恵器の蓋である。天井部はヘラ削りが施されている。また、天井部は平坦に整えられ、沈線が1条巡る。65～68は須恵器盤Aである。65は口径約16.0cm、66は口径約15.0cm、67は口径約17.0cm、68は口径約17.9cmを測る。67・68共に墨書あり。文字は不明である。69～71は須恵器坏Bである。70は口径約9.9cm、底径約5.8cm、器高約3.8cmを測る。71の高台は外側に開く。底部から体部にかけてやや丸みをもつ器形を呈する。72・73は須恵器盤Bで、72は口径約20.4cm、底径約16.0cm、器高約4.0cmを測り、体部はやや直立気味にたつ。73は口径約23.4cm、底径約17.9cm、器高約3.9cmを測り、体部は外側に直線的に開く。74は須恵器瓶の底部か。高台は径約11.4cmを測り、外側に開く形態をもつ。75～77は須恵器甕である。75は口縁端部を台形におさめる。破片のため口径は不明である。76は直立気味に伸びる口縁部を呈する。口縁端部は欠損する。77は口径約22.0cmで、口縁部がやや外反気味に開く。口縁端部を丸くおさめる。78は口径約20.0cmを測る広口壺である。口縁部はやや開き気味ではあるが直立形態をとる。また、口縁端部は断面を三角形におさめる。79～82は瓦である。79は行基葺式の丸瓦である。内外面共に摩滅が非常に激しく調整等は不明である。80～82は平瓦で、凸面は3～3.5本/1cmのR L線を巻きつけた原体により叩きつける。凹面は布目をもつ。側縁部は面取りを行う。共にⅢ類(註1)を呈する。

(中川)

第3節 中世の遺構と遺物

1区の中世に帰属する遺構は、1～22グリッドで集中して確認することができた。室町時代を中心とした遺構・遺物が多く検出されている。また、7～22グリッドの遺構が集中する場所からは多量の炭化物が遺構埋土より広範囲に検出されており、大規模な火災などが起こった可能性が窺える。

SE-02 (第17図)

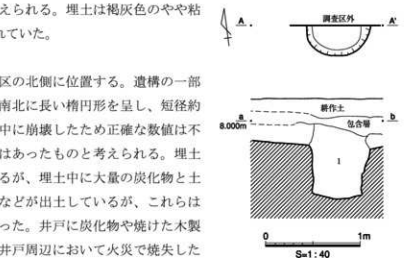
井戸は19グリッドの調査区南側に位置する。遺構の半分は調査範囲外であるが、直径約0.7m、深度約0.78mの円形を呈すると考えられる。遺構からは遺物の検出は確認されなかったが、周辺の状況から室町時代に帰属する遺構と考えられる。埋土は褐灰色のやや粘性が強く、炭化物が多く含まれていた。

SE-03 (第18～20図)

19グリッドに位置し、調査区の北側に位置する。遺構の一部は調査範囲外である。井戸は南北に長い楕円形を呈し、短径約1.15cmを測る。深度は掘削途中で崩壊したため正確な数値は不明であるが、2m以上の深度はあったものと考えられる。埋土は基本的に灰色の粘質土であるが、埋土中に大量の炭化物と土器・木器・石器および有機物などが出土しているが、これらは井戸に投げ込まれた状況であった。井戸に炭化物や焼けた木製品が出土している状況から、井戸周辺において火災で焼失した家屋の片付け行為が行われていたものと考えられる。

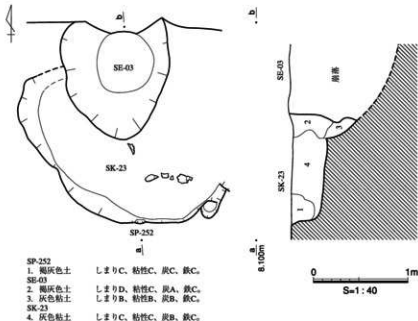
83は越前焼甕で、上層から中層にかけて破砕された状況で検出されている。甕は口径約76.6cm、底径約31.6cm、器高約82.0cm

を測り、外面肩部に押印が施されている。押印は「本」に正方形格子目の組み合わせ文が間隔をあけて押されている。また、同様の肩部に「+」「||」のヘラ描きの記号文が描かれている。口縁部は縁帯が崩れかけており、口縁端部は方形を呈する。頸部は「く」字で短く外に開く形態をとる。胴部最大径はやや上位に位置し、体部が球形から砲弾形に変化する途中段階である。成形はいわゆる「ねじたて成形」技法で、粘土紐は6段階で製作されている。84は口縁部と



SE-02 1. 褐灰色土、しまりC、粘性C、灰C、鉄A。

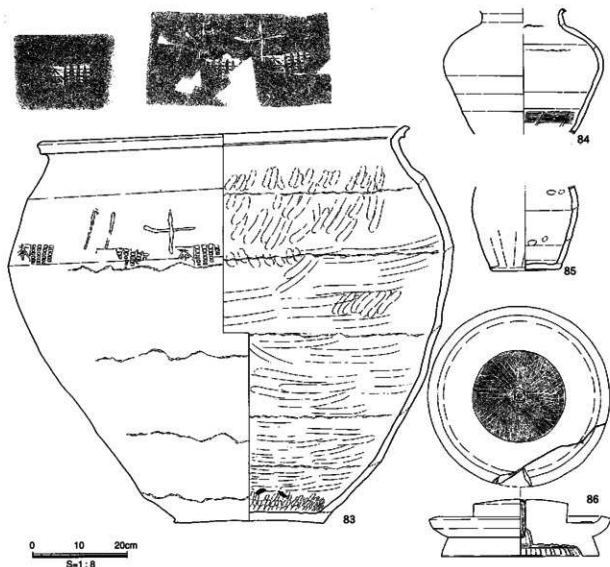
第17図 SE-02平面図・土層図



SP-252
 SE-03
 SK-23
 SP-252

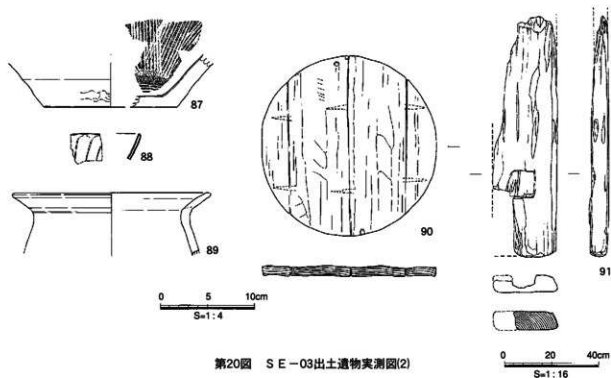
1. 褐灰色土	しまりC、粘性C、灰C、鉄C。
2. 褐灰色土	しまりD、粘性C、灰A、鉄C。
3. 灰色粘土	しまりB、粘性B、灰B、鉄C。
4. 灰色粘土	しまりC、粘性C、灰B、鉄C。

第18図 SE-03, SK-23平面図・土層図



第19図 SE-03出土遺物実測図(1)

底部が欠損している越前焼の甕である。頸部は直線的に伸びる形態をとることから、12～13世紀代に帰属するものと考えられる。85は越前焼の壺で、体部から上半は欠損している。底部から胴部にかけての外面は下から上にむかって縦方向のナデ調整を施している。86は茶臼の台部である。受け皿は丸みもち滑らかに仕上げられている。目分画の数は8分画である。また、芯棒孔には木製品が依存している。一部受け皿が欠損しているが、その部分は漆を接着剤として使用した痕跡が残る。87は越前焼の挿鉢である。底部から体部の一部が残存している。内面は擦り目が施され、外面は成形段階で轆轤台座から切り離すときに使用されていたと考えられる縄目痕が底部近くに残る。88は輸入陶磁器の青磁碗である。口縁部のみが依存しているが、片切りの連弁文を有する。89は律令時代の土師器甕である。「段状口縁」を呈し、頸部は「く」字でやや外に開く形態をもつ。色調は外面を橙色、内面は黄褐色である。90・91は木製品で、90は直径19cm前後を測る桶底と考えられる。幅30～60cm、厚さ10cm前後の板を4枚繋ぎ合わせて作られている。板と板の繋ぎは木釘のようなものを使用して合せている。91は建築部材か。片面に10cm前後を測る正方形のホゾ孔が斜り貫かれている。一部に焼けた痕跡が確認できる。



第20図 S E-03出土遺物実測図(2)

S E-04 (第21・22図)

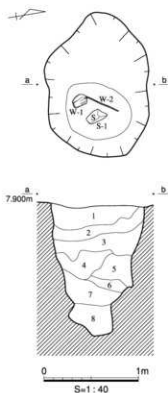
井戸は18・19グリットにかけて位置する。S E-03の南東側約1mのところにある。平面形は不整形円形を呈し、長径約1.53m・短径約1.07m・深度約1.39mを測る。埋土は基本的に灰色を示し下層に行くほどシルトが強くなる。遺物は最下層から検出されており、木製品や河原石が出土している。

92は桶底の板状木製品で、直径約17.1cm・幅約11.0cmを測る。

S K-01・02 (第23・25図)

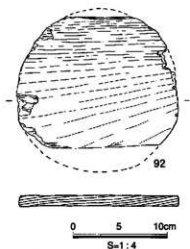
遺構は7・8グリットにあり、一部は調査範囲外にある。S K-01と02は、両方を完掘した状態では、ともに同一の遺構底面のレベルを示していたため、明確に双方の遺構の区別はできなかった。遺構検出した状態では拳大から人頭大位の礫が散在しており、規則的な配列は見られなかった。埋土は単層の灰褐色を呈す。遺物も疎らに出土しており、一括性は認められなかった。

93は瓦質土器の鉢と考えられる。口径約30.0cmで、外に開き直線的に伸びる形態をもつ。火鉢か。94は輸入陶磁器の青磁碗で、底部から体部の一部が残存する。釉薬は畳付けから高台内までみられるが、一部高台内に露胎の部分が認められる。蓮弁文は細い線描きで、高台径は約5.6cmを測る。96は石製の長方形硯と考えられる。硯尻の幅約6.5cm、高さ1.2cmを測る。裏面は平坦を呈し、側面は若干傾斜している。また、縁部が非常に薄く2~2.5mm前後である。石材は赤色の粘



- SE-04
- | | |
|-----------|--------------------|
| 1. 褐灰色土 | しまりB, 粘性C, 炭B, 炭C, |
| 2. 褐灰色土 | しまりC, 粘性C, 炭A, 炭C, |
| 3. 褐灰色土 | しまりB, 粘性C, 炭A, 炭B, |
| 4. 灰色シルト | しまりA, 粘性B, 炭C, 炭B, |
| 5. 灰色シルト | しまりA, 粘性B, 炭C, 炭B, |
| 6. 灰黄色粘土 | しまりA, 粘性A, |
| 7. 灰色シルト | しまりA, 粘性B, 炭C, 炭C, |
| 8. 明緑灰色粘土 | しまりA, 粘性B, |

第21図 S E-04平面図・土層図



第22図 SE-04出土遺物実測図

板岩製で赤間石、もしくは鳳足石か。水野型式分類(註2)では長方形硯 I A c タイプである。98は平瓦である。凸面は3.5本/1cmのRL縄を巻きつけた原体により叩きつける。凹面は布目をもち、側縁部において面取りを施している。Ⅲ類を呈する。

SK-04 (第24・25図)

遺構は10グリット内にあり、調査区の南側に位置する。やや不整の長方形をとり、長辺約19.7cm・短辺約8.2cmを測る。深度は遺構検出面から約2.9~5.1cmで、褐色の埋土が堆積する。埋土中には多くの拳大の礫が含まれていた。

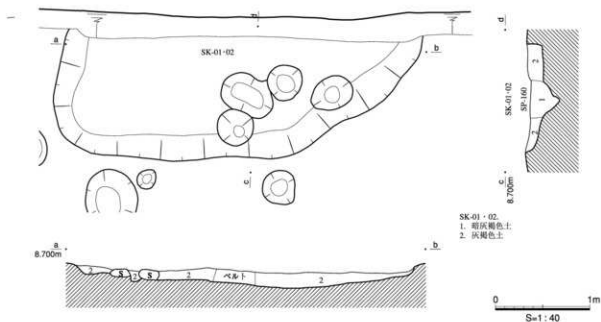
遺物は95の土師器皿や97の石製硯などが検出されているが、その他の遺物は小片で図示することはできなかった。95は口径約12.0cmで口縁部外面に1段のナデまわしが確認できる。97は石製の

SK-05 (第26図)

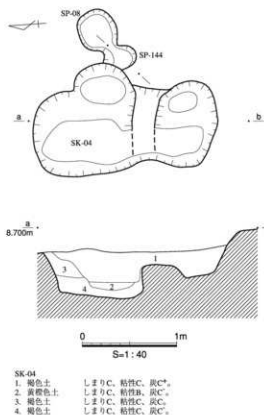
遺構はSK-04の西側に隣接し、規模や形態もほぼ同様な形をとり、並列する。長辺約1.8m・短辺約1.08mを測る。埋土や堆積状況もSK-04と近似しており、ほぼ同時期の遺構と考えられる。出土遺物はほとんどなく、また図示できる遺物はなかった。

SK-08・09 (第27図)

15・16グリット内に位置する。当初はSK-08と09に分けて掘り進んだが、完掘すると同一の遺構と考えられ、上層平面で確認できたものは層の相違から見間違えたと思われる。埋土は褐色を呈し、



第23図 SK-01・02平面図・土層図



第24図 SK-04平面図・土層図

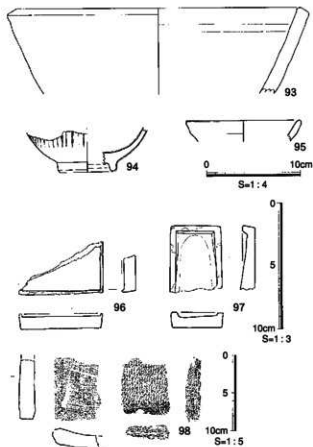
炭化物も多く含まれる。

SP-95 (第28・29図)

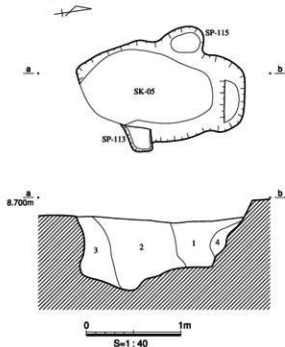
15グリット内に位置し、SD-05の溝の上に遺構は構築されている。SP-128と重なり合っているが、新旧関係は土層断面よりSP-95のほうが新しい。遺構の深度は検出面から約0.7mで、遺構底には20~30cm前後の角礫が出土しており、意図的に投げ込まれた状況を呈している。柱の抜き取り痕が確認でき、その埋土には多くの炭化物が含まれていた。ちなみに、SP-95と並列関係にある遺構は確認できなかった。出土遺物は99の土師器皿1点であった。柱痕の埋土中で出土している。99は口径約12.0cmで、灰黄褐色を呈する。口縁端部に灯心油痕が多く確認できる。

SA-01 (第31図)

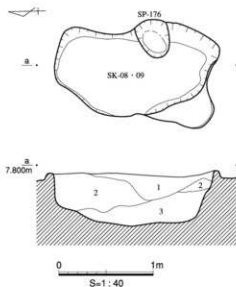
調査範囲が狭いため並びが確認できたのが1列のみであったため、今回は欄列として取り扱った。SA-01に含まれる遺構は、SP-100・SP-105・SP-108で、直径約0.4~0.56mを呈する。いずれも掘削



第25図 SK-01・02(93-94-96-98)・04(95-97)出土遺物実測図



第26図 SK-05平面図・土層図



SK-08.09

1. 褐色土 しまりC、粘性C、灰C、鉄B。
 2. 褐色土 しまりC、粘性C、灰C、鉄C。
 3. 褐色土 しまりC、粘性C、灰C、鉄C。

第27図 SK-08.09平面図・土層図

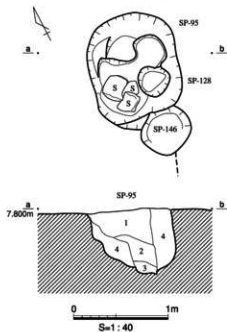
深度は浅いが、SP-108のみ深く掘り込まれていた。また、SP-105の底から直径40cm前後、厚み15cm前後のやや丸みを帯びた石が水平に置かれていた。礎石か。遺構からは遺物は検出されなかった。周辺の遺構や遺物の出土状況からSA-01は中世(室町時代?)の時期に帰属するものと考えられる。

SD-05 (第31図)

溝は東側(第2区SD-01と同一溝)から西側に向かって流れている溝で、おそらく旧竹田川に合流する自然流路と想定される。溝の深度は遺構確認面から深いところで1m前後を測る。埋土は基本的に黒褐色を呈し、多くの遺物が含まれていた。上層には中世の遺物が検出されたが、中～下層にかけては弥生時代～平安時代にかけての遺物が出土している。溝の機能がいつの時期に止まったかは確認できないが、中世の段階では溝は完全に埋まっていたと考えられる。

その他の遺構出土遺物 (第32図)

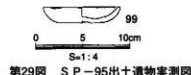
100～103は土師器皿である。すべていわゆる「小皿」の範囲に入るものである。100は口径約7.4cmで器高約1.5cmを測り、口縁端部には灯心油痕が確認できる。101は口径約8.5cm、102は口径約8.0cm、



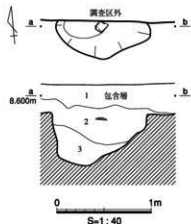
SP-95

1. 褐色土 しまりC、粘性C、灰C、鉄B。
 2. 褐色土 しまりC、粘性C、灰C、鉄C。
 3. 灰色土 しまりB、粘性B。
 4. にぶい黄褐色土 しまりA、粘性C、灰C、鉄C。

第28図 SP-95平面図・土層図



第29図 SP-95出土遺物実測図



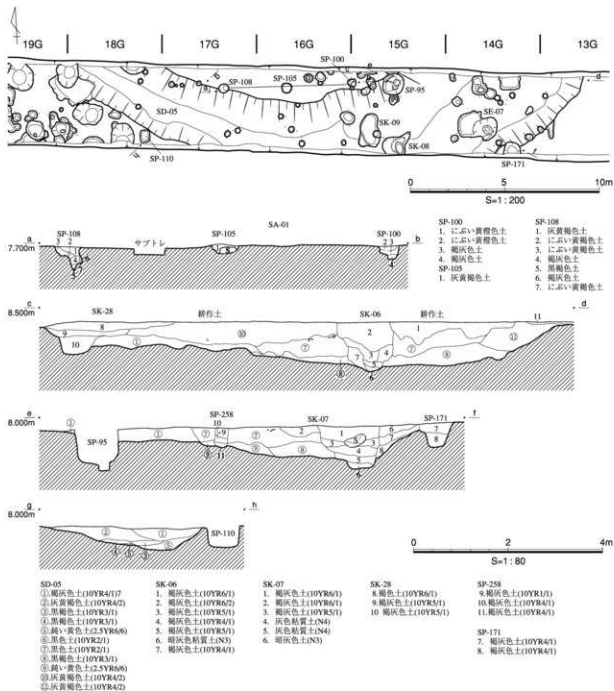
SP-111

1. 黄褐色土 しまりC、粘性C、灰C、鉄C。
 2. 暗褐色土 しまりC、粘性C、灰C、鉄C。
 3. 暗褐色土 しまりD、粘性C、灰C。

第30図 SP-111平面図・土層図

103は口径約9.7cmを測る。100～102の外面調整は横ナデを行っているが、はっきりと段をもつものではなく丸みを帯びる。103も外面は横ナデ調整を施しているが、他の土師器皿と比べるとやや厚く、また、内外面に布で横ナデした痕跡が確認できる。100～102は橙色系を、103は黄褐色系の色調を呈する。104～107・109～113は越前焼である。104は甕の口縁部で、SE-03出土の83とほぼ同一

の形態をとる。104のほうがやや頸部の屈折が弱い。105は甕もしくは壺の底部と考えられる。内外面にはオリブ灰色系の自然釉がかかり、白灰色の粒子の細かい胎土を有する。鎌倉時代産出のものか。106は甕の肩部で、押印が施されている。押印は粗い斜格子に菱形文を配し、連続して押されている。加賀焼の可能性も考えられる。107~111は播鉢の口縁部である。108のみ瓦質の播鉢である。口縁端部形態で方形(108・110)を呈するもの、やや丸み(109)を帯びるもの、端部を強く抑えて面(107・111)をもつものに分かれる。112・113も播鉢で、底径16.0と16.8cmを有する底部である。ともに内面は捺り目が施され、外面は成形段階で轆轤台座から切り離すときに使用されていたと考えられる縄目痕が底

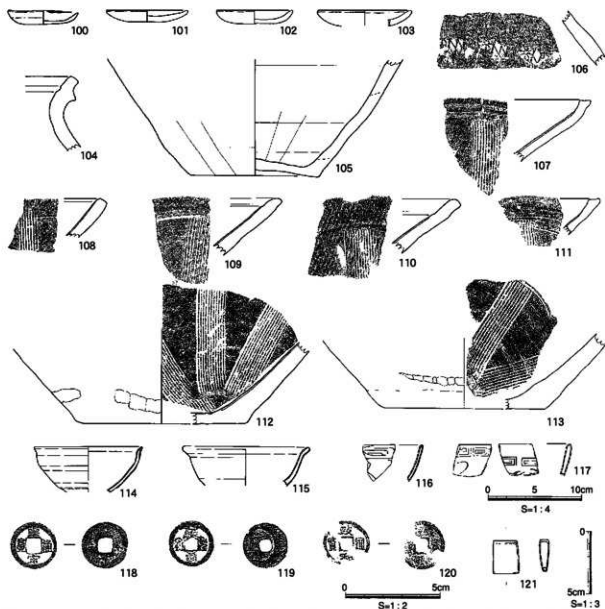


第31図 SA-01, SD-05平面図・土層図

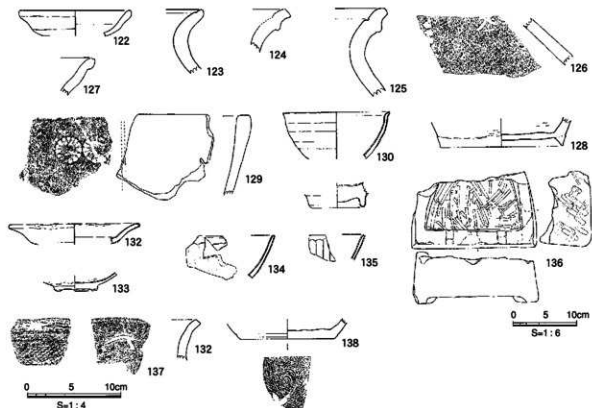
部近くに残る。114は瀬戸・美濃焼の天目茶碗である。形態は直線的に開く体部をもち、口縁下の屈曲が顕著である。釉薬は黒褐色の釉がかかる。115～117は輸入磁器の青磁碗である。115は口縁部が外反し、口径約13.3cmを測る。116は口縁外面に雷文帯連弁文を施す。117は口縁部内外面に雷文帯をもち、115や116に比べて胎土の粒子が細かく白色で、釉薬もやや濃いオリーブ灰色を呈する。118～120は銭貨で、118は1038年(寶元元年)に鑄た「皇宋通寶」の北宋銭である。真書体のもので背文字は確認できない。119は摩滅が激しく、1023年(天聖元年)に鑄た「天聖元寶」の北宋銭か、1094年に鑄た「紹聖元寶」の北宋銭である。120は1111年(政和元年)に鑄た「政和通寶」の北宋銭である。書体は分楷で、背文字は確認できない。

包含層出土遺物 (第33図)

122は土師器皿で口径約11.8cmを測り、黄褐色系の色調を呈する。口縁外面をナデ調整し、端部はや



第32図 S K-16(120)・23(109), S P-96(114)・170(118・119・121)・171(111)・181(100)・184(101)・200(112)・207(113)・223(105)・267(107)・292(103), S D-04(108)・05(102・106・110・115・116)・15(117)・24(104)出土遺物実測図

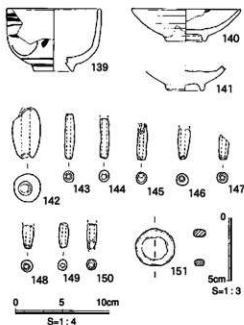


第33図 包含層出土遺物実測図

や丸みを帯びた形態をとる。123～126は越前焼の甕である。123は「く」字の形態をとり口縁端部を上方につまみ上げる。124は口縁帯が崩れ、口縁部が方形の形態をとる。83および104は同様の形態を有する。125は口縁帯が退化して、口縁外面に少し鰭状の突起が残る。口縁内面に凹線がつく。頸部はゆるやかな「く」字状をとり、やや上方に伸びる形態をとる。126は甕の肩部で押印をもつ。押印は「本」字に正方形の格子文が施されている。127・128は越前焼の鉢である。127は口縁端部上方に沈線が巡る形態をとる。128は三角形の付け高台をもち、高台径は約13.0cmを測る。127および128については片口の形態を有する鉢と考えられる。129は瓦質土器の火鉢である。口縁部はほぼ方形の形態をとり、外面上方に菊花文が施されている。外面にタテ方向の凹線が見受けられ、輪花形を呈する浅鉢と考えられる。130は瀬戸・美濃焼の天目茶碗である。口径は約11.2cmで、直線的に開く体部をもち、口縁下の屈曲が顕著な形態をとる。軸は茶褐色である。131・132・134・135は輸入磁器の青磁である。132は稜花皿の形態をとり、口縁径が約13.6cmを呈する。131・134・135は破片しか残存していないが碗の形態と考えられる。131は高台径約5.3cmで、高台内は軸を輪状に拭き取る。134・135は細い線描きの蓮弁文を有し、134は貫入が多く入る。133は輸入磁器の白磁皿である。外面腰部以下が露胎で、高台に挟りを入れるいわゆる割高台を有する。136はいわゆる笏谷石製のバンドコである。底部に煤が付着している。137は珠洲焼の壺と考えられる。頸部から口縁下部にかけての外面調整は叩きを施した後横ナデにより消されている。また、口縁内面にはヘラ描きの記号文が認められる。138は灰軸を有する瀬戸焼の壺もしくは瓶の底部である。底部は糸切り痕を残す。(中川)

第4節 その他の遺構と遺物

本節では、近世以降に所属すると考えられる遺構・遺物および所属時期が不明なものを取りあげる。



第34図 S D-04(151)・05(142~148・150)・16(149)・包含層出土遺物実測図

1区では近世以降に所属する明確な遺構は確認することはできなかったが、遺物については若干であるが出土している。以下、所属時期の不明な遺物ととも記述する。遺物はS D-04・05の上層および包含層からの出土遺物である。139~141は肥前系陶磁器である。いずれも18世紀後半の所産と考えられる。139は肥前系陶磁器碗で口径約9.8cm、器高約6.6cm、高台径約4.2cmを測る。140は肥前磁器の皿である。見込みには蛇の目状の軸刺ぎが見られる。高台は露胎である。141は肥前陶器で唐津焼である。軸葉は胎軸色を呈し、高台豊付けのみ露胎である。142~150は土師質の管状土錘である。142は胴部が膨らむ樽状の形態をとるが、他は幅1.1~1.8cmで筒状の形を有する。151は環状の形態をとる不明鉄製品である。直径は3.0cm前後で、厚さは0.5~1.0cmを測る。表面の腐食はかなり激しい。遺物は、S D-04から出土しており、中世(室町時代)の時期に含まれる可能性がある。

(中川)

(註)

- 1) 久保智康 「資料編・福井瓦谷2号窯跡」『北陸の古代寺院—その源流と古瓦—』1987年
- 2) 水野和雄 「日本石硯考—出土品を中心として—」『考古学雑誌』第70巻第4号 1985年

第4章 2区の調査

調査は面工事によって掘削作業が行われ、破壊される部分について発掘調査を実施した。対象面積は約1,275㎡で、底辺約30m・長辺約80mの三角形をした調査地である。調査前の現状は水田であった。表土（耕作土）を剥ぐと調査地の北半分で砂利層が存在し、すぐに遺構が確認できた。本来の地形は、横山古墳群のある北北東方向から竹田川に向けて南南西方向に緩やかに下方傾斜していたと考えられ、以前の耕地整理時に大きく地形が改変され、削平が行われたことを想起させる。一方、35グリットから南側については若干ではあるものの包含層も存在し、予想外に35～39グリットにおいて、下層から縄文時代の遺構・遺物が検出され、調査地の南側に行くほど遺構・遺物の依存状況は良好であった。2区の基本的な層序は、表土（耕作土）→赤橙色土（近現在の遺物を含む層）→暗灰褐色土（包含層）→明黄褐色土（上層）→明黄褐色土（下層）の順に堆積土が確認された。ちなみに、明黄褐色土（上層）は飛鳥時代～平安時代にかけての遺構面が確認された土層で、明黄褐色土（下層）は縄文時代中期の遺構面が確認された土層である。また、下層の明黄褐色土のほうが若干明るい色の土層であったが、明確に分層できる層位ではなかった。

2区で検出された遺構は、ほとんどが飛鳥時代～平安時代にかけてのものであったが、その中でも34グリット周辺に位置するSD-01を境に北側と南側で遺構の配置等の相違がみられる。ちなみに、2区で検出されたSD-01は1区のSD-05と同一の自然流路と考えられ、蛇行しながら東から西方向に流れていたと想定できる。

第1節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構と遺物

縄文時代の遺構は、律令時代以降の遺構面より下位の下層面で検出した。その内容は、土坑・柱穴・ピットなどがある。遺構分布は、2区南側のSD-01とSD-02に挟まれる限られた範囲で検出した。この範囲内においては、ほぼ全域に分布する。出土遺物は中期中葉に限られることから、遺構の時期は、おおむね該期に帰属するものと考えられる。以下、主要なものについて説明を行う。

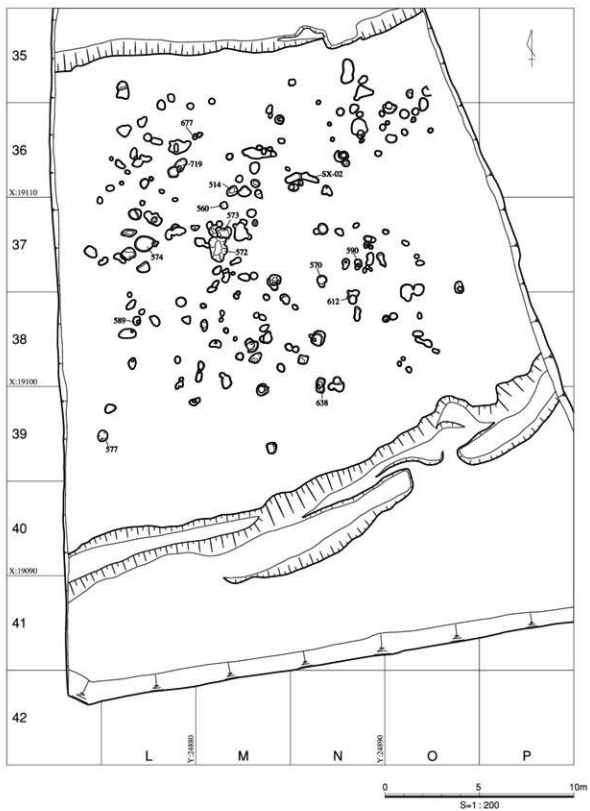
土坑（第36図）

径が1m前後の規模のものを土坑とした。遺物が出土したものは3基を数える。

SP-572（第36図・第37図・第38図）

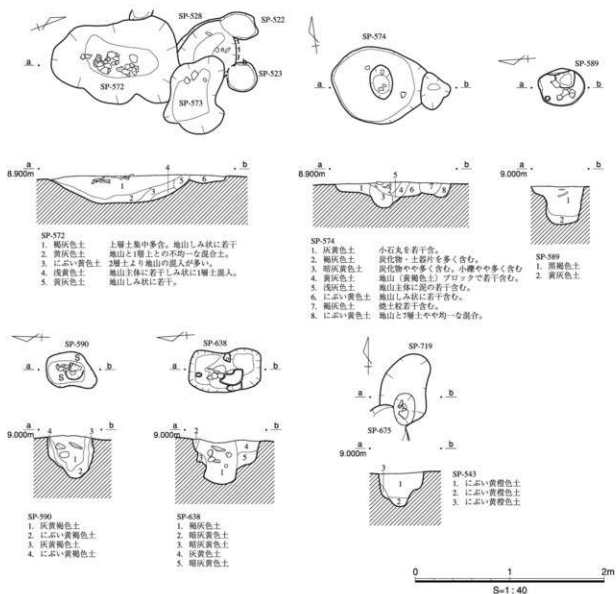
M-37グリットに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、壁面は緩く立ち上がる。土坑SP-573を切る。覆土上層から中期中葉の土器（152・153の一部、157・181・183～186）がまとめて出土した。

152は、同一個体がSP-572・573・590からそれぞれ出土した。水平口縁のキャリバー器形を呈す深鉢である。幅が狭い断面三角形の貼付隆帯で文様を描出する。文様帯は、口縁部・頸部・胴部の3帯構成をとり、頸部は上下端とも隆帯で画され無文帯となる。口縁部には、4単位の円形隆帯文とその外側部に二重の「U」字状隆帯文を配し、間隙に垂下隆帯文を配す。胴部には、多重円形隆帯文を口縁部単位文の円形隆帯文の位置とずらして4単位で配し、間隙に口縁部と同様に垂下隆帯文を配す。153は、同一個体がSP-570・572から出土した。水平口縁のキャリバー器形を呈す深鉢で、頸部で強く括れ、



第35図 2区下層（縄文時代）遺構配置図

口縁部が大きく開き、短く直立する。幅が狭い断面三角形の貼付隆帯で文様を描出する。文様帯は152同様に、頸部無文帯を含み3帯構成をとると考えられる。接合土器片が少なく図上復元となるが、口縁部文様は、二重の「U」字状隆帯文と縦位楕円形隆帯文を交互に配すと考えられる。地文には斜位縄文RLを施す。157は、深鉢胴部片であり、口頸部を欠失する。胴部最大径が底部付近にあり、頸部に向かい狭まる。斜行する半隆起線文直下には、三叉状文が付随する縦位半隆起線文（コスモス状文）を配す。三叉状文には、斜行する半隆起線文と縦位半隆起線文の接する部分で下向きに施すものと、その下位で右向きに施すものがある。斜行する半隆起線文から、単位的に斜行渦巻文を配すと考えられる。底部はナデを施す。181は、深鉢口縁部片で、端部が貼付隆帯により肥厚する。直下に幅の狭い横走半隆起線文を2条配す。183は、深鉢口縁部片で、間隔の狭い爪形文を施す隆帯を斜位に配す。地文には縄文RLを施す。184は、深鉢口縁部片で、端部が肥厚し短く内屈する。地文には縄文LRを施す。185は、深鉢底部片で、一枚敷きの木葉痕を残す。186は、直線的に立ち上がる深鉢頸胴部片で、断面三角形の



第36図 下層遺構（縄文時代）平面図・土層図

幅が狭い隆帯による多重曲線文を配す。地文縄文は施さない。

S P-574 (第36図・第39図)

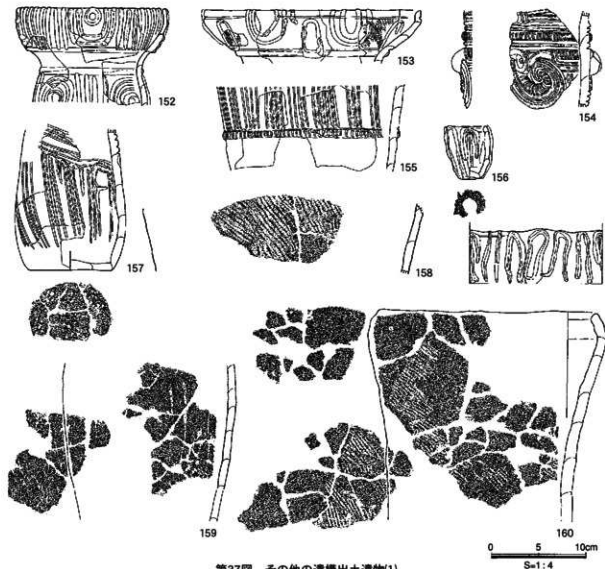
L-37グリットに位置する。平面形は楕円形を呈し、断面は浅皿状となる。中央部のビツは、本遺構に伴う一連のものなのか、別の遺構なのか不明である。覆土から中期中葉の土器(187)が出土した。

187は、口縁部が内弯する深鉢口頸部片である。細い隆帯を口縁部下端まで多条に垂下させる。地文には縄文RLを施す。

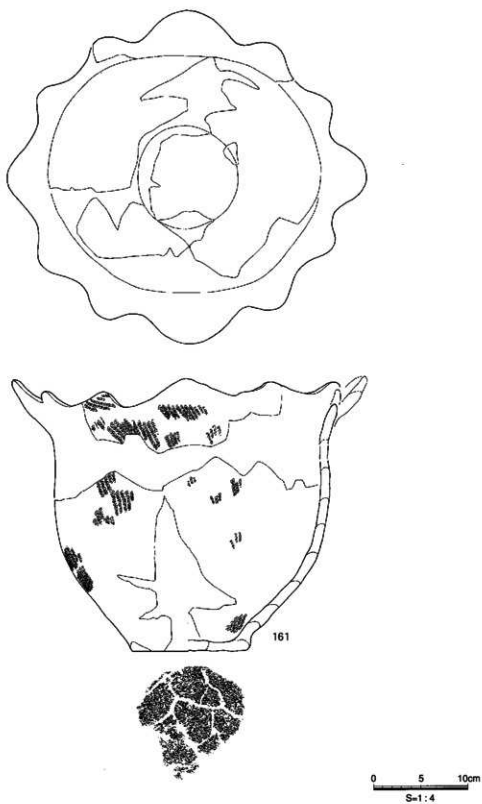
柱穴 (第36図～第40図)

多数検出した。規則性を持つ配列などは認められない。S P-589・638などのように、中央部の覆土が黒色ないし褐色を呈すものと、S P-543・590などのように、地山に近似した黄褐色を呈すものの2種が認められる。両者共に遺物が出土するため、柱材は抜き取られた可能性があり、色調の違いは埋没過程によるものとも考えられる。以下、柱穴出土遺物を各個に説明する。

154は、S P-677出土である。深鉢胴部片であり、口縁部は緩やかに外反すると考えられる。頸部上半には横走半隆起線文と、これを区切る単位的な縦位半隆起線文を配す。頸部下端に横走隆帯をめぐ



第37図 その他の遺構出土遺物(1)



第38図 その他の遺構出土遺物(2)

らせる。直下の胴部上端には、単位的な環状突起と、これと連結する横走隆帯を配す。環状突起下位には、基軸隆帯と半隆起線文による渦巻文が付随する。隆帯上には間隔の狭い爪形文を浅く施す。環状突起左側には円形の凹みを有す。

155は、S P-512出土である。円筒状の器形を呈す深鉢胴部片である。胴部上半は、縦位半隆起線文を密に施す。この下端に押し引き状の爪形文を施す横走隆帯を配し、下位を無文部とする。

156は、S P-589出土である。小型土器（ミニチュア土器）であり、152・153と同様の断面三角形の隆帯で楕円文や逆「U」字状文などを描出する。口縁端部は面を有さず、底部は凹底となる。

158・159・174～179は、S P-514出土である。158・159・176・177・178は深鉢胴部片、174・175は深鉢胴底部片、179は口縁部片である。158は、地文に縄文LRを施す。159は、板状工具による縦位ナデを施す。175～177は、地文に節が細く密な縄文RLを縦斜位に施す。179は、口縁部が緩やかに内湾する。すばまる端部には、接合部の段を残す。

160・161・182は、S P-515出土である。160は、胴部から開いて立ち上がり、口縁部が内湾するキャリパー器形を呈す深鉢である。口縁端部は面を有す。地文に斜位縄文RLを施す。161は、口縁部が楕円形を呈す。口縁部が緩やかに外反し、頸部でやや括れ、底部にむかひすばまる、やや寸胴の器形を呈す鉢である。口縁部には4単位で大波頂部を配し、その間隙に小波頂部を2箇所配す。地文には複節縄文RLRを施すが、口縁端部には施さない。底部はナデを施す。182は、深鉢胴部片で摩擦や剥離が顕著である。胴部上端に横走隆帯を配し、下位に基軸隆帯と半隆起線文で曲線的な文様を描出する。隆帯上の施文は不明である。

163・165は、それぞれSK-31とS P-509出土で遺構間接合した。163は、深鉢胴部片で、基軸隆帯の末端が環状突起となる。環状突起左側には円形の凹みを有す。基軸隆帯上には細かい爪形文を施す。

165は、内湾する深鉢口縁部片で、口縁端部が肥厚し内側に面を有す。

172は、S P-424出土である。深鉢頸部片で、地文には縄文RLを施す。

173は、S P-513出土である。深鉢頸部片で、半隆起線文による長方形区画状文内に幅の狭い縦位半隆起線文を密に施す。

180は、S P-560出土で、浅鉢胴部片である。内外面共に摩擦や剥離が著しい。

188は、S P-577出土である。深鉢頸部片で口縁部が内屈すると考えられる。地文には斜位縄文RLを密に施す。

189・191は、S P-590出土である。189は、深鉢口頸部片で、口唇部が肥厚する。地文には斜位縄文LRを密に施す。191は、深鉢底部片で縦位櫛状線文を間隔をあけず密に施す。底部はナデを施す。

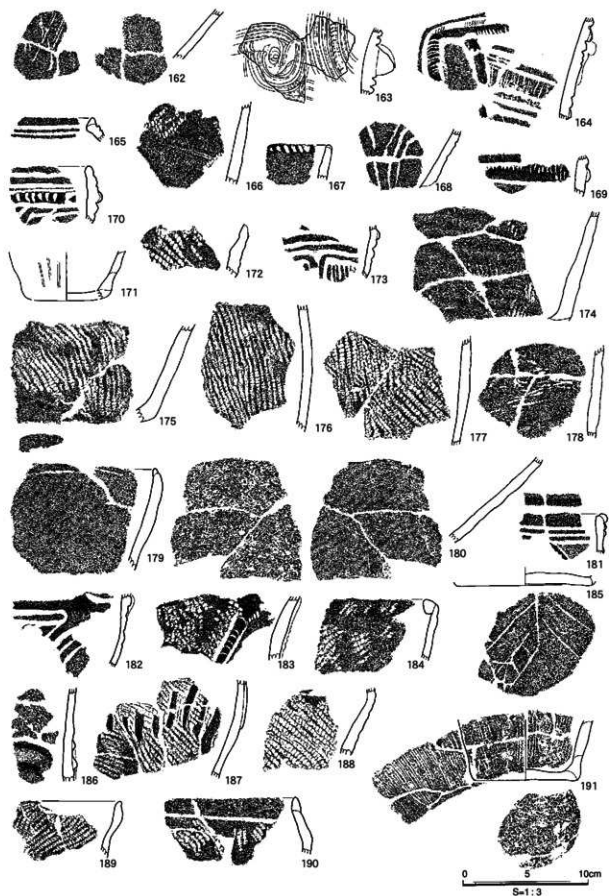
190は、S P-612出土である。深鉢口縁部片で、口縁部が内屈するキャリパー器形を呈す。口唇部には接合部の段を残す。地文には斜位縄文RLをまばらに施す。

192・195は、S P-638出土である。192は、小形深鉢の底部片で、外面・底面共にナデを施す。195は、深鉢胴部片で、節が細く密な縄文RLを縦斜位に施す。

193・194は同一個体で、S P-677出土である。共に節が細長く斜行する縄文RLを縦斜位に施す。

196は、S P-719出土である。基軸隆帯上に間隔が狭い爪形文を施す。

197は、S P-718出土である。横走半隆起線文のみで文様を描出する。



第39図 その他の遺構出土遺物(3)

2 その他の遺構遺物 (第39図・第40図)

ここでは、上層の律令期の遺構から混入して出土した縄文式土器を説明する。

162は、S K-02出土である。浅鉢胴部片で内外面を研磨する。

164・169は、同一個体で、S D-04出土である。直線的に開いて立ち上がる深鉢頸部片である。間隔が狭い爪形文を施す基軸隆帯と半隆起線文で文様を描出する。半隆起線文の長方形区画状文内には縦位半隆起線文を密に浅く充填的に施す。

166・170は、S X-02出土である。166は、深鉢胴部片で、地文には縄文LRを施す。170は、深鉢ないし台付鉢の口縁部片である。わずかに内弯する口縁部を有し、口唇部には横走半隆起線文を2条、屈曲部には雑な押し引き状の爪形文を施す横走隆帯をそれぞれ配す。

167は、S P-224出土である。深鉢の口縁部片で、緩やかに外反する。端部には全周する刻みを施す。地文は施さない。中期後葉に位置付けられる。

168は、S P-393出土である。台付鉢の胴部下半片と考えられる。上下に展開する曲線的な半隆起線文を施す。地文は施さない。

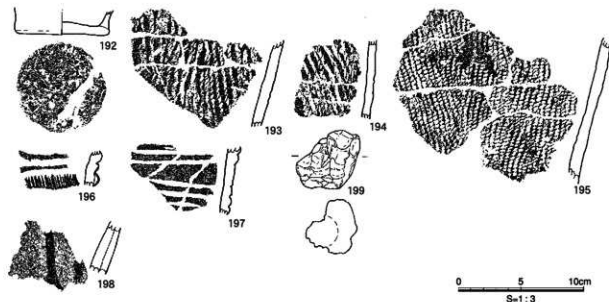
171は、S P-383出土である。小形深鉢の底部片で縦位条痕を施す。

199は、S P-124出土の焼成粘土塊である。全体の形状は不定形であるが、ナデによる丸みを持つ。重さは69gを量る。粘土は均一に塊となっておらず、一部折り込まれた状態となる。胎土に砂粒はほとんど入っていないが、赤褐色を呈す粘土粒が多く含まれる。この様な胎土は、2区出土の縄文式土器に多く認められることから、おおむね中期中葉に該当すると考えられる。

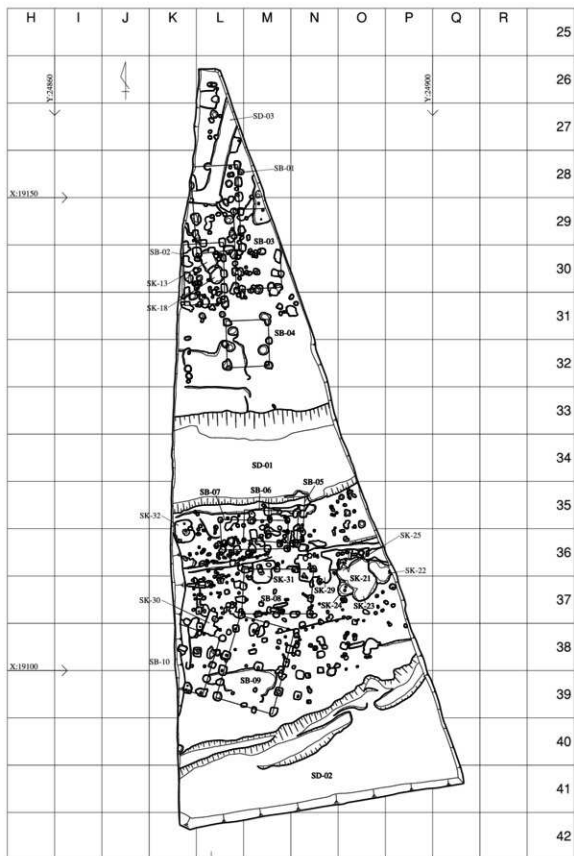
3 包含層出土遺物 (第40図)

2区出土遺物の大半は、下層遺構に伴うものである。律令期の上層遺構や包含層からの出土遺物は少なく、共に流れ込みと判断される。なお、下層の縄文時代遺構面に対応する包含層は確認していない。

198は、深鉢口頸部片で152・153と同様な隆帯による曲線文様を描出する。地文は施さない。



第40図 その他の遺構出土遺物(4)・包含層出土遺物



第41図 2区上層遺構配置図

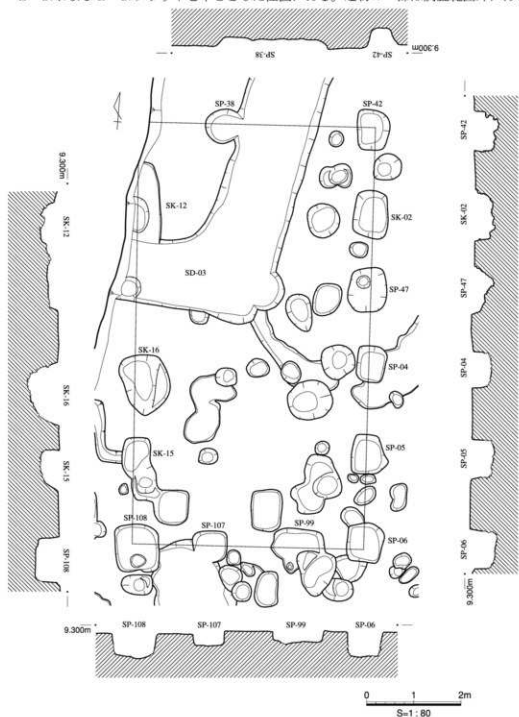
0 10 20m
S=1:400

第2節 飛鳥時代～平安時代の遺構と遺物

飛鳥時代～平安時代にかけて検出された遺構は、前述したように調査区全域で確認できた。また、遺構の構築された時期が明確に判明できたものは少なく、細かな時期や遺構毎に記述できないため、ここでは飛鳥時代～平安時代の大きな括りの中で取り扱うこととする。

S B-01 (第42・43図)

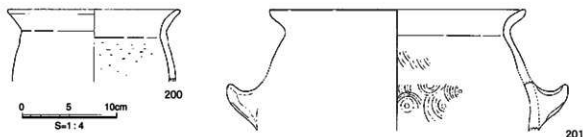
L-28およびL-29グリットを中心とした位置にある。建物の一部は調査範囲外にあるが、おそらく



桁行9.00m (5間)、梁行4.88m (3間)の側柱建物で、方位はN6°Wである。柱間距離は桁行が約1.6~2.0m、梁行は1.5~1.8mと桁行も梁行もややばらつきがある。S B-01から検出された遺物は、図示できるものが200・201の2点だけで、その他は破片のみで出土であった。

200は口径約18.0cmを測る土師器甕である。外面は摩滅が激しく調整不明である。内面は体部でケズリ調整を施す。

第42図 S B-01平面図・断面図



第43図 SH-01出土遺物実測図

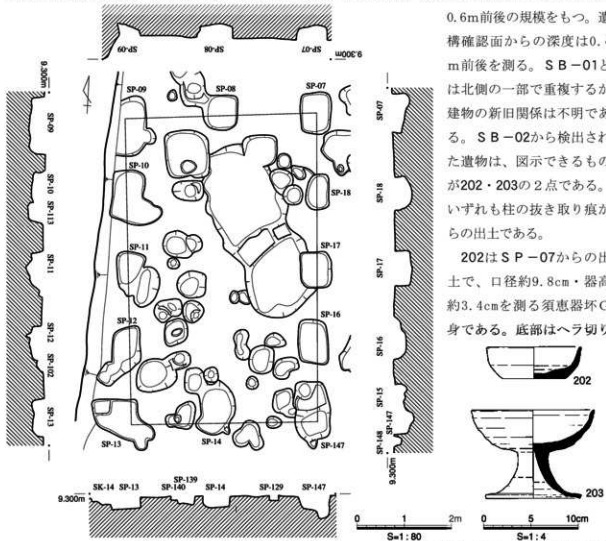
201は口径約27.0cmで、土師器の把手付き深鉢である。把手の下方から切り込みが認められる。調整は、外面は摩滅が激しく不明であるが、内面には同心円文のあて具痕が確認できる。200および201の遺物はともに小片である。

SB-02 (第44・45図)

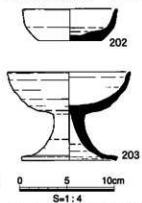
L-30およびK-30グリットを中心とした位置にある。建物は、桁行6.58m (4間)、梁行4.04m (2間)の側柱建物で、方位はN4°Wである。柱間距離は桁行が約1.6~1.7m、梁行は約2.0mで、桁行・梁行ともに柱間距離は一定している。柱穴の掘り方はやや南北に長い方形で、柱穴の掘り方は0.8m×

0.6m前後の規模をもつ。遺構確認面からの深度は0.4m前後を測る。SB-01とは北側の一部で重複するが建物の新旧関係は不明である。SB-02から検出された遺物は、図示できるものが202・203の2点である。いずれも柱の抜き取り痕からの出土である。

202はSP-07からの出土で、口径約9.8cm・器高約3.4cmを測る須恵器坏G身である。底部はヘラ切り



第44図 SB-02平面図・断面図

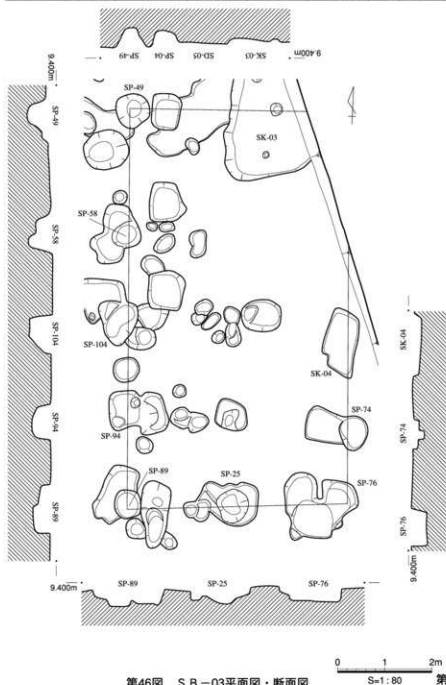


第45図 SB-02出土遺物実測図

第2表 2区掘立柱建物一覧

*は検出分の数値

建物番号	桁×梁	構造	桁行(m)	梁行(m)	面積(m ²)	方位	備考
SB-01	5×3	側柱	9.00	4.88	43.92	N6° W	
SB-02	4×2	側柱	6.58	4.04	26.58	N4° W	
SB-03	4×2	側柱	8.56	4.64	39.72	N3.5° W	
SB-04	2×1	側柱	4.90	4.40	21.56	N4° W	
SB-05	*1×2	側柱	*2.00	3.68	*7.36	N2° W	S D-01を切られる
SB-06	3×2	側柱	5.70	3.48	19.84	N90° W	S D-01を切られる
SB-07	4×1	側柱	7.16	3.00~3.40	22.91	N88° W	
SB-08	4×3	側柱	7.20	4.70	33.84	N89° W	
SB-09	5×2	側柱	9.10	6.40	58.24	N20° W	
SB-10	4×*2	側柱	6.60	*4.00	*26.4	N16° W	

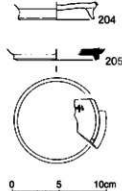


第46図 SB-03平面図・断面図

後粗いナデ調整を施す。
203は須恵器の無蓋高坏である。口径約12.9cm、器高約9.4cmを測る。

S B-03 (第46・47図)

M-29およびM-30グリットを中心とした位置にある。建物の北東方向の一部は調査範囲外にあるが、桁行8.56m(4間)、梁行4.64m(2間)の側柱建物で、方位はN3.5° Wである。柱間距離は桁行が約1.8~2.6m、梁行は2.2~2.4mで、桁行の柱間距離にはややばらつきがある。建物の北西方向の一部がS B-01の建物と重複しているが、新旧関係は確認で



第47図 SB-03出土遺物実測図

きなかった。

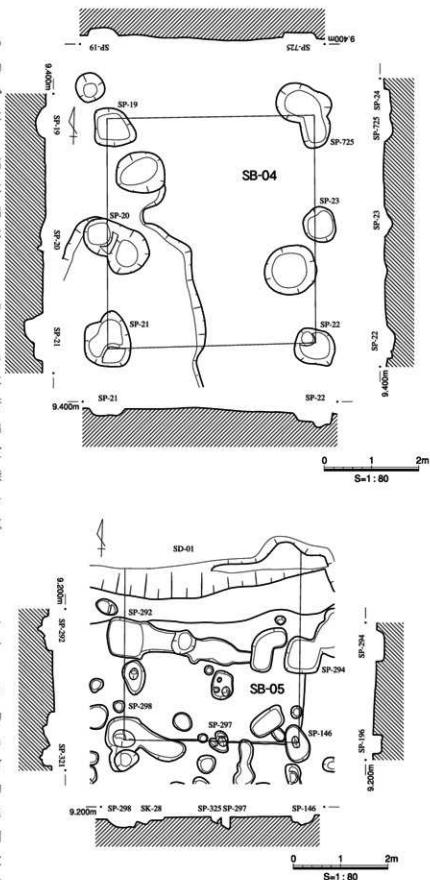
遺物は、204の土師器碗Aの高台部分である。高台径は約8.0cmを測り、SP-88・89から出土している。また、底部はへら切り後高台を付けている。205は須恵器坏B身である。高台部分のみ残存する。高台径は8.2cmで、SP-57・58より出土している。底部外面に墨書が確認できる。「千・」か。

SB-04 (第48図)

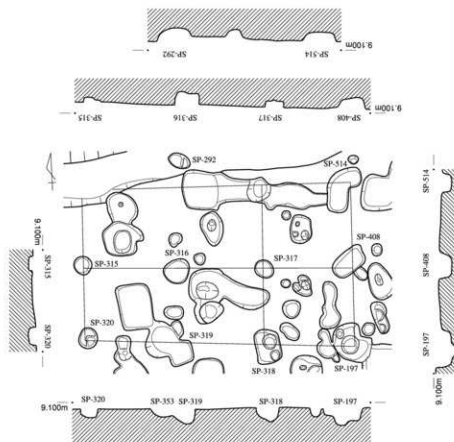
L・M-31・32グリットを中心とした位置にある。建物は、桁行4.9m(2間)、梁行4.4m(1間)の側柱建物で、方位は $N4^{\circ}W$ である。柱間距離は桁行が2.4m前後、梁行は約4.4mである。柱穴の掘り方は不定の円形で、遺構確認面からの深度は、0.2～0.3m前後の深さを測る。建物からは土師器や須恵器の破片は少量出土しているが、図示できるものはなかった。

SB-05 (第48図)

N-35グリットを中心とした位置にある。建物は北側の一部がSD-01に重複しており、正確な規模は不明である。SD-01の溝に切られている。建物は、桁行2間以上、梁行3.68m(2間)あり、方位は $N2^{\circ}W$ をとる。柱間距離は桁行が約2.0～2.2m、梁行は1.6～2.2mを測り、桁行・梁行ともに柱間の距離はばらつきがある。柱穴の掘り方は不定形で、遺構確認面からの深度は、0.2m前後の深



第48図 SB-04,05平面図・断面図

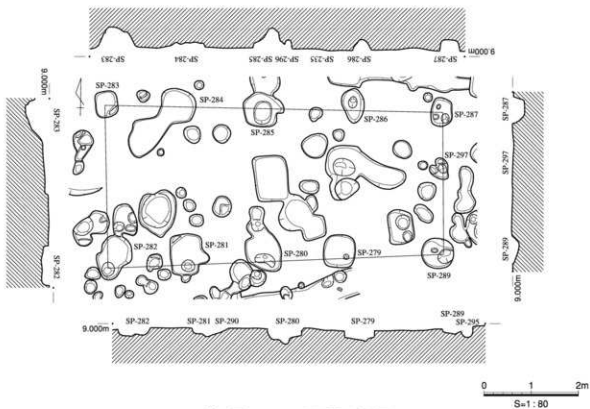


第49図 SB-06平面図・断面図

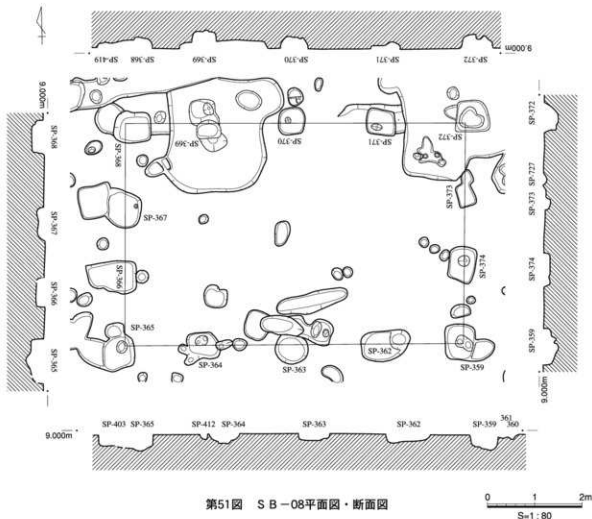
さを測る。建物からは土師器や須恵器の破片は少量出土しているが、図示できるものはなかった。

SB-06 (第49図)

M-35・36グリットを中心とした位置にある。建物の一部はSD-01に切られている。桁行5.7m(3間)、梁行3.48m(2間)の総柱建物で、方位はN90°Eである。柱間距離は桁行が1.7~2.0m前後、梁行は約1.64~1.8mである。柱穴の掘り方は不定形である。深度は遺構確認面から0.1~0.4m前後を測



第50図 SB-07平面図・断面図



第51図 SB-06平面図・断面図

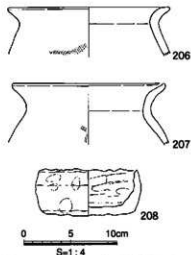
る。建物からは土師器や須恵器の破片は少量出土しているが、図示できるものはなかった。

SB-07 (第50図)

L-36およびM-36グリットを中心とした位置にある。桁行7.16m（4間）、梁行3.0～3.44m（1間）の側柱建物で、方位はN88°Eである。柱間距離は桁行が約1.7～2.0m、梁行は3.0～3.44mで、桁行・梁行ともに柱間の距離にはややばらつきがある。SB-05およびSB-06の建物と重複しているが、新旧関係は不明である。柱穴の掘り方は不定形で、深度は遺構確認面から0.14～0.4mの深さを測る。建物からは土師器や須恵器の破片は少量出土しているが、図示できるものはなかった。

SB-08 (第51・52図)

M・N-37グリットを中心とした位置にある。建物は、桁行7.2m（4間）、梁行4.7m（3間）の側柱建物で、方位はN89°Eである。柱間距離は桁行が約1.7～1.96m、梁行は約1.56～1.8mで、桁行・梁行ともに柱間の距離はほぼ一定している。柱穴の掘り方は方形が多いが一部不定形もある。柱穴の深度は遺構確認面から0.16～0.36mを測る。SB-09とは南西の柱穴

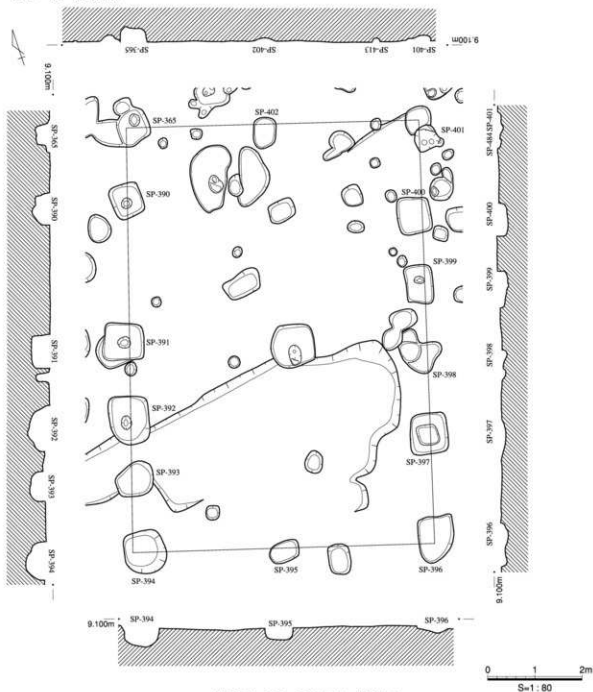


第52図 SB-08出土遺物実測図

の一部が重複するが新旧関係は不明である。S B-08から検出された遺物は、いずれも碎片で、柱の抜き取り痕からの出土である。

206はS P-365の出土で、口径約16.9cmを測る土師器甕である。外面体部に斜めのハケ調整が見られる。内面は摩擦が激しく不明である。口縁部は「く」字状に外反する。207も土師器甕で、口径約8.0cmを測る。頸部が若干上方に伸び、また口縁端部積み上げる形態をとる。体部外面にはハケ調整が施され、内面体部上部はナデ調整?を行う。S P-365から出土している。208は口径約10.4cm、器高約4.8cmを測る土師器手捏ね土器である。S P-369から出土している。

S B-09 (第53図)



第53図 S B-09平面図・断面図

M-38・39グリットを中心とした位置にある。建物は、桁行9.1m（5間）、梁行6.4m（2間）の側柱建物で、方位はN20° Eである。柱間距離は桁行が約1.7～3.0m、梁行は約3.0～3.2mで、梁行は柱間の距離はほぼ一定しているが、桁行はまばらである。柱穴の掘り方は方形が多いが一部不定形もある。柱穴の深度は遺構確認面から0.1～0.5mを測る。建物からは土師器や須恵器の破片は少量出土しているが、図示できるものはなかった。

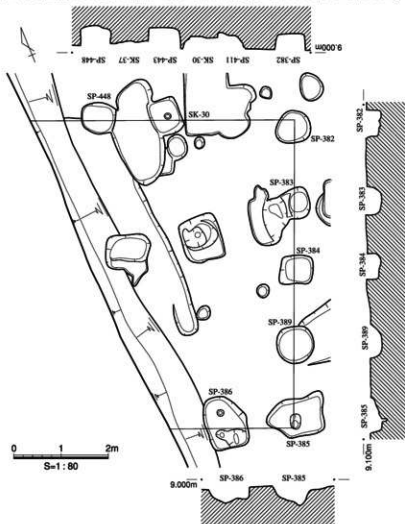
SB-10（第54図）

L-38グリットを中心とした位置にある。建物の西側一部は調査範囲外にあるが、桁行6.6m（4間）、梁行2間以上の側柱建物で、方位はN16° Eである。柱間距離は桁行が約1.4～1.8m、梁行は1.8mを測る。柱穴の掘り方は不定形で、深度は遺構確認面から0.24～0.4mの深さを測る。建物からは土師器や須恵器の破片が少量出土している。図示できるものはなかった。

SK-13・17・18（第55・56図）

L-30グリット内に位置し、SK-13・17・18は連続した遺構である。SK-17はSK-13とSK-18に切られていて、新旧関係は明白であるが、SK-13とSK-18については不明である。SK-13・17・18の埋土は基本的に同様の灰褐色土を呈し、土層からは時間的差異はそれほど認められない。また、各遺構の深度は確認面からSK-13が約0.2m、SK-17が約0.18m、SK-18が0.27mを測り、各遺構深度の差がほとんどなく、浅かった。遺物の出土状況は破片が多く散在する状況で検出されている。

209～211はすべて須恵器坏G身である。それぞれ口径約9.0cm・10.4cm・9.8cmで、器高3.5cm・3.8cm・3.0cmを測る。底部においても、すべてヘラ切り後粗いナデ調整を施す。212は土師器浅鍋で、口径約34.2cmを測る。口縁部は「く」字状に外側に開き、端部を内側に強く折り返す形態をもつ。外面体部上方は横方向のカキ目を残し、下方では叩き調整を施す。内面体部上方は横ナデを行い、下方部については同心円文の叩きあて具痕が残る。213・214は管状土錘である。ともに土師質で、側面形は長方形を呈する。



第54図 SB-10平面図・断面図

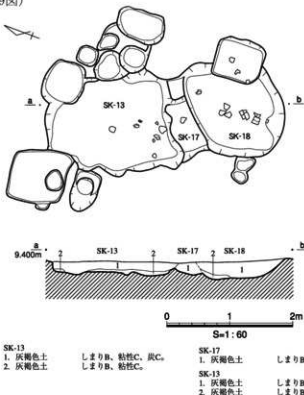
SK-21・22・23・24・25 (第57～59図)

○-36・37グリットを中心とした位置にSK-21～25の重なり合った連続する遺構である。各遺構の構築順については、土層の堆積状況からSK-23とSK-25が一番古く、次にSK-21、そしてSK-22の順になる。SK-24については切り合い関係が不明のところがあり、新旧関係はわからない。遺物の多くは、SK-21から出土しているが、SK-22・23からも一定量認められる。ちなみに、SK-24・25では、土師器や須恵器の破片は少量出土しているが、図示できるものはなかった。

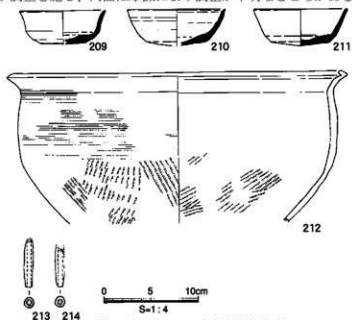
215は土師器小型壺の体部下半である。調整は摩滅が激しく調整は不明である。一部内面には指頭圧痕が認められる。216は土師器高坏である。外面はナデ調整を施し、内面はハケ調整を行う。217は口

径約9.0cm・器高約4.3cmで比較的浅い丸底の形態をとる。土師器碗か。体部から途中で屈曲し、やや外に開く口縁部を有する。内外面の調整は摩滅が激しく不明な部分が多いが一部内面にハケによる調整痕が認められる。218は口径約12.8cmを測り、内面が丁寧な横ナデ調整を施す。土師器の器台か。219は口径約10.8cmで、口縁端部をやや内湾気味に立ち上がらせる土師器の小型碗である。体部外面はケズリ調整を施し、内面は摩滅により調整が不明なところがあるが、丁寧なナデ調整が行われている。220

～232までは土師器甕である。220は口径約13.2cmで、口縁部はやや上方に伸びる形態の小型の甕である。口縁の内外面はナデ調整を施し、体部については外面がハケ調整、内面はケズリ調整を行う。外面体部に一部煤が付着。211は口径約13.2cmを測り、赤褐色の色調を呈する。口縁部は「く」字に屈曲し、外に向かって薄く引き延ばす形態をとる。内外面は摩滅が激しく調整は不明である。222も赤褐色の色調を呈し、口径約18.0cmを測る。口縁形態は「く」字状を呈し、やや広めに外側に開く。口縁内外面はナデ調整を施す。223も「く」字の口縁部を有

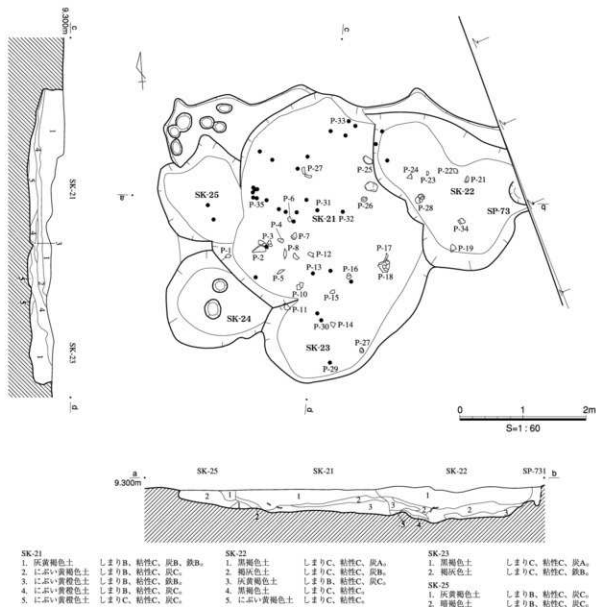


第55図 SK-13,17,18平面図・断面図

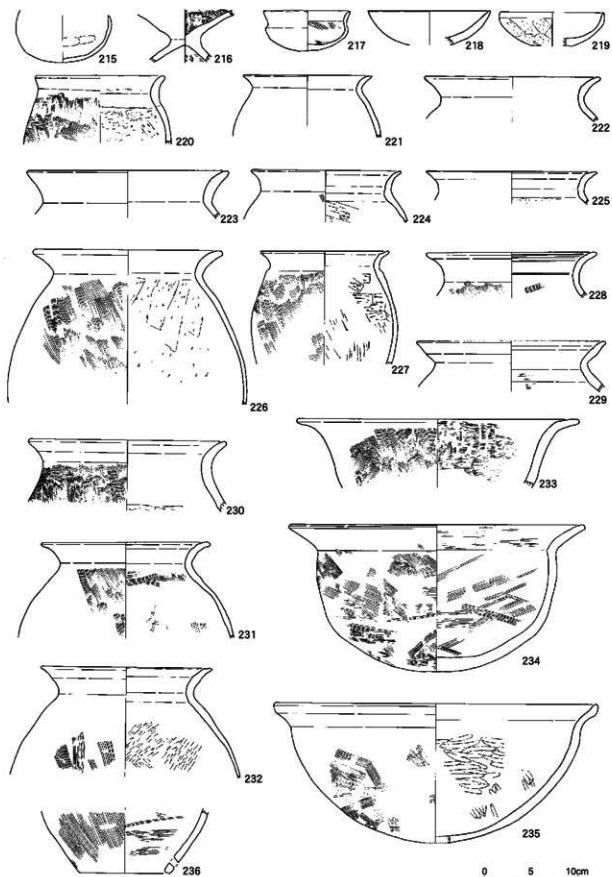


第56図 SK-13出土遺物実測図

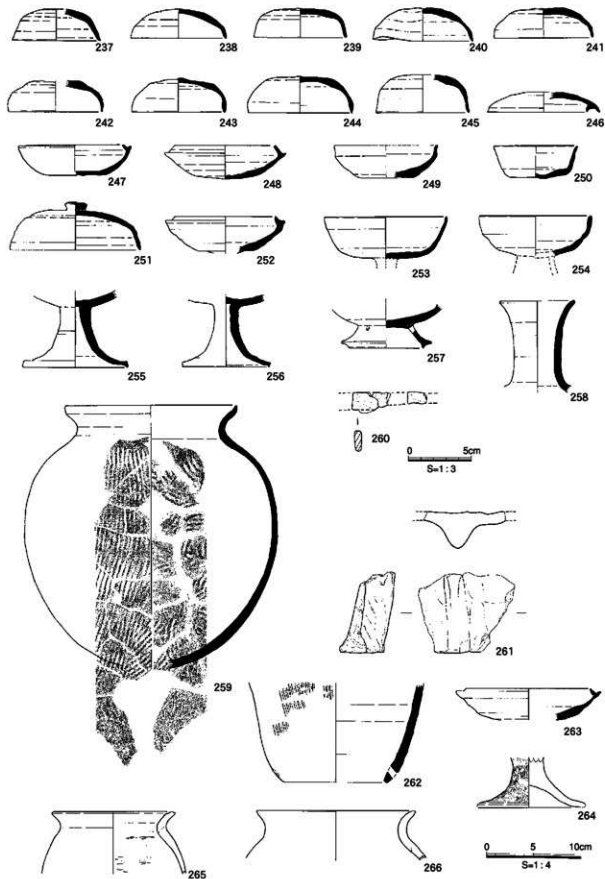
し、頸部から口縁部にかけて鋭角な屈曲が見られる。色調は黄褐色系で、胎土はやや細かな粒子を多く含む。226は口径約20.0cmで、赤褐色の色調を呈する。外面はハケ調整を施し、内面では縦方向のケズリが見られる。224・225・227～232はいわゆる「段状口縁」を有する土師器甕である。頸部は「く」字に外反し、口縁部は強く外側に開く。224・225・227・230・232は、外面体部を縦および斜め方向のハケ調整を施し、内面体部の調整をケズリによって仕上げている。一方、228・229・231の土器については、内面体部においてもハケ調整を施す。いずれも底部まで残存していないため、体部のどの辺までハケ調整が行われているかは不明である。また、上記のいずれの「段状口縁」甕も、色調は赤褐色系を呈し、胎土もやや粗い粒子のものが多く見受けられる。233～235は土師器浅鍋である。233は、口縁部が水平近くまで外側に開く形態を有し、内外面ともにハケ調整を施す。体部下半は欠損している。234は頸部で強く鋭角に屈曲し、外反する。233と同様に内面はハケのちナデ調整を施し、外面はハケ調整のみである。また、内外面口縁部については横方向のナデ調整を最終段階で施している。235は、頸部



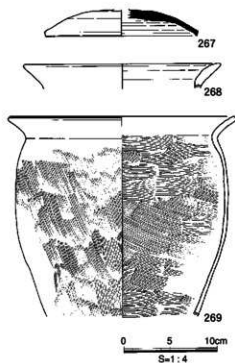
第57図 SK-21,22,23,24,25平面図・土層図



第58図 SK-21出土遺物実測図

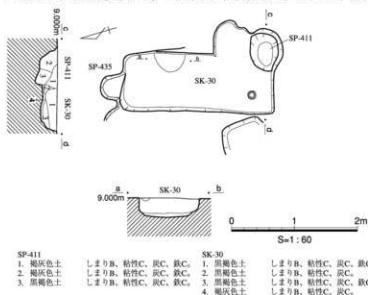


第59図 S K-21(237~243・245~247・249~261)・22(244・248・262)・23(263~266)出土遺物実測図



第60図 S K-29出土遺物実測図

は弱い「く」字状を呈し、口縁外面に1cm前後の面をもって上方に伸びる口縁部を有す。口径約33.8cm、器高約14.7cmを測る。外面体部はハケ調整を行い、内面においては粗いミガキ状のナデ調整が施されている。236は土師器甕の底部である。残存しているものには底部下方側面に1孔認められるが、もう1孔が対面に開けられていると思われる。外面は縦方向の後ナデ調整を行い、内面においては横方向のハケの後ナデ調整を施す。237~245は須恵器坏H蓋で、口径は約9.4~11.0cmに収束できる。天井部の調整はヘラ切り後ケズリ調整を行うのは237・245で、ヘラ切り後ナデ調整を施すのは238~244である。その中でも241~244はやや粗いナデ調整を施す。246は須恵器坏G蓋である。口径約12.0cmを測り、天井部はヘラ切り後ナデ調整を施す。247・248・252は須恵器坏H身である。口径は約10.2~10.8cmに収まる。また、底部調整は247がヘラ切り後粗いナデ調整を施し、248・252においてはヘラ切り後不調整である。249・250は須恵器坏G身である。249は口径約10.8cmを測り、底部はヘラ切り後不調整である。250は口径約8.8cmで、底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。251・252は須恵器有蓋高坏で、251は蓋である。252は坏の受け部のみである。253~256は須恵器無蓋高坏の坏部分である。255・256は受け部が欠損しており、また、脚においては透かしが認められない。253は口径約13.0cmで、254が口径約11.8cmを測る。257は須恵器瓶底部と考えられる。脚と体部の境界に刺突孔が3箇所認められる。258は須恵器瓶で、頸部~口縁部にかけて残存している。口径約7.8cmを測る。259は口径約18.2cmで、器高約27.7cmを測る須恵器甕である。口縁端部はやや上方に摘み上げる形態をとる。内外面の叩き成形は、外面が平行線文で、内面は同心円文が施されている。

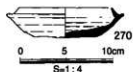


第61図 S K-30平面図・断面図

SP-411
1. 焼灰色土
2. 焼灰色土
3. 黒褐色土

SK-30
1. 黒褐色土
2. 黒褐色土
3. 黒褐色土
4. 焼灰色土

1. しまりB、粘性C、灰C、鉄C。
しまりB、粘性C、灰C、鉄C。
しまりB、粘性C、灰C、鉄C。
しまりB、粘性C、灰C、鉄C。



第62図 S K-30出土遺物実測図

260は鉄製品である。破片で小片のため器種は不明であるが、小刀の可能性が考えられる。261は土師質の土製品であるが、器種は不明である。1cm前後の粘土板に三角形を呈する粘土紐が縦に貼り付けられ、やや斜めに立つ。移動式の籠かもしくは形象埴輪の一部か。262は須恵器甕である。外面底部付近は1次成形で平行線文の叩きを行い、

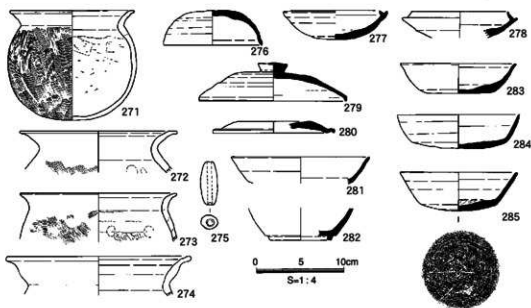
その後ナデ調整が施されている。内面は横ナデ調整が認められる。また、底部下方側面に2孔開けられている。263は須恵器坏H身である。口径約13.1cmを測る。底部は欠損しているため調整は不明である。264は土師器高坏の脚部である。外面は細かな縦方向のハケ調整が施されている。265は「段状口縁」を有する土師器甕である。外面の調整は不明であるが、内面はケズリ調整が施されている。色調は赤褐色系で、胎土はやや粗い粒子が含まれる。口径約13.0cmを測る。266は土師器甕である。頸部は「く」字状で、口縁部がやや外側に伸びる形態をもつ。口径約16.6cmを測る。

SK-29出土遺物（第60図）

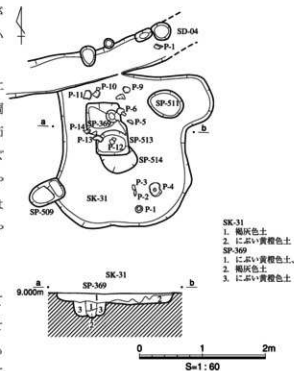
267は須恵器坏蓋である。天井部の一部が欠損している。転用硯として使用されていたと考えられる。そのため内面は磨り減っている。また、若干墨の痕跡も認められる。本来は宝珠つまみがつくが打ち欠かされている。口径約16.0cmを測る。268は「段状口縁」を有する土師器甕である。口縁部のみ残存する。色調は赤褐色系を呈し、やや粗い粒子の胎土を有する。269は口径約23.6cmを測る土師器甕である。頸部は「く」字を呈し、かなり外反し開く口縁部を有する。また、口縁端部は若干の面をもつ。

SK-30（第61・62図）

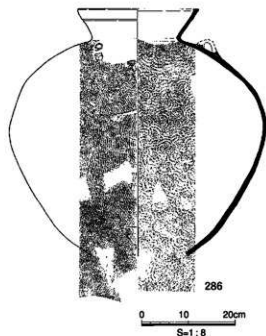
L-37・38グリットに位置し、南北に長い方形をとる。埋土は黒褐色土を呈し、SP-41に切られる。また、出土遺物は土師器・須恵器の破片が若干と270の須恵器坏H身の完形品が1点出土している。



第64図 SK-31出土遺物実測図(1)



第63図 SK-31平面図・土層図

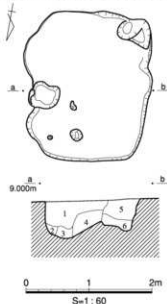


第65図 SK-31出土遺物実測図(2)

270は口径約9.8cmで、器高約3.2cmを測る。底部はヘラ切り後粗いナデ調整を施す。内面はナデ調整を行う。SK-31(第63・64・65図)

M-36・37グリットに位置する。遺構は方形に近い不整形をとる。埋土は褐灰色土を基本とし、下層は地山に近いぶい黄褐色土を呈する。SK-31のほぼ中央にSB-08の建物の柱の一部であるSP-369がある。SP-369は土層セクションよりSK-31に切られており、SB-08はSK-31より古い年代が当てられるよう。遺物は多く出土している。遺物は飛鳥時代～奈良時代にかけての須恵器と土師器で、一括性は認められない。

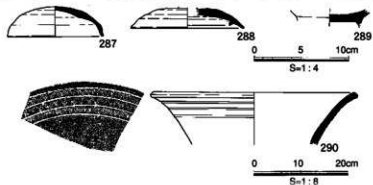
271～274は「段状口縁」を有する土師器甕である。271は小型で、口径約14.0cm、器高約12.6cmを測る。外面はハケ調整で、一部煤が付着する。内面体部はケズリ調整を施し、口縁部では横ナデを行う。胎土はやや粗い粒子を含み、赤褐色系の色調を呈する。272は口径約18.0cmで、口縁部が大きく外側に開く形態をもつ。外面調整はハケで、内面はケズリ調整を施す。赤褐色系の色調を呈する。273は口径約17.8cmを測り、若干口縁端部を外側に開く。外面はハケ調整を行い、内面はケズリを施す。黄褐色系の色調を呈する。274はやや粗い粒子の胎土を含み、黄褐色系の色調を呈する。口径は約20.8cmを測り、273に近い形で口縁端部を外側に開く。275は長さ4.9cmを測る土師質の管状土錘である。276は口径11.1cm、器高3.9cmの須恵器坏H蓋である。口縁部と天井部の境界の稜はない。天井部の調整はヘラ切り後粗いナデを施す。277・278は須恵器坏H身である。277は口径10.0cm、器高3.2cmを測り、底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。278は口径約7.0cmで、底部調整は不明である。279・280は須恵器坏B蓋である。279は口径16.9cm、器高4.4cmを測る。天井部はヘラケズリを施し、やや平坦な面をもち、口縁端部は折り返さない。280は口径約13.8cmを測り、口縁端部を折り返す形態をもつ。天井部の調整はヘラケズリか。281は口縁部の一部が残存する。口径約15.8cmを測る須恵器坏Aと考えられる。282は底径約



SK032

1. 灰黄褐色土 しまりB, 粘性C, 炭C,
2. 灰黄褐色土 しまりB, 粘性C, 炭C, 炭C,
3. 灰黄褐色土 しまりB, 粘性C, 炭B,
4. 灰黄褐色土 しまりB, 粘性C, 炭C,
5. 灰黄褐色土 しまりA, 粘性C, 炭B,
6. 灰黄褐色土 しまりB, 粘性C, 炭C, 炭B.

第66図 SK-32平面図・土層図



第67図 SK-32出土遺物実測図

6.9cmを測る須恵器杯Bである。283～285は須恵器杯Aである。283は口径13.1cm、器高3.5cmを測る。底部はヘラ切り後粗いナデ調整を施す。口縁端部が若干外に開く。284は口径14.0cm、器高3.8cmを測り、底部はヘラ切り後ケズリ調整を施す。285は口径13.3cm、器高4.5cmを測る。底部はヘラ切り後ナデ調整を施し、ヘラ記号が認められる。286は縦位の耳が3方向につく須恵器大甕である。底部は欠損しているが、ほぼ球形をなす。外面は平行線文で、内面は同心円文の叩き痕が認められる。

ちなみに、上記の遺物の中でSK-31の最上層もしくは遺構付近で検出されているのが273・280・282の3点であり、遺構に伴わない。

SK-32 (第66・67図)

K-35・36グリットに位置する。遺構は南北約2.3m、東西約1.5mの若干南北に長い方形の形をとる。また、遺構確認面から約0.6mで遺構底に達する。埋土は灰黄褐色土を基本とする。遺物は須恵器・土師器が少量出土している。

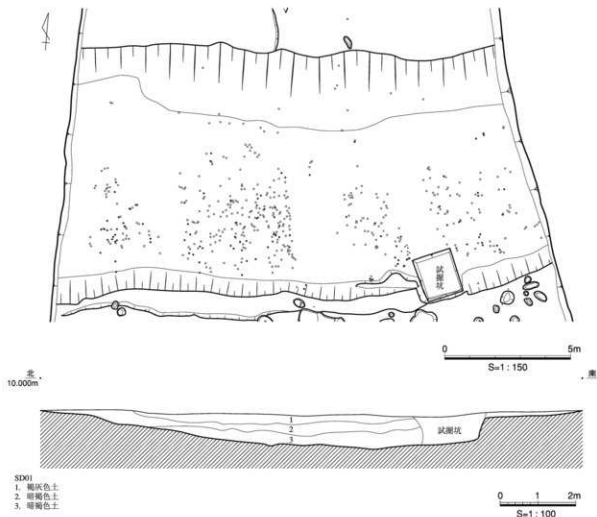
287は須恵器杯H蓋である。口径約10.0cm、器高約3.2mを測る。口縁部と天井部の境界の稜はなく、また、天井部はヘラ切り後粗いナデ調整を施す。288は口径約11.9cmを測る須恵器杯Gで、かえりは短く内におさまる。天井部はナデ調整を施し、乳首状のつまみの痕跡が残る。289は残存部が少なく器種は不明であるが、須恵器の高杯もしくは短脚を有する瓶と考えられる。290は口縁外面に波状文を有する須恵器大甕である。波状文は3段に描かれている。口径は約42.2cmを測る。

SD-01 (第68～81図)

34グリットを中心に東西方向に伸びる自然流路と考えられる。流路は1区で確認されたSD-05と同一流路と考えられ、東側から西側方向に流れていると想起できる。流路は幅10m前後、深度0.9m前後を測り、埋土上層は褐灰色土で、中・下層は暗褐色土を基本とする。遺物は全層から多くに検出されたが、下層から出土した遺物は少ない。また、下層からは弥生時代の土器を中心に出土しているが、若干飛鳥時代～平安時代の遺物も出土している。遺物の出土状況から流路の存続期間や廃絶時期を明確に判別することは不可能であった。しかし、中近世の遺物はSD-01からは出土していないため、中世以前にSD-01は機能していなかったと考えられる。

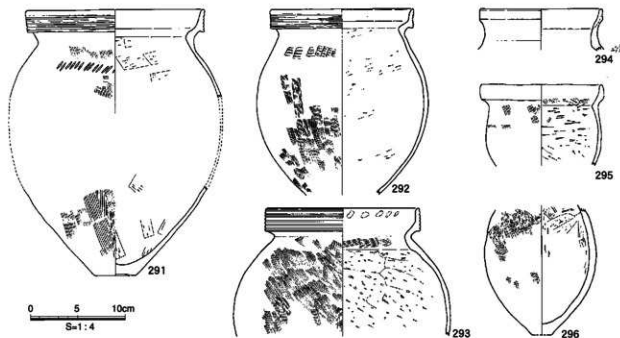
291～296は弥生時代終末～古墳時代初頭の土器である。291～293は擬凹縁を有する甕形土器である。291は口径約18.7cmで、体部から底部にかけて外面はハケ調整を施し、肩部にはハケ目工具による列点文が認められる。内面体部はケズリ調整を施す。292は体部上方でナデ調整が施されている。口径15.1cmを測る。293は口径約16.0cmで、外面体部はハケ、内面体部はケズリ調整を施す。内面頭部の一部にハケによるナデの痕跡が見受けられる。また、口縁端部内面には指頭圧痕が残る。294は口径約12.8cmを測り、有段口縁が不明瞭な壺である。口縁部内外面の調整は横ナデを施す。295は有段の口縁部をもつ壺である。口縁はやや受け口状で内傾する形態をもち、口径約12.5cmを測る。外面体部はハケ工具をもちいた縦ナデ調整を施し、内面体部は横方向のケズリ調整を行う。296は、体部から底部にかけて残存している。底部は径約2.2cmの小きな平底を呈し、外面体部はハケ状工具をもちいたナデ調整を施す。一部にハケ目が残る。内面は体部上半でケズリ調整、下半はナデ調整を行う。297～305は「段状口縁」を有する土師器甕である。外面体部はハケ調整を行い、内面は基本的にはケズリ調整が施される。304の内面には一部ハケ目が残るが、おそらく1次成形時に施されたハケ目と考えられる。口縁端部が大きく外に開く形態をもつもの(297・299・301・302・303・304)と頭部が「く」字状に外側に開いたまま伸び上がる形態のもの(298・300・305)の口縁部の形態で大きく2つに分けられる。また、色調が赤

褐色系のもの(297・301・303・304・305)と黄褐色系のもの(298~300・302)がある。306と307は土師器の小型甕であるが、口縁部内面が不明瞭のため「段状口縁」であるかは不明である。306は口径約13.0cmで、外面体部はナデ調整を施し、内面体部は不明である。307においては、外面体部はハケ調整、内面体部はケズリ調整を行う。308は口径約20.0cmの土師器甕である。内面体部のケズリ調整以外は摩滅が激しく調整は不明である。頸部は鋭角に「く」字状を呈するが、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。309は口径約21.0cmを測る土師器甕である。内外面体部はハケ調整を施し、口縁部は横方向のナデ調整を行う。310は口径約23.8cmで、外に大きく開く口縁部をもつ土師器甕である。口縁端部はやや上方に摘み上げる形態をもつ。調整は内外面ともにハケ調整が施されている。311は口径約17.8cmで、外に大きく開く口縁部をもち端部は丸くおさめる土師器甕である。外面の摩滅は激しく調整の観察は不可能であるが、内面体部はケズリ調整を施している。312は鋭角に屈曲する口縁部をもつ土師器甕である。内外面体部ともにハケ調整を施す。口径約21.1cmを測る。焼成はかなり硬質である。313は口径約18.0cmを測る古墳時代前期の土師器高坏か。外面は調整不明で、内面はミガキを施す。314は口径15.0cm、器高11.9cmを測る土師器高坏である。外面はミガキを施し、内面の調整は不明瞭であるが、ミガキの可能性はある。315~317は土師器の小型甕である。315は口径約16.0cmで、受け口状の口縁形態を有する。外面調整は摩滅が激しく不明瞭であるがカキ目の跡が若干確認できる。内面は横ハケ調整が施され

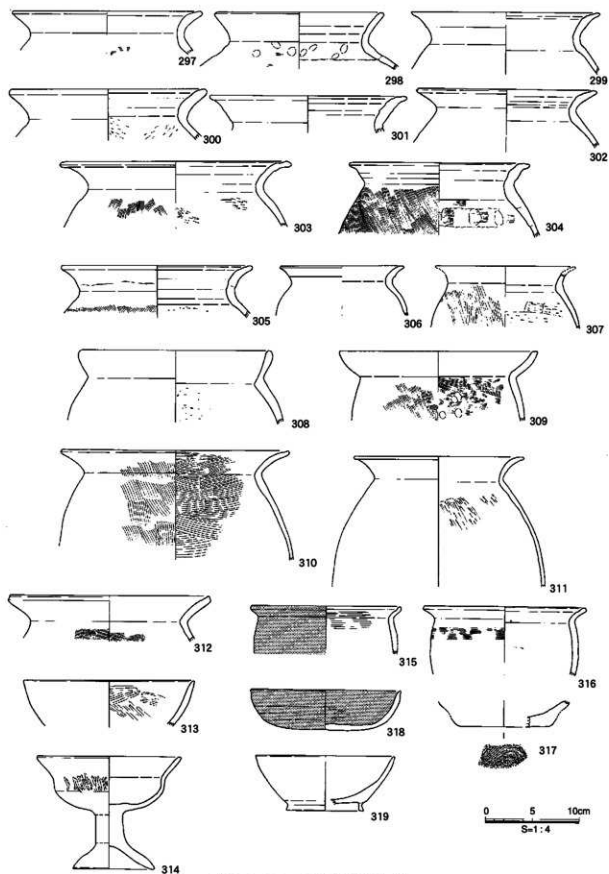


第68図 SD-01遺物出土状況図・土層図

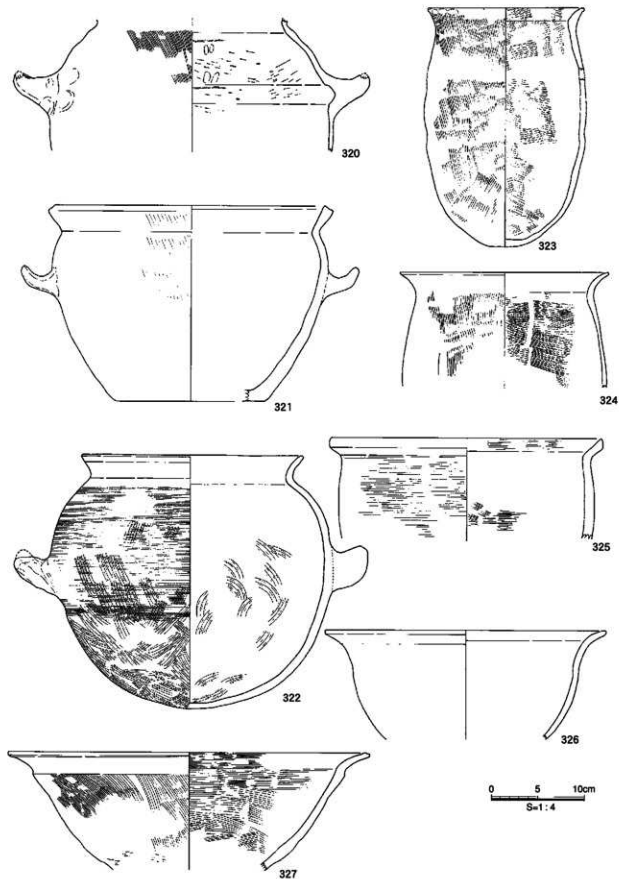
ている。外面の一部に赤色顔料が若干見受けられる。316は口径約17.0cmで、外面に煤が残存している。317は底径約10.0cmで、底部外面は糸きり痕が確認できる。小型甕の底部と考えられる。318は口径約15.8cmの内外面赤彩を施す土師器坏である。内面と外面口縁部の一部にミガキ痕が認められる。外面の底部は丁寧なヘラケズリ調整を施している。319は口径約14.8cm、器高約5.9cmの土師器碗Bである。外面底部から体部下半においてはケズリ調整の痕跡が若干見受けられる。320～322は手付深鍋である。320は外面ハケ調整、内面はケズリ調整を施す。体部は欠損部分が多く、明確な器形の復元は困難であるがおそらく球形に近いものと考えられる。321は口径約28.5cm、器高約20.7cmを測る。頸部は鋭角に「く」字状に折り曲がり、口縁端部は面を有する内外面はナデ調整が施されているが、外面の一部には1次調整のハケ目が残存する。322は口径23.8cm、器高26.8cmを測る。外面体部は平行線文、内面は同心円文の叩きを行い、外面体部上半にはカキ目を施す。323～325は土師器甕である。323は口径約16.6cmで砲弾形を呈する器形をもつ。口縁部は「く」字状に短く外に開く。調整は内外面ともにハケを施す。324の口縁部はやや緩やかに外に開き、口径約22.0cmを測る。外面体部は縦ハケ調整、内面体部は横ハケ調整を施す。325は口径約28.8cmで、外面体部にカキ目をもつ長胴の甕と考えられる。口縁部は鋭角に「く」字に屈折する。326・327は土師器浅鍋である。326は口径約29.9cmを測り、口縁部は大きく外に開く形態をもつ。内外面は摩滅が激しく調整は不明瞭である。327は口径約38.4cmで、326同様に口縁部は大きく外に開く。外面口縁部はナデ、体部はハケ調整を施すが、底部付近においてはケズリの跡が確認できる。内面は口縁から底部にかけてハケ調整が行われている。328・329は土師器甕である。328は口径約22.9cm、器高27.8cm、底径約14.8cmを測る。口縁部は直立気味で上方に伸び上がる形態をとる。外面の調整は口縁部で横ナデ、体部では斜めハケ、底部付近でケズリを行う。また、内面はハケ調整を施す。329は底径約16.0cmを測る甕の底部と考えられる。外面体部はハケ調整を行い、底部付近においては横ハケを施す。内面体部は縦ハケが確認されるが、底部付近はケズリ調整を行う。また、底部底においてもハケによる調整が認められる。330～334は土師器鍋か甕などにつく把手と考えられる。



第69図 S D-01出土遺物実測図(1)

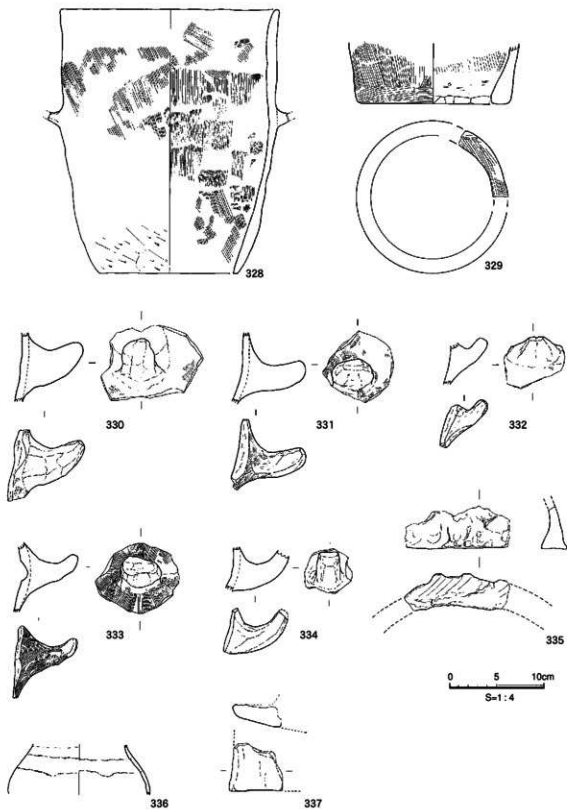


第70図 S D-01出土遺物実測図(2)



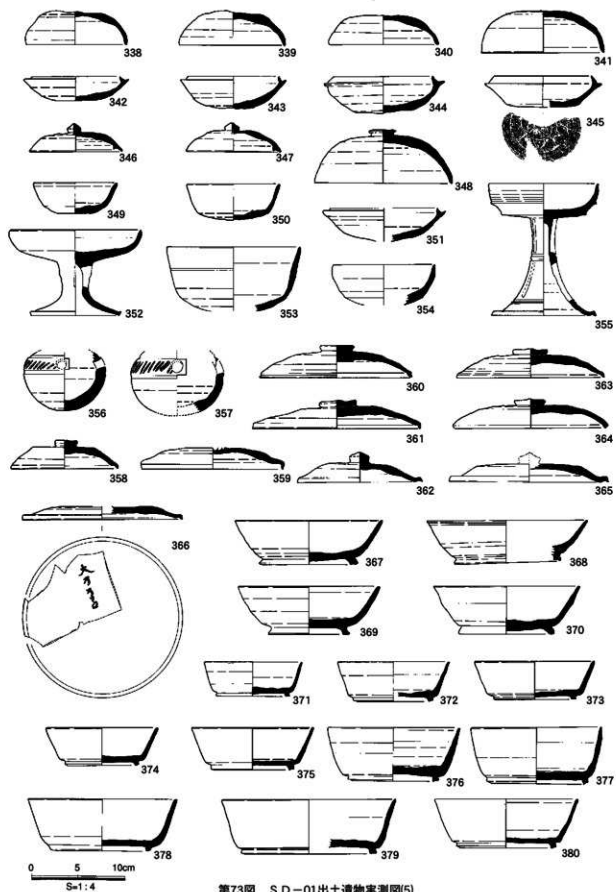
第71図 S D-01出土遺物実測図(3)

334は細かな胎土を呈し、他の把手と比べて幅細く製作されている。332においては三角形の把手を呈し、鍋につく把手と想定できる。335は土師質の製品であるが、器種は不明である。いずれかの基底部と考えられ、やや内側上方に伸びていく。器種の可能性としては瓶か移動式竈の一部では

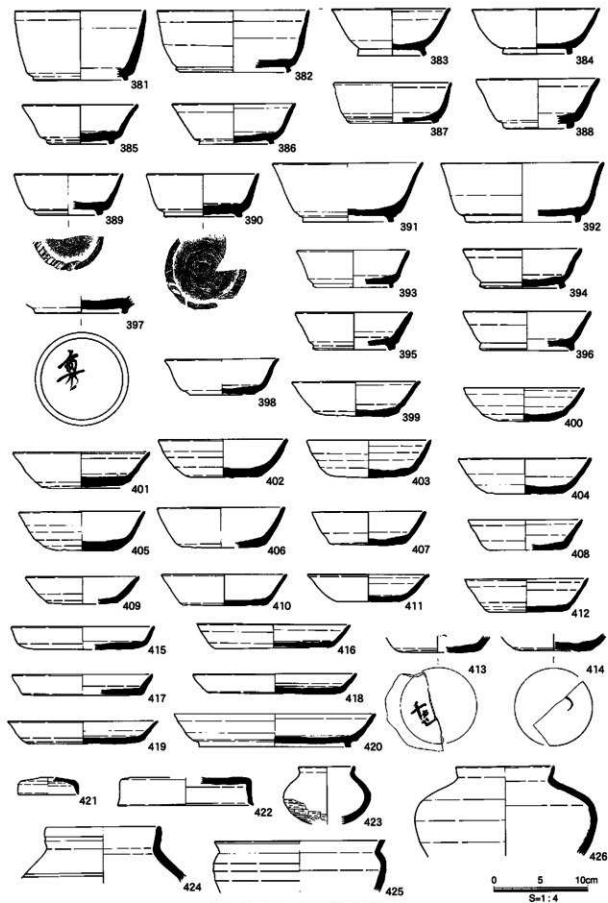


第72図 S D-01出土遺物実測図(4)

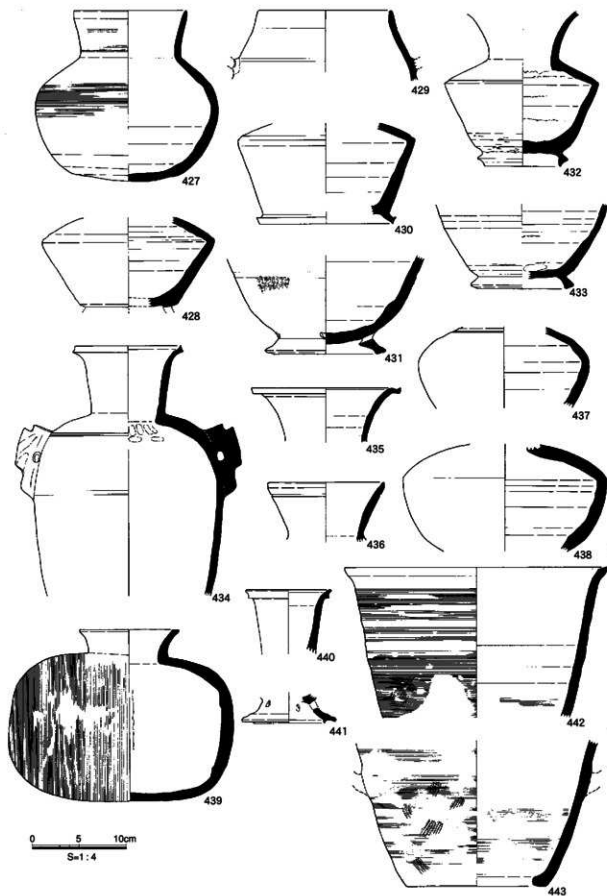
ないかと思われる。しかし、移動式竈は越前地方においてこれまでに出土例はほとんどなく、335が竈の可能性は低いかもしれない。336は製塩土器である。色調は赤褐色で、非常にもろい。破片は一定量検出できたが、小片ばかりで復元できるものはほとんどなかった。製塩土器は、粘土紐を幅1.5～2cm前後、厚さ1～3mm前後に平たく伸ばし、輪積み技法により製作されている。337は不明土製品である。土師質でいずれかの基底部に位置するものと考えられる。338～341までは須恵器坏H蓋である。338は口径10.5cm、器高3.4cmを測り、天井部はヘラ切り後不調整である。口縁部と天井部の境界の稜は不明瞭である。339は口径11.1cm、器高3.6cmを測り、天井部はヘラ切り後不調整である。口縁部と天井部の境界の稜は不明瞭である。340は口径約11.6cm、器高3.1cmを測る。天井部はヘラ切り後ナデ調整を施す。口縁部と天井部の境界の稜は不明瞭である。341は口径12.9cm、器高4.4cmで、天井部はヘラケズリ調整を行う。口縁部と天井部の境界の稜は不明瞭である。342～345は須恵器坏H身である。342は口径約9.2cm、器高2.6cmを測り、底部ヘラ切り後粗いナデ調整を施す。立ち上がりは短く内傾している。底部と体部の境界の稜は不明瞭である。343は口径9.6cm、器高5.5cmで、底部ヘラ切り後粗いナデ調整を施す。底部と体部の境界の稜は不明瞭である。344は口径10.5cm、器高3.9cmで、底部ヘラ切り後不調整である。底部と体部の境界の稜は明瞭である。345は口径10.2cm、器高3.3cmを測り、底部ヘラ切り後不調整である。底部と体部の境界の稜は明瞭である。また、底部にヘラによる直線記号?が数本確認できる。346・347は須恵器坏G蓋である。346は口径約10.0cm、器高3.0cmを測り、天井部はヘラケズリ調整を行う。347は口径10.2cm、器高3.1cmを測る。天井部は降灰がひどく調整は不明である。349・350は須恵器坏G身である。349は口径約9.0cm、器高3.3cmを測り、底部はヘラ切り後不調整である。350は口径9.8cm、器高3.8cmを測り、底部はヘラ切り後未調整である。348は須恵器有蓋高坏の蓋で、口径14.7cm、器高5.7cmを測る。天井部はカキ目状の丁寧なナデ調整が施されている。351は須恵器有蓋高坏身と考えられるが、坏H身の可能性もある。口径約11.3cmを測り、底部はナデ調整が施されている。352は須恵器無蓋高坏である。口径約13.9cm、器高9.1cmを測る。脚は1段のみで4方向から薄い切れ込みが入る。353須恵器無蓋高坏の受け部である。口径約14.0cmを測り、口縁部が若干斜め上方に伸びる。受け部の底部外面はケズリ調整を施す。口縁下に1条沈線が巡る。354は須恵器高坏の受け部と考えられるが、坏G身の可能性も想定できる。口径約10.8cmを測り、底部はヘラ切り後不調整である。355は長脚2段3方透かしの須恵器無蓋高坏である。口径約11.4cm、器高約14.0cm、脚端部径約11.0cmを測る。坏部には体部と底部の境に2条の稜を形成する。また、体部は直立気味に立つ器形をとる。脚部には上段と下段にそれぞれ2本の沈線が巡る。356・357は須恵器甕で、胴部のみ残存する。両方ともに胴部にくし歯状工具による連続刺突文が巡る。358～366は須恵器坏蓋である。358は口径約11.4cm、器高3.0cmを測り、天井部はヘラケズリ調整を施す。また、天井部は平坦面をもち、扁平円盤状のつまみがつく。359は口径約15.0cmを測り、つまみ部分は欠損する。天井部はヘラ切り後ナデ調整を施す。360は口径16.3cm、器高3.4cmで、天井部は降灰のため調整は不明瞭であるが、ヘラ切り後ケズリ調整を施していると考えられる。つまみは扁平円盤状を呈する。361は口径約18.0cm、器高3.1cmを測り、体部上半はケズリ調整を行う。天井部についてはナデ調整を施している。つまみは扁平円盤状を呈する。362は口径15.2cm、器高3.1cmで、天井部はケズリ調整を施す。つまみは乳首状を呈する。363は口径15.8cm、器高3.1cmを測る。天井部はケズリ調整を施し、扁平円盤状のつまみをもつ。364は口径16.0cm、器高3.1cmで、天井部はケズリ調整を施し、扁平円盤状のつまみをもつ。365は天井部が平坦な面をもちヘラ切り後ナデ調整が施されている。口径約17.0cmを測る。つまみ部分は欠損している。366は口径



第73図 S D-01出土遺物実測図(5)

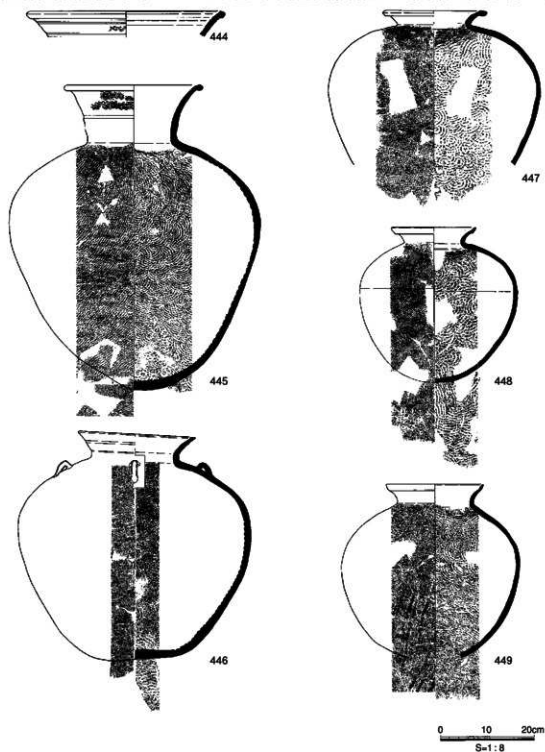


第74図 S D-01出土遺物実測図(6)

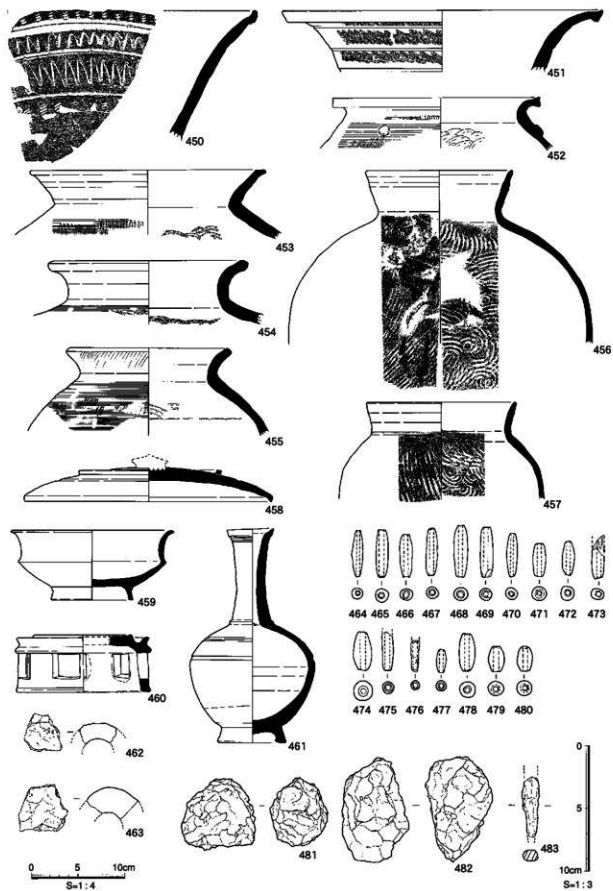


第75図 S D-01出土遺物実測図(7)

約17.0cmを測り、天井部はナデ調整を施す。裏面には「大乃万呂」の人名と考えられる墨書が確認できる。つまみ部分は欠損している。367～397は須恵器坏B身である。367～370は口径14.9～16.9cmで、口縁部がやや外側に伸びる形態をもつ。高台は「ハ」字状に外側に開く。371～382・389・390・395・396は箱型を有する形態をもつ。371～375・389・390・395・396においては、小型の器形で高台が「ハ」字状に外側に開く形態をもつ。376～382は大型で深みを呈する。高台は「ハ」字状に外側に開くもの(377・

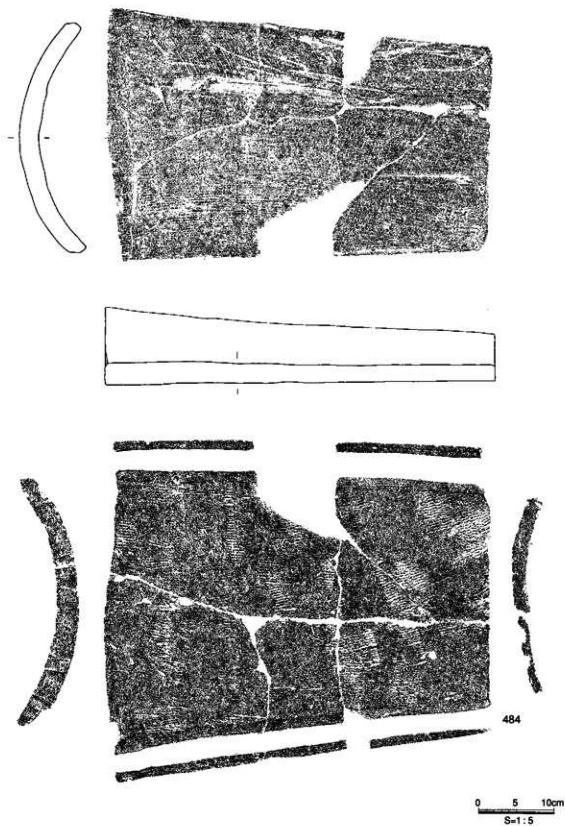


第76図 S D-01出土遺物実測図(8)

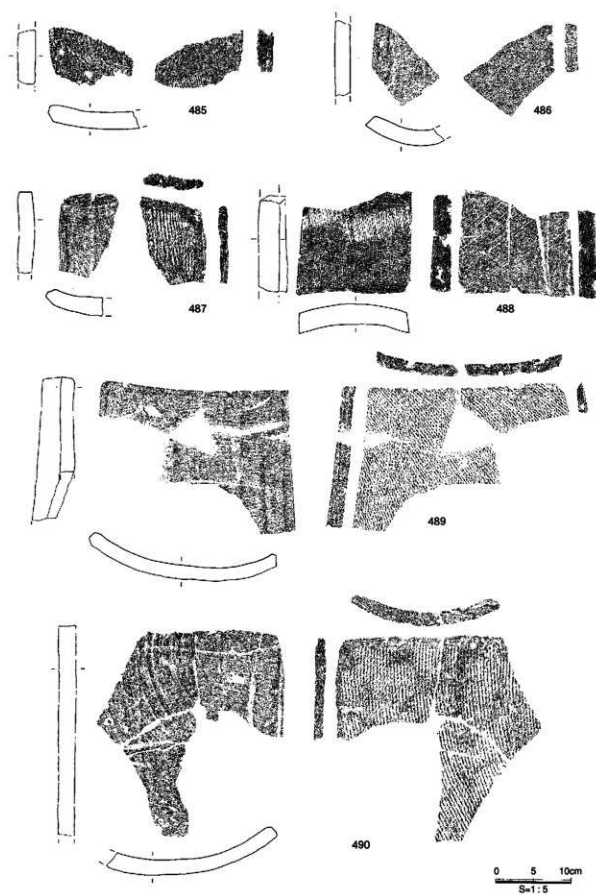


第77図 S D-01出土遺物実測図(9)

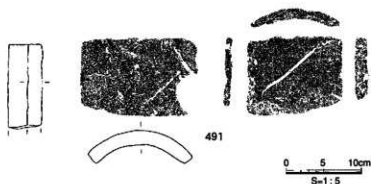
380・381・382)と、直立気味にたつもの(376・378・379)がある。383～388・391～394は体部中ほどから外側に若干反り返る器形を有するものである。383は碗の器形に近いもので高台も高く外側に開くものである。397は体部から口縁部にかけて欠損しているため器形は不明であるが、底部裏側に墨書が認められる。文字は不明。398～414は須恵器坏Aである。413・414は底部裏面に墨書が確認できるが、文字は不明である。415～419は須恵器盤Aである。415はやや上方に伸びる口縁部を有し、底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。口径約15.2cm、器高2.4cmを測る。416～419は口縁部が少し外側に開く形態をもつ。また、底部はヘラ切り後ナデ調整が施されているが、416・419においてはクシ状工具の差し込み痕が認められる。420は須恵器盤Bである。口径約21.3cm、器高3.5cmを測り、口縁部はやや外側に開き伸びていく形態を有する。底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。内外面には火障の痕跡が認められる。高台はほぼ直立気味に立つ。421・422は須恵器蓋である。おそらく、壺に伴うものと考えられる。421は口径約6.4cm、器高約1.8cmを測る。天井部はナデ調整を施す。全体の作りは丁寧である。422は口径14.4cm、器高約3.0cmを測り、天井部および体部外面は丁寧なナデ調整を施す。口縁端部は三角形を呈し、やや外側につまみだす。器形は箱状であるが、天井部の一部が欠損しているためつまみがつかどうかは不明である。423は小型の須恵器壺である。口径約5.8cmを測り、体部外面下半から底部にかけてケズリ調整を施す。424・426は須恵器狭口壺である。424は口径約12.0cmを測る。口縁部は短く直立気味に伸び、端部は丸くおさめる。口縁部下方には1条の沈線が巡る。426は口径約10.6cmを測り、若干内湾する短い口縁部をもつ。胴部は球形を呈する。425は須恵器広口壺で、やや外側に真っ直ぐ開く口縁部をもつ。口径約18.1cmを測る。427は狭口壺で、口径約12.2cm、器高約18.0cmを測る。口縁部は直立気味に伸び、端部はやや先細りする。体部にカキ目跡が残る。429は体部に把手を有する須恵器無頸壺である。口径約14.0cmを測り、把手の位置する体部に1条の沈線が巡る。428・430～433・435・437・438は須恵器広口壺である。いずれも、短脚を有し、体部に稜をもつもの(428・430・432・438)と稜をもたないもの(437)がある。口縁部は口縁端部で外側に開く形態のものがそのほとんどと考えられる。434は須恵器双耳瓶で、口径約11.2cmを測る。内外面はナデ調整を施す。一部頸部内面には指頭圧痕が見られる。440も須恵器双耳瓶の口縁部か。口径9.0cmを測る。439は須恵器横瓶である。口径10.4cm、器高18.1cmで、外側に開く口縁部をもつ。外面にはカキ目が全面に施されている。441は須恵器瓶底部か。底部は返りを有し底径7.6cmを測る。底部には5孔が確認できる。442・443は須恵器瓶である。442はやや外に開く口縁部をもち、口縁端部は三角形を呈する。カキ目は外面のほぼ全域に巡り、体部の一部に平行線文の叩き痕が残る。443は底径14.6cmで、体部に把手をもつ。外面は強い横ナデ調整が施され、体部外面一部に平行線文の叩き痕が残る。内面においても強い横ナデ調整が施されている。444～457は須恵器甕で、体部が残存するすべてのものには、外面は平行線文で、内面は同心円文の叩き成形を施す。445・450・451は口縁部外面に2～3条の波状文が巡る。445は口径約28.2cm、器高63.8cmを測る。口縁部には1条沈線が巡る。口縁部はやや開き気味で上方に伸び、体部最大径が上方にある砲弾形の器形をもつ。外面は平行線文で、内面は同心円文の叩き成形を施す。444は口径12.0cmを測り、口縁部に「×」文が連続して巡る。452においては肩部に扁平のボタン状装飾が施されている。458は須恵器蓋で、口径約26.2cmを測る。器形は編み笠状を呈し、天井部に断面方形の粘土紐を貼り付け巡らす。紐に近いところで2条の沈線が、口縁部に近いところで1条の幅広の沈線が巡る。ちなみに、紐は欠損している。459は須恵器稜碗である。口縁部は外側に大きく開き体部に稜をもつ。口径約16.8cm、器高7.4cm、高台径8.8cmを測る。460は須恵器円面碗の圈足碗である。碗面の径は14.4cm、器高6.1cm



第78図 SD-01出土遺物実測図(1)

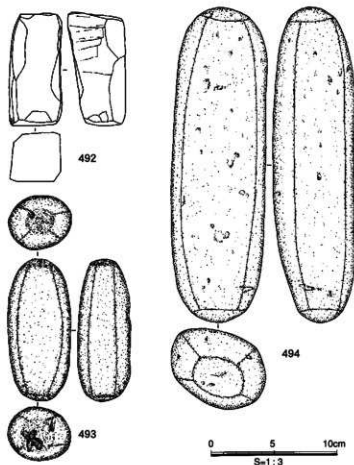


第79図 SD-01出土遺物実測図(1)



第80図 S D-01出土遺物実測図02

共に破片であるため、正確な孔の直径などは不明である。463には溶解したガラス質の膜が残る。464～480は管状の土鏝である。473・479・480は須恵質で、他は土師質を呈する。481・482は鉄滓である。481は119g、482は168gの重さである。483は鉄製品で、器種は不明である。断面は槽凹形を呈する。484～491は瓦である。484～487・489・490は平瓦である。凹面は布目痕がすべての平瓦に認められる。凸面では調整方法に相違により3種類に分類できる。R L縄の原体を凸面全域に叩きしめるⅢ類とその後、凸面を粗いヘラケズリを行うⅡ類があり、さらにその後、別の原体で部分的に叩きしめたⅠ類に分けられる。Ⅰ類は484・485・491で、Ⅱ類は486、Ⅲ類は487・489・490がある。Ⅰ類の484はほぼ



第81図 S D-01出土遺物実測図03

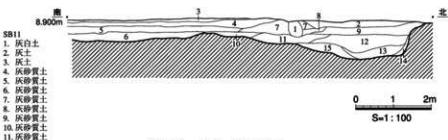
を測る。陸は水平で、溝状の海を有する。台脚に方形透かしをもつ。明確な透かし数は不明であるが、残存する透かしから推測すると8箇所想定できる。また、焼成は非常に良く断面色調が茶褐色を呈する。461は須恵器の水甕である。長い頸部を持ち、口縁端は上方に摘み上げ、受け口状を呈する。体部に1条の沈線が巡る。462・463は輪の羽口である。

全形が復元でき、全長52.0cm、狭幅26.8cm、広幅38.2cmで、厚さは2～3cm前後を測る器形である。488は鬘斗瓦で、幅15.2cmを測る。凸面の調整方法は平瓦の分類によるとⅠ類となる。上記のすべての平瓦において、側縁部は面取りを行う。491は丸瓦で、凹面は布目痕が残る。凸面はR L縄の原体で叩きしめたのち全面をナデ消す調整方法をとる。側縁部においては面取りを行う。492は石質が凝灰岩の砥石である。493は長さ11.2cm、幅4.9cm、厚さ4.2cmを測る、安山岩製の凹石・蔽石である。494は安山岩製の磨石である。長さ24.8cm、幅7.5cm、厚さ6.4cmを測る。

S D-02 (第82・83図)

39～41グリットにかけて東西方向に伸びる溝である。溝はS D-01同様に東から西方向に流れていると考えられる。溝の南側は調査範囲外である。溝は北側が最も深く1m前後を測る。南側は0.5

m前後の深さを測る。溝南側は低湿地帯を呈していたと考えられる。溝の埋土は、灰色の砂質土を基本とする。遺物は北側周辺から検出されたが、量は少ない。遺物は律令時代のものがほとんどを占める。



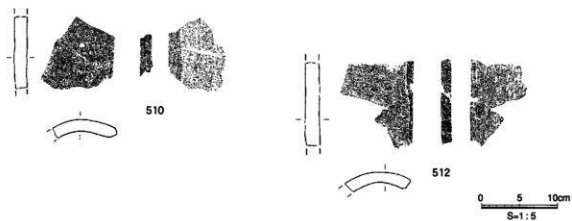
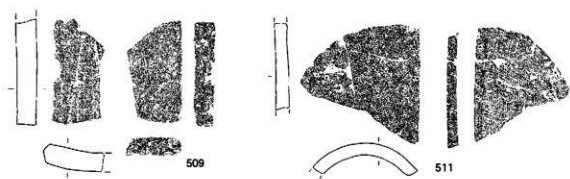
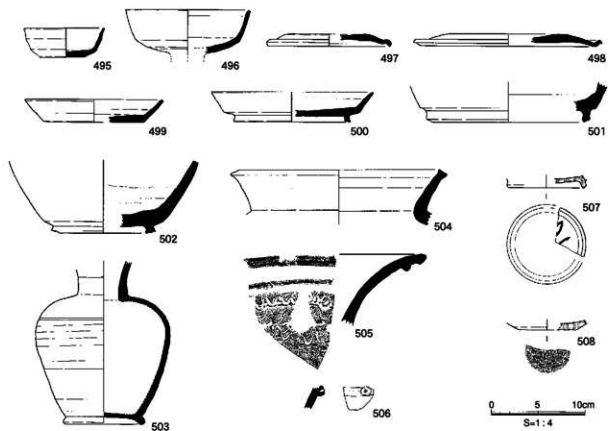
第82図 S D-02土層図

495は須恵器坏G身である。口径約8.4cm、器高3.1cmを測り、底部はヘラ切り後粗いナデ調整を施している。外面の体部と底部の境ではケズリ調整が行われている。496は須恵器無蓋高坏の受け部である。口径約13.0cmを測り、受け部底面はヘラケズリのちナデ調整が施されている。497・498は須恵器坏蓋である。497は口径13.0cmを測り、天井部は平坦面をもち、ヘラ切り後ナデ調整が施されている。498は口縁端部の返りが強く、天井部に向かって器形が下がっていく形態をとる。口径約20.0cmを測り、天井部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。499は須恵器盤Aで、底部はヘラ切り後ナデ調整を行う。口径は約14.4cm、器高約2.4cmを測る。500は須恵器盤Bである。高台径約17.0cm、器高3.2cmを測る。若干外側に開く高台をもち、底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。501および502は広口瓶の底部と考えられる。501は高台径約15.0cmを測り、ほぼ直立にたつ高台を有する。502は若干外側に開く高台を有し、高台径約11.0cmを測る。底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。503は須恵器長頸瓶である。口縁部上方が欠損しているが、外側に開き気味の口縁部をもつと考えられる。高台は短く外側に向かって踏ん張る形態をもつ。高台端部は丸くおさめる。高台径8.6cmを測る。504・505は須恵器壺である。504は口縁部が短く直立気味に外側に伸びる形態を有し、口縁端部は面をもつ。口径約21.4cmを測る。505は3段の波状文が口縁部を巡る。また、口縁端部下に突帯が1条巡る。口縁断面は三角形を呈する。506は器種不明の須恵器である。体部に突帯を巡らせ、その上に径1cm前後の扁平ボタン状の粘土を貼り付けてある。また、ボタン状の粘土を貼り付けあとに円形の刺突孔を穿つ。507は灰軸陶器碗である。高台は外側に開き端部をややまるくおさめる。底部裏には判読不明の墨書が確認できる。高台径約7.8cmを測る。508は底径6.0cmを測り、底部糸きりを施す灰軸陶器碗である。また、糸きり後に「×」印状のヘラ記号が確認できる。509～512は瓦である。509は平瓦で、凹面は布目痕が全面に認められる。凸面はR L縄の原体を叩きしめ、その後凸面全面の縄目をナデ消し、さらに後、部分的に縄原体によって叩く調整方法をとる（I類）。側縁部は面取りを行う。510～512は丸瓦で、共に凹面は布目痕が残り、凸面では縄原体により叩きしめた後、全面をナデ消す調整を施す。側縁部においては面取りを行う。

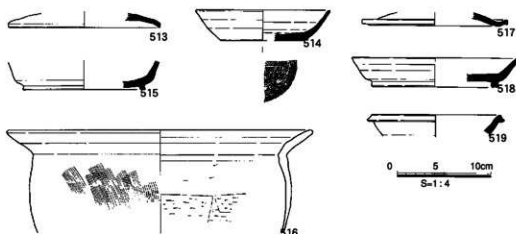
S D-03・04出土遺物（第84図）

S D-03から出土している遺物は513～516である。513は須恵器坏蓋で、口径約16.0cmを測る。坏Bの蓋になろうか。514は須恵器坏Aである。口径約14.0cm、器高約3.3cmを測る。底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。また、底部にはヘラ記号の一部が認められる。515は須恵器坏Bで、高台径約13.0cmを測る。高台は外側に開く形態を有する。516は土師器浅鍋である。口径約32.0cmで、「段状口縁」を有する口縁部をもつ。口縁部は斜め上方に伸びる形態をとる。外面体部はハケ調整で、内面体部はケズリを施す。色調は赤褐色系で、胎土は赤色粒子を多く含み、その他の粒子も粗いものが目立つ。

S D-04からは517～519までの遺物が出土している。517は須恵器坏蓋である。口径約15.4cmを測



第83図 S D-02出土遺物実測図

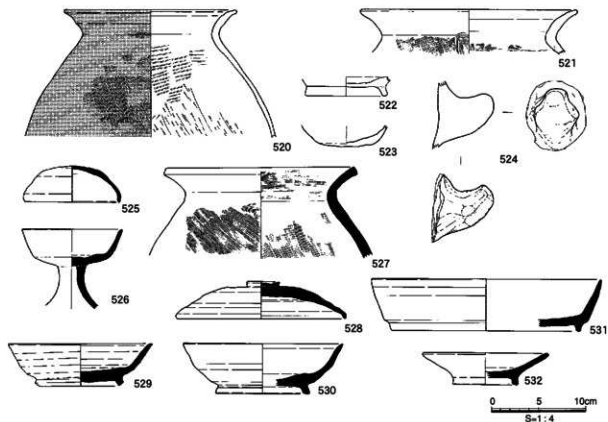


第84図 S D-03(513～516)・04(517～519)出土遺物実測図

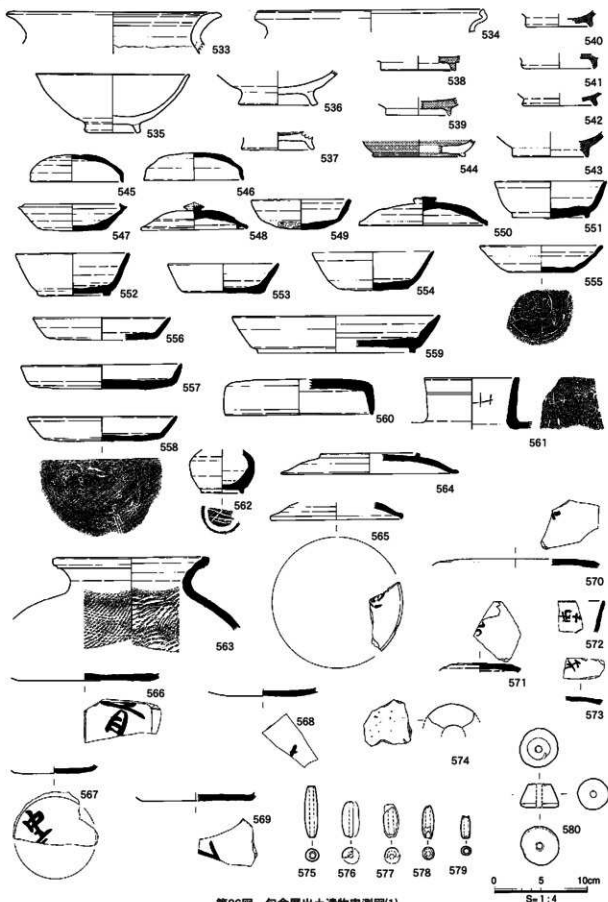
測り、口縁端部を強く折り返す。518は須恵器盤Bで、口径約17.4cm、高台径約13.2cm、器高3.1cmを測る。高台は直立気味に立ち、底部にはヘラ切り後ナデ調整を施す。519は須恵器広口瓶の一部か。口径約13.4cmを測り、外側に開く口縁部をもつ。また、口縁端部は三角形の断面形態を有する

その他の遺構出土遺物 (第85図)

律令時代の遺物について取り上げるが、出土した遺物に伴う遺構については必ずしも遺物の時期に帰属する遺構でないことは断っておきたい。ここでは、遺物のみを取り上げる。



第85図 S K-01(529)・03(526)・04(521)・07(523)・27(524)・36(530)・37(520)・S P-38(531)・80(532)・109(522)・396(527)・S D-06(525)・S P-114・115(528)出土遺物実測図



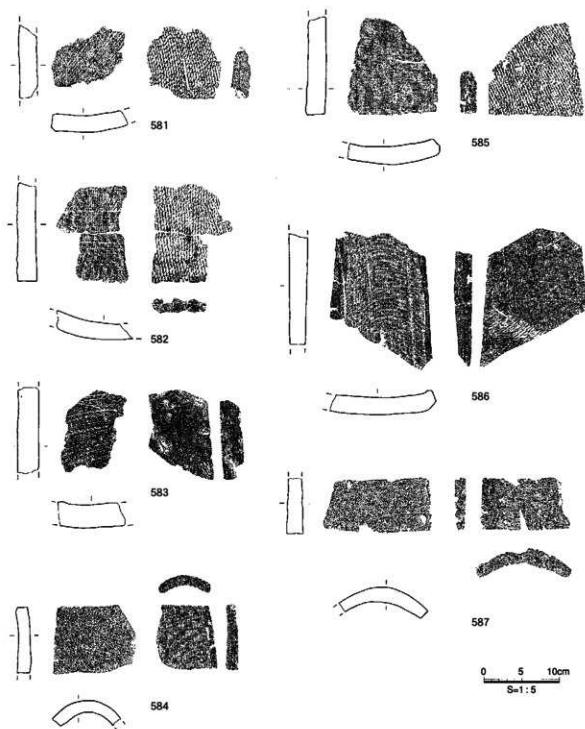
第86図 包含層出土遺物実測図(1)

520・521は土師器甕である。共に、いわゆる「段状口縁」を有する甕である。520は口径約18.0cmを測り、体外外面はハケ調整を行い、体内内面は頸部に近い箇所の一部叩き目状の粗いハケ目が残し、その後にケズリ調整が施されている。外面体部には赤彩が一部確認できる。521は黄褐色の色調を呈し、やや粗い粒子の胎土を多く含む土器である。口径約22.8cmを測り、口縁部は器厚が他の「段状口縁」甕と比べると厚い。体外外面はハケ調整を施し、内面では頸部近くに1次成形時のハケ目が残存し、その後体部ではケズリ調整が行われている。522は土師器碗Bの高台部である。高台径約8.4cmを測り、底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。胎土はやや粗い粒子が多く、成形も粗く作られている。高台は外側に開く形態を有する。523は土師器の小型甕の底部と考えられる。底部底は2次的な付着物が付き、内面も摩滅が激しいため調整等を確認するのは不可能である。524は土師器手付深鍋の把手部分と考えられるが、甕の可能性も残す。525は須恵器坏H蓋である。口径約9.9cm、器高3.8cmを測り、天井部はヘラ切り不調整である。526は須恵器無蓋高坏である。口径約10.4cmを測り、受け部底はナデ調整が施されている。脚部下半は欠損している。527は須恵器甕である。口径約20.0cmを測る。体外外面は1次成形で叩きを行い、2次成形でハケ調整を施している。叩き痕はわずかに確認できる。体内内面も外面同様に、1次成形で叩き、2次成形でハケ調整を施す。また、口縁内面には横位のハケ目が調整痕として残る。528は須恵器坏蓋である。口径約17.8cm、器高4.0cmを測る。天井部はケズリ調整が施され、つまみは扁平中がくぼむ形態をとる。編み笠状を呈する。坏Bの蓋と考えられる。529・530は須恵器坏Bである。529は口径15.0cm、器高4.5cm、高台径8.2cmを測り、530は口径約16.8cm、器高5.3cm、高台径約10.0cmを測る。529・530共に底部はヘラ切り後ナデ調整が施され、高台は外側に開く形態を有する。口縁部も外側に開く。531は須恵器盤Bである。口径約24.2cm、器高5.5cm、高台径約10.0cmを測る。底部はナデ調整が施され、高台は直立気味に立つ形態をもつ。口縁部はやや内湾し、先細りする口縁端部をもつ。532は須恵器皿Bである。口径約13.2cm、器高3.4cm、高台径約7.0cmを測る。高台は直立気味に立ち、底部はナデ調整が施されている。その他の調整もナデ調整が施されているが、おしなべて丁寧なナデ調整が行われている。口縁端部はまるくおさめる。

包含層出土遺物 (第86・87図)

533はいわゆる「段状口縁」を有する土師器甕である。口径約22.0cmを測り、外側にかなり開く口縁部をもつ。粗い粒子を多く含み、黄褐色系の色調を呈する。534は口縁部が内湾し受け口状の形態を有する土師器浅鍋と考えられる。頸部以下は欠損している。535・536・537は土師器碗Bである。535は口径約16.2cm、器高6.3cm、高台径約6.0cmを測る。高台は若干外側に開き気味で低い台が付く。底部はナデ調整を施し、一部に工具もしくは爪痕が残る。内外面ともに摩滅が激しく調整の観察は困難であるが、一部ミガキもしくは丁寧なナデ調整が窺える。胎土には赤色粒子が多く含まれている。色調は赤褐色系を呈する。536は高台径7.6cmを測り、外側に伸びる高台を有する。底部は丁寧なナデ調整が施されている。底部の一部には、535と同様に工具痕もしくは爪痕が残る。内外面の調整は丁寧なナデ調整が施されているが、体部上半は欠損している。胎土には赤色粒子が多く含まれている。色調は赤褐色系を呈する。537は口径7.6cmを測る、内面が黒色処理されている黒色土器の底部である。高台は外側に開き、底部はナデ調整が施されている。色調は黄褐色系を呈する。538・539は緑釉陶器の底部である。538は高台径約7.8cmを測り、高台は貼り付けで、有段輪高台の形態を有する。施釉は全面に認められ、釉調は濃緑色に近い。539は高台径6.6cmを測り、全面背釉である。釉調は淡緑色に近い。底部内面には凹線による圏線が認められる。540～543は灰釉陶器の碗である。540は高台径約6.6cmを測る。高台

はやや内湾する形態を有する。541は高台径7.2cmを測り、540同様に高台が内湾する形態をとる。542は高台径約7.4cmを測る。高台は外側に開き気味の形態をとり、高台外面まで灰軸がつく。543は高台径約7.8cmを測り、高台は先細りしつつ外側に開く形態をもつ。544は器形の全面に赤彩を施した土師器碗である。高台径は約9.8cmを測り、高台は外側に開く形態をもつ。また、低い高台を有する。底部はナデ調整が施されている。545・546は須恵器坏H蓋である。545は口径約10.9cm、器高2.9cmを測る。



第87図 包含層出土遺物実測図(2)

天井部はヘラ切り後クシ状工具の差込痕が残る。また、天井部と体部の境界周辺はヘラケズリが行われている。546は口径約10.4cm、器高2.9cmを測る。天井部はヘラ切り後粗いナデ調整が施されている。547は須恵器坏H身である。口径約10.0cm、器高2.8cmを測り、立ち上がりは短く内傾している。底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。548は須恵器坏G蓋で、口径11.8cmを測る。天井部はヘラ切り後ナデ調整を施し、返りはうちにおさまっている。549は須恵器坏G身である。口径10.2cm、器高3.2cmを測り、底部は不定方向のケズリが施されている。550は須恵器坏蓋である。口径約13.6cm、器高3.1cmを測る。天井部はヘラ切り後不調整である。551・552は須恵器坏B身である。551は口径約12.0cm、器高約3.9cm、高台径約8.2cmを測り、底部はナデ調整が施されている。高台は直立気味に立つ。器形はやや箱気味で、少し外側に開く口縁部を有する。552は口径12.0cm、器高4.5cm、高台径7.7cmを測る。底部はナデ調整を施し、高台は低く直立気味に立つ。553～555は須恵器坏Aである。553は口径11.7cm、器高3.1cmを測り、底部はヘラ切り後不調整である。554は口径約13.1cm、器高4.1cmを測り、底部はヘラ切り後粗いナデ調整を施す。底部に接する体部外面はヘラケズリ後ナデ調整が行われている。555は口径約12.8cm、器高2.8cmを測り、底部はヘラ切り後粗いナデ調整を施し、その後「十」字のヘラ記号が描かれている。器厚は薄く成形されている。556・557・558は須恵器盤Aである。556は口径約14.4cm、器高2.4cmを測る。底部はヘラ切り後粗いナデ調整が施されている。口縁部は直線的に外側に伸びる形態をとる。557は口径17.0cm、器高2.5cmを測り、底部はヘラ切り後ナデ調整が施され、やや厚い器壁を有する。口縁部は直立気味に上方に伸びる。558は口径約15.8cm、器高2.6cmを測り、底部はヘラ切り後粗いナデ調整が施される。一部工具による差込痕が認められる。口縁部は斜め上方に直立気味に伸び、器壁は薄く成形されている。559は須恵器盤Bである。口径約21.8cm、器高3.9cm、高台径約16.7cmを測る。底部はヘラ切り後粗いナデ調整が施されている。高台は直立気味に立つ。560は須恵器の蓋と考えられる。口径は15.6cm、器高約3.8cmを測り、天井部の調整はヘラケズリを行う。561・562は須恵器壺である。561は短頸で直立気味に伸びる口縁部をもち、口径約10.1cmを測る狭口壺である。口縁部下に1条の沈線が巡る。また、口縁部内面にはヘラ記号が確認できる。562は小型の壺で、体部から底部にかけて残存する。ほぼ直立する低い高台を有し、底部はナデ調整が施されている。また、底部には直線で描かれたヘラ記号が確認できる。高台径は4.4cmを測る。563は須恵器甕である。口径約15.5cmを測り、「く」字の頸部で口縁部は外に開く。体部外面は平行線文と内面は同心円文の叩き痕が確認できる。564は須恵器蓋で、口径約19.0cmを測る。天井部は丁寧なナデ調整が施される。また、天井部には環状の方形突帯が1条巡る。口縁端部は外側にやや反り返る形態をもつ。565～573は墨書が描かれた須恵器である。判読不明である。574は輪の羽口である。破片のため孔の直径などは不明である。色調は赤黄褐色を呈し、胎土は赤色粒や長石などの粒子を含む。575～579は管状土錘である。すべて土師質の土錘である。580は最大厚が2.5cm、直径2.4cmを測り、断面台形を呈する須恵質の紡錘車である。側面は丁寧なヘラケズリ調整が施されている。中央に直径0.6cmの軸孔を穿つ。581～583・585・586は平瓦である。581・582・585は凹面には布目痕が残り、凸面はR L原体を全面に叩きしめるⅢ類である。583・586は凹面には布目痕が残り、凸面はR L原体を全面に叩きし、その後叩き目をナデで擦り消し、また、原体で部分的に叩く技法Ⅰ類が認められる。平瓦において面取りを行う側縁部が認められるのは581・585・586である。584・587は丸瓦である。共に凹面は布目痕が残り、凸面はR L原体を全面に叩きしめた後、叩き目をナデで擦り消すⅠ類の技法が施されている。

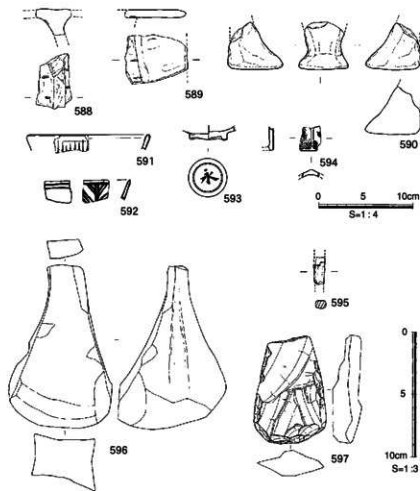
(中川)

第3節 その他の遺構と遺物

遺構については、中世以降の明確な遺構が2区では確認することはできなかった。以下、この節では中世以降の遺物や時期不明の遺物について取り上げる。

その他の出土遺物（第88図）

588は土師質で黄褐色の色調を呈する。器種は不明である。両側に2箇所ずつ切れ込み状の刺突孔が認められる。589はおそらく588と同一個体と考えられる。厚さ0.7cm前後で丁寧なナデ調整が施されている。切れ込み状の刺突孔が2箇所ある。590は土師質で、獣足のようなものであるが、器種は不明である。



赤黄褐色の色調を呈する。591

は輸入磁器の青磁碗である。

外面には細い線描きの蓮弁文

が確認できる。淡緑色の釉調

である。592は肥前系磁器の

碗か。染付けあり。593は白

磁の皿である。高台に抉りを入

れるいわゆる割高台の皿で

ある。底部に「永」の墨書が見

える。594は肥前系磁器で

器種は不明である。染付けあ

り。595は鉄製品で上下が欠

損しているため器種等は不明

である。断面は方形を呈す。

596は砂岩製の砥石である。

長さ12.9cm、幅8.1cm、厚さ

8.4cmを測る。597は安山岩製

の打製石斧である。長さ

8.6cm、幅5.8cmを測り、刃部

は摩滅している。（中川）

第5章 3区の調査

3区の調査地でも2区同様に面工事によって掘削される部分について発掘調査を実施した。調査地は梶袋山古墳の南側約100mの地点で、調査面積は約2,650m²であった。調査地は、底辺約40m・長辺約85mの平面形が垂直三角をなす。ちなみに、調査前の現状は水田であった。調査は重機により表土（耕作土）を剥ぐことから開始した。1～14グリット間では表土直下に黒褐色の包含層が存在しており、遺物も一定量出土した。一方、15～18グリット間では以前の耕地整理時にかなり削平されていて、表土直下からは黄褐色の地山面ができる状況であった。遺構や遺物量は削平された分少なかった。

3区では、飛鳥時代～平安時代にかけての遺構や遺物がほとんどを占めた。その他の時代の遺物は包含層および流れ込みのなかで若干確認できたに過ぎなかった。縄文時代の遺構や遺物については、2区のような下層からの遺構や遺物の出土はなかった。唯一、調査終了後の工事立会い調査で、C-7グリット周辺から土坑状遺構が見つかり、そこから纏まって土器が検出された。

第1節 縄文時代・弥生時代の遺構と遺物

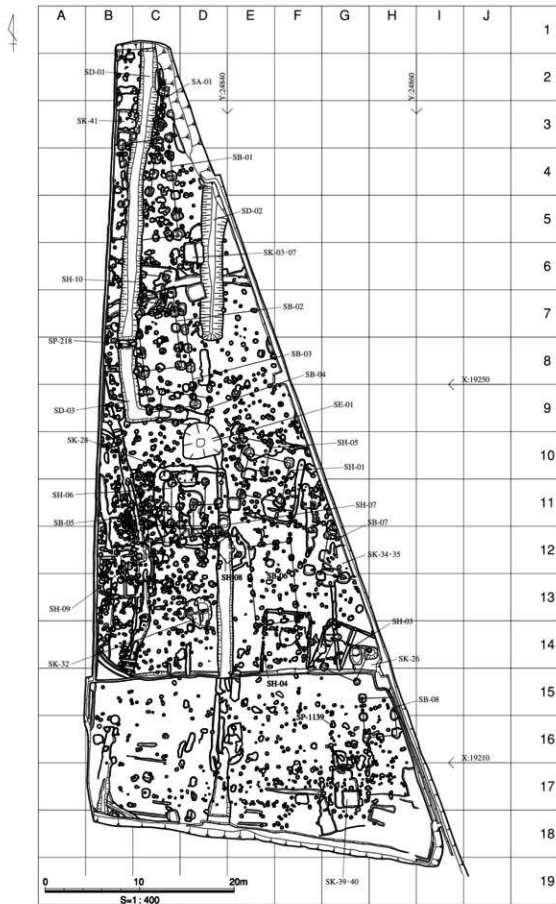
1 遺構と遺物

3区で検出した縄文時代の遺構は、土坑とピット各1基のみである。

工事立会い土坑（第89図・第91図・第92図）

C-7グリットに位置し、調査終了後工事立会いで検出した。平面形が楕円形を呈し、径約50cm、深さ約40cmを測る。覆土は、上層に黄褐色土、中・下層は焼土を多量に含む赤褐色土となる。中・下層からほぼ完形の縄文式土器3個体（598～600）が重なって出土した。堅穴住居の跡の可能性があるが、付随するほかの遺構は検出できなかった。遺物は前記の3個体の土器以外に、破片土器（606～610）が出土した。一括性を有す3個体の土器から、中期中葉に帰属すると考えられる。

598は、4単位波状口縁で円筒形器形を呈す深鉢である。口唇部は肥厚し、縄文LRを横位に施す。波頂部下に横走半隆起線文と連結した小振りの渦巻文を配し、半隆起線文を垂下させる。波底部下も同様で、これらと頸部・胴部の横走半隆起線文と組み合わせて方形文を描出する。地文には縄文LRを密に施す。底部は、網代痕が残るが外縁部のみであり、中央部はナデ消す。599は、やや内弯する4単位波状口縁を呈し、頸部に括れるキャリバー器形を呈す深鉢である。口縁内面は、やや肥厚し面を有す。口唇部には3条の横走半隆起線文をめぐらし、波頂部下に小振りの独立した渦巻文を配す。頸部には「Π」字状の半隆起線文を配し、胴部上端には横走半隆起線文を3条周回させる。地文には縄文LRを施す。底部はナデを施す。600は、599と近似する器形の無文深鉢である。地文には粗い縄文RLを施す。底部外縁には網代痕が残る。中央部はナデ消す。606は、内屈する深鉢口縁部片である。やや肥厚する口縁部に横位区画帯を配し、内部に縦位の短い半隆起線文を施す。頸部は無文部とする。607・608は同一個体の鉢である。間隔が細かい爪形文を施す基軸隆帯と半隆起線文が斜行するため、これと連結する渦巻文を単位的に配すと考えられる。内面は黒色研磨され、その上面に赤彩が僅かに残る。地文には複節縄文LRLを施す。609は、大波状を呈す深鉢口縁部側片と考えられる。2条の沈線内に連続する刺突文を施す。610は、深鉢底部片である。地文には縄文LRを施し、底部はナデを施す。



第89図 3区遺構配置図

S P-1139 (第90図・第92図)

G-16グリットに位置する。覆土上層から人頭大の自然礫と中期の土器(619・625)が出土した。出土土器から、おおむね中期中葉に帰属すると考えられる。

619は、深鉢胴部片で、地文には直前段半撚りの縄文LLを横位に施す。625は、深鉢底部片で底部中央部が肥厚する。地文に縦位縄文RLを施す。底部外縁は網代痕が残るが、中央部はナデ消す。

2 その他の遺構出土遺物 (第92図)

3区で出土した遺構出土の縄文時代の遺物は、若干の該期遺構からの出土を除き、律令期の遺構から混入して出土するものを主体とする。出土した縄文式土器は、中期中葉を主体とし、中期後葉・後期前葉・後期中葉・晩期後葉のものが若干認められる。以下、各個に説明を行なうこととする。

601は、S K-29出土である。ボウル状を呈す浅鉢口縁部片で、三角形陰刻文を施し、工字状文を施す。口縁端部は強いナデにより凹む。

602は、S K-59出土である。口縁部を欠失する浅鉢胴部片で、内外面を研磨する。

603は、S K-70出土である。直立する深鉢口縁部片で、口唇部下に3条の横走半隆起線文を施す。地文には縄文LRを密に施す。

604・605は、S K-67出土であり、605は、S P-1716と遺構間接合した。604は、緩やかに内弯する山形波状を呈す深鉢口縁部片である。隆帯と半截竹管により曲線文を描出する。背の低い隆帯上にも平行して半截竹管文を施す。地文には筋が長く斜行する斜位縄文RLを施し、口縁端部や波頂部内面にも施す。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。605は、深鉢胴部片で、地文に縄文RLを施す。

611は、S D-28出土である。無文の蓋と考えられる。胎土に砂粒を多く含む。

612は、S D-23出土である。台付鉢胴部下半片で、垂下する蛇行半隆起線文を施す。

613は、S D-36出土である。深鉢胴部片で横走半隆起線文を施す。地文には縄文LRを施す。

614は、S D-37出土である。内弯する深鉢口縁部片で、口縁端部に上面から押圧され凹状となる小突起を有す。口唇部は短く外屈する。

615は、S D-39出土である。内屈する深鉢口縁部片で、縦位半隆起線文を屈曲部下位まで垂下させる。口唇部は短く外屈する。

617は、S D-41出土である。緩やかに外反する深鉢口縁部片で、地文には斜位縄文RLを施す。

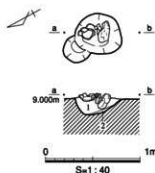
616は、S P-1386出土である。深鉢胴部片で、縦位半隆起線文を施す。

618は、S P-1734出土である。緩やかに外反する深鉢口縁部片で、地文には縦位縄文LRを施し、口縁端部にも施す。

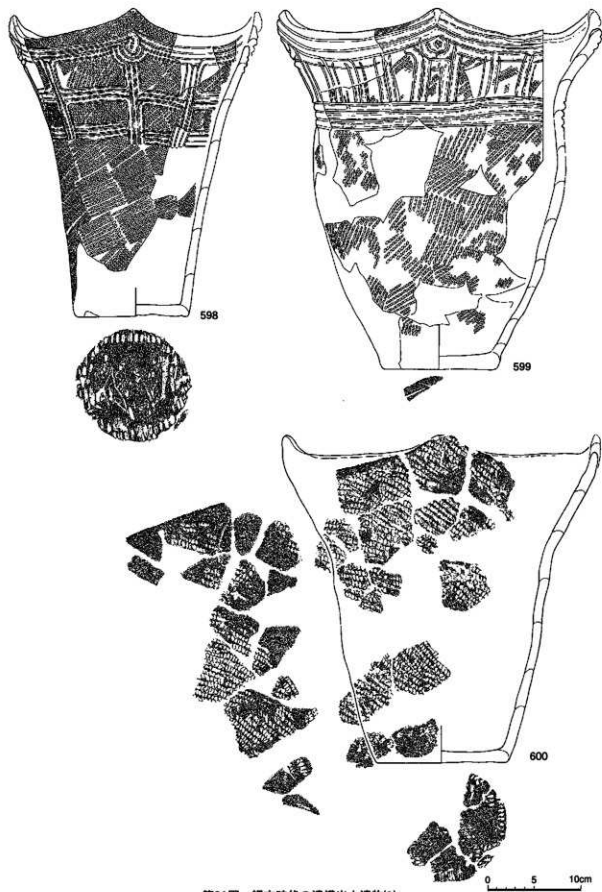
620は、S P-1346出土である。内面に文様帯を配す浅鉢口縁部片で、口縁端部には円形孔を施す小突起を単位的に配す。口縁内面には、幅が広く深い沈線とその下位の櫛描集合沈線を横走させる。外面は丁寧なナデを施す。

624は、S P-1435出土である。深鉢底部片で外面はナデを施す。底面は網代痕を残す。

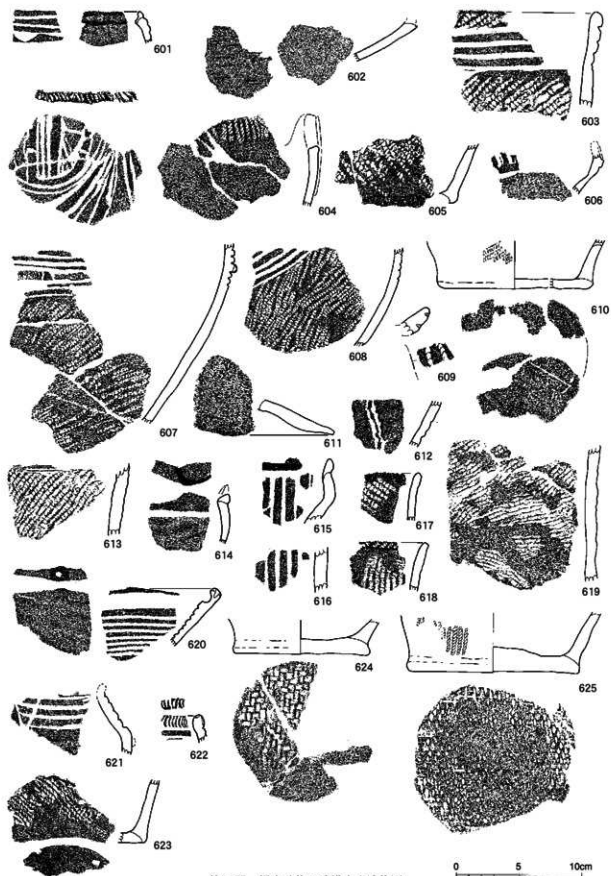
621は、S P-1946出土である。深鉢ないし鉢の内屈する口縁部片と考えられる。口縁部には横走半隆起線文を4条配す。剥離痕から屈曲部に横走隆帯を有すものと考えられる。



第90図 S P-1139平面図・土層図



第91図 縄文時代の遺構出土遺物(1)



第92図 縄文時代の遺構出土遺物(2)

0 5 10cm
S=1:3

622は、S P-2112出土である。深鉢口縁部片で端部と口唇部に間隔が狭い爪形文をそれぞれ施し、下位に横走半隆起線文を配す。

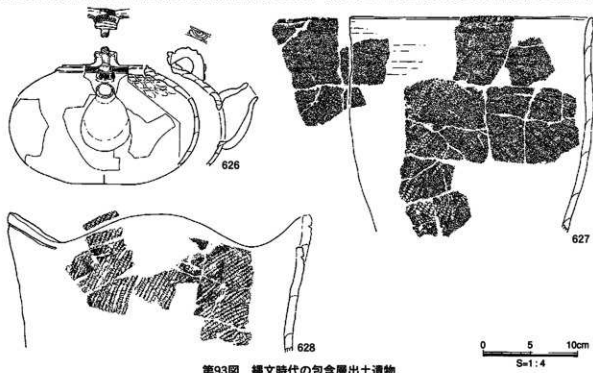
623は、S P-1982出土である。深鉢底部片で、地文に縄文RLを施す。底面はナデを施す。

3 包含層出土遺物 (第91図・第92図)

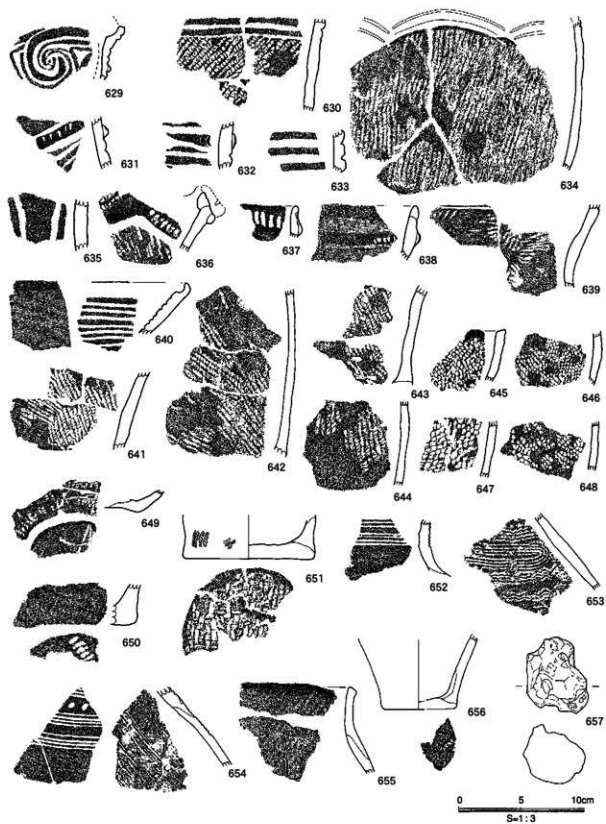
律令期の包含層から出土した。時期は、中期中葉を主体とし、後期前葉、後期中葉なども若干認められる。出土分布は、C・D-8・9グリットを中心に集中する傾向が認められる。3区は縄文時代以降に削平を受けたものと考えられるが、この周辺には、**工事立会い土坑**などの該期の遺構も若干検出されており、本来は遺構群および包含層が存在した可能性が高い。以下、各個に説明を行うこととする。

626は、注口土器である。残存率が低いが、器形はボウル状の鉢形を呈すと考えられる。文様は口縁部および突起部のみ施される。口唇部に2条の沈線による狭い区画文を有し、内部に0段多条の縄文LRを充填する。口縁部には頂部が肥厚する小突起を有し把手と連結する。把手上面には同心半円状の文様が施される。注口部は、反りではなく直立し、基部が張り先端部ですばまる。色調は暗褐色を呈し、胎土に金雲母と共に砂粒を多く含む。色調や胎土の特徴から搬入品の可能性が高い。627は、胴部から直線的に立ち上がり、口縁部が僅かに外反する器形を呈す深鉢である。地文には縄文LRを施し、口頸部を中心に部分的にナデを施す。口縁端部にも縄文LRを施すが、地文原体とは異なる。628は、4単位の波状口縁で、胴部から緩やかに開いて立ち上がる器形を呈す深鉢である。口唇部に半隆起線文を施したあと、口縁端部を含め全面に縄文LRを施す。

629~635・639は、有文深鉢胴部片である。629は、内面を剥離する。頸部下端は外反する。基軸隆帯と半隆起線文による渦巻文を配し、側部に三叉状文を配す。頸部下端の外反部上面には剥離痕から突起ないし把手を有すものと考えられる。胎土には石英や長石などを多く含む。630は、多条横走半隆起線文を配す。地文には縄文LRを施す。631は、櫛歯状刺突文を施す隆帯と半隆起線文を配す。632は、爪形文を施す隆帯と半隆起線文を横位に配す。633は、横走する半隆起線文を多条に配す。634は、胴



第93図 縄文時代の包含層出土遺物



第94図 縄文時代・弥生時代の包含層出土遺物

部上方に半裁竹管による下向きの弧線文を配す。地文には縦縄文RLを施す。胎土には砂粒を多量に含む。635は、縦位の半隆起線文を間隔をあけて配す。639は、口縁部下端に横走半隆起線文を配す。地文には縄文LRを施す。

636～638は、有文深鉢口縁部片で、隆帯により下端区画する横位区画帯を有す。636は、波状口縁を呈す。区画帯内は無文部とし、口縁側端部と隆帯上に櫛歯状刺突文を施す。頸部には縄文RLを施す。637は、水平口縁を呈す。区画帯内に縦位半隆起線文を施す。638は、水平口縁を呈す。口唇部はやや肥厚し接合部の段を残す。区画内は無文部とし、隆帯上に櫛歯状刺突を施す。

640は、620と同一個体の浅鉢口縁部片である。内面に横走する太沈線と櫛描集合沈線を配す。

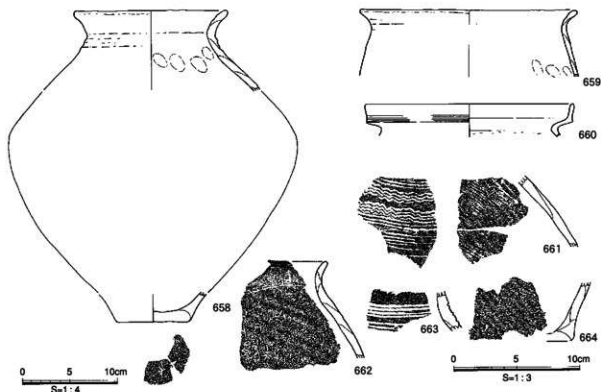
641～644は、有文ないし無文深鉢胴部片である。いずれも地文に縄文RLを施す。642・644は胎土に砂粒を多く含む。

645～648は、同一個体で地文に擬縄文rを施す深鉢である。645は、僅かに内弯する口縁部片で、口唇部がやや肥厚し端部に面を有す。

649～651は、深鉢底部片である。底部に網代痕が残るものに650・651がある。649は、地文には縦縄文RLを施す。上げ底となる。651は、地文には縄文LRを施す。

657は、焼成粘土塊でD-11グリットから出土した。全体の形状は不定形であるが丸みを持つ。部分的にナデや指頭痕および刺突状の工具痕が認められる。重さは81gを量る。胎土には、赤褐色を呈す粘土粒が多く含まれ、砂粒は少ない。2区出土の199と同様に、時期は、中期中葉に位置付けられる。

第2節 弥生時代の遺構と遺物



第95図 弥生時代の遺構出土遺物

1 その他の遺構出土遺物（第95図）

3区においては、弥生時代の遺構は明確には検出していない。遺構出土遺物は、すべて律令期の遺構に混入する遺物である。おおむね前期後半～中期前半を主体とする。以下、各個に説明を行なう。

658は、S P - 1282・1283およびD 6 グリット包含層出土である。口頸部・底部のみ残存する壺である。口縁部はやや肥厚し、頸部には強い横ナデを施す。頸部下位は、摩滅のため調整は明確ではない。口縁部内面は横ナデを施し、頸部内面には指頭圧痕が残る。底部はナデを施す。内傾接合で製作し色調は内外面共に赤褐色を呈す。遠賀川系壺と考えられ、前期後半に位置付けられる。

659は、S P - 1267出土である。「く」字状の口縁部とやや張る胴部など器形的にも662に近似する甕である。内外面共に摩滅が顕著であるが、細かいハケが部分的に残る。器壁が薄い。

660は、S D - 06出土である。甕口頸部片である。口縁部に擬凹線を施す。

661は、S P - 1267出土である。壺胴部片で、4条の櫛描直線文と波状文を交互に上方から順に配す。内外面共にハケ調整を施す。

662は、S P - 1269出土である。口縁部が「く」字状に外反し、胴部がやや張る器形を呈す甕である。口縁端部は丸く収める。口頸部内外面は横方向のナデ、胴部内外面は縦方向のナデを施す。内外面共に炭化物が部分的に付着する。

663は、S P - 1282出土である。壺頸部片で、4条の櫛描直線文が2段確認できる。

664は、S D - 30出土である。底部片で、外面および底部にはナデを施す。

2 包含層出土遺物（第94図）

包含層出土遺物は、出土量が少ないものの、その他の遺構出土遺物と同様に中期前半を主体とする。C 5 グリット周辺で分布の偏りが認められることから、縄文時代と同様に、削平以前は該期の遺構や包含層が残存していたと考えられる。以下、各個に説明を行なう。

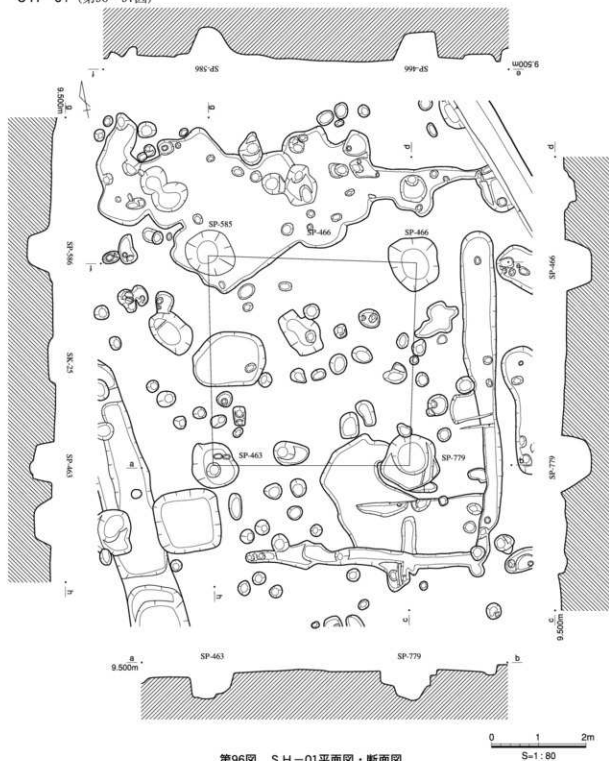
652は、壺頸部片で、4条の櫛描直線文が2段確認できる。653は、壺胴上半片で、上位から4条の櫛描波状文1段・流水文1段・櫛描波状文2段の構成が認められる。外面の摩滅が顕著である。内面はナデを施す。654は、壺胴部片で、上位から4条の櫛描直線文1段・円形刺突文列・櫛描直線文2段の構成が認められる。内面は斜位のハケを施す。655は、甕口縁部片である。胴部があまり張らず、口縁部が外反する器形を呈す。口縁端部はナデによる面を有す。内外面共にナデを施し、部分的に炭化物が付着する。656は、底部片である。外面および底部はナデを施す。

(山本)

第3節 飛鳥時代～平安時代の遺構と遺物

飛鳥時代～平安時代にかけて検出された遺構は、前述したように調査区全域で確認できた。また、遺構の構築された時期が明確に判明できたものは少なく、また、細かな時期設定が困難なため、2区同様に飛鳥時代～平安時代の大きな括りの中で取り扱い記述していくこととする。

S H-01 (第96・97図)



第3表 3区壁穴住居一覧

建物番号	柱穴間距離 (m)	規模 (m)		面積 (m ²)	方位	備 考
		長 辺	短 辺			
SH-01	4.4×4.4	8.00	8.00	64.00	N11° E	
SH-02	欠番	—	—	—	—	
SH-03	3.6×3.6	6.80	6.80	46.24	N24° E	S K-26に切られる
SH-04	不明	*6.60	5.00	*33.00	N5° E	
SH-05	3×3	?	?	?	N0° E	
SH-06	3.6×4.4	7.20	8.00	57.60	N1° E	
SH-07	2.6×3.1	6.60	4.60	30.36	N1° W	S D-15に切られる
SH-08	2.6×2.4	4.80	5.20	24.96	N33° W	S D-15に切られる
SH-09	3×3	5.60	5.80	32.48	N2° W	
SH-10	2.6×3.0	5.00	5.00	25.00	N10° E	S D-01に切られる

*は検出分の数値

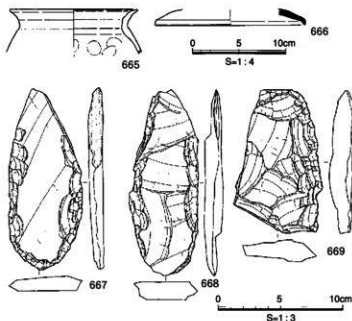
E・F-10・11グリットに位置する。住居はS P-466・463・585・779の4本の柱穴を主柱穴とし壁溝が巡る、平面形が正方形の壁穴住居である。壁溝は南東方向では認められたが、他は確認することができなかった。柱穴間は4.2~4.4m、柱の掘り方は径1m前後、深度0.6m前後で、かなり大型の住居と考えられる。壁溝は幅0.7m前後、深度0.1m前後を測る。住居内には硬化面や炭化した土層などは確認することはできなかった。遺物は住居内の覆土から検出されたが、遺物は小片が多く流れ込みの可能性が高い。

665は口径約13.6cmを測る土師器の小型甕である。いわゆる「段状口縁」を有し、口縁端部は強く外側に開く形態をとる。暗赤褐色の色調を呈し、粗い粒子の胎土はあまり見られない。666は須恵器坏蓋である。口径約16.0cmで、編み笠状の形態を有すると考えられる。667~669は安山岩製の打製石斧である。667・668は短冊形を呈し、刃部は丸みをもつ。669は楕円形を呈する。

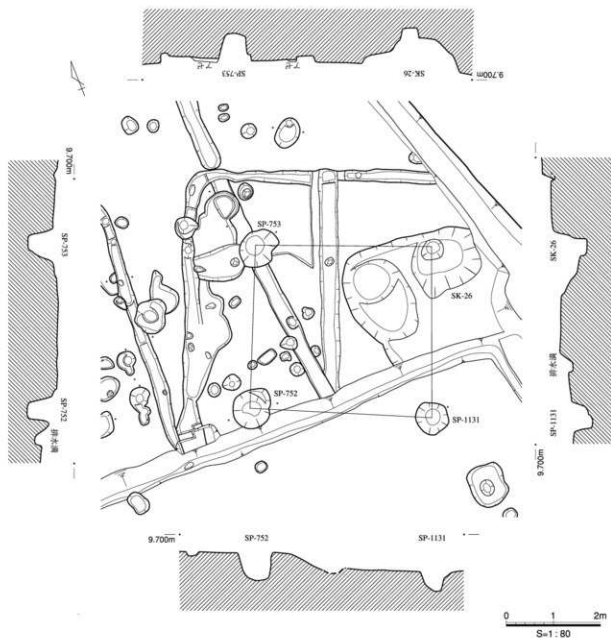
S H-03 (第98図)

G-14グリットに位置する。住居はS P-752・753・1131、S K-26の4本の柱穴を主柱穴とし壁溝が方形に巡る。住居は北東側の一部が調査範囲外で、また、南側においては大きく削平を受けている。

住居は主軸が北北東に向く、平面形が正方形の壁穴住居と考えられる。柱穴間は3.6m前後をとり、柱の掘り方は径0.8m前後、深度0.6m前後を測る。壁溝は幅0.25m前後、深度0.2m前後を測る。住居内には硬化面や炭化した土層などは確認することはできなかった。遺物は住居内の覆土から検出されたが、遺物は小片ばかりで図示できなかった。S K-26からは多くの遺物が出土しているが、それらはS H-03に伴う遺物ではない。土層からもS H-03がS K-26に切られていることから傍証できる。



第97図 S H-01出土遺物実測図



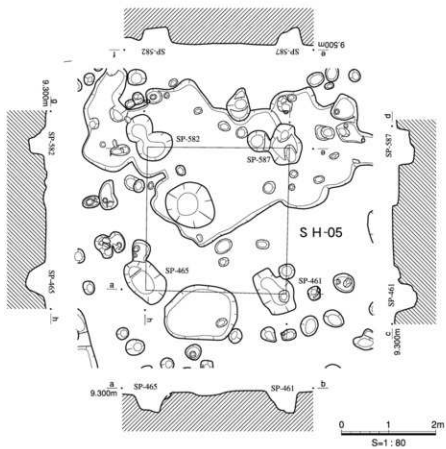
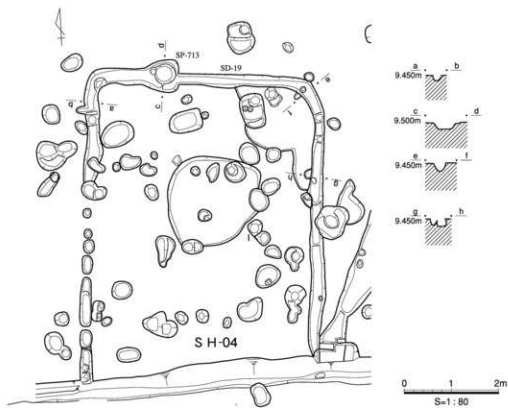
第98図 SH-03平面図・断面図

SH-04 (第99図)

F-14グリットに位置する。住居は南側の一部が削平され、壁溝は巡らない。また、主柱穴になる柱穴も確認できなかった。壁溝は幅0.2m前後、深度0.15m前後を測り、南北方向に長い長方形を呈する。遺物は土師器や須恵器の小片が検出されたが、年代がわかる遺物はなかった。ここでは住居として取り扱ったが、住居でないことも否めない

SH-05 (第99図)

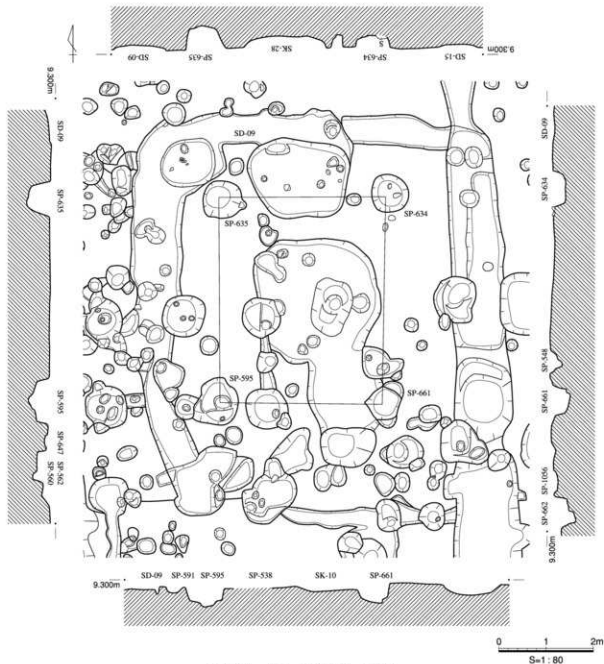
E-10グリットに位置し、SH-01と重複する。SH-01との新旧関係は不明。住居はSP-461・465・582・587の4本の柱穴を主柱穴とし、明確な壁溝は確認することができなかった。柱穴間は3m前後を測り、各柱穴は径0.7m前後、深度0.4～0.5mにおさまる。遺物は土師器や須恵器の小片が検出されたが、年代がわかる遺物はなかった。



第99図 SH-04・05平面図・土層図

SH-06 (第100図)

C・D-11グリットに位置する。住居はSP-595・634・635・661の4本の柱穴を主柱穴とし壁溝が巡る、平面形が正方形の竪穴住居である。柱穴間の距離は東西方向で3.6m、南北方向で4.4mを測る。柱の掘り方はほぼ円形を呈し、径0.7m前後、深度0.3~0.5m前後であった。4本の主柱穴ともに木柱の痕跡はなく、埋土は黒褐色を呈し、柱穴底も平らになっているものがほとんどで、木柱は抜き取られたと考えられる。壁溝は北側と西側部分については確認できたが、東側部分ではSD-15の溝と重複し、その存在は明らかではなかった。また、南側では壁溝が削平されたかどうかは不明であるが、溝は認められなかった。残存する壁溝は、幅0.6~1.1m前後、深度0.1m前後を測る。住居内には硬化面や炭化した土層などは確認することはできなかった。遺物は住居内の覆土から検出されたが、遺物は小片が多

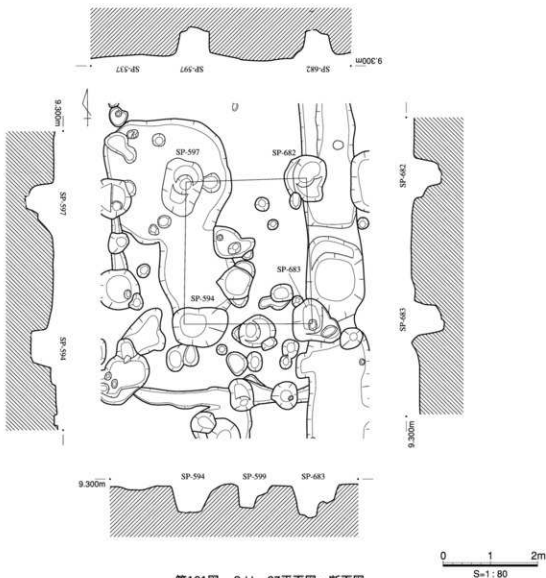


第100図 SH-06平面図・断面図

く流れ込みの可能性は高い。また、SD-09からは1点須恵器(793)が出土しているが、SD-09周辺からの出土があるためここでは取り上げなかった。

SH-07 (第101図)

D-11グリットに位置し、壁溝が巡る竪穴住居である。SH-06と重複するが、SH-07とSH-06との新旧関係は不明である。また、SH-07の柱穴の一部がSD-15とも重複し、SD-15に切られる状態で検出された。住居はSP-594・597・682・683の4本の柱穴を主柱穴とし、壁溝は南側の一部で確認することができた。残存する壁溝の幅は0.35m前後で、確認面からの深度は0.1m前後を測る。溝の埋土は黒褐色を呈し、若干の炭化物は混入する。柱穴はほぼ円形の掘り方が認められ、一部の柱穴底には0.2m位の柱痕が確認できる。柱穴間は東西方向で2.6m前後、南北方向で3.1m前後を測る。各柱穴は径0.8m前後、深度0.6m前後におさまる。柱穴の埋土にはふい黄褐色土が基本で、上層に黒褐色土が入る柱穴もある。遺物は土師器や須恵器の小片が検出されたが、年代がわかる遺物は確認できなかった。



第101図 SH-07平面図・断面図

SH-08 (第102図)

E・D-12グリットに位置し、一部SH-07と重複する竪穴住居である。SH-07との新旧関係は不明である。また、SH-07と同様に柱穴の一部がSD-15とも重複し、SD-15に切られる状況で検出された。住居はSP-780・782・789とSD-15内の1柱穴の4本の柱穴を主柱穴とする。壁溝は南東側の一部でしか確認できなかったが、おそらく、溝は住居全体を巡るものと考えられる。確認できた壁溝は幅0.4m前後で、遺構確認面から0.2m前後の深度を測る。柱穴はほぼ円形の掘り方が認められる。柱穴底は水平気味で柱の掘り込み跡は確認できなかった。柱穴間は東西方向で2.6m前後、南北方向で2.4m前後を測る。各柱穴は径0.5m前後、深度0.4m前後におさまる。遺物は土師器や須恵器の小片が検出されたが、年代がわかる遺物は確認できなかった。

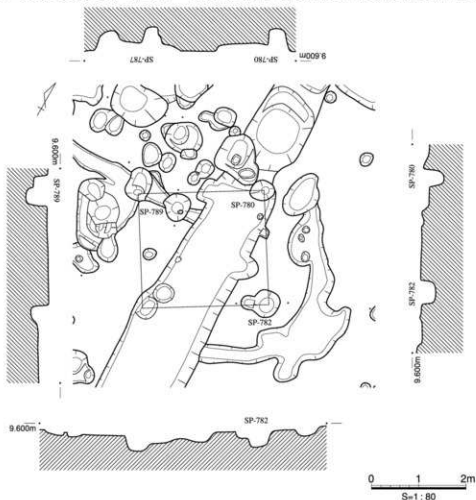
SH-09 (第103・104図)

B・C-12・13グリットに位置する竪穴住居である。住居はSP-888・891・936・949の4本の柱穴を主柱穴とし、壁溝は北側のみで確認できた。他の溝は認められなかったが、住居を方形に巡るものと考えられる。確認できた壁溝は幅0.25～0.5m前後で、遺構確認面から0.1m前後の深度を測る。柱穴間は3.0m前後を測る。柱穴はほぼ円形の掘り方が認められ、柱穴底には0.18～0.2m位の柱痕が確認できる。柱の掘り方は径0.6m前後、深度0.5m前後であった。住居内には硬化面や炭化した土層などは確認することはできなかったが、一部焼土が覆土中に散在していた。遺物は住居内の覆土や北側の壁溝内

から検出された。

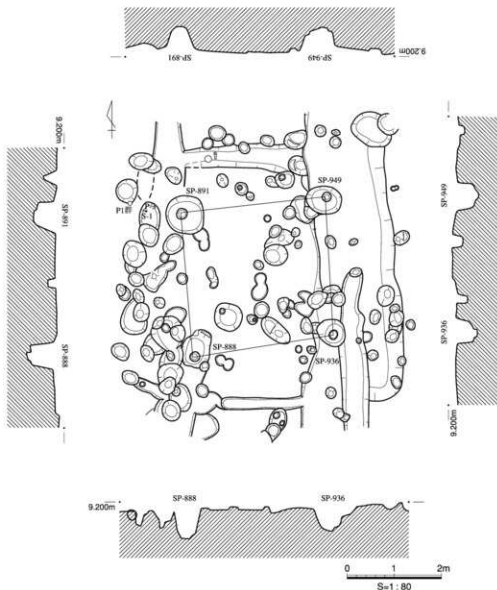
670は口径約12.6cmを測る土師器甕である。外面はハケ調整、体部内面はケズリ調整が施されている。頸部は「く」字で、外側に開く口縁部を有する。口縁端部は若干面をもつようにナデつけている。

671・672・673は須恵器坏Hである。671と673の出土状況は、北側壁溝内より671が上、673が下に、重なるようにして検出



第102図 SH-08平面図・断面図

された。671は口径12.8cm、器高3.8cmを測り、天井部はヘラ切り後粘土をなでつけたような粗いナデ調整が施されている。口縁部と天井部の境界の稜はほとんどなく、口縁端部はまるくおさめる。672は口径11.1cm、器高3.8cmで、短く内傾する受け部をもつ。底部はヘラ切り後不調整である。673は口径

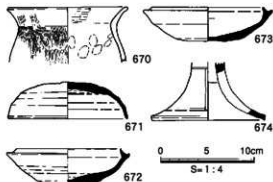


第103図 SH-09平面図・断面図

約11.8cm、器高3.6cmを測り、672同様に短く内傾する受け部をもち、底部もヘラ切り後不調整である。674は須恵器高坏の脚部である。脚底径は12.0cmで、長方形の2方透かしがある。透かし1段目以上から欠損している。

SH-10 (第105・106図)

C-6・7グリットに位置し、西側部分がSD-01に切られている。住居はSP-166・280・460・476の4本の柱穴を主柱穴とし、明確な壁溝は確認



第104図 SH-09出土遺物実測図

できなかったが、北側で一部壁が認められた。柱穴間は東西方向で2.6m前後、南北方向で3.0m前後を測る。各柱穴は径0.6m前後、深度0.6m前後である。

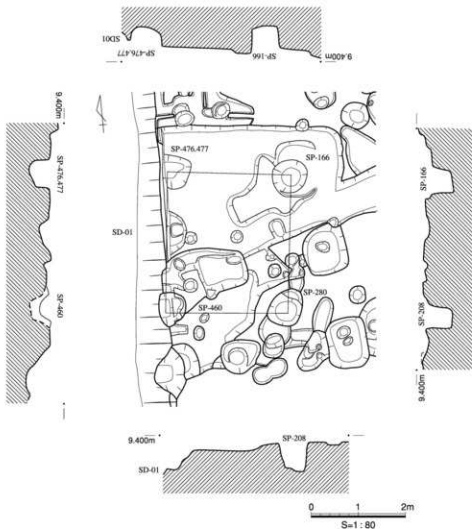
675は土師器把手である。鍋もしくは甌につく把手と考えられる。

SB-01 (第107・108図)

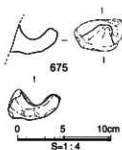
C-4・5グリットを中心とした位置にある。建物の一部はSD-01に切られる。建物は、桁行10.4m(5間)、梁行4.9m(2間)の側柱建物で、方位はN6°Wである。柱間距離は桁行が2.0m前後、梁行は2.5m前後と桁行も梁行も柱間距離はほぼ一定している。検出された遺物は、柱の抜き取り穴から須恵器・土師器などが破片で出土している。

676は土師器浅鍋で口径約27.4cmを測る。頸部は「く」字で斜め外に口縁部は開き、口縁端部は面を持つ。体部内外面はハケ調整で、口縁部においては横ナデを施している。677は外面を赤彩、内面を黒色に処理している土師器碗Bである。口径約20.0cmを測る。外部体部下半においてはケズリ調整が施され、

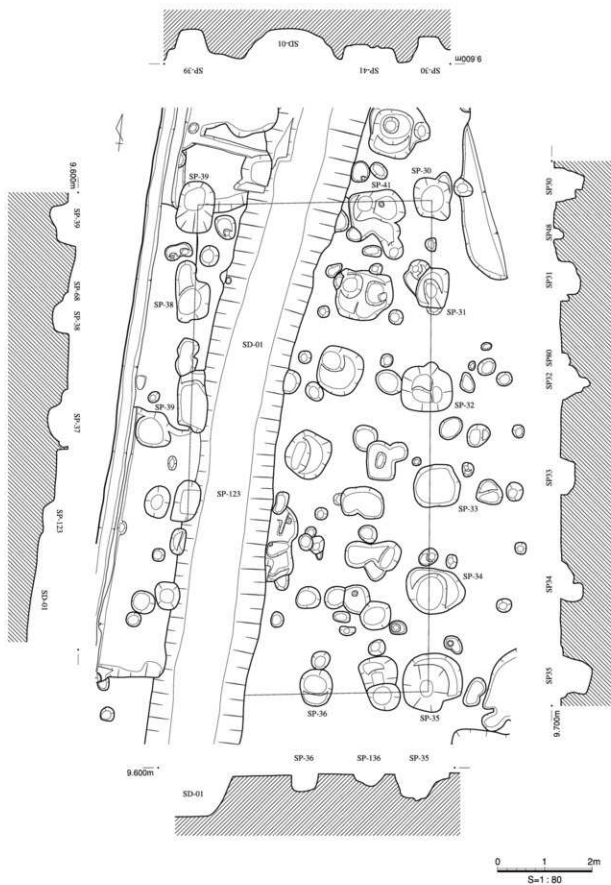
内面はミガキ調整を全面に行っている。678は内外面赤彩を施している土師器杯Aである。内面には暗文が確認できる。679は厚さが2.5~3.5cmの断面「T」字状を呈する須恵質の遺物である。形状等から鴟尾の可能性が考えられる。縦帯の一部であろうか。色調は灰白色を呈し、胎土は細かな白色粒子を多く含み硬く焼き締まっている。680・681は須恵器杯蓋である。680は口径約13.7cmで、天井部は平坦な面をもちヘラ切り後ナデ調整が施されている。681は天井部と口縁部の境界は不明瞭で、天井部はナデ調整が施される。口径約12.9cmを測る。682~685は須恵器杯Bである。682は口径約14.4cm、



第105図 SH-10平面図・断面図



第106図 SH-10出土遺物実測図



第107図 SB-01平面図・断面図

第4表 3区掘立柱建物一覧

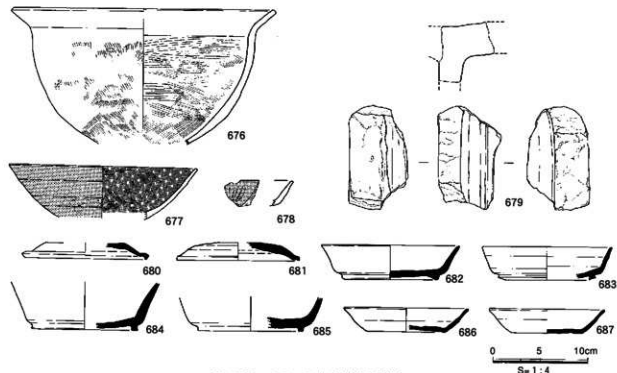
建物番号	桁×梁	構造	桁行(m)	梁行(m)	面積(m ²)	方位	備考
SB-01	5×2	側柱	10.40	4.90	50.96	N6° W	S D-01に切られる
SB-02	4×2	側柱	7.76	4.38	33.99	N7° W	S D-01に切られる
SB-03	5×2?	側柱	10.28	4.88	50.17	N8° W	S D-01に切られる
SB-04	3×2	側柱	5.10	3.00	15.30	N82° W	S D-01・S E-01に切られる
SB-05	2×2	総柱	3.76	3.40	12.78	N1° W	S H-06を切る
SB-06	5×3	側柱	8.40	4.52	37.97	N6° W	
SB-07	*2×2	側柱	*4.2	4.20	*17.64	N10° E	
SB-08	2×2?	側柱	4.32	3.36	14.52	N4° W	
SA-01			*11.6			N7° E	

*は検出分の数値

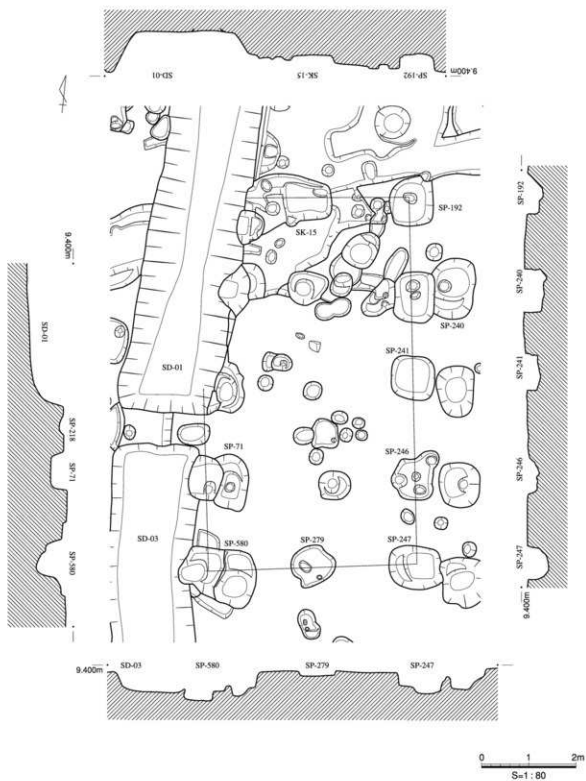
器高3.7cm、高台径約9.6cmで、底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。体部上半から口縁部にかけてやや外に開く形態をもつ。内面には火燂痕が認められる。683は口径約13.6cm、器高3.4cm、高台径約8.8cmを測る。底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。684は高台径約11.0cmで、底部はナデ調整が施されているが、一部ヘラ状工具の抜き取り痕が残る。器形は箱形である。685は高台径約8.8cmを測り、ヘラ切り痕が残る底部を有する。直立気味に立つ低い高台をもつ。体部上半から口縁部にかけて欠損している。686・687は須恵器坏Aである。686は口径約15.0cm、器高2.5cmで、底部はヘラ切り後粗いナデ調整が施されている。全体的に器壁は薄く、口縁部は外側に開く形態をもつ。687は口径約12.1cm、器高2.5cmで、底部はヘラ切り後不調整である。器形や成形などは686と同様である。

S B-02 (第109図)

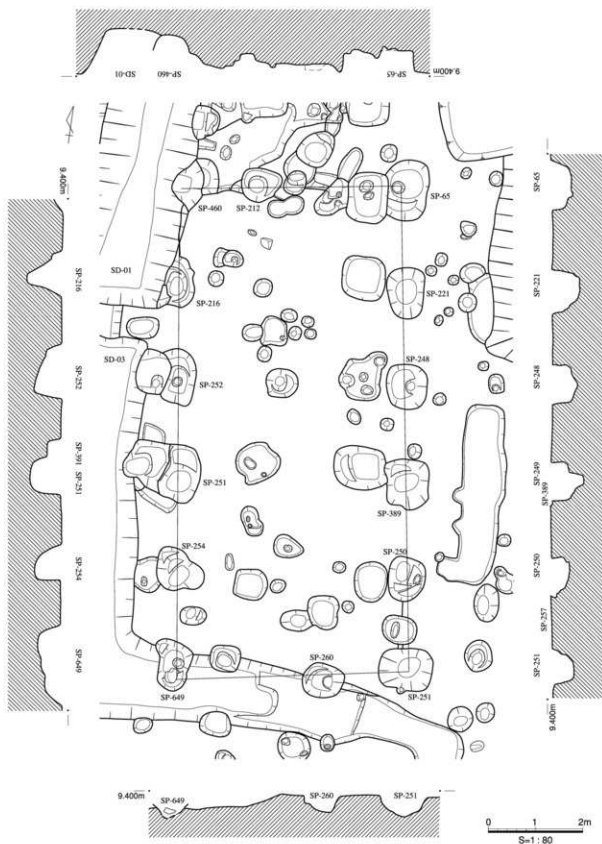
C-7・8グリットを中心とした位置にある。建物は、桁行7.76m(4間)、梁行4.38m(2間)の側柱建物で、方位はN7°Wである。柱間距離は桁行が約1.8~2.0m、梁行は約2.0~2.4mで、桁行や梁行の柱間距離はややばらつきがある。柱穴の掘り方平面は方形を基本とし、径0.8~1.0m前後の規模をもつ。深度は遺構確認面から0.1~0.5m前後を測る。建物の北西部分がS D-01に切られる。



第108図 S B-01出土遺物実測図



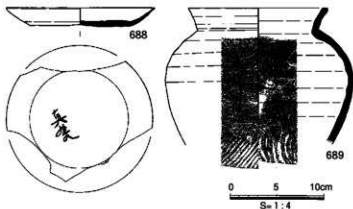
第109図 SB-02平面図・断面図



第110図 SB-03平面図・断面図

SB-03 (第110・111図)

C・D-7・8・9グリットを中心とした位置にある。建物の北西部分がSD-01に切られる。SB-02の建物と重複しているが、建物間の新旧関係は不明である。建物は桁行10.28m(5間)、梁行4.88m(2間?)の側柱建物で、方位はN8°Wである。柱間距離は桁行が2.0m前後を測り一定しているが、梁行の柱穴は判然としない。

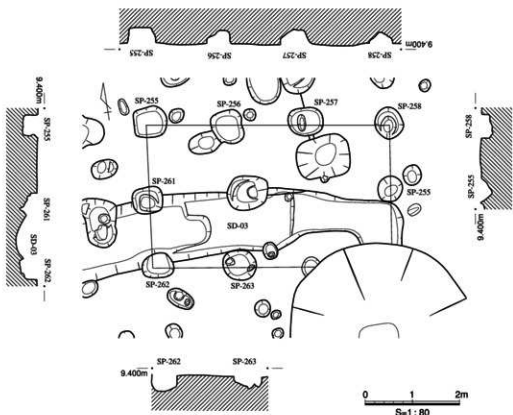


第111図 SB-03出土遺物実測図

688は須恵器盤Aで、口径15.6cm、器高2.0cmを測る。底部はヘラ切り後粗いナデ調整が施されている。また、底部には「真屋九」の墨書が確認できる。体部の器壁は薄く成形されている。688の出土状況は、SP-248の柱穴抜き取り痕から出土している。689は須恵器甕で、口径14.8cmを測る。頸部は鋭角に「く」字状に屈折し、直線的に口縁部は短く伸びる。体部内外面は1次成形として叩きを施し、その後叩き目をナデ消している。底部近辺においては叩き目が残る。

SB-04 (第112図)

C・D-9グリットを中心とした位置にある。建物は、桁行5.1m(3間)、梁行3.0m(2間)の側柱建物で、方位はW8°Nである。柱間距離は桁行が1.6~1.8m、梁行は約1.4~1.6mでやや柱間の距離にばらつきがある。遺構確認面からの柱穴深度は、0.25~0.35m前後の深さを測る。柱穴の掘り方内から土師器や須恵器の破片が少量出土しているが、図示で



第112図 SB-04平面図・断面図

きるものはなかった。

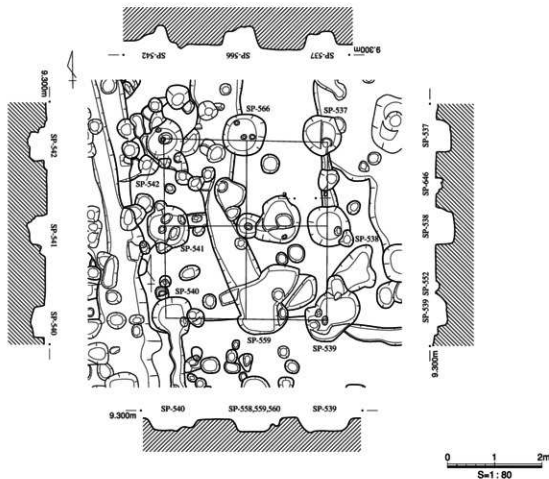
S B-05 (第113・114図)

C・D-11・12グリットの位置にあり、東側がS H-06に重複している。また、S H-06の壁溝を切っている。建物は、桁行3.76m(2間)、梁行3.4m(2間)の総柱建物で、方位はN1°Wをとる。柱間距離は桁行・梁行ともに1.9m前後を測り、柱間の距離はほぼ一定している。遺構確認面からの柱穴深度は、0.2~0.4m前後の深さを測る。遺物は柱穴抜き取り跡から土師器や須恵器の破片が少量出土している。

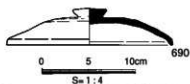
690は口径17.6cm、器高3.8cmを測る須恵器坏蓋である。天井部はヘラケズリが施され、つまみは扁平の円盤状の形態を有する。器形は編み笠状を呈する。

S B-06 (第115図)

E・F-12・13グリットの位置にある。建物の一部はS H-04に重複している。桁行8.4m(5間)、



第113図 S B-05平面図・断面図



第114図 S B-05出土遺物実測図

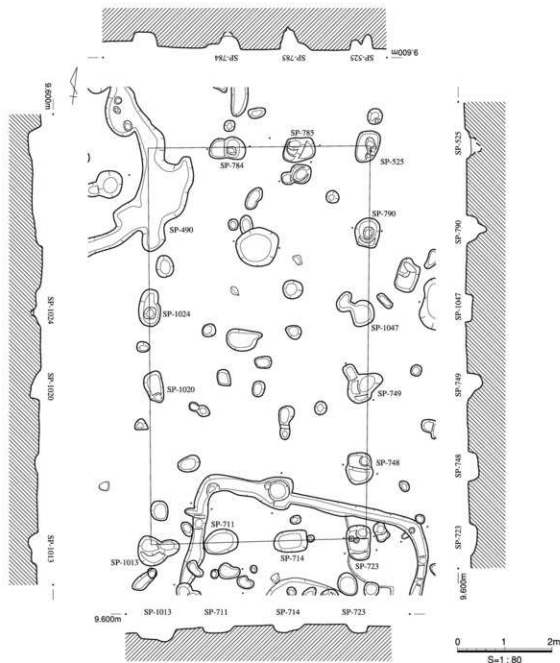
梁行4.52m(3間)の側柱建物で、方位はN6°Wである。柱間距離は桁行が1.5~1.9m、梁行は1.8m前後である。桁行の柱間距離にはややばらつきがあるが、梁行は一定している。深度は構確認面から0.2~0.4m前後を測る。柱穴からは土師器や須恵器の破片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

S B-07 (第116図)

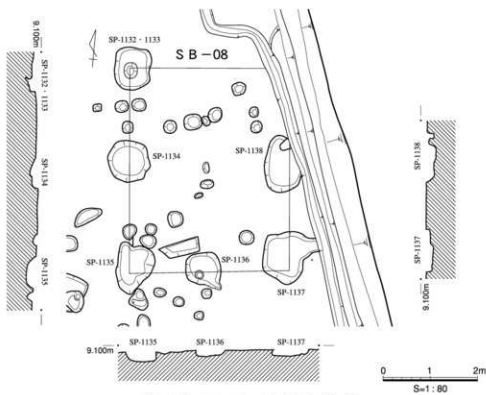
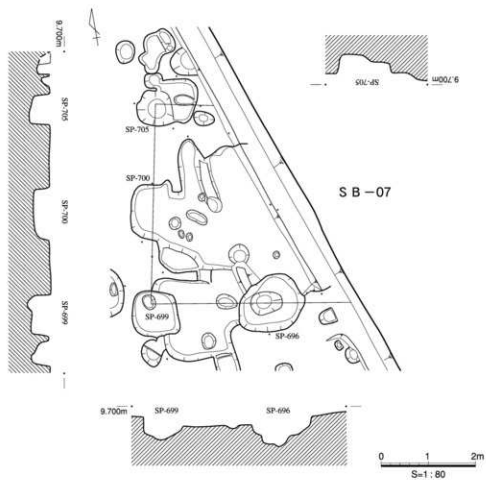
G-12グリットを中心とした位置で、建物の東側は調査範囲外である。桁行は2間以上、梁行4.2m(2間)の側柱建物で、方位はN10°Eをとる。柱間距離は桁行が約2.4m、梁行は2.0～2.2mで、梁行は柱間の距離にややばらつきが認められる。深度は構確認面から0.4m前後の深さを測る。建物からは土師器や須恵器の破片が若干出土しているが、図示できるものはなかった。

S B-08 (第116図)

H-15・16グリットを中心とした位置にあり、建物の北東の一部が調査範囲外である。建物は、桁行4.32m(2間)、梁行3.36m(2間)の側柱建物で、方位はN4°Wである。柱間距離は桁行が約2.0



第115図 S B-06平面図・断面図



第116図 SB-07・08平面図・断面図

～2.4m、梁行は約1.5～1.8mで、桁行・梁行ともに柱間の距離はばらつきがある。柱穴の深度は遺構確認面から0.2m前後を測る。

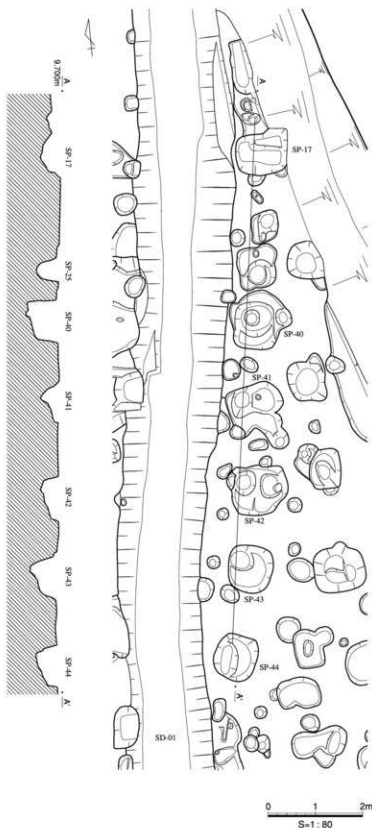
SA-01 (第117図)

C-2・3・4グリットの位置にある。6間以上、12m以上の南北方向(N7°E)に伸びる櫓である。櫓の柱穴間距離は1.0～2.6mと不揃いであるが、SD-01の東側に沿う形で柱穴が並ぶ。柱穴の深度は遺構確認面から0.4～0.6mを測る。柱穴の抜き取り痕からは土師器や須恵器の破片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

SE-01 (第118～120図)

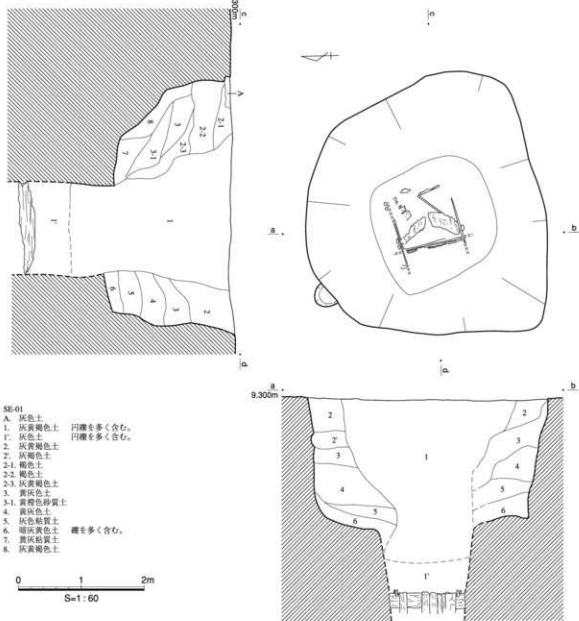
D-10グリットを中心とした位置にある。井戸は短辺3.85m×長辺4.1mの不整形で、深度は遺構検出面より4m以上を測る(明確な井戸底は側壁の崩壊や泥水の噴出などで確認することはできなかった)。井戸中位以下のところで直径1.5mにすばまった形状を呈していた。井戸側は最下段(基底部)のみ遺存するが、南東側にある井戸側も損失していた。井戸側は横板組を基本とし、基底部の裏側には縦板を数本差し込まれていた。この縦板は補強用とした使用されていたと考えられる。いずれも遺存状態はあまりよくなく、中～上部にかけての井戸側は抜き取られていた。遺物のほとんどは井戸側内から出土しており、遺物量も少なかった。

691は底径約8.0cmの土師器碗Bである。高台はやや外側に踏ん張り気味に立つ。692・693は須恵器坏B

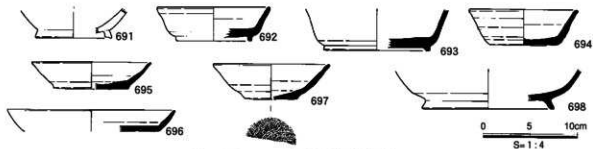


第117図 SA-01平面図・断面図

で、692は口径約11.7cm、器高約3.6cm、高台径約8.0cmを測る。底部はナデ調整が施される。693は高台径約11.2cmで、底部にはクシ状工具の抜き取り痕が残る。器形は箱型をとる。694・695・697は須恵器坏Aである。694は口径約11.2cm、器高3.8cmで、底部はへら切り後粗いナデ調整を施す。695は

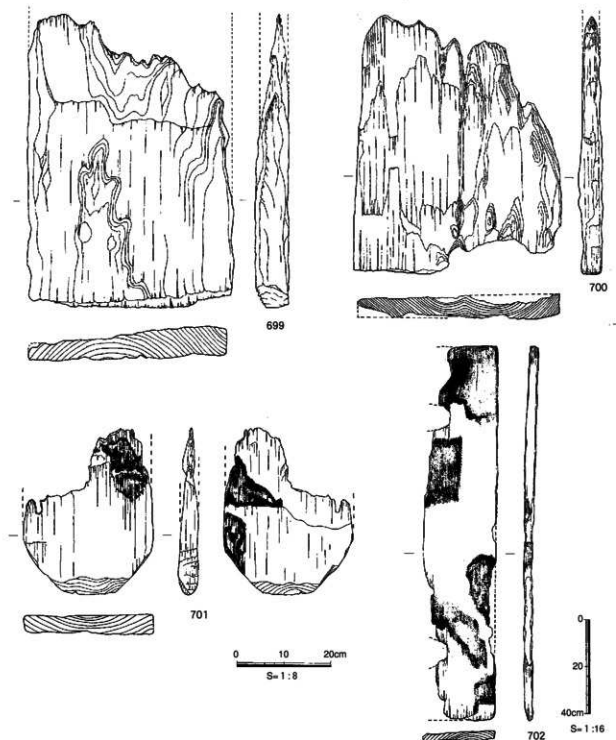


第118図 SE-01平面図・断面図

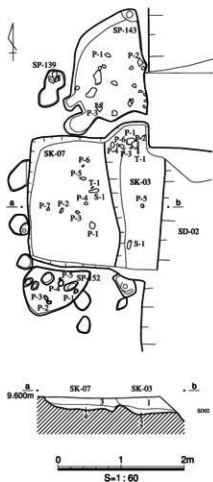


第119図 SE-01出土遺物実測図(1)

口径約12.5cm、器高2.9cm、底径約8.0cmを測り、底部はヘラ切り後不調整である。器厚は底部が厚く、上方に行くにしたがって薄くなる。697は口径約12.2cm、器高3.7cm、底径5.6cmを測る。底部は糸きり調整を行い、斜め上方に開く口縁形態を有する。696は須恵器盤Aで、口径約17.7cm、器高2.3cmを測る。底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。698は須恵器坏Bか。高台径約13.8cmを測り、外側に開く高台をもつ。底部と体部の境界部分はヘラケズリを行い、底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。699～702は



第120図 SE-01出土遺物実測図[2]



- SK-03・07
 1. 褐色土 しまりB、粘性C、炭C。
 2. 褐色土 しまりB、粘性C、炭C。
 3. 暗褐色土 しまりB、粘性C、炭B。
 4. 褐色土 しまりC、粘性C。

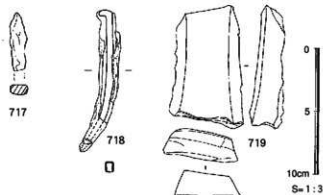
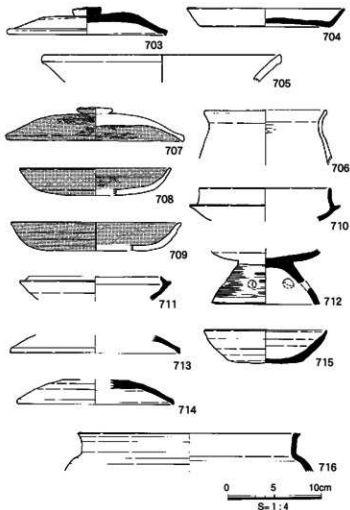
第121図 SK-03・07平面図・土層図

めに設けられた幅約10cmの切れ込みが、上部両側近くに認められる。

SK-03・07 (第121・122図)

D-6グリッド内に位置し、SK-07はSK-03に切られる遺構である。また、SK-03はSD-02に切られていて、新旧関係がはっきり確認できる遺構群である。SK-03・07は連続している遺構で、遺構確認面からの深度はSK-03が約25cm、SK-07は約20cm測る。平面形は方形をとると考えられる。双方の埋土は基本的に褐色土を呈し、遺物も埋土中に多く出土している。SK-03から出土している遺

井戸側の木製品である。699・700は縦板の一部で上方部分が欠損している。701は基底部の横板の裏込め部分に差し込まれていた板材である。板の先端が土中に差込みやすいように断面三角形に斜めに切れ込みをいれる。702は西側基底部の横板で長さ156.3cm、高さ30.9cm、厚さ4.5cmを測る。横板を積み上げた



第122図 SK-03(705・706・720・721)・07(707~719)出土遺物実測図

物は703・704・718・719で、SK-07は705～717である。また、715の遺物はSK-07とSK-03から出土した破片同士が接合している。

703は須恵器坏蓋で、口径約16.6cm、器高2.9cmを測る。天井部は平坦な面をとり、調整はヘラケズリを行う。つまみは扁平な円盤状を呈する。

704は須恵器盤Aで、口径約16.6cm、器高1.9cmを測る。底部はヘラ切り後粗いナデ調整が施され、その上にヘラ状工具の差込痕が残る。外面に一部火捺痕が確認できる。705

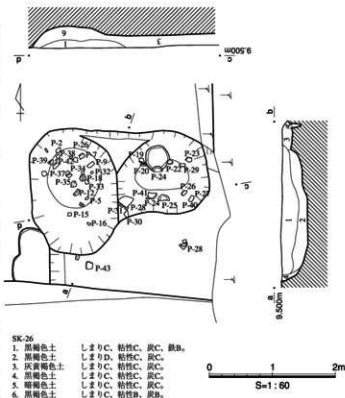
は土師器甕の口縁部で、口径約24.9cmを測る。口縁端部断面は三角形を呈し、「く」字状の頸部をもつと考えられる。色調は橙色を呈す。

706も土師器甕で、口径約12.6cmを測り、短い口縁部をもつ。色調は浅黄橙色で、やや粗い粒子の胎土を多く含む。707は土師器坏蓋

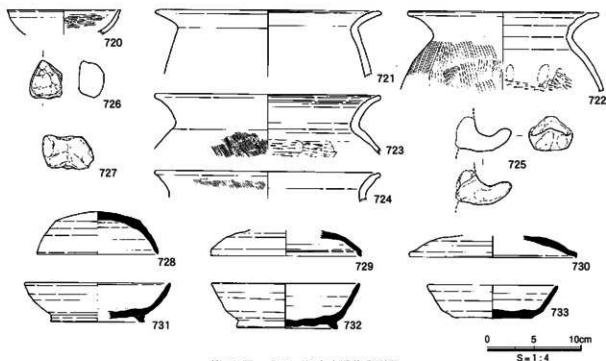
である。口径18.5cm、器高3.5cmをはかり、全面赤彩を行っている。また、内外面においてはミガキ調整が施されている。つまみは扁平

の円盤状を呈する。708・709は全面赤彩が施されている土師器盤Aである。708と709

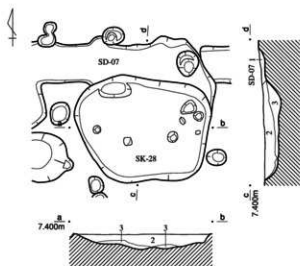
はそれぞれ口径約 15.9cm・17.9cm、器高2.9cm・3.0cmを測り、ともに内外面ミガキ調整が施されている。710は須恵器坏身で、復



第123図 SK-26平面図・土層図



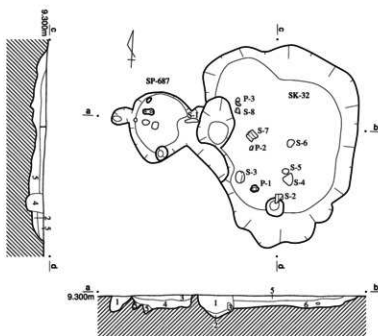
第124図 SK-26出土遺物実測図



- SD-07 1. 灰黄褐色土 地山の土（暗灰質）を少量、焼土粒を若干含む。
 SK-28 2. 暗灰色土 地山の土少量、灰粒を若干含む。
 3. 暗灰黄色土

0 1 2m
 S=1:60

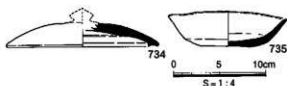
第125図 SK-28平面図・土層図



- SK-32
 1. にぶい黄褐色土 しまりB、粘性C、灰B。
 2. にぶい黄色土 しまりB、粘性B、灰C。
 3. 明黄褐色土 しまりC、粘性C。
 4. 黒褐色土 しまりC、粘性C、灰C。
 5. 褐色土 しまりC、粘性C、灰B。
 6. 暗褐色土 しまりC、粘性C、灰B。

0 1 2m
 S=1:60

第127図 SK-32平面図・土層図



第126図 SK-28出土遺物実測図

元口径13.8cmを測る。口縁部の立ち上がりは緩やかに外反する。711は須恵器坏H身で、復元口径14.0cmをはかる。口縁部は立ち上がりが短く内傾する。712は須恵器高坏の脚部で、脚部に直径1.1cm前後の円形孔が6個？開けられている。713・714は口縁部の内に短い返りをもつ須恵器坏蓋である。713は復元口径18.0cmを測る。714は口径約16.5cmで、天井部はケズリ調整を施している。715は須恵器坏Aで、口径12.8cm、器高3.5cmを測る。底部はヘラ切り後不調整である。口縁端部を上方に擁み上げる形態を有する。716は須恵器広口壺で、口径約23.4cmを測る。口縁部は短く直立気味に伸び、端部を平坦にし

て面をつくる。717・718は鉄製品で、717は刀子か。718は基部断面が方形を呈する角釘で、基部を折り曲げて頭とする折釘と考えられる。719は砂岩製の砥石である。長さ9.7cm、幅5.8cm、厚さ2.7cmを測る。

SK-26 (第123・124図)

G・H-14グリットに位置し、不整形な土坑である。SH-03の主柱穴と重複しているが、SH-03を切っている。深度は0.3m前後を測り、埋土は黒褐色を基本とし、大きく2層に分かれる。埋土中には多くの遺物が検出されている。

720は土師器坏である。口径約12.0cmを測り、内外面ミガキ調整が施されている。また、口縁部の内外面は横ナゲ調整が行われ、やや外側に端部が開く。色調は明赤褐色を呈し、細かな粒子の胎土が多く含まれている。721~724は土師器甕である。724以外は

いわゆる「段状口縁」を有する甕の口縁部で、体部外面はハケ調整、内面はケズリ調整が施される。721は粗い粒子が多い胎土で、にぶい黄褐色の色調を呈する、722・723は721よりも細かな粒子の胎土が多く含み、色調も赤褐色をしめす。724は口縁部を強く横ナデするが、外面には1次成形時のハケ調整痕

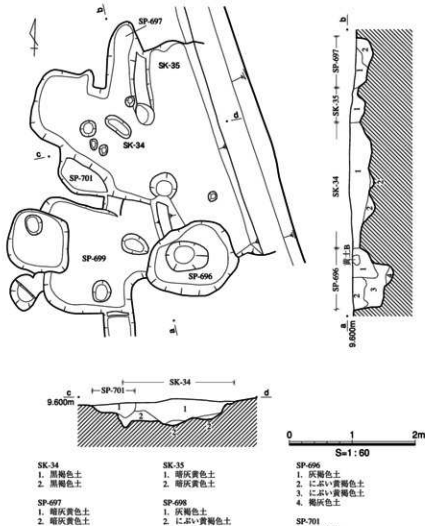
が僅かに残る。725は土師器の把手である。鍋か甕につく把手であろう。726・727は粘土塊で、色調は黄褐色を呈する。726には、平坦な一面があり、他の側面部と比べると風化が著しい。住居の壁材の可能性が考えられる。728は須恵器坏H蓋で、口径約12.7cm、器高約4.4cmを測る。天井部はヘラ切り後不調整である。729・730は須恵器坏蓋である。730は天井部の調整はヘラケズリを施している。729の天井部は自然釉が全面にかかり調整は不明である。

731・732は須恵器坏Bである。底部の調整は731がヘラ切り後ナデ調整で、732ではヘラ切り後不調整である。器高は732が4.8cmと高く、口縁部に向かって直線的に伸びてやや箱形に近い形態を有する。

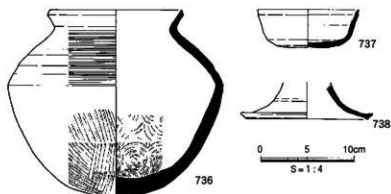
733は須恵器坏Aで、口径約12.7cm、器高3.6cmを測る。底部はヘラ切り後不調整で工具による抜き差し痕が残る。底部と体部の境界に強いナデが施され、段状に成形されている。

S K - 28 (第125・126図)

D - 10・11グリットに位置し、楕円形をした土坑である。S H - 06の壁溝である S D - 07と重複しており、土坑は



第128図 S K - 34・35平面図・土層図



第129図 S K - 34(737・739・740)・35(736)出土遺物実測図

SD-07に切られる。遺構深度は確認面から0.25m前後で、上層が暗灰色を呈し下層は暗灰黄色の土が堆積する。遺物は少量検出されている。

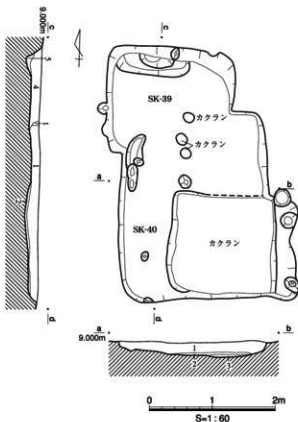
734は須恵器坏G蓋で、口径約16.0cmを測る。内側に短いかえりがある。天井部はヘラ切り後ケズリ調整が施されている。つまみは欠損している。また、内側の器面が滑らかになっており、天地逆に転用甕として再利用された可能性が窺える。735は須恵器坏G身としたが、焼き歪みが酷く明確な器種は不明である。口径は10cm前後で、器高も3.2cm前後になるうか。底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。

SK-32 (第127図)

D-13グリットに位置し、不整形な楕円の土坑である。土坑は長辺約3m×短辺約2.5mの規模で、深度は遺構確認面から0.2m前後を測る。埋土は粘性が強く褐色を呈する。遺物は小片が多く図示できるものはなかった。

SK-34・35 (第128・129図)

G-12・13グリットに位置し、土坑や柱穴が重複して存在する。SB-07の柱穴の1つであるSP-696がSK-34の土坑を切る。SK-34と35は遺構確認面の段階で区別したが、土層や遺構深度などからおそらく同一の土坑と考えられる。埋土は黒褐色を呈し、ほぼ単一層に近い。遺物は若干検出されている。



SP-39,40

- | | |
|----------|--------------|
| 1. 暗褐色土 | しまりC、粘性D、灰C. |
| 2. 黒褐色土 | しまりC、粘性C、灰C. |
| 3. 暗灰色土 | しまりC、粘性C、灰B. |
| 4. 暗褐色土 | しまりC、粘性C. |
| 5. 明黄褐色土 | しまりC、粘性C、灰C. |

第130図 SK-39・40平面図・土層図

736は須恵器壺で、口径約14.0cm、器高19.7cmを測る。口縁部は「く」字状にやや外側に開き、口縁端部の断面は三角形を呈する。体部外面上半はカキ目があり、下半では平行線文の叩き痕が確認できる。内面上半は横ナデで1次成形時の叩き痕が消され、下半は同心円文の叩き痕が残る。737は須恵器坏Gで、口径約10.7cm、器高4.0cmを測る。底部はヘラ切り後ケズリ調整が施されている。口縁端部はやや内傾する。738は須恵器高坏で方形の透かしがつか不明である。焼成は良く737同様に断面は赤茶褐色を呈する。

SK-39・40 (第130図)

G-17グリットに位置する土坑である。SK-39とSK-40は重複しており、土層からSK-39はSK-40に切られる。SK-39は2m×1.7mの方形を呈し、約0.15mの深度を測る。埋土は暗褐色で、遺物は含まれていなかった。SK-40は3m×2.4mの南北に長い方形の形をとる。深度は0.2m前後を測り、SK-39同様に暗褐色の埋土であった。遺物は細片で時期のわかるものはなかった。

SK-41 (第131・132図)

B-3グリットに位置し、西側部分は調査範囲外で、東側部分はSD-01に切られている土坑である。土坑は南北約3.8m、深度は遺構確認面から0.15m前後を測る。また、中央で北側部分がやや低い段差が認められる。埋土は暗褐色色を基本とし、一定量の炭化物や焼土が埋土に混入していた。また、遺物も北側部分を中心に多く検出されている。

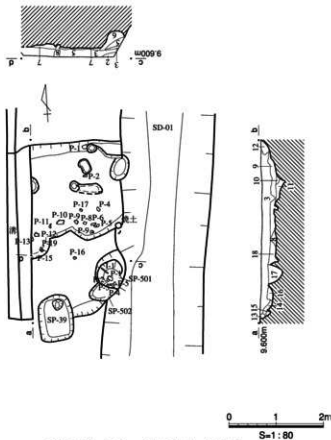
739は口径約12.0cmを測る灰軸陶器の碗か。740・741・743は須恵器杯Bで、高台径かそれぞれ8.0cm、9.2cm、9.2cmを測る。底部の調整はすべてヘラ切り後ナデ調整を施す。742は須恵器杯B蓋である。口径約18.0cmを測り、天井部はヘラ切り後ナデ調整を行う。744は須恵器壺の底部か。高台径8.1cmを測り、底部は丁寧なナデ調整が施されている。

746は口径約14.0cm、器高1.5cmを測る須恵器盤Aである。底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。口縁部は外側に大きく開く形態をもち、器壁も薄く成形されている。747は粘土塊である。色調はにぶい橙色で、細かな粒子の胎土である。住居の壁材か。

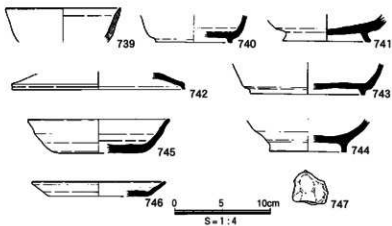
SP-218 (第133・134図)

C-8グリットに位置し、東西方向に長い楕円形をとる。遺構確認当初は柱穴と考え掘り進めたが、土師器甕2個が合口し横たえた状態で検出されたため、SP-218は土器埋納遺構であることが判明した。遺構は東西0.78m×南北0.45mの規模で、深度は遺構確認面から0.25m前後を測る。埋土は黒褐色土を基本とする。主軸は東西に据える。SD-01とSD-03の間のほぼ真ん中の位置に構築されて、また、SB-02や03のすぐ西側に存在する。その他遺構との新旧関係は明確にはわからなかった。

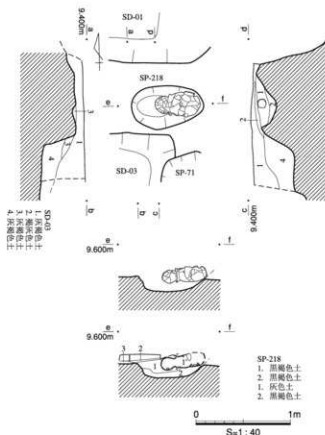
748は土師器甕で、口径15.5cm、器高16.8cmを測る小型品である。口縁部は短く斜め上方に伸び、端部はやや丸くおさめる。体部外面は全面ハケ調整で、内面はケズリ調整が施されている。749も土師器甕である。口径20.0cm、器高30.6cmを測り、長胴の形態をとる。頸部は「く」字状を呈し、外に開く口縁部をもつ。口縁外面は横ナ



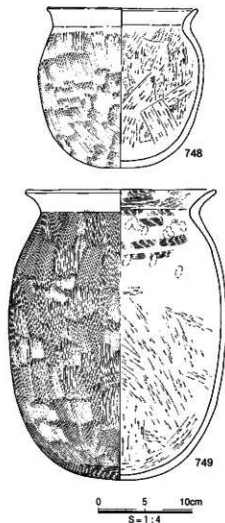
第131図 SK-41平面図・土層図



第132図 SK-41出土遺物実測図



第133図 SP-218平面図・土層図

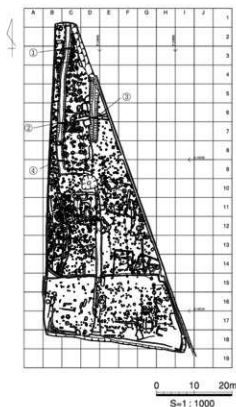


第134図 SP-218出土遺物実測図

デで、内面においては横ハケ調整が施されている。外面体部は縦方向のハケで、内面体部上方はナデを行い、一部に1次成形のハケ目が残る。下半はケズリ調整が施されている。

SD-01・02・03 (第135～137図)

SD-01はC-1～7グリットを中心に南北方向に伸びる溝である。溝は幅約2m前後、深度は遺構確認面から0.6～0.9mを測る。埋土は黒褐色の砂質土を基本とする。溝の断面形状は逆台形でやや急な傾斜をとる。また、溝の南端も急な傾斜をとり立ち上がる。溝は一端南側で途切れる。遺物は破片が少量含まれている程度であった。SD-02はD-5～7グリットを中心に南北方向に伸びる溝である。幅2.3～2.5m、深度は遺構確認面から0.95m前後を測る。埋土は褐灰色土を基本とし、断面形状は逆三角の形をとる。SD-01とは約0.6mの距離を保ち平行に構築され、ほぼ同様の位置で溝が南側で立ち上がる。SD-01とは同時構築されたかは不明である。SD-03はSD-01から南に続く溝である。C-9グリットで東側にほぼ90°折れ曲がりSE-01にぶつかる。溝は幅1.3～1.8mで、深度は遺構確認面から0.1～0.4mを測る。北側→南側→東側に行くに従って深度は浅くなる。埋土は黒褐色の砂質土を基本とする。溝の断面形状はU字状をとる。また、SE-01から南に伸びるSD-15もSD-03から連続する溝と考えられる。SD-01・02・03・15の溝とSE-01が同時に構築されたかは確認でき

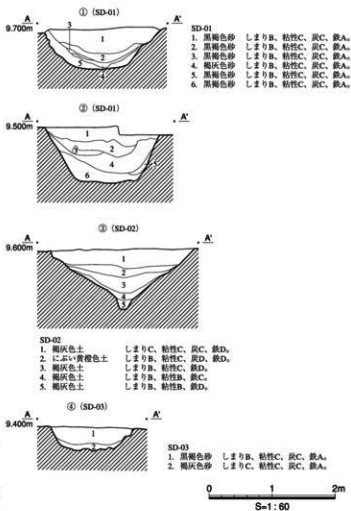


第135図 3区遺構配置図

ないが、それぞれが関連をもって機能していたことは確かであろう。

SD-01から出土している遺物は750～764・773で、750は口径17.8cmを測る土師器甕である。口縁部は鋭角に「く」字

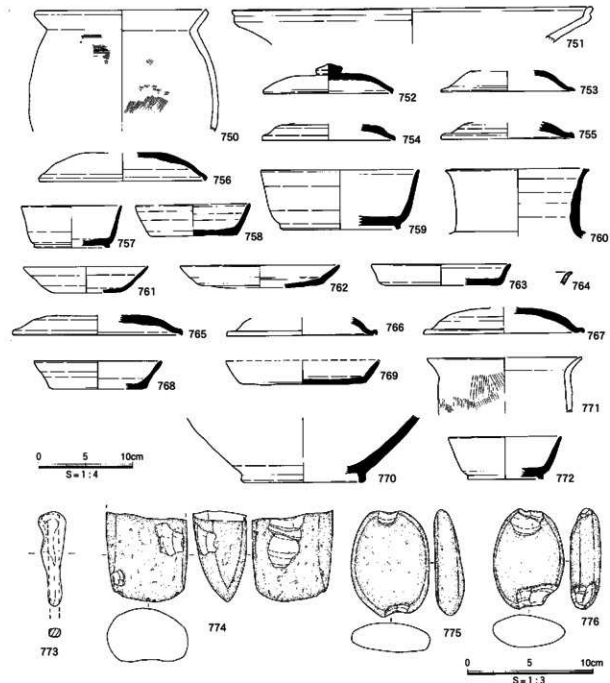
に外反し、端部は方形に整える。内外面の摩滅は激しいが、外面体部上半の一部にカキ目が認められる。また、内面にはハケ調整を施した後が窺える。751は土師器浅鍋で、口縁部の一部が残存する。復元径38.0cmで、口縁部は逆「ハ」字に開き、口縁端部を外側に折り曲げる。口縁部の調整は横ナデを施していると考えられるが摩滅が激しい。色調はにぶい橙色で、赤色粒子を含む細かな胎土である。752～756は須恵器坏蓋で、坏Bに伴うものと考えられる。752は口径13.6cm、器高2.2cmを測り、宝珠つまみがつく。天井部から体部にかけてケズリ調整が施されている。天井部と体部の境界は不明瞭である。756は口径約17.5cmを測り、天井部はナデ調整が施される。757・759は須恵器坏Bで、ともに箱形の器形をもつ。757は口径約10.6cm、器高4.4cm、高台径約8.0cmを測り、底部はナデ調整を施す。759は口径約16.6cm、器高6.3cm、高台径約12.0cmで、底部の調整はヘラ切り後ナデである。758・761は須恵器坏Aである。758は器壁がやや厚く底部から体部にかけて鋭角に曲がる。口径は約12.0cm、器高3.3cmを測り、底部はヘラ切り後不調整である。761は口径約13.1cm、器高約2.7cmを測り、底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。器厚は非常に薄く成形されている。762・763は須恵器坏Aである。762は外側に広く開く口縁部をもち、底部はナデ調整が施される。763は口縁端部で外に開く形態をもち、底部はナデ調整が施される。760は須恵器広口瓶の口縁部である。口径は約15.2cmで、若干外に開く口縁部



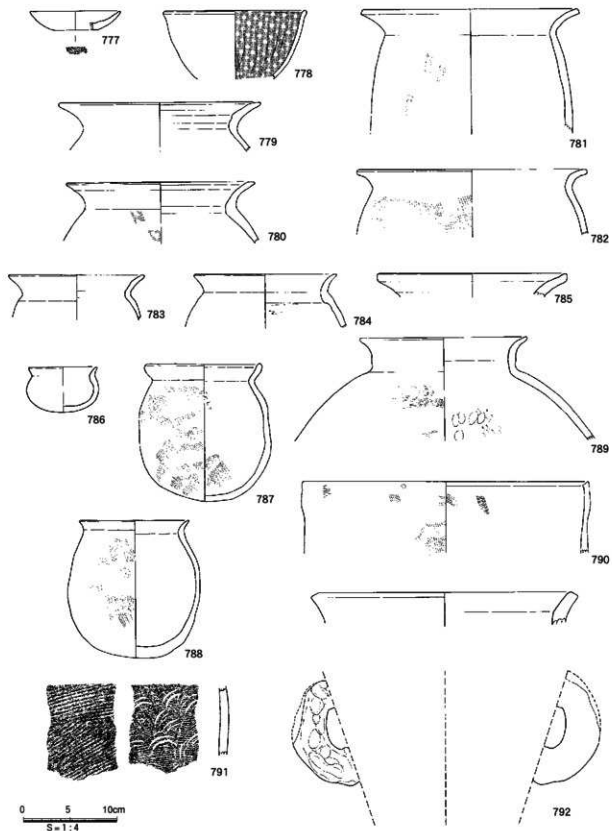
第136図 SD-01・02・03土層図

をもち、端部は外側につまみ出す形態を有する。764は灰釉陶器の口縁部の破片である。773は、基部断面が方形を呈する角釘である。基部を折り曲げて頭とする折釘と考えられ、基部下半は欠損している。

S D-02から出土している遺物は765~770である。765~767は須恵器坏蓋である。いずれも坏Bに伴うものか。765は口径約17.8cmで、天井部はヘラケズリ調整が施されている。767も天井部がヘラケズリ調整で、口径約16.8cmを測る。768は須恵器坏Aで、口径約13.4cmを測る。底部はヘラ切り後ナデか。769は須恵器盤Aで、底部はヘラ切り後粗いナデ調整が施される。770は須恵器の碗Bである。高台径は約12.0cmで、直立気味に高台は立つ。器面全体は摩滅が激しい。



第137図 S D-01(750~764・773)・02(765~770)・03(771・772・774~776)出土遺物実測図



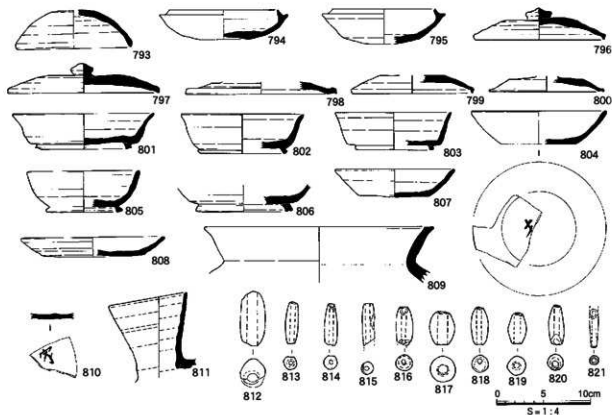
第138図 S K-06(787)・27(784)・29(781・788)・37(790)・59(792)・S P-21(786)・129(778)・
143(783)・501(785・791)・599(782・789)・793(780)・1236(777)・S D-23(779)
出土遺物実測図

S D-03から出土している遺物は771・772・774～776である。771は「く」字状に外に開く短めの口縁部をもつ土師器甕である。口径15.9cmを測り、体部外面は縦ハケが施される。内面は摩滅が激しく調整の観察不明である。772は須恵器坏Bである。口径約11.9cm、器高約4.5cm、高台径約8.0cmを測る。底部はナデ調整が施されている。774は砂岩製の磨製石斧である。上半が欠損している。775・776は石錘で、775は安山岩製、776は砂岩製である。

その他の遺構出土遺物 (第138・139図)

律令時代の遺物について取り上げるが、出土した遺物に伴う遺構については必ずしも遺物の時期に帰属する遺構でないことは断っておきたい。ここでは、遺物のみを取り上げる。

777は土師器碗Aである。復元口径9.6cm、底径約2.0cmを測り、底部には糸きり痕が確認できる。口縁部は先細り気味に斜め上方に立ち上がる。778は土師器碗で、内面は黒色処理を行い、暗文を施す。外面色調は赤褐色で、細かな粒子を多く含む胎土をもつ。779・780・783はいわゆる「段状口縁」を有する土師器甕である。779と783は赤褐色系の色調で、粗い粒子を多く含む胎土である。また、外側に大きく開く口縁部をもつ。一方、780においては黄褐色系の色調で、ある程度細かな粒子を均一的に含む胎土である。口縁部も779や783に比べて上方に立ち気味である。781は土師器甕で長胴の形態をとる。頸部は「く」字に鋭角に屈曲する。内外面は摩滅が激しく調整が不明瞭であるが、外面体部の一部にハケ調整が認められる。782は土師器甕で、外側に開く短い口縁部を有する。体部外面はハケ調整が施され、一部に炭化物の付着が認められる。784は口径15.0cmを測り、頸部は厚い器壁をもつ。体部は

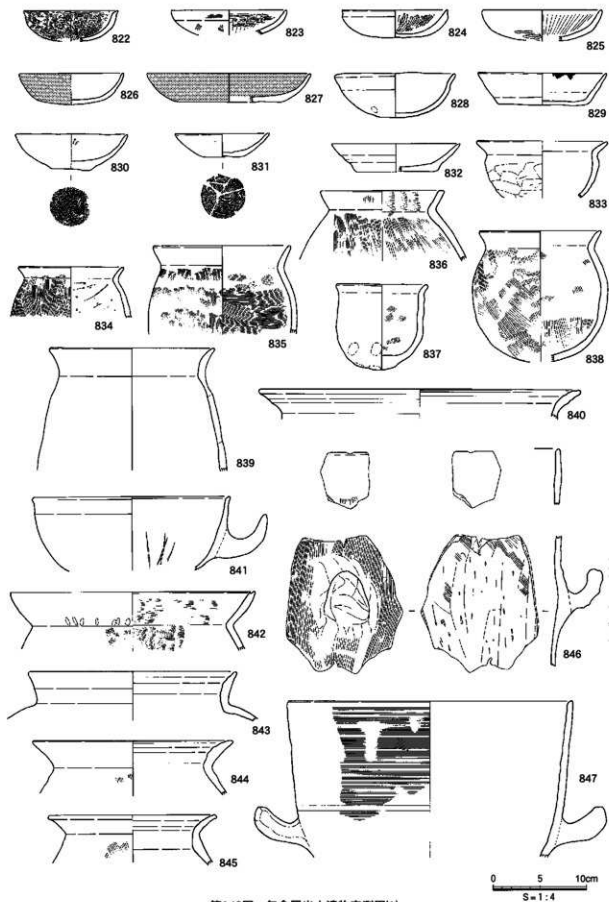


第139図 S K-05(796・798・799・805・806)・09(794)・37(795)・70(813)・72(821)・S D-09(793)・14(803)・23(818・820)・25(817)・26(819)・S P-34(808)・35(816)・45(797)・49(809)・104(811)・113(804)・147(807)・208(810)・261(800)・359(802)・501(801)・700(815)・876(814)・1318(812)出土遺物実測図

強いケズリが見られる。785は土師器甕で、少し上方に積み上げる口縁端部を有する。やや細かめの胎土を使用する。786は小型の壺か。赤褐色の色調で、赤色粒を多く含む胎土をもつ。摩擦が激しく調整は不鮮明であるが、丁寧な作りで成形している。787・789は小型の甕である。787は口縁部が内湾しながら開き、体部内外面にはハケ調整が施されている。「近江系」か。788は外側に開く短い口縁部をもち、体部外面をハケ、内面をナデ調整を施す。789は頸部径が小さく、上方に伸びながら端部で外側に開く口縁部をもつ。体部外面はハケ、内面はケズリ調整が施されている。790は土師器の甕か。口縁部は直立し、端部はやや内傾する。外面はハケ調整で、内面はナデ調整が施されている。791は内外面叩き痕が認められる土師器甕の体部である。叩きは外面を平行線文で、内面は同心円文とする。792は把手付きの甕か。口縁部の一部と把手のみが遺存する。同一個体である。口縁部は外に開き、端部断面は方形を呈する。把手は縦位につくと考えられるが、横位の可能性も否めない。色調は灰黄色で、細かな粒子を多く含む胎土をもつ。793は須恵器坏H蓋である。口径約12.0cmで、器高4.0cmを測る。天井部ヘラ切り後不調整を施す。794・795は須恵器坏Hで、ともに立ち上がりは内傾している。794は底部ヘラ切り後不調整で、795はヘラ切り後ナデ調整である。796～800は須恵器坏蓋で、坏Bにつく蓋と考えられる。796・797・799は天井部がヘラ切り後ケズリ調整である。798・800の天井部はヘラ切り後ナデ調整である。また、796は器形がやや山笠の形態をとるが、その他は扁平な形を有する。801～803・805・806は須恵器坏Bである。801・802は体部中ほどから口縁部にかけて外側に開く形態を有し、底部もともにヘラ切り後粗いナデ調整が施される。803は箱型の形態を有し、底部は丁寧なナデ調整が施される。805はやや丸みを帯びた器形を呈し、高台は外に開き踏ん張る形をとる。底部は丁寧なナデ調整が施される。806は底部がナデ調整を施し、高台は外に開く。804は須恵器坏Aで、底部に墨書が認められる。「才」の字か。器壁は全体的に薄く、底部はヘラ切り後ナデ調整が施される。808は須恵器甕Aで、外側に開く口縁部をもち、端部は若干内湾する。底部はヘラ切り後ナデ調整を施され、器壁は薄く成形されている。809は頸部「く」字で外側に短く開く口縁部をもつ、須恵器甕である。810は須恵器の坏もしくは盤の底部である。底部に「家」字の墨書が認められる。811は須恵器平瓶の口縁部である。口径8.4cmを測り、口縁部中ほどに1条沈線が巡る。812～821は管状土鍾で、すべて土師質を呈する。

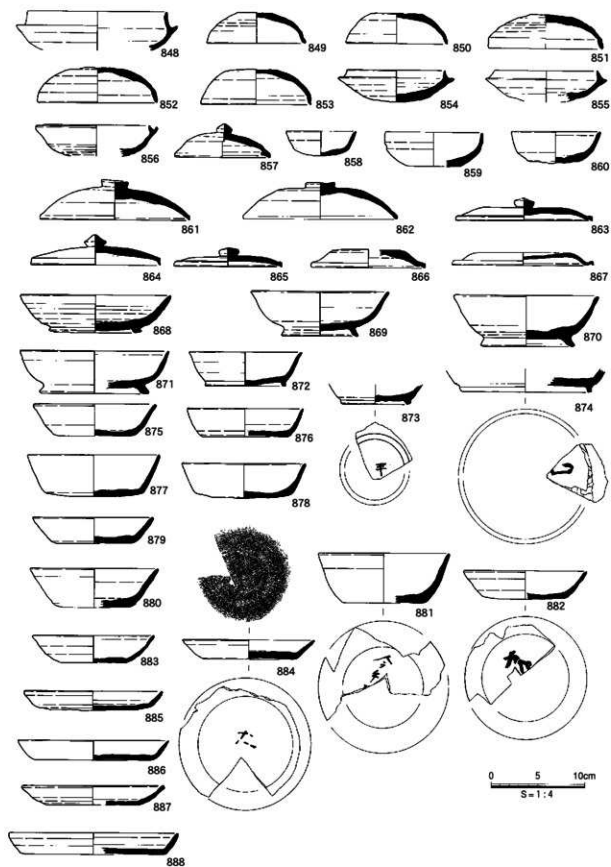
包含層出土遺物 (第140～142図)

822～827は土師器坏で、色調は赤褐色系を有する。822・823・825の内面には放射状の暗文が施されている。826は摩擦が激しく調整は不鮮明だが、放射状の暗文がかろうじて認められる。824は下から上に伸びる放射状のミガキ調整が内面に施されている。827は内外面赤彩が行われ、器形は盤に近い。828は口径12.6cm、器高4.7cmを測る土師器碗である。外面口縁部と内面は丁寧なナデが施されるが、外面底部は指頭圧痕を多く残し、粗いナデ調整が施されている。内面は煤が多く付着している。829・832はにぶい橙色の色調を呈する土師器坏である。829は口径13.4cm、器高3.4cmを測り、底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。口縁部の一部に灯心油痕が認められる。832は底部の器壁は厚く、口縁部にいくほど薄く成形されている。底部の調整はヘラ切り後粗いナデが施されている。830・831は底部糸きり痕を残す土師器碗である。ともに橙色系の色調を呈す。830は口径11.9cm、器高3.8cmで、内湾する口縁部をもつ。胎土は赤色粒を多く含む。831は口径9.9cm、器高2.5cmを測り、細かな粒子を多く含む胎土をもつ。833は体部外面をヘラケズリする小型の甕である。内面はナデ調整を施す。834～839は土師器甕である。834は体部内面がヘラケズリを行うが、835～838の甕はハケ調整を施す。837の調整は不鮮明であるが、残存するハケ目は1次成形段階でのハケ目であろう。その後ナデ調整が施された

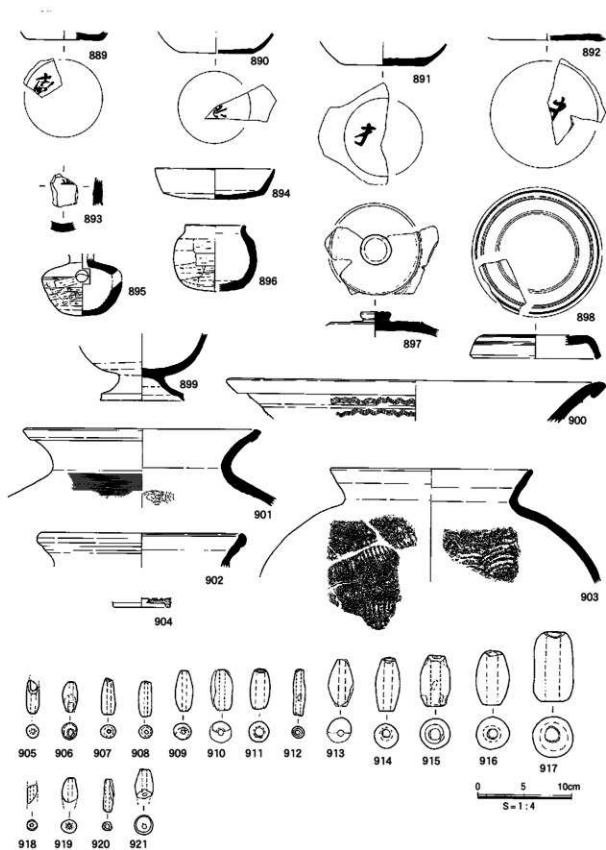


第140図 包含層出土遺物実測図(1)

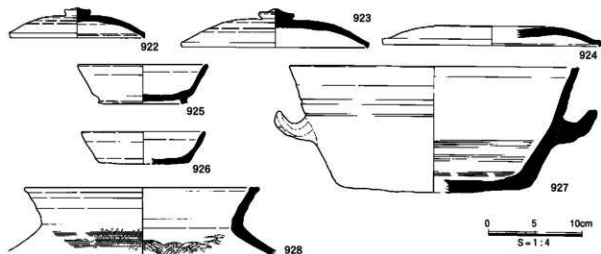
考えられる。839は内外面ナデ調整が施されている。色調は橙色を呈す。841は土師器把手付き碗である。復元径20.6cmを測り、牛角状の把手がつく。内面はやや間隔のある放射状の暗文が施され、極めの細かな粒子を含む胎土である。色調は明赤褐色を呈する。842は土師器甕で、口縁部が内湾しながら開く形態を有する。体部外面はハケを施し、頸部から体部にかけての内面もハケ調整が施されている。840・843～845は「段状口縁」を有する土師器甕である。840・844・845においては外側に大きく開く口縁部を有し、赤褐色系の色調を呈する。843はやや上方に伸びる口縁部で、にぶい黄褐色の色調である。846・847は土師器甕である。846は口縁部の一部と体部把手付近のみが出土している。外面はハケ調整が施され、内面においてはハケによる1次成形が行われ、その後に縦方向のケズリが施されている。色調は橙色を呈する。847は外面にカキ目が施され、灰白色の色調を呈する。846と比べると細かな粒子を多く含む胎土をもつ。848は須恵器坏身である。口縁部の立ち上がりはやや内傾する。遺存する天井部には回転ヘラケズリが窺える。849～853は須恵器坏H蓋である。849・850・852の天井部はヘラ切り後不調整。851は天井部ヘラ切り後ケズリが行われ、853の天井部はヘラ切り後粗いナデ調整を施す。854～856は須恵器坏H身である。口縁部の立ち上がりは短く内傾する。855の天井部はヘラ切り後不調整で、854・856の底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。857は須恵器坏G蓋で、口径10.0cm、器高3.6cmを測る。かえりは短くうちにおさまっている。天井部はヘラケズリが施され、宝珠つまみがつく。858～860は須恵器坏G身である。858は口径7.4cmで、器高2.7cmを測り、底部はヘラナデ調整が施されている。蓋の可能性が考えられる。859の底部にはヘラ状工具の抜きとり痕が認められる。860は口径約9.4cmで、底部はヘラ切り後不調整である。861～867は須恵器坏蓋である。861・862は扁平の円盤状つまみがつき、天井部はヘラケズリを施す。器形は山笠状を呈す。863～865・867の天井部はヘラ切り後ナデ調整が施され、866はケズリを行う。867の天井部にはつまみがつかず、扁平な器形を有する。868～874は須恵器坏Bである。872・873は中型で、その他は大型の坏身である。底部はヘラ切り後ナデ調整が施され、868のみナデが粗い。872は体部から口縁部にかけてほぼ直線的に斜め上方に伸びる器形をとる。また、高台はやや外側に踏ん張る形態を有する。873・874は底部に墨書が確認できる。873は「平」の字か。874は判読できず。875～883は須恵器坏Aである。底部がヘラ切り後ナデ調整を施すのは875・878～880で、ヘラケズリを行うのは877である。また、ヘラ切り後不調整は881～883である。882と883は他と比べると器壁は薄く成形されている。底部に墨書が確認できるのは881・882で、881が「今…」と読めるが、882は不明である。884～888は須恵器盤Aである。884は底部ヘラ切り後不調整で、885は粗いナデを施すが、ほとんど不調整に近い。886～888の底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。884の見込みには「×」のヘラ記号が、底部には「大」?の墨書が確認できる。889～893は須恵器で、墨書が確認できる。字が読めるものは891と892で、ともに「才」の字か。894は須恵器坏であるが、壺類の蓋の可能性が考えられる。底部はヘラケズリが施され、やや丁寧な作りである。895は須恵器甕である。体部下半から底部にかけてはケズリが施される。頸部以上は欠損している。896は口径6.2cm、器高7.0cmを測る小壺である。体部から底部にかけてヘラケズリが施されている。897は扁平なつまみがつく須恵器蓋である。天井部にやや深い沈線が巡る。天井部はケズリを施す。898は天井部から体部にかけて2条1単位の沈線が3条巡る須恵器蓋である。天井部はナデ調整を施す。899は須恵器高坏で、身が深い碗形の受け部をもつ。900・901・903は須恵器甕である。900は口縁部に2条の波状文が巡る。口縁端部は外側に折り曲げて形作る。901は口径約24.0cmを測り、肩部外面にはカキ目が施される。また、体部内外面には叩き痕が残る。外面は平行線文で、内面は同心円文が確認できる。903



第141図 包含層出土遺物実測図(2)



第142図 包含層出土遺物実測図(3)



第143図 立ち合い調査出土遺物実測図

は外側に直線的に短く開く口縁部をもつ。体部外面は平行線文、内面は同心円文の叩き痕が窺える。902は須恵器壺の口縁部か。口縁端部は外側に粘土紐を折り曲げまるくおさめる。904は緑釉陶器で高台径6.0cmを測る。高台は貼り付け輪高台で、釉調は淡緑色を呈する。905～921は管状土錘である。すべて土師質である。

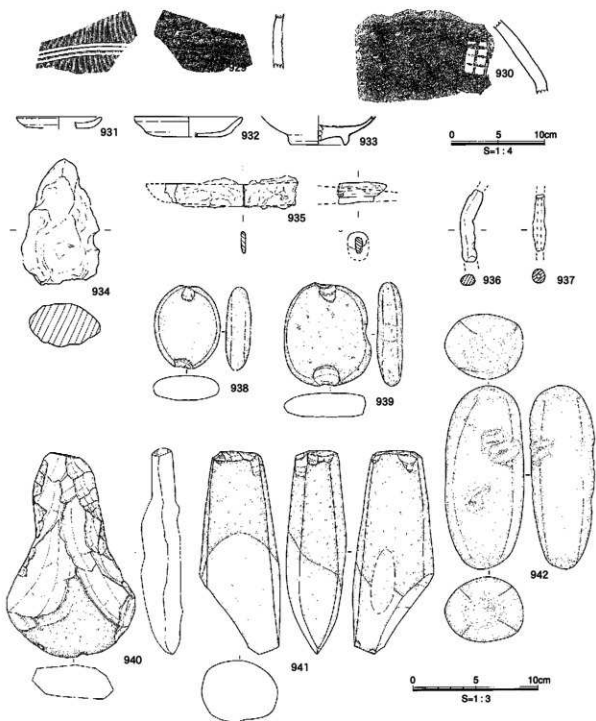
立会い調査出土遺物（第143図）

立会い調査は、調査範囲外のA-4・5グリット周辺で、民間工場に水道管を敷設するための工事に伴って出土した土器を回収しただけの調査である。出土した層位や明確な場所については不明である。唯一、黒褐色でやや粘性を帯びた土から出土したことだけ判明している。また、出土した遺物は須恵器と土師器で、律令時代に帰属するものだけであった。

922・923は扁平なつまみをもつ須恵器の坏蓋である。ともに天井部はヘラケズリ調整が施され、山笠状の器形を呈する。924は天井部に1条の沈線が巡る須恵器蓋である。天井部はヘラケズリ調整が施され、やや扁平な器形を有する。925は口径約13.6cm、器高4.1cm、高台径8.1cmを測る須恵器坏である。底部はナデ調整を施す。926は底部がヘラ切り後粗いナデ調整が施されている須恵器坏Aである。927は須恵器槽形鉢である。直線的にやや外に開く口縁部を有し、体部に扁平な牛角状の把手をもつ。体部上半には沈線が2条巡る。928は須恵器甕で、「く」字に開く口縁部をもつ。体部外面は平行線文の叩きで、内面は同心円文の叩き痕が窺える。（中川）

第4節 その他の遺構と遺物

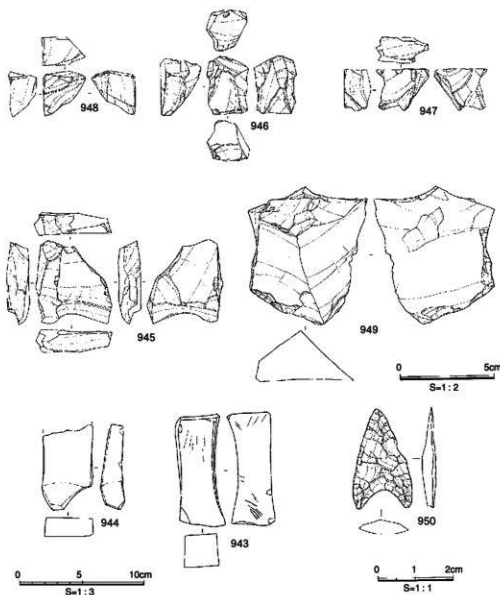
3区の中世以降の明確な遺構はB・C-9～17グリット周辺に位置する遺構で、南北方向に流れる数条の溝である。埋土は灰褐色を呈し、遺物も数点のみであったので、遺構については割愛する。以下、この節では中世以降の遺物や時期不明の遺物について取り上げる。



第144図 SH-501(935)・1140(930)・SD-14(930)・SX-01(937)・その他包含層出土遺物実測図

その他の出土遺物 (第144・145図)

929は須恵質の円筒埴輪である。外面は1次調整タテハケのみで、低い突帯が巡る。930は越前焼の大甕である。肩部のみで格子目の押印が確認できる。931・932は土師器皿である。931は口径約8.9cmを測り、一段のナデが巡る。色調はにぶい橙色を呈する。932は口径約11.4cmを測る。口縁部は一段ナ



第145図 S K-02(948)・S P-753949)・1607(944)・その他包含層出土遺物実測図

939は安山岩製で、長さ8.1cmを測る。940は安山岩製の打製石斧である。基部に素材面を残し、刃部は摩滅が激しい。941は安山岩製の磨製石斧である。刃部には右上方へ斜行する擦痕が残る。942は安山岩製の礫石である。943・944は凝灰岩の砥石である。945～949は緑色凝灰岩の玉作り関連資料である。945～948は形割で、949は荒割の資料である。950はチャートの石織である。長さ2.8cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmを測る。

デを施し、口縁端部は面取りを施す。色調は浅黄橙色を呈する。

933は輸入磁器の青磁碗である。

高台径5.8cmを測り、軸には貫入が見られ、畳付け以内は露胎である。934は不明鉄製品である。

935は小刀と考えられる。

柄の部分には一部木質が残る。

936・937は不明鉄製品である。

基部の断面は936が方形で、937は円形である。

936は鉄釘の可能性ある。

938・939は石錘である。

938は砂岩製で、長さ6.6cmを測る。

第5表 出土遺物観察表

(凡例)

1. 出土遺物観察表は、土器、木製品、金属製品、土鏝、一部の石製品からなる。
 2. 出土遺物観察表については、壺形土器などの表記に際しては、壺・甕などと省略する。

2区 遺構出土土器式土器観察表

遺物 番号	出土層 No.	層位	材質	土器文様	地名・調査	出土数	品数	形状	色調	灰化率	備考
152	35	S P-272	陶鉢	口縁部4単位形文・中心に二重U字文 器下文 胴部：上下帯形区画文 胴部：4単位中心U字、帯下文	○	1	1	1m以下若干	灰褐色/灰黄褐色		口縁部帯形区画文 器身帯形区画文なし
153	35	S P-272	陶鉢	口縁部：6単位二重U字文、帯下文 胴部：上下帯形区画文	○	1	1	1m以下若干	赤褐色		口縁部帯形区画文 器身帯形区画文なし
154	35	S P-677	陶鉢	高橋形器土平帯形文による高橋文 帯位平帯形文にのみ区画	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		1区画区画帯位以下は無文
155	35	S P-515	陶鉢	帯位平帯形文にのみ区画	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部帯形区画文 器身帯形区画文なし
156	35	S P-508	土器	1(1) 字文・横引文 帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
157	35	S P-572	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
158	35	S P-514	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
159	35	S P-515	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
160	35	S P-515	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
161	36	S P-515	林	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
162	37	S K-02	瓦鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
163	37	S K-21	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
164	37	S D-04	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
165	37	S K-21	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
166	37	S X-202	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
167	37	S P-224	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
168	37	S P-230	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
170	37	S X-202	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
171	37	S P-385	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
172	37	S P-424	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ
173	37	S P-515	陶鉢	帯位平帯形文・三文字文	○	1	1	1m以下若干	灰黄褐色		口縁部以下無文 器：ナブ

174	37	SS P-514	深鉢	制成型	白磁中業	単位蓮文七尺	○					白磁中業	174と同じ一帯体・製成不良・割渡	67
175	37	SS P-514	深鉢	制成型	白磁中業	単位蓮文七尺	○				白磁中業	単位蓮文七尺	174と同じ一帯体・製成不良・割渡	68
176	37	SS P-514	深鉢	制成型	白磁中業	単位蓮文七尺	○				白磁中業	単位蓮文七尺	174と同じ一帯体・製成不良・割渡	69
177	37	SS P-514	深鉢	制成型	白磁中業	単位蓮文七尺	○				白磁中業	単位蓮文七尺	174と同じ一帯体・製成不良・割渡	70
178	37	SS P-514	深鉢	制成型	白磁中業	単位蓮文七尺	○				白磁中業	単位蓮文七尺	174と同じ一帯体・製成不良・割渡	71
179	37	SS P-514	深鉢	口縁面	白磁中業	ナブ	○				白磁中業	ナブ	174と同じ一帯体・製成不良	72
180	37	SS P-560	浅鉢	手摺	白磁中業	内外縁部隆線	○				白磁中業	内外縁部隆線	縁部隆線・外周抄線	73
181	37	SS P-572	深鉢	口縁面	白磁中業	口縁部隆線に垂帯形可し肥厚	○				白磁中業	口縁部隆線	縁部隆線・外周抄線	74
182	37	SS P-515	深鉢	口縁面	白磁中業	口縁部隆線に垂帯形可し肥厚	○				白磁中業	口縁部隆線	縁部隆線・外周抄線	75
183	37	SS P-572	深鉢	口縁面	白磁中業	口縁部隆線に垂帯形可し肥厚	○				白磁中業	口縁部隆線	縁部隆線・外周抄線	76
184	37	SS P-572	深鉢	口縁面	白磁中業	口縁部隆線に垂帯形可し肥厚	○				白磁中業	口縁部隆線	縁部隆線・外周抄線	77
185	37	SS P-572	深鉢	底面	白磁中業	底面	○				白磁中業	底面	底面	78
186	37	SS P-572	深鉢	口縁面	白磁中業	口縁部隆線	○				白磁中業	口縁部隆線	縁部隆線・外周抄線	79
187	37	SS P-574	深鉢	口縁面	白磁中業	口縁部隆線	○				白磁中業	口縁部隆線	縁部隆線・外周抄線	80
188	37	SS P-571	深鉢	口縁面	白磁中業	口縁部隆線	○				白磁中業	口縁部隆線	縁部隆線・外周抄線	81
189	37	SS P-560	浅鉢	口縁面	白磁中業	口縁部隆線	○				白磁中業	口縁部隆線	縁部隆線・外周抄線	82
190	37	SS P-612	深鉢	口縁面	白磁中業	口縁部隆線	○				白磁中業	口縁部隆線	縁部隆線・外周抄線	83
191	37	SS P-560	浅鉢	底面	白磁中業	底面	○				白磁中業	底面	底面	84
192	38	SS P-638	深鉢	底面	白磁中業	底面	○				白磁中業	底面	底面	85
193	38	SS P-477	深鉢	底面	白磁中業	底面	○				白磁中業	底面	底面	86
194	38	SS P-638	深鉢	底面	白磁中業	底面	○				白磁中業	底面	底面	87
195	38	SS P-638	深鉢	底面	白磁中業	底面	○				白磁中業	底面	底面	88
196	38	SS P-719	深鉢	口縁面	白磁中業	口縁部隆線	○				白磁中業	口縁部隆線	縁部隆線・外周抄線	89
197	38	SS P-718	深鉢	底面	白磁中業	底面	○				白磁中業	底面	底面	90

2区 包含層出土縄文式土器観察表

層別 No.	層別 No.	器種	形状 型式	時期	主な文様	地文・調整	粘土粒	黒炭粒	骨片	新土	色調	展化形	備考	式例 No.
198	38	N37	深鉢	白磁中業			○			新土	黒炭粒 骨片	展化形		41

3区 遺構出土縄文式土器観察表

層別 No.	層別 No.	器種	形状 型式	時期	主な文様	地文・調整	粘土粒	黒炭粒	骨片	新土	色調	展化形	備考	式例 No.
98	91	土師土器	深鉢	中業中業	口縁部・甲線部による連珠帯文 胴部：方文	単位蓮文七尺	○			新土	黒炭粒	展化形	単位蓮文七尺 口縁部隆線 口唇部隆線 口唇内底面	101
99	91	土師土器	深鉢	中業中業	口縁部・甲線部による連珠帯文 胴部：方文	単位蓮文七尺	○			新土	黒炭粒	展化形	単位蓮文七尺 口縁部隆線 口唇部隆線 口唇内底面	102
100	91	土師土器	深鉢	中業中業	口縁部・甲線部による連珠帯文 胴部：方文	単位蓮文七尺	○			新土	黒炭粒	展化形	単位蓮文七尺 口縁部隆線 口唇部隆線 口唇内底面	103
101	92	SS-N-29	鉢	白磁中業	底面文様	底面	○			新土	黒炭粒	展化形	底面	9
102	92	SS-N-29	鉢	白磁中業	底面文様	底面	○			新土	黒炭粒	展化形	底面	1

603	92	S.K-70	竪形式	口縁部	口縁部：多色横条半平縁起線文 肩内面：滑条半平縁起線文による直線文 腹面：上半縁起線文	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色/深褐色 φ 1～2mm多色横条色/深褐色	外心	山形袋取口縁、腹面内面：口縁部直線 縄文線文、腹上に斜条多色	25
604	92	S.K-67	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色			26
605	92	S.K-67	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色			85
606	92	S.P-1776	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色	外心	口縁部直線	29
607	92	土器土器上	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1～2mm多色横条色		内面白色磨面後赤彩	77
608	92	土器土器上	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1～2mm多色横条色		本體白色磨面後赤彩	78
609	92	土器土器上	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1～2mm多色横条色		腹、フチ	84
610	92	土器土器上	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色		腹上に斜条多色	2
611	92	S.D-28	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色			13
612	92	S.D-28	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色			12
613	92	S.D-36	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色			28
614	92	S.D-37	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色			30
615	92	S.D-39	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色			18
616	92	S.P-1286	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色		口縁部に接合部の段あり	11
617	92	S.D-41	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下多銅色	外心	口縁部直線縄文線文	3
618	92	S.P-173	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色/深褐色			7
619	92	S.P-1128	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下多銅色			62
620	92	S.P-1348	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下多銅色		口縁上部一帯体	6
621	92	S.P-1946	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色		口縁部内面斜条直線部に同部滑条	6
622	92	S.P-2112	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色			21
623	92	S.P-1962	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色			10
624	92	S.P-1455	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1～2mm多色横条色		底、フチ	32
625	92	S.P-1138	口縁部	口縁部	口縁部	斜位縄文R.L	○			φ 1mm以下青銅色/深褐色		底、側代縄 底面内面中央厚み付 側代中央部ナズ	73 74

3区 包含層出土縄文式土器類表

遺跡名	層位	器種	形状	時期	主な文様	地文・調整	粘土粒	器底	器身	器口	色調	肌化	備考	図録
626	93	F13	口	後期古	口縁部：花巻式内面直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	○			φ 1～2mm多色横条色	外周内面	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	101
627	93	E11	口	後期古	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	○			φ 1mm以下多銅色		口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	100
628	93	T-5	口	中期古	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	○			φ 1mm以下青銅色		口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	90
629	94	F10	口	中期古	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	○			φ 1mm以下多銅色		口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	84
630	94	F10	口	中期古	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	○			φ 1mm以下多銅色		口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	27
631	94	F14	口	中期古	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	○			φ 1mm以下多銅色		口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	17
632	94	G12	口	中期古	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	○			φ 1mm以下多銅色		口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	口縁部直線文 腹面：多色半平縁起線文	12

植物種別 No.	種名	部位	系統	結構	主成分	課題	動物系統	動物番号	動物	色調	形状	備考	植物種別 No.
603	34 T-3	葉体	樹形	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 淡灰褐色/淡褐色 61~2mm葉片 淡褐色/白色	31
604	34 B6	葉体	樹形	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	79
605	34 D9	葉体	樹形	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	4
606	34 F10	葉体	口線型	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	15
607	34 C9	葉体	口線型	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	8
608	34 C8	葉体	口線型	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	16
609	34 C7	葉体	口線型	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	20
610	34 C6	葉体	口線型	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	22
611	E9	葉体	樹形	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	60
612	34 B4	葉体	樹形	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	80
613	34 F11	葉体	樹形	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	25
614	34 B3	葉体	樹形	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	81
615	34 E9	葉体	口線型	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	14
616	34 D9	葉体	口線型	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	14
617	34 E9	葉体	樹形	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	80
618	34 E9	葉体	樹形	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	87
619	34 E9	葉体	樹形	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	33
620	34 F10	葉体	樹形	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	34
621	34 B+C6	葉体	樹形	直立	中国中葉	葉体平展葉狀	中国中葉	○	○	○	○	61mm以下葉片 葉体褐色 61~2mm葉片 葉体褐色	75

3区 遺構出土弥生土器観察表

植物種別 No.	種名	部位	系統	結構	主成分	課題	動物系統	動物番号	動物	色調	形状	備考	植物種別 No.
622	D46 白磁	蓋	口線型	覆	白陶・ 灰質	口線型	白陶・ 灰質	覆	口線型	覆	口線型	61~2mm多角 淡褐色 61~3mm多角 淡褐色	106
623	S P-1282	蓋	口線型	覆	白陶・ 灰質	口線型	白陶・ 灰質	覆	口線型	覆	口線型	61~2mm多角 淡褐色 61~3mm多角 淡褐色	116
624	S P-1282	蓋	口線型	覆	白陶・ 灰質	口線型	白陶・ 灰質	覆	口線型	覆	口線型	61~2mm多角 淡褐色 61~3mm多角 淡褐色	179
625	S P-1282	蓋	口線型	覆	白陶・ 灰質	口線型	白陶・ 灰質	覆	口線型	覆	口線型	61~2mm多角 淡褐色 61~3mm多角 淡褐色	111
626	S P-1282	蓋	口線型	覆	白陶・ 灰質	口線型	白陶・ 灰質	覆	口線型	覆	口線型	61~2mm多角 淡褐色 61~3mm多角 淡褐色	107
627	S P-1282	蓋	口線型	覆	白陶・ 灰質	口線型	白陶・ 灰質	覆	口線型	覆	口線型	61~2mm多角 淡褐色 61~3mm多角 淡褐色	112
628	S D-30	蓋	口線型	覆	白陶・ 灰質	口線型	白陶・ 灰質	覆	口線型	覆	口線型	61~2mm多角 淡褐色 61~3mm多角 淡褐色	111

3区 包含層出土土器観察表

植物種別 No.	種名	部位	系統	結構	主成分	課題	動物系統	動物番号	動物	色調	形状	備考	植物種別 No.
629	C3	蓋	口線型	覆	白陶・ 灰質	口線型	白陶・ 灰質	覆	口線型	覆	口線型	61~2mm多角 淡褐色 61~3mm多角 淡褐色	109
630	C5	蓋	口線型	覆	白陶・ 灰質	口線型	白陶・ 灰質	覆	口線型	覆	口線型	61~2mm多角 淡褐色 61~3mm多角 淡褐色	113
631	C4	蓋	口線型	覆	白陶・ 灰質	口線型	白陶・ 灰質	覆	口線型	覆	口線型	61~2mm多角 淡褐色 61~3mm多角 淡褐色	110
632	C4	蓋	口線型	覆	白陶・ 灰質	口線型	白陶・ 灰質	覆	口線型	覆	口線型	61~2mm多角 淡褐色 61~3mm多角 淡褐色	108
633	D3	蓋	口線型	覆	白陶・ 灰質	口線型	白陶・ 灰質	覆	口線型	覆	口線型	61~2mm多角 淡褐色 61~3mm多角 淡褐色	115

1区 出土土器観察表

() 表示は、() 内は付録

番号	器種	遺構	口径	底径	高さ	構成	胎土	色調	内装調査	外面調査	備考
1	赤土器 土	3H 竪	23.8	—	14.2	良好	2mm以下の黄白色・褐色の砂粒10%以下を含む	(9)に赤・褐色 (8)に赤・褐色	(1)～(8)横ナギ (9)ハケ	(1)～(8)横ナギ・縦切跡 (9)ハケ	6
2	赤土器 赤土器 赤土器	3H 0 3H 0 3H 0	23.4	—	13.2	良好	1mm以下の灰白色・褐色の砂粒10%以下を含む	(9)に赤・褐色 (9)に赤・褐色 (9)に赤・褐色	(9)横ナギ (9)横ナギ (9)横ナギ	(9)横ナギ (9)横ナギ (9)横ナギ	交差の可能性あり
5	土師器 赤土器	5P-339 5P-361	23.0	—	18.6	中々 不良	1mm以下の黄褐色の砂粒10%以下を含む	灰白色	(1)不明 (交差)横ミガキ (9)ケズリ	(1)不明 (交差)横ミガキ 内外面磨面	17
6	赤土器	5P-362	21.4	—	13.1	良好	1mm以下の褐色の砂粒10%以下を含む	赤・黄褐色	(1)～(8)横ナギ (9)ハケ	(1)～(8)横ナギ・縦切跡 (9)ハケ	3
7	赤土器	6H10P 5P-05	21.8	—	13.6	良好	10%以下の黄白色・褐色・黄褐色の砂粒	(9)黄褐色 (9)黄褐色	(1)横ナギ (9)ケズリ	(1)横ナギ (1)横ナギ (1)横ナギ	7
8	赤土器	5P-209	21.8	—	12.0	良好	10%以下の黄白色・褐色の砂粒	(9)黄褐色 (9)黄褐色	(9)ケズリ (9)ケズリ	(9)横ナギ (9)横ナギ	4
9	赤土器	5K-34	19.8	—	13.4	良好	2mm以下の黄白色・黄褐色の砂粒10%以下を含む	(9)に赤・黄褐色 (9)に赤・黄褐色	(1)～(8)横ナギ (9)ケズリ	(1)～(8)横ナギ (9)ケズリ	8
10	赤土器	5P-05	—	1.5	17.2	良好	2mm以下の黄白色・褐色の砂粒10%以下を含む	(9)に赤・黄褐色 (9)に赤・黄褐色	(8)ケズリ (9)ケズリ	(8)～(9)横ナギ (9)ケズリ	12
11	赤土器	5P-200	21.4	—	13.3	良好	2mm以下の灰白色・黄褐色の砂粒10%以下を含む	(9)に赤・褐色 (9)に赤・褐色	(1)～(8)横ナギ (9)ケズリ	(1)～(8)横ナギ (9)ケズリ	5
12	赤土器	5P-05 赤土上	20.4	—	7.3	良好	10%以下の黄白色・褐色の砂粒	(9)に赤・褐色 (9)に赤・褐色	(1)～(8)横ナギ (9)ケズリ	(1)～(8)横ナギ (9)ケズリ	15
13	赤土器	5P-05 赤土上	—	2.4	15.0	中々 不良	4mm以下の黄白色・褐色の砂粒10%以下を含む	(9)黄褐色 (8)に赤・黄褐色	不明	不明	地胎中に黒部穿孔
14	赤土器	5P-27	—	—	14.3	良好	1mm以下の灰白色・褐色・黄褐色の砂粒	(9)黄褐色 (9)黄褐色	不明	不明	
16	赤土器	2I-33X 赤土上	21.4	—	14.3	良好	2mm以下の灰白色・褐色・黄褐色の砂粒	(9)に赤・黄褐色 (9)に赤・黄褐色	(1)横ナギ (9)ケズリ	(1)横ナギ (9)ケズリ (9)横ナギ	2
18	赤土器	1P5 包	21.4	—	15.3	良好	2mm以下の黄褐色・褐色・赤色の砂粒10%以下を含む	(9)に赤・黄褐色 (9)黄褐色	(1)横ナギ (9)ケズリ	(1)横ナギ (9)ケズリ (9)横ナギ	1
17	赤土器	1P5 包	18.6	—	14.0	良好	4mm以下の褐色・黄褐色・黄褐色・灰白色の砂粒10%以下を含む	(9)に赤・褐色 (9)に赤・褐色 (9)に赤・黄褐色	(1)横ナギ (9)ケズリ (9)ケズリ	(1)～(8)ミガキ (9)ケズリ	14
19	土師器	5P-05 土層 14G 5P-05 土層 13+14G 11+16G包	21.8	2.9	12.6	良好	1～2mm以下の灰白色の砂粒10%以下を含む	赤・黄褐色	(1)～(8)ハケ (9)黄褐色	(9)～(8)ハケ	84
20	土師器	3K 23	21.2	—	15.3	良好	1mm以下の明赤褐色の砂粒10%以下を含む	褐色	(1)横ナギ ハケ	(1)横ナギ ハケ	71
21	土師器	5P-05 土層 14G	21.4	—	2.4	良好	1mm以下の暗灰色の砂粒10%以下を含む	赤色	横ナギ	横ナギ	78
22	土師器	5P-05 土層 14G	21.4	—	2.4	良好	1mm以下の暗灰色の砂粒10%以下を含む	褐色	横ナギ	横ナギ	76
23	土師器	5P-05 土層 14G	21.4	—	2.4	良好	1mm以下の暗灰色の砂粒10%以下を含む	褐色	横ナギ	横ナギ	79
24	土師器	5P-05 土層 14G	21.4	—	2.4	良好	1mm以下の暗灰色の砂粒10%以下を含む	褐色	横ナギ	横ナギ	73
25	土師器	5P-05 土層 14G	21.4	—	2.4	良好	2mm以下の灰白色・黄褐色・黄褐色の砂粒	赤・黄褐色	横ナギ	横ナギ	10
26	土師器	5K-03	—	0.9	21.3	良好	1mm以下の赤褐色の砂粒10%以下を含む	赤・黄褐色	(1)～(8)横ナギ (9)ミガキ	(1)～(8)横ナギ (9)ミガキ	11
27	土師器	5P-05	—	—	—	中々 不良	1mm以下の灰白色・黄褐色・黄褐色・赤色の砂粒10%以下を含む	赤・黄褐色	(9)横ナギ	(9)横ナギ	80
28	土師器	5P-05	12.2	—	2.6	良好	1mm以下の赤褐色の砂粒10%以下を含む	褐色	横ナギ	横ナギ	33
29	土師器	5P-05 土層 22G	21.3	—	16.2	良好	1mm以下の灰白色・赤色の砂粒10%以下を含む	赤色 褐色	(1)～(8)横ナギ (交差)内面直切ナギ	横ナギ	84

30	保護部 底層部	50-05 145 黒層	—	—	11.2	劣等 不良	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	(M)黒層ナゾ 7.0以下黒層部圧入	(M)黒層ナゾ 黒層ナゾ	長層二層二方連 二方連	56
31	底層部 底層部	50-05 上層 205	—	(12.2)	15.2	良好	—	灰色	(M)黒層ナゾ (M)黒層ナゾ	(M)黒層ナゾ (M)黒層ナゾ	—	55
32	底層部 底層部	50-05 140	—	—	(5.4)	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	灰色	(M)黒層ナゾ (M)黒層ナゾ	(M)黒層ナゾ (M)黒層ナゾ	—	57
33	底層部 底層部	50-05 黒色土 50-05 黒色土 156 156 型	(11.4)	—	4.5	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	灰色	(M)黒層ナゾ (M)黒層ナゾ	(M)黒層ナゾ (M)黒層ナゾ	仏部?	69
34	底層部 底層部	50-05 150	(20.4)	—	3.3	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	灰白色	黒層ナゾ	黒層ナゾ	仏部?	52
35	底層部 底層部	58-09-0	14.0	—	11.3	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	灰白色	黒層ナゾ	黒層ナゾ	内層部(黒) 仏部?	135
36	底層部 底層部	50-05 黒色土	(12.3)	—	1.6	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	(M)黒層ナゾ	(M)黒層ナゾ	(M)黒層ナゾ	—	68
37	底層部 底層部	14-156 型	(12.0)	(8.1)	3.9	良好	2mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	(M)黒層ナゾ	(M)黒層ナゾ	(M)黒層ナゾ	—	28
38	底層部 底層部	50-05 黒色土 50-05 黒色土	13.0	7.8	3.7	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	黒褐色	黒層ナゾ	黒層ナゾ	外層部(黒)・使川部(黒)	30
39	底層部 底層部	50-05 3	(12.4)	(6.7)	4.6	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	灰白色	黒層ナゾ	黒層ナゾ	外層部(黒)・使川部(黒)	29
40	底層部 底層部	50-05 103	12.6	7.7	3.8	良好	2mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	灰色	黒層ナゾ	黒層ナゾ	外層部(黒)・使川部(黒)	27
41	底層部 底層部	50-05 1	(14.0)	(12.2)	5.7	良好	2mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	灰色	黒層ナゾ	黒層ナゾ	外層部(黒)・使川部(黒)	30
42	底層部 底層部	58-36	16.0	10.0	5.1	良好	1.5mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	灰色	黒層ナゾ	黒層ナゾ	外層部(黒)・使川部(黒)	34
43	底層部 底層部	58-22	(16.4)	—	(4.5)	劣等 不良	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	灰白色	(M)黒層ナゾ (M)黒層ナゾ	(M)黒層ナゾ (M)黒層ナゾ	石部 内層部(黒)・使川部(黒)	59
44	底層部 底層部	50-122 14-205 跡土	—	—	(16.9)	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	灰色	カキダ	カキダ	—	62
45	底層部 底層部	58-15	—	(8.0)	11.2	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	灰白色	(M)黒層ナゾ	(M)黒層ナゾ	—	50
46	土砂部 土砂部	14-206 跡土	(11.2)	—	(4.2)	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	(M)黒層ナゾ (M)黒層ナゾ	不明	黒層ナゾ	使川口縁	75
47	土砂部 土砂部	120 黒色土	(15.4)	—	(4.4)	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	(M)黒層ナゾ (M)黒層ナゾ	不明	黒層ナゾ	使川口縁	74
48	土砂部 土砂部	156 包	(13.4)	—	(2.8)	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	暗色	黒層ナゾ	黒層ナゾ	使川口縁	77
49	土砂部 土砂部	196 包	(17.4)	—	(5.4)	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	暗色	黒層ナゾ	黒層ナゾ	外層部(黒)	70
50	土砂部 土砂部	360 一箱	(13.4)	(7.4)	3.8	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	暗色	黒層ナゾ	黒層ナゾ	—	69
51	土砂部 土砂部	350 一箱	—	(6.6)	—	良好	1~2mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	暗色	(M)黒層ナゾ (M)黒層ナゾ	(M)黒層ナゾ (M)黒層ナゾ	内外部(黒)付	83
52	土砂部 土砂部	350 一箱	—	7.0	(2.0)	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	暗色	不明	不明	—	65
53	土砂部 土砂部	14-206 跡土	—	(6.2)	11.4	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	暗色	不明	不明	—	83
54	土砂部 土砂部	14-206 跡土	—	6.4	11.4	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	暗色	不明	不明	—	64
55	土砂部 土砂部	350 一箱	—	5.2	(2.5)	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	暗色	(M)黒層ナゾ	(M)黒層ナゾ	包と同梱体	66
56	土砂部 土砂部	320 一箱	—	4.6	11.4	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	暗色	(M)黒層ナゾ	(M)黒層ナゾ	黒色土部(内)	67
57	土砂部 土砂部	350 一箱	—	4.9	(2.2)	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	暗色	(M)黒層ナゾ	(M)黒層ナゾ	底部(黒)	68
58	土砂部 土砂部	跡土 45	(9.9)	—	(2.4)	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	暗色	黒層ナゾ	黒層ナゾ	底部(黒)	51
59	土砂部 土砂部	196 包	(10.7)	(5.2)	2.9	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	(M)黒層ナゾ (M)黒層ナゾ	黒層ナゾ	黒層ナゾ	自然堆積物	66
60	土砂部 土砂部	20-21-220 包	(11.1)	(4.0)	3.4	良好	1mm以下の灰白色・茶褐色・黒色の粉粒が5%以上多く含む	灰白色	黒層ナゾ	黒層ナゾ	底部→9号身有り	47

番号	品類	遺構	口積	底径	高さ	構成	跡土	色調	内装調査	外装調査	備考	実測 No.
131	青磁甕	15C 包	—	5.3	24.7	良好	底 3mm以下の灰白色・灰赤・黒褐色・赤褐色の砂状の跡土が下層に多く含む	(A) 灰白色 (B) 灰赤褐色	黒釉	(灰赤) 黒釉 (灰赤) 黒釉		114
132	青磁甕	14-20C 跡土	13.6	7.4	24.1	良好	底 3mm以下の灰赤・灰赤・黒褐色・赤褐色の砂状の跡土が下層に多く含む	(A) 灰赤褐色 (B) 灰赤褐色	黒釉	不明		112
133	白磁甕	14-20C 跡土	—	4.6	14.7	良好	底 3mm以下の灰白色・灰赤・黒褐色・赤褐色の砂状の跡土が下層に多く含む	(A) 灰白色 (B) 灰赤褐色	黒釉 砂目跡み	(灰赤) 黒釉 (灰赤) 黒釉	外部に遺跡あり	115
134	青磁甕	19C 包	—	—	—	良好	底 3mm以下の灰白色・灰赤・黒褐色・赤褐色の砂状の跡土が下層に多く含む	(A) 灰白色 (B) 灰赤褐色	黒釉	黒釉	外部に遺跡あり	121
135	青磁甕	9C	—	—	—	良好	底 3mm以下の灰白色・灰赤・黒褐色・赤褐色の砂状の跡土が下層に多く含む	(A) 灰白色 (B) 灰赤褐色	黒釉	(白) 黒釉 (白) 黒釉	外部に遺跡あり	118
137	灰陶甕	14-20C 跡土	—	—	—	良好	3mm以下の灰白色・灰赤・黒褐色・赤褐色の砂状の跡土が下層に多く含む	(A) 灰白色 (B) 灰赤褐色	黒釉ナズ	(白) 黒釉 (白) 黒釉	内部に遺跡あり	132
139	灰陶甕	跡土一部	—	(10.0)	(24.1)	良好	底 3mm以下の灰白色・灰赤・黒褐色・赤褐色の砂状の跡土が下層に多く含む	(A) 灰白色 (B) 灰赤褐色	黒釉ナズ	(白) 黒釉 (白) 黒釉	黒釉ナズ	131
139	灰陶甕	49-41C 一括	(9.5)	4.2	6.6	良好	底 3mm以下の灰白色・灰赤・黒褐色・赤褐色の砂状の跡土が下層に多く含む	(A) 灰白色 (B) 灰赤褐色	黒釉	(白) 黒釉 (白) 黒釉		124
140	灰陶甕	62C 一括	(11.4)	4.2	3.4	良好	底 3mm以下の灰白色・灰赤・黒褐色・赤褐色の砂状の跡土が下層に多く含む	(A) 灰白色 (B) 灰赤褐色	黒釉	(白) 黒釉 (白) 黒釉		122
141	灰陶甕	45-48C 一括	—	4.1	(24.7)	良好	底 3mm以下の灰白色・灰赤・黒褐色・赤褐色の砂状の跡土が下層に多く含む	(A) 灰白色 (B) 灰赤褐色	黒釉	(白) 黒釉 (白) 黒釉		123

2区 出土土器観察表

() 復元値, [] 推定値

220	土砂層	SK-21 P-29 SK-21 1K SK-22	13.2	—	〔7.2〕	良好	2mm以下の灰褐色、赤褐色、灰白色、灰色、ガラス質の砂粒が10%以上多く含む	こぶみ褐色	(10)〜(16)礫ナズ (16)ケズリ	(10)〜(16)礫ナズ (16)ハナ	外周層付着	114
221	土砂層	SK-21 1K SK-21 P-9 SK-21 1K SK-21 P-7 SK-21	03.3D	—	〔6.5〕	良好	2mm以下の灰褐色、赤褐色、灰白色、灰色、ガラス質の砂粒が10%以上多く含む	褐色	不明	不明		115
222	土砂層	SK-21 P-9 SK-21 1K SK-21	18.0	—	〔4.6〕	良好	2mm以下の灰褐色、赤褐色、灰白色、灰色、ガラス質の砂粒が10%以上多く含む	赤褐色	不明	不明	層状が強い	116
223	土砂層	SK-21 SK-22	021.0	—	〔5.6〕	良好	2mm以下の灰褐色、赤褐色、灰白色、赤褐色の砂粒が10%以上含む	こぶみ褐色	礫ナズ 一部不明	礫ナズ 一部不明		304
224	土砂層	SK-21 SK-22	018.8D	—	〔5.5〕	良好	1〜2mm以下の白色、赤褐色、ガラス質の砂粒が10%以上含む	こぶみ黄褐色	(11)ナズ (16)ケズリ	(11)ナズ (16)ハナ	段状口縁	148
225	土砂層	SK-21 1K SK-21 P-7	017.4D	—	〔3.4〕	良好	2mm以下の白色、赤褐色、赤褐色の砂粒が10%以上含む	(10)に赤褐色 (16)に赤褐色	不明	不明	段状口縁	141
226	土砂層	SK-21 P-17 SK-21	020.0	—	〔16.2〕	良好	2mm以下の褐色、灰白色、灰色、ガラス質の砂粒が10%以上多く含む	赤赤褐色	(11)〜(16)礫ナズ (16)ケズリ	(11)〜(16)礫ナズ (16)ハナ		117
227	土砂層	SK-21 SK-22	033.0	—	〔11.6〕	良好	1mm以下の褐色、灰白色、赤褐色の砂粒が10%以上含む	こぶみ褐色	(11)礫ナズ (16)ケズリ	(11)礫ナズ (16)ハナ	段状口縁	221
228	土砂層	SK-21 P-36 SK-21	017.0D	—	〔4.6〕	良好	2mm以下の白色、赤褐色、赤褐色の砂粒が10%以上含む	こぶみ黄褐色	(11)〜(16)礫ナズ (16)ケズリ	(11)礫ナズ (16)ハナ	段状口縁	303
229	土砂層	SK-21 1K SK-21 P-33 SK-21 1K SK-22	019.8D	—	〔5.3〕	良好	2mm以下の白色、赤褐色、赤褐色の砂粒が10%以上含む	こぶみ褐色	(11)〜(16)礫ナズ (16)ケズリ	(11)〜(16)礫ナズ (16)ハナ	段状口縁	302
230	土砂層	SK-21 1K SK-21 1K SK-21 1K	020.8	—	〔7.4〕	良好	2mm以下の灰褐色、灰白色、灰色、赤褐色、ガラス質の砂粒が10%以上多く含む	褐色	(11)〜(16)礫ナズ (16)ケズリ	(11)〜(16)礫ナズ (16)ハナ	段状口縁	118
231	土砂層	SK-21 P-12 SK-21	017.4D	—	〔16.1〕	良好	2mm以下の灰色、灰白色、赤褐色の砂粒が10%以上多く含む	褐色	(11)〜(16)礫ナズ (16)ケズリ	(11)〜(16)礫ナズ (16)ハナ	段状口縁	76
232	土砂層	SK-21 P-31 SK-21 P-33 SK-21 P-33 SK-22	018.0D	—	〔11.4〕	良好	1〜2mm以下の白色、灰褐色、赤褐色、ガラス質の砂粒が10%以上含む	こぶみ黄褐色	(10)ナズ (16)ケズリ	(10)ナズ (16)ハナ	細部から二一節層付着、段状口縁	106
233	土砂層	SK-21 3K SK-21	028.4D	—	〔7.3〕	良好	2mm以下の灰褐色、赤褐色、赤褐色の砂粒が10%以上含む	褐色	礫ナズ (16)ハナ	(16)礫ナズ (16)ハナ		361
234	土砂層	SK-21 P-13 SK-21 1K SK-22	31.0	4.3	16.5	良好	1〜2mm以下の灰褐色、灰白色、ガラス質の砂粒が10%以上含む	赤黄褐色	ハナ	ハナ		73
235	土砂層	SK-21 SK-22	033.8D	—	14.7	良好	2mm以下の褐色、灰白色、赤褐色、ガラス質の砂粒が10%以上含む	こぶみ黄褐色	(11)〜(16)礫ナズ (16)ケズリ	(11)礫ナズ (16)ハナ		134
236	土砂層	SK-21 SK-21 P-13 SK-21 P-10	—	0.4	〔6.5〕	良好	1〜2mm以下の白色、赤褐色、赤褐色、ガラス質の砂粒が10%以上含む	(10)黄褐色 (16)に赤褐色	礫ナズのちナズ	礫ナズ		171
237	砂層	SK-21 3K SK-21	09.4D	—	〔3.3〕	良好	2mm以下の灰褐色、赤褐色、赤褐色の砂粒が10%以上含む	(10)灰褐色 (16)灰褐色	(11)〜(16)礫ナズ (16)ケズリ	(11)〜(16)礫ナズ (16)ハナ	右側面?	190
238	砂層	SK-20 SK-21	010.2D	—	3.1	良好	2mm以下の灰褐色、赤褐色、赤褐色の砂粒が10%以上含む	灰色	礫ナズ	礫ナズ		65
239	砂層	SK-22 P-21 SK-21	09.8D	—	3.1	良好	2mm以下の灰褐色、赤褐色、赤褐色の砂粒が10%以上含む	灰色	礫ナズ	礫ナズ		191
240	砂層	SK-20 SK-21	10.6	—	3.4	良好	1〜2mm以下の灰褐色、赤褐色、赤褐色の砂粒が10%以上含む	緑灰色	礫ナズ	礫ナズ		196
241	砂層	SK-21 1K SK-21	10.3	—	3.1	良好	2mm以下の褐色、灰白色、灰色、赤褐色の砂粒が10%以上多く含む	灰白色	礫ナズ	礫ナズ		5
242	砂層	SK-21 P-96 SK-21	09.8D	—	3.2	良好	2mm以下の灰褐色、赤褐色、赤褐色の砂粒が10%以上含む	黄褐色	礫ナズ	礫ナズ		128
243	砂層	SK-21 3K SK-22 SK-22 P-22	9.8	—	3.6	良好	1〜2mm以下の灰褐色、赤褐色、赤褐色の砂粒が10%以上含む	灰色	礫ナズ	礫ナズ		67
244	砂層	SK-22 3K SK-22 P-22	11.0	—	3.8	良好	2mm以下の灰褐色、赤褐色、赤褐色の砂粒が10%以上含む	(10)黄褐色 (16)黄褐色	礫ナズ	礫ナズ		196

245	原形部 直上1区	3K-21 3K	(9.8)	(7.0)	4.0	良好	1mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む 下含む	(M)灰色 (N)オリーブ/黒色	同色ナツ	同色ナツ (O)→ラウリ層ナツ	同色ナツ (O)→ラウリ層ナツ	96
246	原形部 直上1区 HFG	3K-21 4K	(12.0)	—	(24.1)	良好	1mm以下の白色、黒色、灰色の砂粒10%以下含む	灰色	同色ナツ	同色ナツ	同色ナツ	301
247	原形部 直上1区	3K-21 1K	(10.2)	5.4	3.2	良好	1mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰色	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	59
248	原形部 直上1区	3K-22 P-23	(10.6)	(6.0)	3.5	良好	1mm以下の灰白色、灰色、ガラス質の砂粒10%以下含む	灰色	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	108
249	原形部 直上1区 HFG	3K-21 P-15 3K-21 P-20	(10.8)	(6.0)	3.5	良好	2mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰色	同色ナツ	同色ナツ	同色ナツ	87
250	原形部 直上1区 HFG	3K-21 P-17 3K-21	8.8	6.0	3.4	良好	1mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰色	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	60
251	原形部 直上1区 HFG	3K-21 P-25	13.6	—	5.1	良好	1mm以下の灰白色、灰色の砂粒10%以下含む	灰色	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	173
252	原形部 直上1区	3K-21	(10.0)	(3.0)	(3.0)	良好	1mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰色	同色ナツ	同色ナツ	同色ナツ	88
253	原形部 直上1区 HFG	3K-21 1K 3K-21 1K	(13.0)	—	(4.5)	良好	1mm以下の灰白色、赤褐色、黒褐色の砂粒10%以下含む	(M)灰色 (N)用灰色	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	同色ナツ (O)→同色ナツ (N)不定方向ナツ	48
254	原形部 直上1区 HFG	3K-21 1K 3K-21 P-05	(11.8)	—	(4.2)	不良	10%以下含む	暗灰色	不明	不明	不明	131
255	原形部 直上1区 HFG	3K-21 3K	—	(11.0)	(6.0)	良好	1mm以下の灰白色、自然の砂粒10%以下含む	緑灰色	同色ナツ	同色ナツ	同色ナツ	199
256	原形部 直上1区 HFG	3K-21 1K 3K-21 1K	—	(9.1)	(7.0)	良好	1~2mm以下の灰白色、灰色の砂粒10%以下含む	暗灰色	同色ナツ	同色ナツ	同色ナツ	200
257	原形部 直上1区 HFG	3K-21 1K 3K-21 1K 3K-21 1K	—	8.0	(4.0)	良好	1mm以下の灰白色、灰色の砂粒10%以下含む	灰色	同色ナツ	同色ナツ	同色ナツ	51
258	原形部 直上1区 HFG	3K-21 3K	(7.8)	—	(9.6)	良好	1mm以下の灰白色、灰色の砂粒10%以下含む	灰色	同色ナツ	同色ナツ	同色ナツ	205
259	原形部 直上1区 HFG	3K-21 1K 3K-21 P-07	18.2	—	(27.7)	不良	5mm以下の小片を主とし含む	灰色	同心文	同心文	ハツ タタキ	102
261	不明	3K-21 P-07	(8.0)	—	—	良好	1~2 以下の赤褐色の砂粒10%以上含む	灰白色	同心文	同心文	ハツ タタキ	204
262	原形部 直上1区	3K-22 P-28	—	11.0	(10.5)	不良	1mm以下の白色、褐色、ガラス質の砂粒10%以上含む	灰白色	同心文	同心文	タタキ	219
263	原形部 直上1区	3K-22 P-29	(13.1)	7.9	2.1	不良	1mm以下の灰白色、褐色、ガラス質の砂粒10%以上含む	灰白色	同心文	同心文	タタキ	219
264	原形部 直上1区	3K-23 P-27	—	(12.0)	(5.3)	良好	1mm以下の灰白色、灰白色の砂粒10%以下含む	(M)灰色 (N)用灰色	同色ナツ	同色ナツ	同色ナツ	309
265	原形部 直上1区	3K-23	(13.0)	—	(6.7)	良好	1~2mm以下の灰色、褐色、ガラス質の砂粒10%以下含む	暗灰色	同心文	同心文	不明	333
266	原形部 直上1区	3K-23 P-30	(16.0)	—	(5.3)	良好	1mm以下の灰白色、赤褐色、灰白色、ガラス質の砂粒10%以下含む	灰白色	同心文	同心文	同心文	109
267	原形部 直上1区	3K-29	(16.0)	—	(3.8)	良好	1mm以下の灰白色、赤褐色、黒褐色の砂粒10%以下含む	(M)灰色 (N)用灰色	同心文	同心文	同心文	307
268	原形部 直上1区	3K-29	(20.8)	—	(3.7)	良好	2mm以下の灰白色、灰白色の砂粒10%以下含む	暗色	同心文	同心文	同心文	330
269	原形部 直上1区	3K-29 3K-29	(20.0)	—	(21.2)	不良	5mm以下の灰白色、灰色、ガラス質、赤褐色の砂粒10%以上含む	(M)用灰色 (N)用暗灰色	同心文	同心文	同心文	145
270	原形部 直上1区	3K-30 P-01	9.8	6.7	3.2	良好	1mm以下の灰白色、灰色の砂粒10%以下含む	灰色	同心文	同心文	同心文	189
271	原形部 直上1区	3K-31 P-10 3K-31	(14.0)	(3.0)	(3.0)	良好	2mm以下の灰色、灰白色、黒褐色、赤褐色、ガラス質の砂粒10%以上含む	(M)用灰色 (N)用暗灰色	同心文	同心文	同心文	77
272	原形部 直上1区	3K-31 P-05	(18.0)	—	(4.7)	良好	5mm以下の小片を主とし含む	(M)用灰色 (N)用暗灰色	同心文	同心文	同心文	326

273	上野原 155号	SK-31 裏付込	(17.40)	—	(14.5)	良好	1mm以下の黒褐色、青褐色、赤褐色の粉粒10%以上 10%以下多量存在、褐色色の粉粒10%以上 多く含む	灰白色 (19)に赤、褐色 (9)に赤、黄褐色	(1)不明 (15)赤、黄のハシ	外面少し磨行番	329
274	原田 所付	SK-31	(20.40)	—	(4.5)	良好	1mm以下の黒褐色、褐色色の粉粒10%以上 多く含む	灰白色 (19)に赤、褐色 (9)に赤、黄褐色	横ナズ	面状白線	133
276	原田 所付	SK-31 P-01	11.1	—	5.9	良好	1mm以下の灰白色、褐色、ガラス質の粉粒10%以上 多く含む	灰白色 (19)オリーブ褐色 (9)灰褐色	横ナズ	(1)不明 (15)赤、黄のハシ	107
277	原田 所付	SK-31	10.0	(5.0)	3.2	良好	1mm以下の灰白色、褐色、ガラス質の粉粒10%以上 多く含む	灰白色 (19)灰褐色 (9)灰褐色	横ナズ	(1)不明 (15)赤、黄のハシ	187
278	原田 所付	SK-31 P-02	7.0	—	(2.5)	良好	1mm以下の灰白色、褐色、褐色の粉粒10%以上 多く含む	灰白色 (19)灰褐色 (9)灰褐色	横ナズ	(1)不明 (15)赤、黄のハシ	358
279	原田 所付	SK-31 P-01	16.9	—	4.4	良好	1mm以下の灰白色、褐色、褐色の粉粒10%以上 多く含む	灰白色 (19)オリーブ褐色 (9)灰褐色	(1)不明 (15)赤、黄のハシ	右面磨行	91
280	原田 所付	SK-31 付込	(13.40)	—	(14.3)	良好	1mm以下の灰白色、褐色、褐色の粉粒10%以上 多く含む	灰白色 (19)灰褐色 (9)灰褐色	横ナズ	右面磨行	382
281	原田 所付	SK-31	(15.80)	—	(3.0)	良好	1mm以下の灰白色、褐色、褐色の粉粒10%以上 多く含む	灰白色 (19)灰褐色 (9)灰褐色	横ナズ	右面磨行	360
282	原田 所付	SK-31 付込	—	(6.9)	(3.4)	良好	1mm以下の灰白色、褐色、褐色の粉粒10%以上 多く含む	灰白色 (19)不明 (9)不明	横ナズ	不明	354
283	原田 所付	SK-31 P-13	13.1	7.2	3.5	不良	1mm以下の灰白色、褐色、ガラス質の粉粒 10%以下含む	灰白色	不明	(1)不明 (15)不明	100
284	原田 所付	SK-31 P-08	14.0	10.7	5.8	良好	1mm以下の灰白色、褐色、褐色の粉粒10%以上 多く含む	灰白色	横ナズ	右面磨行	8
285	原田 所付	SK-31 No. 4 P-27	13.3	6.0	4.5	不良	1mm以下の灰白色、褐色、褐色の粉粒 10%以下含む	灰白色	(1)不明 (15)不明	面状へり記号あり	37
286	原田 所付	SK-31 No. 3 P-28 SK-31 No. 30 P-27	25.6	—	(10.2)	良好	1mm以下の黒褐色、灰白色、褐色の粉粒 10%以下含む	(19)灰白色 (9)オリーブ褐色 (9)灰褐色	(1)不明 (15)不明	横面部手3方向	228
287	原田 所付	SK-32	(10.0)	—	3.2	良好	1mm以下の灰白色、褐色、ガラス質の粉粒 10%以下含む	(19)灰褐色 (9)オリーブ褐色	(1)不明 (15)不明	不明	192
288	原田 所付	SK-32	11.9	—	(2.2)	良好	1mm以下の灰白色、褐色、褐色、ガラス質 の粉粒10%以上多く含む	灰白色	横ナズ	右面磨行	174
289	原田 所付	SK-32	—	—	(1.8)	不良	1mm以下の灰白色、褐色、ガラス質の粉粒 10%以下含む	(19)灰褐色 (9)不明	横ナズ	不明	185
290	原田 所付	SK-32	(6.20)	—	(11.1)	良好	1mm以下の灰白色、オリーブ褐色の粉粒 10%以下含む	(19)灰褐色 (9)不明	横ナズ	(1)不明 (15)不明	306
291	原田 所付	SK-01 2溝	18.7	4.0	—	良好	1mm以下の灰白色、褐色色の粉粒10%以上 多く含む	(19)灰褐色 (9)に赤、褐色	横ナズ	(1)不明 (15)不明	107
292	原田 所付	SK-01 2溝	15.1	—	(10.5)	良好	1mm以下の灰白色、褐色色の粉粒10%以上 多く含む	(19)灰褐色 (9)に赤、褐色	横ナズ	外延磨行番	71
293	原田 所付	SK-01 2溝	(16.0)	—	(14.5)	良好	1mm以下の灰白色、褐色、褐色、赤褐色、赤褐色 の粉粒10%以上多く含む	(19)に赤、褐色 (9)不明	横ナズ	(1)不明 (15)不明	75
294	原田 所付	SK-01 1溝	12.8	—	(4.4)	良好	1mm以下の灰白色、褐色、ガラス質の粉粒10%以上 多く含む	(19)灰褐色 (9)不明	横ナズ	(1)不明 (15)不明	279
295	原田 所付	SK-01	12.5	—	(8.6)	良好	1mm以下の灰白色、褐色色の粉粒10%以上 多く含む	(19)に赤、褐色 (9)不明	横ナズ	(1)不明 (15)不明	136
296	原田 所付	SK-01 2溝	—	2.2	(18.8)	不良	1mm以下の灰白色、褐色、褐色色の粉粒 10%以上多く含む	(19)に赤、褐色 (9)不明	横ナズ	外延一部磨行番	142

346	原形語 対訳	SP-01 1歳	(10.0)	—	3.0	良好	2mm以下の灰白色・白色の粉粒の90%以下含む	灰色	出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ナゾ (3) 出穂ヘタナゾ	右出穂?	24
347	原形語 対訳	SP-01 1歳	10.2	—	3.1	良好	2mm以下の灰褐色の粉粒の90%以下含む	灰色	出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ヘタナゾ	右出穂	23
348	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	14.7	—	5.7	良好	1mm以下の灰白色・白色の粉粒の90%以下含む	細灰色	はちまきもし出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ナゾ		33
349	原形語 対訳	SP-01 1歳	(6.8)	(6.8)	3.3	良好	1mm以下の灰白色の粉粒の90%以下含む	灰色	(1)~(6) 出穂ナゾ (7) 出穂ナゾ	(1)~(6) 出穂ナゾ (7) 出穂ナゾ		94
350	原形語 対訳	SP-01	9.8	—	3.8	良好	1mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の粉粒の90%以上多く含む	灰色	(1)~(6) 出穂ナゾ (7) 出穂ナゾ	(1)~(6) 出穂ナゾ (7) 出穂ナゾ		140
351	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	(11.3)	8.2	3.5	良好	2mm以下のガラス質・灰色・白色の粉粒の90%以上多く含む	灰色	出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ヘタナゾ	左出穂	26
352	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	(13.9)	(8.2)	9.1	良好	1~2mm以下の灰白色・白色の粉粒の90%以下含む	細灰色	出穂ナゾ	出穂ナゾ	胴部一段通 (4.8)	201
353	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	(14.0)	—	(6.8)	良好	2mm以下の灰白色・灰色・黄褐色の粉粒の90%以上多く含む	灰色	出穂ナゾ	(1)~(6) 出穂ナゾ (7) 出穂ヘタナゾ		60
354	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	(14.0)	—	(4.2)	良好	1mm以下の灰白色・黄褐色の粉粒の90%以上多く含む	(1) 細灰色 (2) 黄褐色	出穂ナゾ	出穂ナゾ		345
355	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	(11.4)	(11.0)	(14.0)	良好	2mm以下の白色・灰色の粉粒の90%以下含む	明緑灰色	出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ナゾ	長節二段三方通	155
356	原形語 対訳	SP-01	—	1.6	(6.1)	良好	2mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の粉粒の90%以下含む	(1) 灰白色 (2) 灰色	出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ナゾ (3) 出穂ナゾ (4) 出穂ナゾ	長節1本 長節1本 長節1本 長節1本	256
357	原形語 対訳	SP-01 SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	—	—	(5.7)	良好	1mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の粉粒の90%以下含む	(1) 灰白色 (2) 灰色	出穂ナゾ	出穂ナゾ	出穂ナゾ	257
358	原形語 対訳	SP-01 1歳	(11.4)	—	3.0	良好	1mm以下の灰白色の粉粒の90%以下含む	(1) 灰色 (2) 黄褐色	出穂ナゾ	(1)~(6) 出穂ナゾ (7) 出穂ヘタナゾ	右出穂	47
359	原形語 対訳	SP-01 灰色 SP-01 灰色 SP-01 灰色	(15.0)	—	(2.2)	良好	1mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の粉粒の90%以上多く含む	灰色	出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ナゾ (3) 出穂ナゾ	右出穂	251
360	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	16.3	—	3.4	良好	1mm以下の灰色・黄褐色の粉粒の90%以下含む	細灰色	出穂ナゾ	出穂ナゾ	右出穂	30
361	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	(18.0)	—	3.1	良好	2mm以下の灰色・白色の粉粒の90%以下含む	灰色	出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ナゾ (3) 出穂ナゾ	右出穂	52
362	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	15.4	—	3.1	良好	2mm以下の灰色・白灰色の粉粒の90%以下含む	灰色	出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ナゾ (3) 出穂ナゾ	右出穂	25
363	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	15.8	—	3.1	良好	1~2mm以下の灰色・灰白色・黄褐色の粉粒の90%以下含む	(1) 細灰色 (2) グレー/灰色	出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ナゾ (3) 出穂ナゾ	右出穂	28
364	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	18.0	—	3.1	良好	1mm以下の灰白色・褐色の粉粒の90%以下含む	(1) 灰色 (2) グレー/黄色	出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ナゾ		29
365	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	(17.0)	—	(1.9)	良好	2mm以下の黄褐色・白色の粉粒の90%以上多く含む	灰色	出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ナゾ (3) 出穂ナゾ	右出穂	31
366	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	(17.0)	—	(1.4)	良好	1mm以下の灰白色の粉粒の90%以下含む	灰色	(1)~(6) 出穂ナゾ (7) ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ナゾ (3) 出穂ナゾ	右出穂 胴部1/2方出	167
367	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	(15.8)	16.1	4.7	良好	1mm以下の灰白色・褐色の粉粒の90%以下含む	灰色	出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ナゾ (3) 出穂ナゾ	右出穂 胴部1/2方出	17
368	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	(16.9)	(11.0)	4.3	良好	1mm以下の白色・灰色・ガラス質の粉粒の90%以下含む	(1) 灰白色 (2) 灰色	出穂ナゾ	(1) 出穂ナゾ (2) 出穂ナゾ (3) 出穂ナゾ	右出穂 胴部1/2方出	216
369	原形語 対訳	SP-01 1歳 SP-01 2歳 SP-01 3歳	(14.9)	8.4	5.1	やや不良	1mm以下の灰白色・灰色の粉粒の90%以上多く含む	(1) 灰白色 (2) 黄褐色	出穂ナゾ	出穂ナゾ	右出穂 胴部1/2方出	43

370	原形語 呼目	SP-01 SP-01 17ノ SP-01 灰色	(1)(4)	10.0	5.1	良好	1mm以下の灰白色・灰色・白色・褐色・赤褐色の 粒の割合以下含む	(9)灰色 (9)黒ナリ一フ灰色	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	11
371	原形語 呼目	SP-01 灰色 SP-01 褐色 SP-01 褐色	(1)(4)	7.9	3.6	良好	1mm以下の灰白色・褐色・褐色・赤褐色 の割合以下含む	(9)灰白色 (9)黒ナリ一フ黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	10
372	原形語 呼目	SP-01 1mm SP-01 1mm	(1)(4)	(7.4)	4.2	良好	1mm以下の灰白色・ガラス質・灰色の粒の 割合以下含む	(9)灰白色 (9)灰色	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	38
373	原形語 呼目	SP-01 1mm SP-01 1mm	(1)(4)	(7.4)	4.1	良好	2mm以下の灰白色・褐色・ガラス質の粒の 割合以下含む	(9)灰白色 (9)灰色	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	310
374	原形語 呼目	SP-01 1mm SP-01 1mm	(1)(4)	(7.4)	4.0	良好	2mm以下の灰白色・褐色・ガラス質の粒の 割合以下含む	(9)灰白色 (9)灰色	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	39
375	原形語 呼目	SP-01 1mm SP-01 1mm	(1)(4)	(7.4)	4.5	良好	2mm以下の灰白色・褐色・ガラス質の粒の 割合以下含む	(9)灰白色 (9)灰色	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	307
376	原形語 呼目	SP-01 1mm SP-01 1mm	(1)(4)	(6.5)	5.6	良好	2mm以下の灰白色・褐色の粒の割合以下含 む	(9)灰色 (9)黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	42
377	原形語 呼目	SP-31 褐色土 SP-01 1mm SP-01 1mm	(1)(4)	9.9	6.0	良好	3mm以下の灰白色・褐色の粒の割合以下含 む	(9)褐色土 (9)灰色 (9)黒ナリ一フ	(1)(一)褐色土 (1)(一)黒ナリ一フ	(1)(一)褐色土 (1)(一)黒ナリ一フ	右面編	16
378	原形語 呼目	SP-01 褐色土 SP-01 褐色土 SP-01 褐色土	(1)(4)	9.2	5.5	良好	3mm以下の灰白色・褐色の粒の割合以上多 く含む	(9)褐色土 (9)褐色土 (9)褐色土	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	45
379	原形語 呼目	SP-01 褐色土 SP-01 褐色土 SP-01 褐色土	(1)(4)	(13.0)	5.8	良好	3mm以下の灰白色・褐色の粒の割合以上多 く含む	(9)褐色土 (9)褐色土 (9)褐色土	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	309
380	原形語 呼目	SP-01 1mm SP-01 1mm	(1)(4)	9.5	5.2	良好	3mm以下の灰白色・褐色の粒の割合以下含 む	(9)灰色 (9)黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	41
381	原形語 呼目	SP-01 灰色 SP-01 1mm SP-01 1mm	(1)(4)	(8.4)	7.4	良好	3mm以下の灰白色の粒の割合以下含む	(9)灰色 (9)黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	317
382	原形語 呼目	SP-01 1mm SP-01 1mm SP-34 褐色土	(1)(4)	11.5	6.6	良好	3mm以下の灰白色・灰色・褐色の粒の割合 以上含む	(9)灰色 (9)黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	9
383	原形語 呼目	SP-01 1mm SP-01 1mm	(1)(4)	7.0	5.0	良好	3mm以下の灰白色の粒の割合以下含む	(9)灰色 (9)黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	14
384	原形語 呼目	SP-01 1.5-4 7ノ SP-01 1.5-4 7ノ SP-01 褐色土	(1)(4)	7.3	4.8	良好	3mm以下の灰白色の粒の割合以下含む	(9)灰色 (9)黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	15
385	原形語 呼目	SP-01 灰色 SP-01 褐色土 SP-01 褐色土	(1)(2)	(6.2)	4.1	良好	2mm以下の暗褐色・灰白色の粒の割合以上多 く含む	(9)灰白色 (9)黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編?	313
386	原形語 呼目	SP-01 褐色土 SP-01 褐色土 SP-34 褐色土	(1)(2)	8.0	4.2	良好	1mm以下の白色・灰白色・黄褐色の粒の 割合以下含む	(9)灰色 (9)黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	214
387	原形語 呼目	SP-01 褐色土 SP-01 褐色土 SP-01 褐色土	(1)(2)	9.8	4.2	良好	3mm以下の灰白色・褐色の粒の割合以下 含む	(9)灰白色 (9)黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	390
388	原形語 呼目	SP-01 SP-34 褐色土	(1)(2)	(6.0)	6.3	良好	3mm以下の灰白色・褐色の粒の割合以上含 む	(9)灰色 (9)黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	312
389	原形語 呼目	SP-01 1mm SP-01 褐色土 SP-01 褐色土	(1)(4)	(6.1)	4.3	良好	3mm以下の灰白色の粒の割合以上多 く含む	(9)灰色 (9)黒ナリ一フ	(1)(一)褐色土 (1)(一)黒ナリ一フ	(1)(一)褐色土 (1)(一)黒ナリ一フ	右面編	314
390	原形語 呼目	SP-01 褐色土 SP-01 褐色土 SP-01 褐色土	(1)(4)	(7.4)	4.5	良好	3mm以下の灰白色・褐色の粒の割合以下含 む	(9)灰色 (9)黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	316
391	原形語 呼目	SP-01 褐色土 SP-01 褐色土 SP-01 褐色土	(1)(4)	(8.4)	6.2	良好	3mm以下の灰白色・ガラス質の粒の割合以上 含む	(9)褐色土 (9)褐色土 (9)褐色土	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	40
392	原形語 呼目	SP-01 1mm SP-01 褐色土 SP-01 褐色土	(1)(4)	11.2	6.3	良好	3mm以下の灰白色・褐色の粒の割合以上多 く含む	(9)褐色土 (9)褐色土 (9)褐色土	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	44
393	原形語 呼目	SP-01 1mm SP-01 褐色土 SP-01 褐色土	(1)(4)	8.4	(3.9)	良好	3mm以下の灰白色・ガラス質の粒の割合 以上含む	(9)褐色土 (9)褐色土 (9)褐色土	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	229
394	原形語 呼目	SP-01 1mm SP-01 褐色土 SP-01 褐色土	(1)(4)	(8.0)	4.2	良好	3mm以下の灰白色・褐色の粒の割合以下含 む	(9)灰色 (9)黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	308
395	原形語 呼目	SP-01 1mm SP-01 褐色土 SP-01 褐色土	(1)(2)	(7.4)	5.0	良好	3mm以下の暗褐色・灰白色の粒の割合以上含 む	(9)灰色 (9)黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	黒ナリ一フ	右面編	311

396	原形語 灰白	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	(13.4)	(9.4)	4.2	良好	2mm以下の灰白色、灰色の輝度の約10%以下含む	灰色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ (46)一方方向ナナ	右側面?	315
397	原形語 灰白	SP-01 L-24	—	9.8	(11.8)	不良	2mm以下の灰白色、灰色の輝度の約10%以下含む	灰白色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	側面	233
398	原形語 灰赤	SP-01 L-24 SP-01 L-35	(12.0)	(6.9)	3.7	良好	2mm以下の灰白色、灰色、黒色の輝度の約10%以下含む	(11)灰白色 (12)灰赤色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	左側面	209
399	原形語 灰赤	SP-01 L-34 灰色 SP-01 L-34	(12.7)	(6.7)	3.5	良好	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	(11)灰赤色 (12)灰赤色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面	211
400	原形語 灰赤	SP-01 L-34 灰色 SP-01 L-34	基準14.9 駆逐柱2.6	8.6	3.7	良好	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	(11)灰赤色 (12)灰赤色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	他計測のみ側面	212
402	原形語 灰赤	SP-01 K-34 灰色 SP-01 L-34	(13.2)	(7.2)	4.0	良好	2mm以下の灰白色、明暗色の輝度の約10%以下含む	灰白色	同様ナナ (11~46)同様ナナ (46)ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面	99
403	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	13.1	8.8	3.9	良好	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰白色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面	7
404	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	13.6	8.0	3.9	不良	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰白色	同様ナナ (11~46)同様ナナ (46)一方方向ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面	98
405	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	(13.0)	(7.3)	4.1	良好	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	(11)灰白色 (12)灰赤色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面	13
406	原形語 灰赤	SP-01 L-34 灰色 SP-01 L-34	(13.4)	(7.3)	4.2	良好	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰白色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面	12
407	原形語 灰赤	SP-01 L-34 灰色 SP-01 L-34	12.0	8.0	3.6	不良	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰白色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面	18
408	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	(12.2)	(7.4)	3.2	良好	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰白色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面	4
409	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	(12.0)	(7.4)	(4.9)	不良	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	(11)灰赤色 (12)灰赤色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面	210
410	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	(13.4)	8.8	3.3	不良	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰赤色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面	356
411	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	(13.0)	(7.0)	2.9	不良	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰赤色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面?	81
412	原形語 灰赤	SP-01 R7+ SP-01 R7+	(13.0)	8.2	3.5	良好	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰赤色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面	1
413	原形語 灰赤	SP-01 R7+ SP-01 R7+	—	(8.8)	(14.6)	不良	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰赤色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	側面	226
414	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	—	(8.0)	(9.9)	不良	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰白色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	左側面?	166
415	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	(13.2)	(12.4)	2.4	不良	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	(11)灰赤色 (12)灰赤色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	左側面?	86
416	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	16.4	13.0	2.5	不良	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰白色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面?	85
417	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	(13.0)	(12.9)	2.2	良好	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰赤色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面	244
418	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	17.5	14.3	2.1	不良	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰白色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面 次側面あり	61
419	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	(16.0)	(12.4)	2.4	良好	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰白色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面?	80
420	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	(21.3)	(16.0)	3.5	良好	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰赤色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	次側面あり	215
421	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	(8.4)	—	(1.8)	良好	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	灰赤色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	右側面	218
422	原形語 灰赤	SP-01 L-24 灰色 SP-01 L-24	(13.4)	—	(3.0)	良好	2mm以下の灰白色、黒色の輝度の約10%以下含む	オリーブ灰色	同様ナナ	(11~46)同様ナナ (46)輝度へ299り番号ナナ (46)一方方向ナナ	同様ナナ	276

423	原色部 赤色部 SP-01 顔料土 P-25	(5.8)	—	(6.1)	良好	50%以下の灰白色、種灰色の割合が5%以下 を含む	(01) 種灰色 (02) 灰色	種灰色	(01) 種灰色 (02) 灰色	種灰色	(01) 種灰色 (02) 灰色	種灰色	164
424	原色部 灰白色部 SP-01 1種	(12.0)	—	(6.9)	良好	50%以下の白色、灰色、褐色の割合が5%以下 を含む	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	289
425	原色部 灰白色部 SP-01 1種	(18.1)	—	(6.4)	やや 不良	50%以下の白色、灰色、褐色の割合が5%以下 を含む	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	287
426	原色部 灰白色部 SP-01 1種 P-35	(10.4)	—	(9.6)	良好	50%以下の灰白色、灰色の割合が5%以下 を含む	(01) 灰白色 (02) 灰色	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色	種灰色	203
427	原色部 灰白色部 SP-01 1種 SP-01 2種	(12.2)	18.8	18.0	良好	20%以下の灰白色、灰色、ガラス質の割合 が5%以下を含む	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	156
428	原色部 灰白色部 SP-01 1種 P-35	—	—	(9.4)	良好	1~20%以下の灰白色、灰色、ガラス質の割合 が5%以上を含む	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	296
429	原色部 灰白色部 SP-01 1種	(14.0)	—	(7.5)	良好	50%以下の白色、灰色、褐色の割合が5%以下 を含む	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	290
430	原色部 灰白色部 SP-01 顔料土 P-28	—	(14.0)	(10.0)	良好	50%以下の灰白色、灰色の割合が5%以下 を含む	(01) 灰白色 (02) 灰色	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色	種灰色	304
431	原色部 灰白色部 SP-01 1種 P-35	—	(13.0)	(10.4)	良好	1~20%以下の灰白色、灰色、ガラス質の割合 が5%以上を含む	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	298
432	原色部 灰白色部 SP-01 1種 P-34	—	8.0	(16.4)	良好	50%以下の灰白色、灰色、褐色の割合 が5%以上多く含む	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	149
433	原色部 灰白色部 SP-01 2種	—	(10.9)	(9.4)	良好	1~20%以下の灰白色、灰色、ガラス質の割合 が5%以上を含む	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	299
434	原色部 灰白色部 SP-01 1~3種 顔料土 P-26	(11.2)	—	(20.3)	良好	1.5~20%以下の灰白色、灰色、褐色の割合 が5%以上多く含む	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	78
435	原色部 灰白色部 SP-01 1種	(10.0)	—	(6.7)	良好	50%以下の白色、灰色の割合が5%以下を含む を含む	(01) 白色 (02) 灰色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色	種灰色	285
436	原色部 灰白色部 SP-01 2種	(12.4)	—	(6.2)	良好	1~20%以下の白色、灰色の割合が5%以下 を含む	(01) 白色 (02) 灰色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色	種灰色	291
437	原色部 灰白色部 SP-01 1種土 P-32	—	—	(8.4)	良好	50%以下の白色、灰色、褐色の割合が5%以下 を含む	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	217
438	原色部 灰白色部 SP-01 1種 P-34	—	—	(11.2)	良好	1~20%以下の白色、灰色、ガラス質の割合 が5%以上を含む	(01) 白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	153
439	原色部 灰白色部 SP-01 1種 顔料土 P-37	(0.0)	10.4	18.1	良好	20%以下の灰白色、灰色、ガラス質の割合 が5%以下を含む	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	(01) 灰白色 (02) 灰色 (03) ガラス質の割合	種灰色	154
440	原色部 灰白色部 SP-01 1種	(0.0)	—	(6.8)	良好	50%以下の白色、灰色、褐色の割合が5%以下 を含む	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	288
441	原色部 灰白色部 SP-01 2種	—	7.6	(3.5)	良好	50%以下の白色、灰色、褐色の割合が5%以下 を含む	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色 (03) 褐色	種灰色	303
442	原色部 灰白色部 SP-01 1種	(28.5)	—	(16.8)	良好	1~20%以下の白色、灰色の割合が5%以下 を含む	(01) 白色 (02) 灰色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色	種灰色	(01) 白色 (02) 灰色	種灰色	297

515	肌色部 灰目	50-03	—	(13.6)	[3.6]	良好	1ms以下の灰白色、灰色、ガラス質の輝度の90%以上含む	灰白色	同色ナゾ	(15)同色ナゾ (16)同色ナゾ	(15)同色ナゾ (16)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	340
516	1.5倍部 肌色部	50-03	022.0	—	[11.6]	良好	1ms以下の赤褐色、灰色、白色、赤褐色の90%以上多く含む	(12)赤褐色 (13)赤褐色	同色ナゾ	(17)同色ナゾ (18)同色ナゾ	(17)同色ナゾ (18)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	342
517	肌色部 灰目	50-04	05.4	—	[1.4]	良好	1ms以下の灰白色、灰色の90%以上多く含む	灰白色	同色ナゾ	(19)同色ナゾ	(19)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	350
518	肌色部 灰目	50-04	07.4	(13.2)	3.1	良好	1ms以下の灰白色、灰色、ガラス質の輝度の90%以上含む	灰白色	同色ナゾ	(20)同色ナゾ (21)同色ナゾ	(20)同色ナゾ (21)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	359
519	肌色部 灰目	50-04	08	(13.4)	—	良好	1ms以下の灰白色、灰色の90%以上多く含む	(20)灰白色 (21)灰白色	同色ナゾ	(22)同色ナゾ (23)同色ナゾ	(22)同色ナゾ (23)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	366
520	1.5倍部 肌色部	50-04	08	(13.4)	—	良好	1ms以下の灰白色、灰色の90%以上多く含む	(20)灰白色 (21)灰白色	同色ナゾ	(24)同色ナゾ (25)同色ナゾ	(24)同色ナゾ (25)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	366
521	1.5倍部 肌色部	50-04	022.8	—	[4.7]	良好	1ms以下の赤褐色、灰色、ガラス質の輝度の90%以上多く含む	同色ナゾ	同色ナゾ	(26)同色ナゾ (27)同色ナゾ	(26)同色ナゾ (27)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	369
522	1.5倍部 肌色部	50-100	—	(6.4)	[2.6]	良好	1ms以下の赤褐色、灰色の90%以上多く含む	(28)赤褐色 (29)赤褐色	同色ナゾ	(28)同色ナゾ (29)同色ナゾ	(28)同色ナゾ (29)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	372
523	1.5倍部 肌色部	50-07	01.02	—	—	不良	1ms以下の灰白色、赤褐色の90%以下	(30)灰白色 (31)赤褐色	不明	(30)同色ナゾ (31)同色ナゾ	(30)同色ナゾ (31)同色ナゾ	不明	不明	383
524	1.5倍部 肌色部	50-07	03.27	—	—	良好	1ms以下の灰白色、灰色、ガラス質の輝度の90%以上多く含む	(32)赤褐色 (33)赤褐色	同色ナゾ	(32)同色ナゾ (33)同色ナゾ	(32)同色ナゾ (33)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	384
525	肌色部 灰目	50-06	09.9	—	3.8	良好	1ms以下の灰白色、灰色、ガラス質の輝度の90%以上含む	灰白色	同色ナゾ	(34)同色ナゾ (35)同色ナゾ	(34)同色ナゾ (35)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	386
526	肌色部 灰目	50-03	(10.4)	—	[6.4]	良好	1ms以下の灰白色、灰色、ガラス質の輝度の90%以上含む	灰白色	同色ナゾ	(36)同色ナゾ (37)同色ナゾ	(36)同色ナゾ (37)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	387
527	肌色部 灰目	50-011101~115 50-206	020.0	—	[9.6]	不良	1ms以下の灰白色、赤褐色の90%以上多く含む	灰白色	同色ナゾ	(38)同色ナゾ (39)同色ナゾ	(38)同色ナゾ (39)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	387
528	肌色部 灰目	50-114~115 50-20	07.8	—	4.0	良好	1ms以下の灰白色、灰色、ガラス質の輝度の90%以上多く含む	灰白色	同色ナゾ	(40)同色ナゾ (41)同色ナゾ	(40)同色ナゾ (41)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	90
529	肌色部 灰目	50-01	15.0	6.2	4.5	良好	1ms以下の灰白色、灰色、ガラス質、黒褐色の90%以上多く含む	灰白色	同色ナゾ	(42)同色ナゾ (43)同色ナゾ	(42)同色ナゾ (43)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	177
530	肌色部 灰目	50-06	(16.6)	(16.0)	6.3	良好	1ms以下の灰白色、灰色、ガラス質の輝度の90%以上含む	(44)灰白色 (45)赤褐色	同色ナゾ	(44)同色ナゾ (45)同色ナゾ	(44)同色ナゾ (45)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	55
531	肌色部 灰目	50-08	024.2	(16.0)	(6.0)	不良	1ms以下の赤褐色、黒褐色、赤褐色の90%以上多く含む	同色ナゾ	同色ナゾ	(46)同色ナゾ (47)同色ナゾ	(46)同色ナゾ (47)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	342
532	肌色部 灰目	50-00	(13.2)	(7.0)	3.4	良好	1ms以下の赤褐色、灰色、ガラス質の輝度の90%以上含む	灰白色	同色ナゾ	(48)同色ナゾ (49)同色ナゾ	(48)同色ナゾ (49)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	66
533	1.5倍部 肌色部	50-06	022.0	—	[4.6]	良好	1ms以下の灰白色、黒褐色、赤褐色、灰色の90%以上多く含む	(50)赤褐色 (51)赤褐色	同色ナゾ	(50)同色ナゾ (51)同色ナゾ	(50)同色ナゾ (51)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	325
534	1.5倍部 肌色部	灰上~灰	024.0	—	[2.4]	良好	1ms以下の赤褐色、黒褐色の90%以上含む	(52)赤褐色	同色ナゾ	(52)同色ナゾ	(52)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	320
535	1.5倍部 肌色部	50-08	(16.2)	(6.0)	6.3	良好	1ms以下の赤褐色、黒褐色の90%以上含む	(53)赤褐色	不明	(53)同色ナゾ	(53)同色ナゾ	不明	不明	143
536	1.5倍部 肌色部	0450 輝目	[11.8]	7.6	[3.6]	良好	1ms以下の灰白色、赤褐色の90%以上多く含む	同色ナゾ	不明	(54)同色ナゾ (55)同色ナゾ	(54)同色ナゾ (55)同色ナゾ	不明	不明	331
537	1.5倍部 肌色部	50-03	—	7.6	[1.9]	良好	1ms以下の赤褐色、灰色、ガラス質の90%以上多く含む	(56)赤褐色	同色ナゾ	(56)同色ナゾ	(56)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	144
538	1.5倍部 肌色部	50-08	—	(7.8)	(1.9)	良好	1ms以下の赤褐色、黒褐色の90%以上多く含む	同色ナゾ	同色ナゾ	(57)同色ナゾ (58)同色ナゾ	(57)同色ナゾ (58)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	157
539	1.5倍部 肌色部	肌色部	—	(6.0)	(1.6)	不良	灰色を呈し、全く軟質	同色ナゾ	同色ナゾ	(59)同色ナゾ (60)同色ナゾ	(59)同色ナゾ (60)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	225
540	1.5倍部 肌色部	50-14 輝目	—	6.6	[1.6]	良好	赤	灰白色	同色ナゾ	(61)同色ナゾ (62)同色ナゾ	(61)同色ナゾ (62)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	166
541	1.5倍部 肌色部	50-33	—	(7.2)	(1.6)	良好	赤	灰白色	同色ナゾ	(63)同色ナゾ (64)同色ナゾ	(63)同色ナゾ (64)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	169
542	1.5倍部 肌色部	50-41 灰目	—	(7.0)	(1.4)	良好	赤	灰白色	同色ナゾ	(65)同色ナゾ (66)同色ナゾ	(65)同色ナゾ (66)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	169
543	1.5倍部 肌色部	50-40 灰目	—	(7.8)	[2.7]	良好	赤	灰白色	同色ナゾ	(67)同色ナゾ (68)同色ナゾ	(67)同色ナゾ (68)同色ナゾ	同色ナゾ	同色ナゾ	168

JIS 10色 色相番号	RGB 値	L*	a*	b*	色相 番号	色相 記号	色相 記号	備考	備考	備考	備考
544	深黒色 黒色 #000000	—	(0,0)	—	1.5m以下 の灰色、灰 白色の輝度 10%以下含む	良好	(1,8)	—	黒色	黒色	黒色
545	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	—	2,9	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
546	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	—	2,9	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
547	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	(0,0)	2,8	良好	良好	(6,0)	—	黒色	黒色	黒色
548	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	—	(2,6)	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
549	暗黒色 黒色 #000000	10,2	—	3,2	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
550	暗黒色 黒色 #000000	13,6	—	3,1	不良	不良	—	—	黒色	黒色	黒色
551	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	(0,0)	3,9	良好	良好	(0,2)	—	黒色	黒色	黒色
552	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	2,7	6,5	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
553	暗黒色 黒色 #000000	11,7	8,6	3,1	不良	不良	—	—	黒色	黒色	黒色
554	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	2,5	5,1	良好	良好	(0,3)	—	黒色	黒色	黒色
555	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	(0,0)	2,8	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
556	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	(0,0)	2,4	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
557	暗黒色 黒色 #000000	17,0	15,1	2,5	不良	不良	—	—	黒色	黒色	黒色
558	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	(0,0)	2,6	良好	良好	(0,8)	—	黒色	黒色	黒色
559	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	3,96	(0,7)	良好	良好	(0,8)	—	黒色	黒色	黒色
560	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	—	(0,8)	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
561	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	—	(0,0)	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
562	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	—	(4,6)	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
563	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	—	(2,7)	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
564	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	—	(2,2)	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
565	暗黒色 黒色 #000000	(0,0)	—	—	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
566	暗黒色 黒色 #000000	—	—	—	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
567	暗黒色 黒色 #000000	—	8,3	(0,9)	不良	不良	—	—	黒色	黒色	黒色
568	暗黒色 黒色 #000000	—	—	—	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
569	暗黒色 黒色 #000000	—	—	—	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
570	暗黒色 黒色 #000000	—	—	—	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色
571	暗黒色 黒色 #000000	—	—	—	良好	良好	—	—	黒色	黒色	黒色

項目	色調	硬度	断面	口徑	高さ	位置	用途	備考	測定 No.
572 頂部部 灰土	5-33	—	—	(5.3)	—	—	2mm以下の灰白色、ガラス質の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (A)土質、硬結石	220
573 灰土 砂層	0-36	—	—	—	—	—	0.5mm以下の灰色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	228
574 幅の狭い 砂層	0-36	—	—	—	—	—	0.5mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	272
580 砂層部	K-36	2.4	4.0	2.5	—	—	2mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	221
581 甲瓦	6-38	—	—	—	—	—	1~2mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	371
582 甲瓦	6-34 硬結	—	—	—	—	—	2mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	384
583 甲瓦	6-33	—	—	—	—	—	2mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	378
584 甲瓦	6-34 硬結	—	—	—	—	—	2mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	369
585 甲瓦	6-36	—	—	—	—	—	2mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	370
586 甲瓦	6-34 硬結	—	—	—	—	—	2mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	368
587 甲瓦	6-36	—	—	—	—	—	2mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	369
588 不明	5K-03	—	—	—	—	—	1mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	395
589 不明	5K-03	—	—	—	—	—	1mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	398
590 不明	6-37	—	—	—	—	—	1mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	397
591 砂層部	K-37	(12.6)	—	(1.7)	—	—	2mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	261
592 砂層部	K-38	—	—	—	—	—	2mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	305
593 白壁・扉部	6-38	—	—	3.5	(1.6)	—	1mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	162
594 1号 部	K-39	—	—	—	—	—	2mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	366

3区 出土土器観察表

遺物 No.	器種	遺物 No.	器種	口徑	高さ	断面	用途	色調	内面調査	外面調査	備考	測定 No.
665	1号土器	5H-01	土器	(3.4)	—	(4.7)	良好	1mm以下の灰白色、灰色、ガラス質の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	91
666	2号土器	5H-02	土器	(6.0)	—	(1.7)	良好	2mm以下の灰白色、灰色、ガラス質の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	83
670	1号土器	5H-05 硬上	土器	(2.4)	—	(5.7)	良好	1mm以下の灰白色、灰色、ガラス質の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	175
671	甲瓦	5H-05 硬上	甲瓦	12.8	6.4	3.8	良好	2mm以下の灰白色、灰色、ガラス質の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	137
672	甲瓦	5H-05 硬上	甲瓦	11.1	6.9	3.8	良好	2mm以下の灰白色、灰色、ガラス質の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	68
673	甲瓦	5H-05 硬上	甲瓦	(11.8)	(7.0)	3.6	不良	2mm以下の灰白色、灰色、ガラス質の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	69
674	甲瓦	5H-05 P-1	甲瓦	—	(12.0)	(6.1)	良好	1mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	76
675	甲瓦	5H-05 P-1	甲瓦	—	—	—	良好	1mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	146
676	1号土器	5H-41	土器	(27.4)	—	(14.3)	良好	1mm以下の灰白色、灰色、ガラス質の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	7
677	1号土器	5H-35 P-1	土器	(20.0)	—	(6.5)	良好	1mm以下の灰白色、灰色、ガラス質の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	224
678	1号土器	5H-38	土器	—	—	(2.0)	良好	1mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	145
679	甲瓦	5H-35	甲瓦	—	—	—	良好	2mm以下の灰白色、灰色の硬結石は下層に認められ、上部は土質	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	灰白色 (B)土質、硬結石	221

() 欠元標、[] 残存標

680	原形部 試薬部 標準 試薬部 標準	SP-30 SP-34	(13.7)	—	(14.7)	良好	1mm以下の白色・灰色の吸光度10%以下を含む 1~2mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の吸光度10%以上含む	灰色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	98
681	原形部 標準 試薬部 標準	SP-34 SP-35	(12.9)	—	(14.6)	良好	1mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の吸光度10%以上含む	灰色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	106
682	原形部 標準 試薬部 標準	SP-34 SP-35	(14.0)	(9.6)	3.4	良好	1mm以下の白色・灰色の吸光度10%以下を含む	灰色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	47
683	原形部 標準 試薬部 標準	SP-34 SP-32	(13.6)	(8.8)	3.4	良好	1mm以下の白色・灰色の吸光度10%以下を含む	灰色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	100
684	原形部 標準 試薬部 標準	SP-32 SP-32	—	(11.0)	(8.0)	良好	1mm以下の白色・灰色・ガラス質の吸光度10%以上含む	(9)灰色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	102
685	原形部 標準 試薬部 標準	SP-32 SP-32	—	(8.8)	(3.8)	良好	1mm以下の白色・灰色・ガラス質の吸光度10%以上含む	灰色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	103
686	原形部 標準 試薬部 標準	SP-30 SP-30	(15.0)	(8.0)	2.5	良好	1mm以下の白色・灰色・ガラス質の吸光度10%以上含む	灰色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	96
687	原形部 標準 試薬部 標準	SP-30 SP-30	(12.1)	(7.2)	2.5	良好	1mm以下の白色・灰色の吸光度10%以下を含む 1~2mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の吸光度10%以上含む	灰色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	99
688	原形部 標準 試薬部 標準	SP-24B SP-24B	15.6	18.4	2.0	良好	1mm以下の白色・灰色の吸光度10%以下を含む	灰色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	124
689	原形部 標準 試薬部 標準	SP-24B SP-25B	14.8	—	(14.0)	良好	1mm以下の白色・灰色の吸光度10%以下を含む	同色ナゲ (体下部)9.9.9.9	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	41
690	原形部 標準 試薬部 標準	SP-53B P-12 包一箱 P-13 包一箱	17.6	—	3.8	良好	1mm以下の白色・ガラス質の吸光度10%以上含む	同色ナゲ	ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	94
691	原形部 標準 試薬部 標準	SE-01 SE-01	—	(8.0)	(3.1)	良好	1mm以下の灰白色・灰色・褐色の吸光度10%以上含む	白色・黄褐色	ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	233
692	原形部 標準 試薬部 標準	SE-01 SE-01	(11.7)	(8.0)	(3.6)	良好	1mm以下の灰白色・灰色・褐色の吸光度10%以上含む	(9)灰色 (9)オリーブ褐色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	80
693	原形部 標準 試薬部 標準	SE-01 SE-01	—	(11.2)	(4.4)	良好	1mm以下の灰白色・灰色の吸光度10%以下を含む	灰色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	79
694	原形部 標準 試薬部 標準	SE-01 SE-01	(11.2)	(7.2)	3.8	良好	1mm以下の灰白色・灰白色の吸光度10%以下を含む 1~2mm以下の灰白色・灰色の吸光度10%以上含む	灰色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	77
695	原形部 標準 試薬部 標準	SE-01 SE-01	(12.8)	(8.0)	2.9	良好	1mm以下の灰白色・灰色の吸光度10%以上含む	灰白色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	229
696	原形部 標準 試薬部 標準	SE-01 SE-01	(12.7)	(14.0)	2.3	良好	1mm以下の灰白色・灰色の吸光度10%以上含む	灰白色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	200
697	原形部 標準 試薬部 標準	SE-01 SE-01	(12.2)	5.6	3.7	良好	1mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の吸光度10%以上含む	灰黄色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	78
698	原形部 標準 試薬部 標準	SE-01 SE-01	—	(13.9)	(4.2)	良好	1mm以下の灰白色・褐色の吸光度10%以上含む	同色ナゲ	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	201
703	原形部 標準 試薬部 標準	SK-00 P-1 SK-00 P-2	(16.6)	—	2.9	良好	1mm以下の灰白色・褐色の吸光度10%以上含む 1~2mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の吸光度10%以上含む	(9)灰色 (9)オリーブ褐色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	59
704	原形部 標準 試薬部 標準	SK-00 P-2 SK-07	(16.6)	(13.4)	1.9	良好	1mm以下の灰白色・褐色の吸光度10%以上含む	灰色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	43
705	原形部 標準 試薬部 標準	SK-07 SK-07	(12.9)	—	(2.6)	良好	1mm以下の灰白色・褐色の吸光度10%以上含む	褐色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	68
706	原形部 標準 試薬部 標準	SK-07 SK-07	(12.4)	—	(5.7)	良好	1mm以下の灰白色・褐色の吸光度10%以上含む	同色ナゲ	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	19
707	原形部 標準 試薬部 標準	SK-4 包一箱 SK-07 P-103 SP-147 P-2	18.5	—	3.5	良好	1mm以下の黒褐色の吸光度10%以下含む	黒褐色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	69
708	原形部 標準 試薬部 標準	SK-07 SK-07	(15.9)	(8.0)	2.9	良好	1mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の吸光度10%以上含む	同色ナゲ	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	23
709	原形部 標準 試薬部 標準	SK-07 SK-07	(17.8)	(16.0)	3.0	良好	1mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の吸光度10%以上含む	灰白色	同色ナゲ	(1)~(6)同色ナゲ (7)同色ナゲ(9)より黒ナゲ (8)同色ナゲ(9)より黒ナゲ	24

710	原形部 原形部	3K-07 P-4	(13.8)	—	—	良好	1mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰色	同様ナリ	同様ナリ	222
711	原形部 原形部	3K-07	(14.0)	—	—	良好	2mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰色	同様ナリ	同様ナリ	222
712	原形部 原形部	3K-07 2-0 磁一栞	—	(16.0)	(5.8)	良好	2mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰色	同様ナリ	(交互)同様ナリ (磁)方ナリ	183
713	原形部 原形部	3K-07	(18.0)	—	—	良好	1mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰白色	同様ナリ	同様ナリ	224
714	原形部 原形部	2-0 磁一栞 3K-07	(16.5)	—	(2.0)	良好	1mm以下の白色・灰色の砂粒10%以下含む	灰色	同様ナリ	同様ナリ	85
715	原形部 原形部	3K-07 P-1 3K-07	(12.8)	(8.0)	(3.0)	良好 不良	1mm以下の灰白色・褐色・ガラス質の砂粒10%以下含む	灰色	同様ナリ	(1)~(8)同様ナリ (9)磁一栞入り基本調整	116
716	原形部 原形部	3K-07 P-4	(23.4)	—	(4.0)	良好	3mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰色	同様ナリ	同様ナリ	207
720	原形部 原形部	3K-26 P-4 3K-26 P-4	(2.0)	—	(2.4)	良好	1mm以下の赤褐色・灰白色・褐色の砂粒10%以下含む	赤褐色	ミダキ	ミダキ?	100
721	原形部 原形部	3K-26 P-4 3K-26 P-4	(23.8)	—	(7.0)	良好	1mm以下の赤褐色・赤褐色・ガラス質の砂粒10%以下含む	赤褐色	同様ナリ	不明	37
722	原形部 原形部	3K-26 P-4 3K-26 P-13	(19.8)	—	(8.3)	良好	1mm以下の赤褐色・赤褐色・灰白色の砂粒10%以下含む	赤褐色	(1)同様ナリ (2)方ナリ	同様ナリ	72
723	原形部 原形部	3K-26 P-10 3K-26 P-10	(23.4)	—	(6.3)	良好	1mm以下の赤褐色・灰白色・赤褐色の砂粒10%以下含む	(1)~(8)同様ナリ (9)方ナリ	(1)~(8)同様ナリ (9)方ナリ	同様ナリ	161
724	原形部 原形部	3K-26 P-10 3K-26 P-10	(23.8)	—	(5.1)	良好	1mm以下の赤褐色・赤褐色・灰白色の砂粒10%以下含む	(1)~(8)同様ナリ (9)方ナリ	(1)~(8)同様ナリ (9)方ナリ	同様ナリ	79
725	原形部 原形部	3K-26 P-10 3K-26 P-10	—	—	—	良好	1mm以下の赤褐色・赤褐色・灰白色の砂粒10%以上多く含む	赤褐色	—	—	162
726	原形部 原形部	3K-26 P-10 3K-26 P-10	—	—	—	良好	1mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	(1)~(8)同様ナリ (9)方ナリ	—	—	220
727	原形部 原形部	3K-26 P-10 3K-26 P-10	—	—	—	良好	1mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	(1)~(8)同様ナリ (9)方ナリ	—	—	222
728	原形部 原形部	3K-26 P-20 3K-26 P-20	(12.7)	(8.8)	(6.4)	良好	1mm以下の灰白色・褐色の砂粒10%以下含む	(1)~(8)同様ナリ (9)方ナリ	同様ナリ	同様ナリ	113
729	原形部 原形部	3K-26 P-27 3K-26 P-27	(15.9)	—	(2.8)	良好	1~2mm以下の灰白色・褐色の砂粒10%以下含む	同様ナリ	同様ナリ	同様ナリ	114
730	原形部 原形部	3K-41 磁一栞 3K-41 磁一栞	(17.4)	(20.5)	(24.3)	良好	1mm以下の灰白色・褐色の砂粒10%以下含む	(1)~(8)同様ナリ (9)方ナリ	同様ナリ	(1)~(8)同様ナリ (9)方ナリ	115
731	原形部 原形部	C-11 磁一栞 3K-26 P-17	(15.4)	(8.9)	(6.1)	良好	1~2mm以下の灰白色・ガラス質の砂粒10%以下含む	同様ナリ	同様ナリ	同様ナリ	109
732	原形部 原形部	3K-26 P-15 3K-26 P-15	15.6	16.6	4.8	良好	1mm以下の灰白色・褐色・ガラス質の砂粒10%以下含む	灰色	同様ナリ	同様ナリ	46
733	原形部 原形部	3K-26 P-21 3K-26 P-21	(12.7)	8.3	(3.0)	良好	1~2mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰色	同様ナリ	同様ナリ	107
734	原形部 原形部	3K-41 磁一栞 3K-26 P-15	(16.0)	—	(24.0)	良好	1mm以下の白色・褐色の砂粒10%以下含む 1mm以上の白色を含む	灰色	同様ナリ	同様ナリ	96
735	原形部 原形部	3K-35 P-2 3K-35 P-3	最大12.7 最小0.2	最大8.0 最小0.2	最大3.7 最小0.2	不良	3mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰白色	同様ナリ	同様ナリ	205
736	原形部 原形部	3K-55 P-1 3K-55 P-1	(14.0)	(2.0)	(9.7)	良好	2mm以下の白色・灰白色の砂粒10%以下含む	(1)~(8)同様ナリ (9)方ナリ	(1)~(8)同様ナリ (9)方ナリ	(1)~(8)同様ナリ (9)方ナリ	5
737	原形部 原形部	3K-12 3K-12	(10.7)	—	4.0	良好	1mm以下の白色・褐色・ガラス質の砂粒10%以下含む	灰色	同様ナリ	同様ナリ	32
738	原形部 原形部	3K-34 P-3 3K-34 P-3	—	(12.8)	(3.8)	良好	1mm以下の灰白色・褐色の砂粒10%以下含む	灰色	同様ナリ	同様ナリ	75
739	原形部 原形部	3K-31 磁一栞 3K-41	(12.0)	—	(34.6)	良好	1mm以下の灰白色・褐色の砂粒10%以下含む	灰色	同様ナリ	同様ナリ	202
740	原形部 原形部	3K-41 3K-41	(8.0)	—	(24.9)	良好	1mm以下の白色・褐色の砂粒10%以下含む	灰色	同様ナリ	同様ナリ	89

741	別記第 1 号	3K-41	—	(0.2)	(2.8)	良好	1mm以下の白色・灰色の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	90
742	別記第 2 号	3K-41	(0.8)	—	(1.7)	良好	1mm以下の白色・灰色の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	90
743	別記第 3 号	3K-41	—	(2.0)	(3.3)	良好	1mm以下の白色・灰色の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	98
744	別記第 4 号	3K-41	—	(0.1)	(5.0)	良好	1mm以下の緑白色・灰色の砂粒の%以下含む	グリーン灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	81
745	別記第 5 号	3K-41 P-1	(14.0)	(16.0)	(5.0)	良好	1mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	92
746	別記第 6 号	3K-41	(14.0)	(16.0)	(1.0)	良好	1mm以下の白色・灰色の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	87
747	別記第 7 号	3K-41	—	—	—	良好	1mm以下の白色・灰色の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	226
748	別記第 8 号	3P-218	15.5	3.5	16.8	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒色の砂粒の%以下含む	(1)灰白色 (2)黒色 (3)赤色 (4)緑色 (5)黒色 (6)赤色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	4
749	別記第 9 号	3P-218	20.0	9.0	30.6	良好	1mm以下の灰白色・黒色の砂粒の%以下含む	(1)灰白色 (2)黒色 (3)赤色 (4)緑色 (5)黒色 (6)赤色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	60
750	別記第 10 号	3P-218	17.8	—	(12.7)	良好	1mm以下の白色・黒色の砂粒の%以下含む	(1)灰白色 (2)黒色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	1
751	別記第 11 号	3P-01	(38.0)	(3.7)	—	良好	1mm以下の灰白色・黒色の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	109
752	別記第 12 号	3P-01	13.6	—	2.2	良好	2mm以下の灰白色・ガラス質の砂粒の%以下含む	灰白色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	57
753	別記第 13 号	3P-01	(14.0)	—	(2.2)	良好	1mm以下の灰白色・黒色の砂粒の%以下含む	(1)灰白色 (2)黒色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	154
754	別記第 14 号	3P-01	(14.0)	—	(1.7)	良好	1mm以下の灰白色・黒色の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	153
755	別記第 15 号	3P-01	(14.0)	—	(1.7)	良好	1mm以下の灰白色・黒色の砂粒の%以下含む	(1)灰白色 (2)黒色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	152
756	別記第 16 号	3P-15	(17.0)	—	(3.0)	不良	1mm以下の白色・灰白色・黒色の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	34
757	別記第 17 号	3P-01	(10.0)	(8.0)	4.4	良好	2mm以下の灰白色・白色の砂粒の%以下含む	(1)灰白色 (2)白色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	155
758	別記第 18 号	3P-01	(12.0)	(6.0)	3.3	良好	1mm以下の灰白色・黒色の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	164
760	別記第 20 号	3P-01	(15.2)	—	(7.3)	良好	1mm以下の灰白色・黒色の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	211
761	別記第 21 号	3P-01	(13.1)	(7.0)	(2.7)	良好	1mm以下の灰白色・黒色の砂粒の%以下含む	灰白色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	156
762	別記第 22 号	3P-01	(16.8)	(11.0)	(2.4)	良好	1mm以下の灰白色の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	151
763	別記第 23 号	3P-01	(14.0)	(11.4)	2.3	良好	1mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	225
764	別記第 24 号	3P-01	—	—	(1.4)	良好	—	—	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	42
765	別記第 25 号	3P-02	(17.8)	—	(2.1)	良好	1mm以下の灰白色・ガラス質の砂粒の%以下含む	(1)同様に灰色 (2)同様に灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	204
766	別記第 26 号	3P-02	(16.0)	—	(1.9)	良好	1mm以下の灰白色・灰色の砂粒の%以下含む	(1)同様に灰色 (2)同様に灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	214
767	別記第 27 号	3P-02	(16.8)	—	(2.6)	良好	1mm以下の灰白色の砂粒の%以下含む	(1)同様に灰色 (2)同様に灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	216
768	別記第 28 号	3P-02	(13.4)	(6.4)	3.0	良好	1mm以下の白色・灰色・黒色の砂粒の%以下含む	灰白色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	105
769	別記第 29 号	3P-02	(16.2)	(13.0)	(2.3)	不良	1mm以下の灰白色・黒色の砂粒の%以下含む	灰色	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	210
770	別記第 30 号	3P-1	—	—	(6.8)	不良	—	—	同様ナゾ	(1)～(6)同様ナゾ (底)同様ナゾより集ナゾ	右図類	218

771	上野原 遺跡	SP-15 SP-01	15.9	—	(5.8)	良好	黒土下の灰白色、褐色色の砂粒の割合は少なからずある。	(内)黄褐色色 (外)灰褐色色	不明	(1)横ナズ (2)横ナズ (3)横ナズ	(1)横ナズ (2)横ナズ (3)横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	66
772	原田遺跡	SP-03 SP-04	(11.9)	(8.0)	(4.5)	良好	10cm以下の灰褐色、ガラス質の砂粒の割合は下を含む。	黄褐色	同横ナズ	(1)横ナズ (2)横ナズ	(1)横ナズ (2)横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	135
777	横山遺跡	SP-126 SP-0-5	(6.4)	—	(2.0)	良好	10cm以下の灰褐色、赤褐色の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)同黄褐色色	ナズ	ナズ	ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	93
778	上野原遺跡	SP-129 SP-23 群	(15.0)	—	(17.2)	良好	10cm以下の灰白色、ガラス質の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)同黄褐色色	横ナズ	横ナズ	横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	144
780	原田遺跡	SP-068 SP-702	(21.0)	(5.3)	(3.3)	良好	20cm以下の灰白色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。 10cm以下の褐色、赤褐色、ガラス質の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)黄褐色色	(1)横ナズ (2)横ナズ	横ナズ	横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	150
781	上野原遺跡	SP-29 SP-097	(22.4)	—	(13.1)	良好	10cm以下の灰白色、灰色、ガラス質、赤褐色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)黄褐色色	不明	(1)横ナズ (2)横ナズ	(1)横ナズ (2)横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	142
782	原田遺跡	SP-091 SP-140 P-3	(23.8)	—	(6.9)	良好	10cm以下の灰褐色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)黄褐色色	横ナズ	横ナズ	横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	28
783	上野原遺跡	SP-140 P-3	(14.3)	—	(4.8)	良好	10cm以下の灰褐色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)黄褐色色	横ナズ	横ナズ	横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	67
784	上野原遺跡	SP-11 遺文 SP-27	(15.0)	—	(5.6)	良好	10cm以下の灰白色、ガラス質の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)黄褐色色	不明	(1)横ナズ (2)横ナズ	不明	黒土土層(内層) 内田遺文	62
785	上野原遺跡	SP-601 P-2	(20.0)	—	(2.5)	良好	10cm以下の褐色、灰白色、褐色色、ガラス質の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)黄褐色色	同横ナズ	横ナズ	横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	149
786	上野原遺跡	SP-21	7.8	3.6	4.8	良好	10cm以下の灰褐色、灰褐色、ガラス質の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)黄褐色色	同横ナズ	横ナズ	横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	158
787	上野原遺跡	SP-01 群	11.9	2.0	14.5	良好	10cm以下の灰褐色、灰白色の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)黄褐色色	(1)横ナズ (2)横ナズ	(1)横ナズ (2)横ナズ	(1)横ナズ (2)横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	3
788	上野原遺跡	SP-082 SP-29	11.5	5.0	14.5	良好	10cm以下の灰褐色、褐色、赤褐色、ガラス質の砂粒の割合は下を含む。 30cm以下の灰褐色	(内)黄褐色色 (外)黄褐色色	ナズ	ナズ	ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	18
789	上野原遺跡	SP-099 SP-254 SP-255	(17.4)	—	(14.0)	劣化 不良	10cm以下の灰褐色、白色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)黄褐色色	(1)横ナズ (2)横ナズ	(1)横ナズ (2)横ナズ	(1)横ナズ (2)横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	6
790	上野原遺跡	SP-37 SP-14 遺文	(28.9)	—	(7.0)	良好	10cm以下の黄褐色、褐色、ガラス質の砂粒の割合は下を含む。	黄褐色	横ナズ	横ナズ	横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	71
791	原田遺跡	SP-501	—	—	—	良好	10cm以下の灰褐色、白色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)黄褐色色	同横ナズ	同横ナズ	同横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	148
792	上野原遺跡	SP-51 SP-69 群	(28.0)	—	—	良好	10cm以下の灰褐色、白色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)黄褐色色	(1)横ナズ	(1)横ナズ	(1)横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	103
793	原田遺跡	SP-69 群	(12.0)	(4.3)	(4.0)	良好	10cm以下の灰褐色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。	(内)黄褐色色 (外)黄褐色色	同横ナズ	同横ナズ	同横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	143
794	原田遺跡	SP-09 SP-11	(11.4)	(6.6)	(3.2)	良好	10cm以下の灰白色、灰色、ガラス質の砂粒の割合は下を含む。	黄褐色	同横ナズ	同横ナズ	同横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	84
795	原田遺跡	SP-37	10.9	2.4	3.2	良好	10cm以下の灰白色、灰色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。	黄褐色	同横ナズ	同横ナズ	同横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	31
796	原田遺跡	SP-05	13.5	—	3.3	良好	10cm以下の灰白色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。	黄褐色	同横ナズ	同横ナズ	同横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	106
797	原田遺跡	SP-45 SP-127	16.0	—	3.1	良好	10cm以下の灰白色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。	(内)灰白色 (外)灰褐色色	同横ナズ	同横ナズ	同横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	58
798	原田遺跡	SP-05	(15.3)	—	(17.7)	良好	10cm以下の灰白色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。	黄褐色	同横ナズ	同横ナズ	同横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	115
799	原田遺跡	SP-05 群	(12.5)	—	(11.9)	良好	10cm以下の灰白色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。	黄褐色	同横ナズ	同横ナズ	同横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	112
800	原田遺跡	SP-01 群 SP-261 P-4	(12.1)	—	(11.5)	良好	10cm以下の灰白色、褐色色の砂粒の割合は下を含む。	黄褐色	同横ナズ	同横ナズ	同横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	97
801	原田遺跡	SP-261 P-3	(14.9)	(16.1)	(5.8)	良好	10cm以下の灰白色、ガラス質の砂粒の割合は下を含む。	黄褐色	同横ナズ	同横ナズ	同横ナズ	黒土土層(内層) 内田遺文	133

802	短毛綿 短毛綿 短毛綿 短毛綿	SP-330 SP-40 SP-113 SP-113	(12.9)	8.8	4.2	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	(10) 黒褐色 (05) 灰色	同様にナゲ	(11→14) 黒褐色ナゲ (13) 黒褐色ナゲ (12) 黒褐色ナゲ (11) 黒褐色ナゲ	101
803	短毛綿 短毛綿	SP-9 SP-113	(11.9)	(7.2)	(4.0)	良好	1→2mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	オリーブ灰色	同様にナゲ	(11→14) 黒褐色ナゲ (13) 黒褐色ナゲ (12) 黒褐色ナゲ (11) 黒褐色ナゲ	104
804	短毛綿 短毛綿	SP-113 SP-113	(14.2)	(8.0)	3.5	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	オリーブ灰色	同様にナゲ	(11→14) 黒褐色ナゲ (13) 黒褐色ナゲ (12) 黒褐色ナゲ (11) 黒褐色ナゲ	109
805	短毛綿 短毛綿	SP-40 SP-113	(11.4)	(7.4)	(4.4)	良好	1mm以下の灰白色の繊維が10%以下を含む	(05) オリーブ灰色 (05) 黒褐色	同様にナゲ	(11→14) 黒褐色ナゲ (13) 黒褐色ナゲ (12) 黒褐色ナゲ (11) 黒褐色ナゲ	110
806	短毛綿 短毛綿	SP-40 SP-113	—	(7.3)	(2.8)	良好	1mm以下の灰白色の繊維が10%以下を含む	(05) 黒褐色	同様にナゲ	(11→14) 黒褐色ナゲ (13) 黒褐色ナゲ (12) 黒褐色ナゲ (11) 黒褐色ナゲ	111
807	短毛綿 短毛綿	SP-147 P-3 SP-147 P-1	12.6	7.0	3.0	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	灰色	同様にナゲ	(11→14) 黒褐色ナゲ (13) 黒褐色ナゲ (12) 黒褐色ナゲ (11) 黒褐色ナゲ	45
808	短毛綿 短毛綿	SP-182 P-5 SP-40	(13.2)	(10.9)	(2.0)	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	明オリーブ灰色	同様にナゲ	(11→14) 黒褐色ナゲ (13) 黒褐色ナゲ (12) 黒褐色ナゲ (11) 黒褐色ナゲ	108
809	短毛綿 短毛綿	SP-40 SP-40	25.0	—	(5.9)	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	黒褐色	同様にナゲ	(11→14) 黒褐色ナゲ (13) 黒褐色ナゲ (12) 黒褐色ナゲ (11) 黒褐色ナゲ	104
810	短毛綿 短毛綿	SP-208 SP-104	—	—	—	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	ナゲ	黒綿(家) ナゲ	200
811	短毛綿 短毛綿	SP-6 SP-6	8.4	—	—	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	109
812	短毛綿 短毛綿	SP-9 SP-9	(10.0)	—	(3.2)	良好	1mm以下の灰白色・白色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	107
823	短毛綿 短毛綿	SP-6 SP-6	(12.2)	—	(2.5)	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	107
824	短毛綿 短毛綿	SP-9 SP-9	(12.3)	(3.0)	(2.2)	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	107
825	短毛綿 短毛綿	SP-7 SP-7	(17.1)	(11.0)	3.0	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	107
826	短毛綿 短毛綿	SP-10 SP-10	(10.9)	2.0	3.3	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	65
827	短毛綿 短毛綿	SP-6 SP-6	(17.1)	(11.0)	3.0	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	181
828	短毛綿 短毛綿	SP-14 SP-14	13.6	4.5	3.4	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	26
829	短毛綿 短毛綿	SP-9 SP-9	13.4	9.4	4.0	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	64
830	短毛綿 短毛綿	SP-14 SP-14	11.9	4.0	3.8	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	74
831	短毛綿 短毛綿	SP-14 SP-14	9.9	4.0	(2.5)	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	178
832	短毛綿 短毛綿	SP-9 SP-9	(13.0)	(8.2)	3.0	良好	1mm以下の灰白色・白色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	180
833	短毛綿 短毛綿	SP-10 SP-10	(13.0)	—	(4.6)	良好	1mm以下の灰白色・白色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	26
834	短毛綿 短毛綿	SP-11 SP-11	(11.0)	—	(3.4)	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	20
835	短毛綿 短毛綿	SP-7 SP-7	14.1	—	(9.3)	良好	1mm以下の灰白色・黒褐色・灰色・オリーブ色の繊維が10%以上多く含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	177
836	短毛綿 短毛綿	SP-14 SP-14	(13.0)	—	(7.4)	良好	1mm以下の灰白色・白色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	17
837	短毛綿 短毛綿	SP-12 SP-12	9.5	3.5	9.1	良好	1mm以下の灰白色・黒褐色・灰色・オリーブ色の繊維が10%以上多く含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	2
838	短毛綿 短毛綿	SP-9 SP-9	(12.7)	—	(13.8)	良好	1mm以下の灰白色・黒褐色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	21
839	短毛綿 短毛綿	SP-7 SP-7	(17.2)	—	(14.9)	良好	1mm以下の灰白色・黒褐色・灰色・オリーブ色の繊維が10%以上多く含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	36
840	短毛綿 短毛綿	SP-10 SP-10	(14.0)	—	(3.2)	良好	1mm以下の灰白色・黒褐色・灰色・オリーブ色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	169
841	短毛綿 短毛綿	SP-16 SP-16	(20.0)	—	(7.8)	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒褐色の繊維が10%以下を含む	同様にナゲ	同様にナゲ	黒綿(家) ナゲ	169

842	土俵跡 P-10 包一	206.0	—	{6.3}	良好	1mm以下の灰色・褐色の砂粒10%以下含む	{01}白色・黄褐色 {02}灰褐色 {03}黄褐色	{11~10}褐色ナガ {12}褐色・ク	中層	(11~10)褐色ナガ 間柱正置 (12)褐色・ク	176
843	土俵跡 P-9 包一 既	222.0	—	{5.3}	良好	1mm以下の白色・灰色・灰褐色・ガラス質の砂粒10%以下含む	{01}白色 {02}黄褐色	ナガ			26
844	土俵跡 P-11 包一 既	208.0	—	{6.6}	良好	1mm以下の灰白色・褐色・黒色・赤色の砂粒10%以下含む 1mm以下の灰白色・褐色・黒色・赤色の砂粒10%以下含む	赤褐色 赤褐色	不明		(10~9)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	22
845	土俵跡 P-10 包一 既	07.4	—	{8.2}	良好	1mm以下の白色・灰白色・ガラス質の砂粒10%以下含む	赤褐色	褐色ナガ ヘタ・ケズリ		(10~9)褐色ナガ (12)褐色ナガ ヘタ	174
846	土俵跡 P-6 包一 既	—	—	—	良好	2mm以下の白色・灰白色・ガラス質の砂粒10%以下含む	赤褐色			赤手付	220
847	土俵跡 P-11 包一 既	30.0	—	{04.0}	良好	1mm以下のオリーブ褐色の砂粒10%以下含む	灰白色	ナガ		タキメ 既埋本	70
848	土俵跡 P-11 包一 既	{04.7}	—	{4.1}	良好	1mm以下の灰白色・褐色の砂粒10%以下含む	灰白色	同床ナガ		(10)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	171
849	土俵跡 P-10 包一 既	{04.0}	—	{3.2}	良好	2mm以下の灰白色・砂粒10%以下含む 2mm以下の砂粒10%以下含む	灰色	(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	16
850	土俵跡 P-10 包一 既	{04.8}	—	3.2	良好	1mm以下の灰白色・灰褐色・ガラス質の砂粒10%以下含む	灰色	同床ナガ		(10)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	52
851	土俵跡 P-11 包一 既	{02.0}	—	{5.6}	良好	砂粒10%以下含む	灰色	同床ナガ		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	53
852	土俵跡 P-7 包一 既	{02.8}	—	3.1	良好	1mm以下の褐色・灰白色の砂粒5%以下含む	{01}黄褐色 {02}灰褐色 {03}灰白色	同床ナガ		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	196
853	土俵跡 P-8 包一 既	11.6	—	3.7	良好	2mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰色	(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	15
854	土俵跡 P-14 包一	{04.3}	{0.4}	3.4	良好	1mm以下の灰白色・褐色の砂粒10%以下含む 多く含む	灰色	同床ナガ		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	100
855	土俵跡 P-7 包一 白表層	{04.8}	—	{3.2}	良好	1mm以下の灰白色・黄褐色の砂粒10%以上含む 2層の4層に達する	灰色	同床ナガ		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	213
856	土俵跡 P-8 包一 既	最大 (02.6) 最小 (01.2)	—	{3.3}	良好	2mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰白色	同床ナガ		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	215
857	土俵跡 P-10 包一 既	10.0	—	3.6	良好	1mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の砂粒10%以下含む	黄褐色	同床ナガ		(10)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	56
858	土俵跡 P-7 包一 既	7.4	—	2.7	良好	1mm以下の灰白色・褐色の砂粒10%以下含む の砂粒10%以下含む	同床ナガ	同床ナガ		(10)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	50
859	土俵跡 P-14 包一 既	{04.2}	—	3.6	良好	1mm以下の灰白色・灰色・ガラス質の砂粒10%以下含む	灰色	同床ナガ		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	51
860	土俵跡 P-6 包一 既	09.4	{0.7}	3.3	良好	2mm以下の灰白色・褐色の砂粒10%以下含む	灰色	同床ナガ		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	117
861	土俵跡 P-11 包一 既	{04.8}	—	4.2	良好	1mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰色	同床ナガ		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	186
862	土俵跡 P-11 包一 既	{04.2}	—	3.9	良好	1mm以下の灰白色・褐色・褐色の砂粒10%以下含む	黄褐色	同床ナガ		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	29
863	土俵跡 P-8 包一 既	{04.0}	—	2.4	良好	2mm以下の灰白色・褐色の砂粒10%以下含む	灰色	同床ナガ		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	185
864	土俵跡 P-9 包一 既	13.6	—	3.2	良好	1mm以下の灰白色・褐色・ガラス質の砂粒10%以下含む	灰色	同床ナガ		同床ナガ	55
865	土俵跡 P-9 包一 既	{04.0}	—	2.9	良好	2mm以下の灰白色の砂粒10%以下含む	灰色	(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	184
866	土俵跡 P-3 包一 既	{02.0}	—	{1.9}	良好	1mm以下の灰白色・灰褐色・ガラス質の砂粒10%以下含む	{01}灰褐色 {02}オリーブ灰色 灰色	同床ナガ		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	196
867	土俵跡 P-02 包一	{04.0}	—	1.3	良好	1mm以下の灰白色・褐色・褐色の砂粒10%以下含む	灰色	同床ナガ		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	33
868	土俵跡 P-6 包一 既	16.0	9.8	4.1	良好	1mm以下の灰白色・白色・ガラス質の砂粒10%以下含む	黄褐色	同床ナガ		(10~9)褐色ナガ (11)褐色ナガ (12)褐色ナガ 間柱へタテ多き層	192

869	原形漆 厚塗り	9-9 包一箱	(14.4)	(7.8)	4.8	良好	2mm以下の灰白色の粉砕率が95%以下含む	(P) 灰白色 (R) 灰色	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	12
870	原形漆 厚塗り	9-12 包一箱	(15.2)	5.4	10.0	中々 不良	2mm以下の白色・灰褐色・ガラス質の 凝り塊が1%以下含む	にじみ・着色	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	40
871	原形漆 厚塗り	9-11 包一箱	(15.6)	(11.0)	6.5	良好	1mm以下の灰白色の粉砕率が85%以上含む	(P) 灰白色 (R) 灰色	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	11
872	原形漆 厚塗り	9-13 包一箱	(11.8)	(8.0)	3.6	良好	1mm以下の灰白色の粉砕率が95%以上含む	(P) 灰白色 (R) 灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	121
873	原形漆 厚塗り	9-12 包全備	—	7.4	(2.1)	良好	2mm以下の黒褐色・灰白色の凝り塊が10%以下含む	着色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	無毒	126
874	原形漆 厚塗り	9-6 包一箱	—	(14.0)	(2.4)	良好	1mm以下の白色・灰褐色・ガラス質の凝り塊が1%以下含む	灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	無毒	132
875	原形漆 厚塗り	9-6 包一箱	(13.0)	(8.2)	3.4	良好	1mm以下の白色・灰褐色・ガラス質の凝り塊が1%以下含む	灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	無毒	138
876	原形漆 厚塗り	9-9 包一箱	(12.2)	(9.0)	3.0	良好	1mm以下の灰白色・灰褐色・ガラス質の凝り塊が10%以下含む	灰白色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	120
877	原形漆 厚塗り	9-6 包一箱	(13.8)	(16.4)	6.4	良好	2mm以下の灰白色・灰褐色の凝り塊が10%以下含む	灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	118
878	原形漆 厚塗り	9-13 包一箱	(13.0)	(16.4)	3.6	中々 不良	2mm以下の灰白色・灰褐色の凝り塊が10%以下含む	灰色	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	9
879	原形漆 厚塗り	9-6 包一箱	12.0	7.0	2.7	中々 不良	1mm以下の灰白色・灰褐色・凝り塊の 凝り塊が10%以上含む	(P) 灰白色 (R) 灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	44
880	原形漆 厚塗り	9-9 包一箱	(13.6)	6.8	4.1	良好	1mm以下の灰白色・灰褐色・凝り塊の 凝り塊が10%以上含む	(P) 灰白色 (R) 灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	30
881	原形漆 厚塗り	9-6 包一箱	(13.9)	9.0	5.2	良好	1mm以下の灰白色・黒褐色の凝り塊が10%以下含む	灰白色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	127
882	原形漆 厚塗り	9-8 包一箱	(17.0)	(8.2)	3.0	良好	1mm以下の黒褐色・灰白色の凝り塊が10%以下含む	灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	無毒	130
883	原形漆 厚塗り	9-13 包一箱	(13.0)	(7.1)	3.9	良好	1mm以下の灰白色の粉砕率が95%以上含む	明オリーブ灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	無毒	194
884	原形漆 厚塗り	9-8 包一箱	(13.9)	10.0	1.9	良好	1mm以下の灰白色・暗灰色の凝り塊が10%以上含む	灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	無毒	209
885	原形漆 厚塗り	9-8 包一箱	(14.7)	9.1	2.1	良好	2mm以下の白色・灰褐色・凝り塊・ガラス質の凝り塊が10%以上含む	灰オリーブ色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	無毒	190
886	原形漆 厚塗り	9-5 包一箱	(16.0)	(13.0)	2.1	不良	1mm以下の灰白色・灰褐色・凝り塊の凝り塊が10%以上含む	灰白色	不明	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	10
887	原形漆 厚塗り	9-8 包一箱	(14.8)	(10.0)	2.1	良好	1mm以下の灰白色・灰褐色・ガラス質の凝り塊が10%以下含む	灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	191
888	原形漆 厚塗り	9-8 包一箱	(17.8)	(15.4)	2.1	良好	1mm以下の灰白色の粉砕率が95%以上含む	明緑灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	無毒	189
889	原形漆 厚塗り	9-9 包一箱	—	(8.2)	—	良好	1mm以下の灰白色の粉砕率が95%以下含む	灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	無毒	188
890	原形漆 厚塗り	9-8 包一箱	—	(7.6)	(2.3)	良好	1mm以下の灰白色の粉砕率が95%以下含む	灰白色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	無毒	131
891	原形漆 厚塗り	9-6 包一箱	—	8.3	(2.4)	良好	2mm以下の灰白色・灰褐色の凝り塊が10%以上含む	灰白色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	無毒	125
892	原形漆 厚塗り	9-10 包一箱	—	(11.2)	—	良好	1mm以下の灰白色の粉砕率が95%以上含む	灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	無毒	199
893	原形漆 厚塗り	9-12 包一箱	—	—	—	良好	2mm以下の灰白色・黒褐色の凝り塊が10%以下含む	灰褐色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	128
894	原形漆 厚塗り	9-10 包一箱	12.6	—	3.2	良好	1mm以下の白色・濃黄色・黒褐色の凝り塊が10%以上含む	灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	14
895	原形漆 厚塗り	9-9 包一箱	—	4.2	(6.4)	良好	2mm以下の灰白色の粉砕率が95%以下含む	灰色	不明	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	182
896	原形漆 厚塗り	9-11 包一箱	(8.2)	(6.0)	7.0	良好	2mm以下の灰白色・黒白色・黒褐色・濃黄色・黒褐色の凝り塊が10%以上含む	(P) 灰オリーブ色 (R) 灰色	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	13
897	原形漆 厚塗り	9-10 包一箱	—	—	(2.7)	良好	2mm以下の灰白色の粉砕率が95%以上含む	(P) 灰褐色 (R) 灰色	同様にナフ	(1) (R) 同様にナフ (R) 一定方向のナフ	右向き? 左向き?	187

898	原色紙 黒	8×8 包	(13.0)	—	2.4	良好	1mm以下の灰白色の粉粒が以下を含む (内)灰白色 (外)灰白色	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	197
899	原色紙 高坪	6×6 包一箱	(12.2)	[3.0]	3.0	良好	1mm以下の灰白色、灰色、ガラス質の粉粒 200人の目で見難くなる	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	198
900	原色紙 薄	8×4 包一箱	(29.8)	—	[4.1]	良好	1mm以下の灰色、白色の粉粒が以下を含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	199
901	原色紙 厚	8×6 包一箱	(24.0)	—	[6.0]	良好	2mm以下の灰白色、灰色、ガラス質の粉粒 200人の目で見難くなる	(内)同紙ナゾ (外)同紙ナゾ	(内)同紙ナゾ (外)同紙ナゾ	(内)同紙ナゾ (外)同紙ナゾ	(内)同紙ナゾ (外)同紙ナゾ	200
902	原色紙 厚	8×6 包一箱	(21.2)	—	[3.6]	不良	1mm以下の灰白色、白色の粉粒が以下を含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	201
903	原色紙 薄	8×10 包一箱	(21.0)	—	[11.9]	不良	1mm以下の灰白色、白色の粉粒が以下を含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	202
904	原色紙 厚	8×7 包一箱	—	(8.0)	[1.1]	不良	不良	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	203
922	原色紙 厚	8×5 包、44×5	(14.2)	—	3.1	良好	1mm以下の灰白色、種灰色の粉粒が10%以上 多く含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	212
923	原色紙 厚	8×5 包、44×5	18.6	—	4.1	良好	1.5mm以下の灰色、白色の粉粒が以下を含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	170
924	原色紙 厚	8×5 包、44×5	(23.0)	—	[2.0]	良好	1.5mm以下の灰色、白色の粉粒が10%以下を含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	169
925	原色紙 厚	8×5 包、44×5	(12.6)	8.1	4.1	良好	1mm以下の灰色、白色の粉粒が以下を含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	167
926	原色紙 厚	8×5 包、44×5	(13.0)	(5.4)	3.4	良好	2mm以下の灰色、白色の粉粒が以下を含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	165
927	原色紙 厚	8×5 包、44×5	(20.6)	(8.1)	(13.3)	良好	1~2mm以下の白色、灰色の粉粒が以下を含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	166
928	原色紙 厚	8×5 包、44×5	(24.0)	—	[7.3]	良好	1.5mm以下の白色、黒褐色の粉粒が10%以下 を含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	61
929	原色紙 厚	8×7 包一箱	—	—	[5.6]	良好	3mm以下の灰白色、黒褐色の粉粒が10%以下 を含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	172
930	原色紙 厚	8×14	—	—	—	良好	3mm以下の白色、灰白色の粉粒が以下を含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	219
931	原色紙 厚	8×14 包一箱	(8.9)	(6.9)	(11.2)	良好	1mm以下の赤褐色、黒褐色の粉粒が以下 を含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	147
932	原色紙 厚	8×11 包	(11.4)	—	2.2	良好	1mm以下の灰色、赤褐色の粉粒が以下を含む	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	73
933	原色紙 厚	8×11 包	—	(8.0)	[3.1]	良好	不良	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	同紙ナゾ	92
												201

石製品観察表

標本 No.	産地	産期	産	傾	厚	色調	備考
96 産	88-02		(6.3)	[4.0]	2.2	赤褐色	
97 産	88-04		[5.2]	4.1	1.1	青褐色	

木製品観察表

単位： [] : 残存値

遺物 No.	地区	出土位置	製品名	全長	最大幅	最小幅	長さ	幅	最大厚	最小厚	厚さ	備考
90	1区	SE-03 甲-12	楕底	—	—	—	19.1	18.5	1.0	—	—	—
91	1区	SE-03 甲-1	楕底 細打?	[10.8]	27.3	—	—	—	8.3	—	—	ほぼ丸あり
92	1区	SE-04 甲-1	楕底	—	—	—	18.9	—	1.2	—	—	—
699	3区	SE-01 甲-5	舟形舟	41.8	41.8	—	—	—	6.1	3.5	—	—
700	3区	SE-01 甲-7	舟形舟	33.9	43.5	—	—	—	4.7	3.8	—	—
701	3区	SE-21 甲-13	舟形舟	35.0	27.5	—	—	—	4.4	3.7	—	楕打ている部分有
702	3区	SE-21 甲-21	舟形舟	198.3	[30.0]	—	—	—	4.5	3.5	—	楕打ている部分有

金属製品観察表

単位： [] : 残存値

遺物 No.	地区	遺構	種類	長さ	幅	厚さ	孔直径	孔間径	最大厚	最小厚	厚さ	備考
118	1区	SP-170	古銭	13.1	12.7	0.95	7.65	7.75	2.16	—	—	奈良遺跡(北米,1038年)
119	1区	SP-170	古銭	12.45	12.1	最大 2.0 最小 0.1	6.15	6.3	3.17	—	—	天智元寶(北米,1022年) 又は、唐聖元寶(北米,1064年)
120	1区	SK-16	古銭	—	—	—	—	—	—	—	—	唐和遺跡(北米,1111年)
121	1区	SP-170	刀剣片	2.6	最大 2.0 最小 0.1	—	—	—	—	—	—	—
151	1区	SP-04	不明鉄製品	2.9	3.0	最大 — 最小 0.5	—	—	7.30	—	—	—
260	2区	SK-21 1区	小刀?	—	最大 1.5 最小 0.5	—	—	—	6.83	—	—	—
483	2区	SP-01 乙-34 甲-17	不明鉄製品	[4.7]	1.2	—	—	—	7.67	—	—	—
595	2区	乙-35	不明鉄製品	[1.9]	0.75	—	—	—	2.03	—	—	—
717	3区	SK-07 甲-1	小刀?	[4.8]	1.3	—	—	—	7.67	—	—	—
718	3区	SK-03 甲-1	小刀?	11.2	1.4	—	—	—	36.41	—	—	—
773	3区	SP-01 乙	小刀?	[8.5]	1.6	—	—	—	30.57	—	—	—
934	3区	乙-11 甲-15	不明鉄製品	9.5	3.5	—	—	—	186.90	—	—	—
935	3区	SP-01 乙-1	小刀?	[6.8]	1.7	—	—	—	30.14	—	—	—
936	3区	乙-8 甲-15	不明鉄製品	[5.7]	1.1	—	—	—	13.83	—	—	—
937	3区	SK-01	不明鉄製品	[4.1]	1.0	—	—	—	4.38	—	—	—

土鐘観察表

国産 No.	区	出土遺構	層位	類別	新形部数	長さ	直径	重量	孔径	遺存状況	跡面	附土	備考	実測 No.
142	1	SD-05	土層	土層	円	5.5	3.0	35.6	0.5	先施欠損	片	φ1mm附土		29
143	1	SD-05	土層	土層	円	4.9	1.4	7.6	0.5	完好		φ1mm附土		30
144	1	SD-05	黒土	土層	円	4.2	1.1	4.4	0.5	先施欠損		φ1mm附土	ねじれあり	31
145	1	SD-05	土層	土層	円	4.9	1.8	4.7	0.5	先施欠損		φ1mm附土		32
149	1	SD-05	土層	土層	円	2.7	1.1	2.0	0.5	先施欠損		φ1mm附土		33
146	1	SD-05	土層	土層	円	3.2	1.4	8.2	0.5	先施欠損		φ1mm附土		34
148	1	SD-05	土層	土層	円	2.6	1.4	3.9	0.5	先施欠損		φ1mm附土		35
150	1	SD-05	土層	土層	円	2.8	1.2	2.5	0.5	先施欠損	片	φ1mm附土		36
147	1	SD-05	土層	土層	円	2.6	1.4	2.5	0.5	先施欠損	片	φ1mm附土		37
464	2	SD-01	1層	土層	円	4.9	1.2	6.9	0.4	完好		φ1mm多弁		1
465	2	SD-01	1層	土層	円	5.1	1.3	7.4	0.5	完好	片	ほとんどなし		2
466	2	SD-01	1層	土層	円	4.6	1.3	7.0	0.5	完好		φ1mm附土		3
467	2	SD-01	1層	土層	円	5.3	1.2	9.0	0.4	完好		φ1mm多弁	ねじれあり	4
468	2	SD-01	1層	土層	円	5.5	1.4	10.7	0.5	完好		φ1mm多弁		5
469	2	SD-01	1層	土層	円	5.3	1.4	9.6	0.5	完好		φ1mm多弁		6
470	2	SD-01	1層	土層	円	5.5	1.4	10.1	0.5	完好		φ1mm附土		7
471	2	SD-01	1層	土層	円	4.6	1.2	6.6	0.4	完好		φ1mm附土		8
472	2	SD-01	1層	土層	円	3.5	1.4	7.7	0.4	完好	片	φ1mm附土		9
473	2	SD-01	1層	土層	円	3.7	1.3	8.0	0.5	完好		φ1mm附土		10
479	2	N34	雑瓦	土層	楕円	0.2	0.1	1.8×0.9	0.5	先施欠損		ほとんどなし		11
578	2	N34	雑瓦	土層	円	0.5	0.3	0.5	0.5	先施欠損		ほとんどなし		12
577	2	N37	土層	土層	—	0.0	0.5	0.5	0.4	先施欠損		ほとんどなし		13
576	2	N38	土層	土層	—	3.7	0.2	0.2	0.4	長軸1/2欠損		ほとんどなし		15
473	2	SD-01	1層	土層	楕円	0.4	0.1	0.5	0.5	先施欠損		φ1mm多弁		16
275	2	SK-31	土層	土層	楕円	4.9	1.9×1.7	15.9	0.5	完好		ほとんどなし		17
474	2	SD-01	雑瓦土	土層	円	4.1	2.0	18.1	0.5	完好	片	φ1mm附土	ねじれあり	18
475	2	SD-01	土層	土層	円	4.1	1.5	0.4	0.5	完好		φ1mm多弁	ねじれあり	21
476	2	SD-01	1層	土層	円	0.3	0.9	0.2	0.5	先施欠損		ほとんどなし	ねじれあり	24
213	2	SK-13	P-02	陶	円	5.1	1.0	6.1	0.4	ほぼ完好	片	φ1mm多弁	ねじれあり・工具による字痕あり	25
214	2	SK-13	P-02	陶	円	4.2	0.9	4.8	0.4	ほぼ完好		φ1mm多弁	ねじれあり	26
477	2	SD-01	1層	陶	円	2.5	1.1	3.9	0.4	完好	両	φ1mm附土		27
478	2	SD-01	陶	陶	円	3.9	1.7	8.1	0.5	ほぼ完好	両	φ1mm附土	両面に根欠損	28
479	2	SD-01	陶	陶	円	2.7	1.7	6.9	0.5	完好	両	φ1mm附土	工具による字痕あり	45
480	2	SD-01	陶	陶	円	2.6	1.7	6.5	0.5	完好	片	φ1mm附土	工具による字痕あり	46
920	3	SP-1000	土層	土層	円	3.5	1.1	0.4	0.4	先施欠損		φ1mm附土		14
910	3	D9	包-1段	土層	—	4.4	0.9	0.1	0.5	長軸1/2欠損		ほとんどなし		19
912	3	6-1.2	土層	土層	円	4.9	1.3	6.8	0.4	ほぼ完好		ほとんどなし		20
821	3	SK-72	土層	土層	円	0.4	0.9	0.4	0.4	先施欠損		φ1mm多弁		22
915	3	B+C-6層	土層	土層	円	5.4	3.1	81.5	1.0	完好	片	φ1mm附土		23
917	3	B18	土層	土層	円	2.4	4.3	6.3	1.5	完好	片	φ1mm附土	断面が凹面状に若干	26
914	3	CT	土層	土層	円	5.7	2.6	35.1	0.8	完好	片	φ1mm附土		29

第6章 遺構と遺物の検討

第1節 飛鳥時代～平安時代にかけての須恵器・土師器の編年の位置付け

第6表 時期区分表

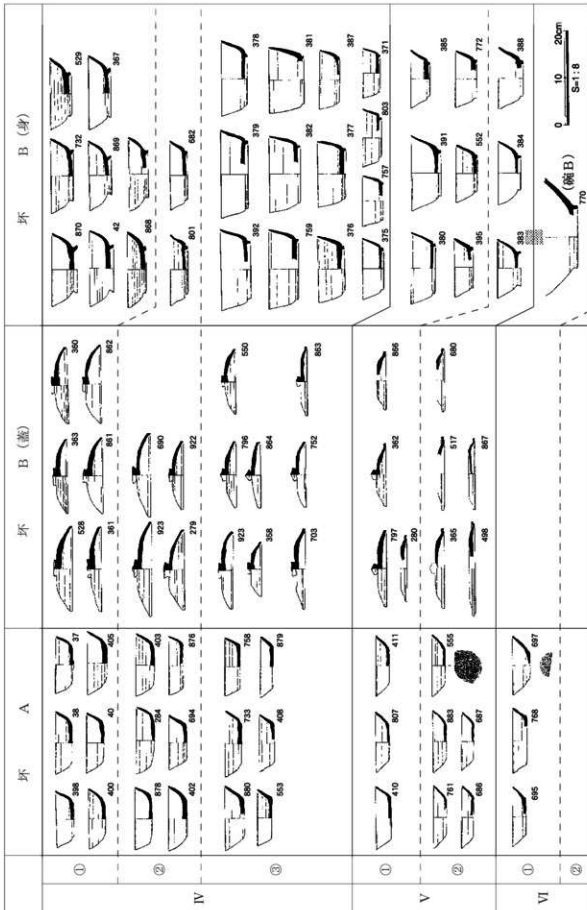
乗兼・坪江遺跡 時期区分	田島編年
I期	I ₁ 期
II期	I ₂ 期
	II ₁ 期
III期	II ₂ 期
IV	III ₁ 期
	IV ₁ 期
	IV ₂ 期(古)
V	IV ₂ 期(新)
	V ₁ 期
	V ₂ 期
VI	VI ₁ 期
	VI ₂ 期
VII	VI ₃ 期
	VII ₁ 期(古)

前節まで報告してきたように、飛鳥時代～平安時代にかけての遺物が多く出土している。これらの出土遺物について、本節では次節の遺構の変遷を考えるための一助とするため、先学の土器研究(註1)を基に、大枠ではあるが土器の編年的な位置付け作業を行っていきたい。ここでは、須恵器の坏H・坏G・高坏(有蓋と無蓋)・坏A・坏B・盤A・盤B・皿Bを、その他には土師器坏・土師器碗A・土師器碗B・土師器黒色土器・灰軸陶器・緑軸陶器の遺物を取り上げ、時期設定を行う。今回、調査により出土した土器から大きくI期からVI期に分類し、さらにその中で9小期に区分した(第6表)。時期設定の区分については、田嶋氏の土器編年軸に準拠しながら位置付け作業を行った。

I期の段階とした須恵器坏H蓋は、口径が11cm台～12cm台を測り、天井部は多くが回転ヘラ切り後ナゲ調整を施すが、不調整やケズリ調

	坏 H			坏 B	高 坏	
					有 蓋	無 蓋
I						
	 S=1:8					

第146図 須恵器編年(1)



第147図 須恵器編年(2)

	盤 A	盤 B	皿 B	墨書土器
①				
②				
IV				
③				
①				
V				
②				
①				
VI				
②				











第149図 須恵器編年(3)

整のものが一部ある。坏Hは口径が11cm前後のものが多く、底部調整は、回転ヘラ切り後不調整とナデ調整の双方が存在する。立ち上がり部はやや長く斜め上方に伸びる。須恵器高坏では有蓋と無蓋が確認されている。有蓋の坏部の立ち上がりは長く、やや上方に伸びる。また、無蓋高坏は、長脚2段2方透かしまたは3方透かしが認められる。

II期の段階では、須恵器坏H蓋は口径が10cm前後を測り、前段階のものに比べて小さくなる。天井部の調整はヘラ切り後ナデ調整が多く認められるが、一部ケズリ調整や不調整もある。須恵器坏Hは口径10～11cm前後で、やはり前段階と比べて小さくなる。底部の調整はヘラ切り後ナデ調整がほとんどを占める。立ち上がりは短く、坏部からわずかに出る。須恵器坏Gは、蓋が口径10～11cm前後を測り、天井部の調整は回転ヘラ切り後ナデ(246・28・548)とケズリ(346・58)調整に分かれる。また、かえりが口縁部と同じ高さのもの(246・28・548)とやや短いもの(346・58)があり、調整やかえりの器形からさらに時間的な細分が可能と考えられる。須恵器有蓋高坏は、坏部の立ち上がりは短くなり、この段階から脚部の透かしはなくなる。須恵器無蓋高坏も脚部には透かしが認められない。坏部の底部は、立ち上がりがやや鋭角なもの(526・496)と丸みを持つもの(203)に分類できる。

III期の段階には、本遺跡から出土した遺物は確認できず、空白期間が存在する。

IV期の段階においては、さらに3時期に細分可能である。IV①期では、須恵器坏Aが、底部から体部にかけてやや丸みをもち、深みのある器形を持ち合わせる。須恵器坏B蓋は、扁平の円盤状つまみを有し、口縁端部の折り返しは三角形を呈する。また、器形は山笠状のものが多く認められる。須恵器坏B身は、外側に踏ん張って付けられる高台を持ち、口縁部は外側に開く形態を示す。IV②期では、須恵器坏Aが前段階と比べて、底部の立ち上がりがやや鋭角になる。また、まっすぐに伸びる口縁部をもち、器高も低くなる。須恵器坏B蓋は、IV①期の蓋よりも器高が低くなるものが多く、つまみも前段階より径が小さくなる。須恵器坏B身は、扁平の器形になり、低い高台が外側に踏ん張る形で付く。須恵器盤Aは短く直立する口縁部をもち、概して厚手の底部を有する。IV③期とした須恵器坏Aは深みの器形と前段階からのやや扁平の器形のものの両方があり、ともに口縁部が直線的にやや外側に開く形態を持ち合わせる。須恵器坏B蓋はつまみの中央部が盛り上がりを見せ、小型化したものになる。また、口縁端部においては折り曲がるものも含まれてくる。須恵器坏B身は深みの器形で、体部から口縁部にかけて直線的に伸びていく形態のものが多く認められる。須恵器盤Aは前段階よりも口縁部の立ち上がりがよ

	土師器 坏	土師器 碗A	土師器 碗B	黒色土器	灰釉陶器	緑釉陶器
V						
VI	① 					
	②	 	 			

第149図 土師器・その他の土器編年

り外側に開く。法量においては小型化したものも含まれてくる。須恵器盤Bは概して厚手の器厚を有し、大型の器形で深みものも含まれる。

V期の段階においては、2時期に細分可能である。V①期とした須恵器坏Aは、前段階と比べて扁平になり、薄手に作られるようになる。また、口縁部もやや外側に開き気味である。須恵器坏B蓋は、平坦な天井部をもち、器形がやや扁平となる。口縁部は短く鋭い曲がりをもつものが多い。須恵器坏B身は前段階と比べてやや外側に開く口縁部をもち、器高もやや低くなる。須恵器盤Aおよび須恵器盤Bは前段階と比べて口縁部が外側に開き、薄手の作りとなる。V②期では、須恵器坏Aは非常に薄手の作りになり、特に体部から口縁部にかけて薄く成形される。坏B蓋は扁平の器形になり、この時期から天井部につまみをもたない無紐のもの(867)が含まれる。須恵器坏B身は体部にやや丸みをもち、口縁部は外反する形態をもつ。須恵器盤Aは坏Aと同じく非常に薄手の作りになる。口縁部は外側に大きく開き、器高も低くなる。V期の段階中には、土師器坏(50・829)がある。やや深みの器形で、体部から口縁部にかけて直線的に伸びる形態をもつ。土師器坏の詳細な時期区分は、出土量が非常に少なかったため、今回は細分しなかった。50・829はV期の範疇で取っておきたい。

VI期の段階も2時期に細分できる。VI①期である須恵器坏Aは、やや厚手の底部をもち、体部から口縁部にかけては薄く引き伸ばす成形形態を有す。一部には底部切り離しに糸切りを行うものも含まれる。その他は底部へラ切り後ナデ調整が施される。須恵器碗B(770)は、いわゆる大平鉢である。出土量は極めて少ない。今回は須恵器碗BをVI①期に設定したが、前段階の時期に位置付けしても良いかもしれない。須恵器皿B(532)も須恵器碗Bと同じく出土量は非常に少ない。時期設定もV②期にあがる可能性がある。土師器坏(832)は須恵器坏(695)と同様の作りからなる。VI②期では土師器碗A(830・831・777)がある。体部から口縁部にかけて丸みをもち、底部糸切りを施す。土師器碗B(319・535)はやや丸みをもつ体部を有し、高めの高台をもつ。一部はVI①期に上がる可能性が考えられる。今回出土した黒色土器(55・537)と灰胎陶器(542・548・540)については、断片資料のため大きくVI期の範疇に収めた。一部はV②期に上がる可能性も否めない。緑釉陶器(538・539)についても、同様に細かな時期設定はできなかった。VI期の範疇で収めた。

墨書土器は一定量出土しているが、そのほとんどは須恵器坏A・蓋もしくは盤Aである。帰属時期が明らかな墨書土器は少なかったが、概ねV期に含まれるものと考えられる。

乗兼・坪江遺跡では、飛鳥時代～平安時代の出土遺物について、大きくVI期の時期設定を行った。また、空白期間が1時期(Ⅲ期)存在することも判明した(註2)。I期からVI期の暦年代については、I期を7世紀第1四半期、II期を7世紀第2四半期～第3四半期にかけて、IV期を概ね8世紀代、V期を9世紀代、VI期を10世紀第1四半期～第3四半期とする時間軸の位置付けを行っておきたい。(中川)

(註)

- 1) 水村伸行『鉢伏2・3号築址発原発掘調査概要』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター1990年
水村伸行「6穂原古築址」『金津町埋蔵文化財調査概要 平成元年～五年度』金津町教育委員会1995年
久保智康『北陸の古代寺院—その源流と古瓦』1987年
久保智康『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編1988年
田島明人『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編1988年
望月精司『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編1988年
本多達哉『舟場窯跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター1995年

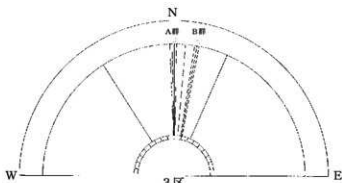
- 2) あくまでも遺物の型式間からみた空白期間であり、実際には遺物が存続していた可能性はある。

第2節 遺構の変遷

遺構の変遷は、竪穴住居や掘立柱建物の方位、遺構の切り合い関係や遺構出土遺物の年代などから検討していきたい。また、変遷過程を飛鳥時代と奈良時代～平安時代の2つに分けて概観することとする。ここで取り上げる遺構は主に竪穴住居・掘立柱建物・井戸や溝である。

遺構から出土した土器については、以下列挙していく。型的にある程度判明でき、また、遺構の下限を示す資料のものを抽出して検討材料とした。

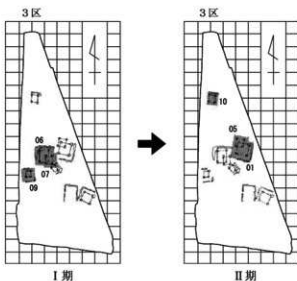
竪穴住居群の中では、3区のSH-09の壁溝から671・672・673の須恵器が出土している。いずれもI期に属する。竪穴住居からは唯一の出土遺物である。次に掘立柱建物群では、2区のSB-03から204の土師器が出土している。土器の帰属時期は概ねVI期である。3区からはSB-01出土の680・686・687が柱の抜き穴から出土しており、V②期に該当する。また、3区のSB-03からは688の須恵器墨書土器が柱の抜き穴から出土しており、概ねV②期に帰属する土器である。次に、主な遺構出土土器をみると、3区のSE-01からは695・697の須恵器が出土しており、VI①期の時期に属する。また、3区のSD-01～04からは768・770の須恵器が出土しており、溝出土遺物の中でも下限を示し、VI①期に該当する遺物である。



第149図 竪穴住居の方位

飛鳥時代

飛鳥時代の遺構は、3区で検出された竪穴住居群が中心と考えられ、ここでは竪穴住居群について検討していきたい。まず、住居群の方位（第150図）について見てみると、大きく2群に分かれ、A群がN 2° WからN 1° Eの範囲で、SH-06・07・09の住居が認められる。B群はN 9° EからN 11° Eの範囲で、SH-01・05・10の住居が該当する。ちなみに、住居の方位については、南北を主軸にした方位から導き出した。次に、住居間の切り合い関係は、今回確認することはできなかった。しかし、その他の遺構との切り合い関係については、第3表の通りで、いずれも平安時代の遺構に切られていることが確認できる。住居から出土した遺物で帰属時期がわかるのは、SH-09のみでI期に属す。上記の事実関係から不明瞭な部分も多いが、方位を同じくする住居群をほぼ同一時間内であると仮定すれば、SH-09と同様の方位軸をもつSH-06・07の住居もI期とすることができる。また、II期の住居群は、B群の方位

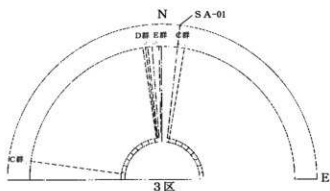
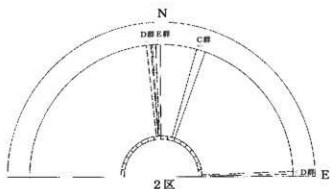


第151図 飛鳥時代の遺構変遷 (S=1:1500)

であるSH-01・05・10が必然的に取まるものと考えられる。SH-03・04・08においては、A・B群の方位軸からずれ、出土遺物も認められなかったため、今回は所属時期の特定はできなかった。

奈良時代～平安時代

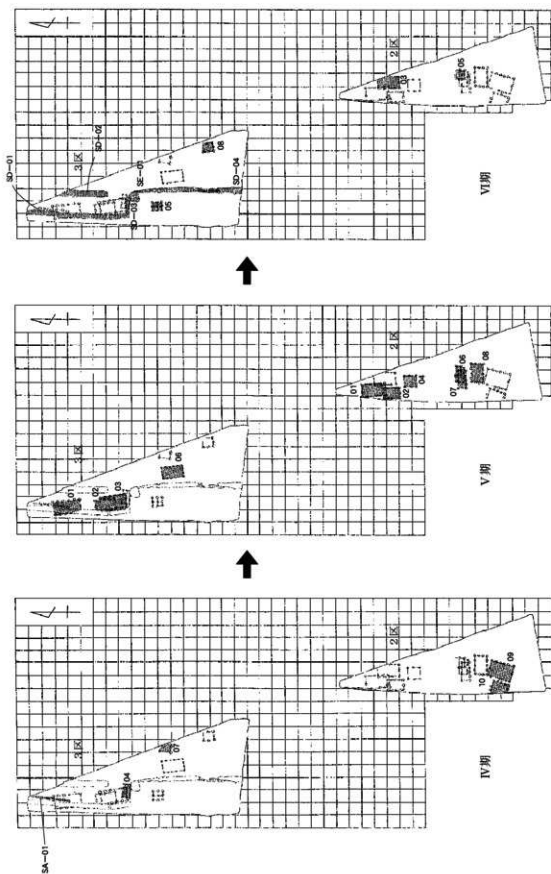
奈良時代～平安時代の遺構の変遷については、2区と3区の両方から検出された掘立柱建物やそれに係わる遺構について検討していきたい。まず、建物の方位（第152図）から、2区並びに3区は3群に分けられる。第152図のようにC群が2区のSB-09・10、3区のSB-04・07の4棟と柵列のSA-01である。D群は2区のSB-01・02・04・06～08、3区のSB-01～03・06の9棟がある。E群は2区のSB-03・05と3区のSB-05・08の4棟である。次に遺構の切り合い関係を見ると、建物間の切り合いは不明であるが、建物とそれに係わりのある遺構は、第4表のとおりでSB-01・02・03・04がSD-01に切られ、また、SB-04においてはSE-01にも切られている。また、所属時期がわかる建物は、2区はSB-03のみで、3区はSB-01・03・05である。以上の事実関係から、まず建物群の方位が、概ね同一の方位位置を示すものは、同時期もしくはそれに近接する時期の構築物と想定し、大きく3つの相違時期建物群として捉えた。そして、その3群の中で時期がわかる遺構からそれぞれの遺構群の時期を導き出した。IV期の遺構群は、2区のSB-09・10、3区のSA-01・SB-04・07と想定したい。2区で大型の建物が1棟（SB-09）検出されたが、他の建物との配置関係は不明であった。また、3区のSA-01は、北側に伸びていく柵列と考えられる。IV期の遺構群からは明確に時期が判明できるものがなかったため、方位を主体にこの期に遺構を含めた。IV期の遺構群は概ね8世紀代と見ておきたい。V期の遺構群は、2区のSB-01・02・04・06・07・08、3区のSB-01・02・03・06と想定したい。2区のSB-01と02で、そしてSB-06と07で、3区のSB-02と03との間で建物の建て替えが行われたと考えられる。また、調査範囲が限られていることもあり明確なことはわからないが、建物群が2区と3区でコの字状に配列されていた可能性が窺える。V期の遺構群は概ね9世紀代と見ておきたい。VI期の遺構群は、2区のSB-03・05、3区のSB-05・08・SD-01・02・03・04・SE-01と想定したい。ここでは大きな建物群が検出されおらず、溝と井戸を中心とした遺構群が検出されている。おそらく、この時期の建物群の中心は溝から東側の位置に存在していると考えられる。VI期の遺構群は10世紀第1～3四半期の時期としておきたい。今回、遺構群の時期想定を大きな時間幅でしか取り扱うことができなかったが、今後の調査成果により詳細な遺構の変遷が解明されることを期待したい。



第152図 掘立柱建物の方位

る遺構は、第4表のとおりでSB-01・02・03・04がSD-01に切られ、また、SB-04においてはSE-01にも切られている。また、所属時期がわかる建物は、2区はSB-03のみで、3区はSB-01・03・05である。以上の事実関係から、まず建物群の方位が、概ね同一の方位位置を示すものは、同時期もしくはそれに近接する時期の構築物と想定し、大きく3つの相違時期建物群として捉えた。そして、その3群の中で時期がわかる遺構からそれぞれの遺構群の時期を導き出した。IV期の遺構群は、2区のSB-09・10、3区のSA-01・SB-04・07と想定したい。2区で大型の建物が1棟（SB-09）検出されたが、他の建物との配置関係は不明であった。また、3区のSA-01は、北側に伸びていく柵列と考えられる。IV期の遺構群からは明確に時期が判明できるものがなかったため、方位を主体にこの期に遺構を含めた。IV期の遺構群は概ね8世紀代と見ておきたい。V期の遺構群は、2区のSB-01・02・04・06・07・08、3区のSB-01・02・03・06と想定したい。2区のSB-01と02で、そしてSB-06と07で、3区のSB-02と03との間で建物の建て替えが行われたと考えられる。また、調査範囲が限られていることもあり明確なことはわからないが、建物群が2区と3区でコの字状に配列されていた可能性が窺える。V期の遺構群は概ね9世紀代と見ておきたい。VI期の遺構群は、2区のSB-03・05、3区のSB-05・08・SD-01・02・03・04・SE-01と想定したい。ここでは大きな建物群が検出されおらず、溝と井戸を中心とした遺構群が検出されている。おそらく、この時期の建物群の中心は溝から東側の位置に存在していると考えられる。VI期の遺構群は10世紀第1～3四半期の時期としておきたい。今回、遺構群の時期想定を大きな時間幅でしか取り扱うことができなかったが、今後の調査成果により詳細な遺構の変遷が解明されることを期待したい。

(中川)



第153図 奈良時代～平安時代の遺構配置 (S=1:1500)

第3節 縄文式土器について

本遺跡で出土した縄文式土器は、コンテナバット約3箱分ある。このうち、小片などを除き99点を図化掲載した。その時期は、中期前葉や中期後葉、後期前葉、後期中葉、晩期後葉のものを若干含むものの、主体は中期中葉の比較的短い時間幅に限られる。ここでは、遺物包含層および遺構出土物を包括して分類を行い、編年上の位置付けについて述べる。あわせて、本遺跡出土土器の有す意義や課題についても簡単に触れる。

1 出土土器群の分類 (第154図・第155図)

分類を行うにあたり、まず有文土器と無文土器に大別した。そのうち、有文土器については文様構成や文様要素などにより分類を行い、第1群～第16群を設定した。その内容は下記のとおりである。

有文土器 文様要素や地文などにより、さらに細分を行い、類・種を設定した(註1)。なお、出土量が少なく破片を主体とすることもあり、器種による細分は行わず同列に扱う。

第1群土器 内湾する口縁部を有し、縦位半隆起線文を施す土器。

第2群土器 山形波状口縁を呈し、貼付隆帯と半裁竹管による曲線文様を描出する土器。

第3群土器 半裁竹管による弧線文を描出し、地文に縦位縄文を施す土器。

第4群土器 水平口縁を呈し、貼付隆帯のみで曲線文様を描出する土器。

1類 地文に縄文を施す土器。

2類 地文を施さない土器。

第5群土器 基軸隆帯と半隆起線による曲線文様を描出する土器。

1類 三叉状陰刻文を施す土器。

2類 環状突起を有す土器。

3類 方形区画状の半隆起線文間に縦位半隆起線文を施す土器。

4類 地文に縄文を施す土器。

5類 口縁側端部に爪形文を施す土器。

6類 口縁側端部がやや肥厚し、幅の狭い半隆起線文を施す土器。

7類 そのほかの破片を一括する。

第6群土器 粗雑な押しきり状の爪形文を施す隆帯と半隆起線による曲線文様を描出する土器。

第7群土器 半隆起線のみにより文様を描出する土器。

1類 4単位波状口縁を呈す深鉢。

2類 水平口縁を呈す深鉢。

3類 深鉢の頸部片。

4類 台付鉢の胴部片。

第8群土器 口縁部に横位隆帯区画文を配す土器。

1類 隆帯上に櫛歯状刺突文を施す土器。

2類 隆帯上は無施文とし、区画内に縦位半隆起線文を施す土器。

第9群土器 内部に刺突を施す沈線により文様を描出する土器。

第10群土器 幅の狭い沈線区画内に磨消縄文を施す土器。

第11群土器 集合沈線で文様を描出する土器。

第12群土器 三角形陰刻による工字状文を施す土器。

無文土器 地文や器面調整により大きく4大別し、器種や地文の種類などにより細分を行った。

第13群土器 縄文土器。

1類 内屈・内湾口縁を呈す深鉢。

A種 内屈口縁を呈すもの。

B種 内湾口縁を呈し、端部に小突起を有すもの。

C種 内屈口縁の内面が肥厚するもの。

2類 緩やかな内湾口縁を呈す深鉢。

A種 縄文を施すもの。

B種 擬縄文を施すもの。

3類 外反口縁を呈す深鉢。

4類 深鉢胴部片を一括する。

A種 細長い節が斜行する縦位・斜位縄文を施すもの。

B種 節の整った縦位縄文を施すもの。

C種 斜位縄文を施すもの。

5類 鉢。

第14群土器 櫛描沈線文土器。

第15群土器 条痕文土器。

第16群土器 素文土器。

1類 緩やかな内湾口縁を呈す深鉢。

2類 外反口縁を呈す深鉢。

3類 深鉢胴部片を一括する。

4類 浅鉢。

5類 蓋。

2 有文土器の編年的位置付け

これまで述べた有文土器各群の内容から、その編年的位置付けを以下に述べる。

第1群土器は、中期前葉に位置付けられ、新崎式に類似する。

第2群土器は、中期中葉に位置付けられ、船元Ⅲ式A類(註2)に比定できる。

第3群土器は、中期中葉に位置付けられ、船元Ⅲ式B類に比定できる。

第4群土器は、中期中葉に位置付けられる。近似する土器群は、石川県荻生遺跡(註3)で認められる。

第5群土器は、中期中葉に位置付けられ、上山田式に類似する。

第6群土器・第7群土器・第8群土器は、中期中葉に位置付けられ、古府式に類似する。

第9群土器は、中期後葉に位置付けられ、大杉谷式に比定できる。

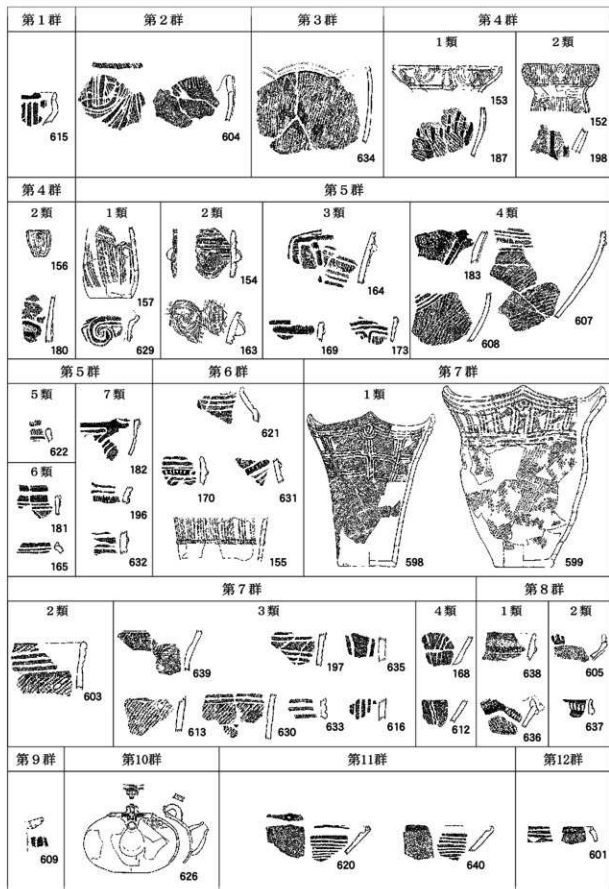
第10群土器は、後期前葉に位置付けられ、堀之内2式に併行する土器群である(註4)。

第11群土器は、後期中葉に位置付けられ、加曾利B1式に併行する土器群である。

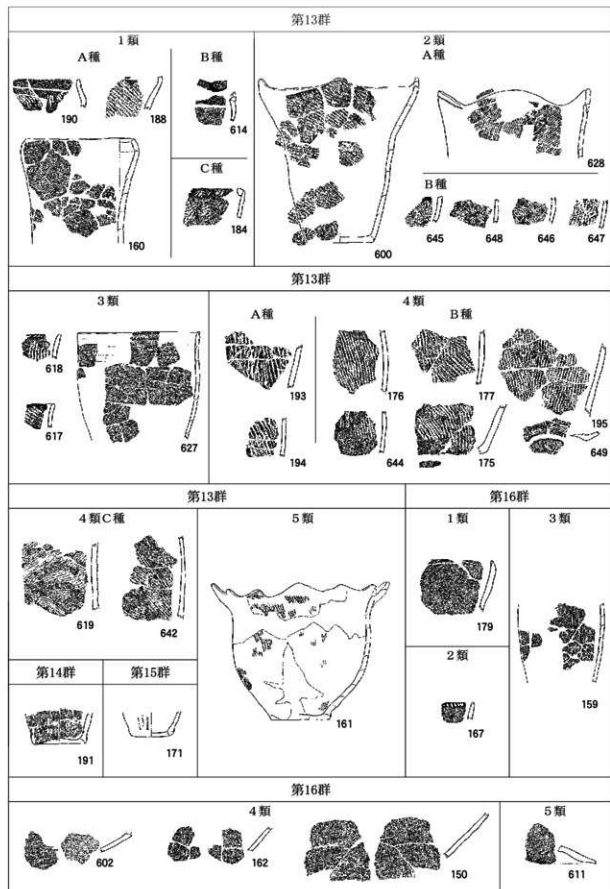
第12群土器は、晩期後葉に位置付けられ、広義の浮線文系土器に相当する。

3 有文土器の系統とその特徴

ここでは、出土量が最も多く、本遺跡における縄文時代の主要時期である中期中葉に位置付け得る、



第154図 有文土器分類図



第155図 無文土器分類図

第2群土器～第9群土器について、系統的分別およびその特徴について述べる。

いままでの位置付けにより、本遺跡出土土器群は、大きくは北陸系土器群（第4群～第9群土器）、近畿系土器群（第2群・第3群土器）に分別できる。

各系統土器群は、主たる分布域の中心部と比較し、型式学的差異が認められ、空間的に変容している（註5）とみなされる。よって、これらは、搬入といった形で存在し展開するのではなく、本遺跡を含めた周辺での生産消費により存続展開すると想定できる。

北陸系土器 北陸系土器には、有文第5群～第9群土器が該当し、出土量が多く、本遺跡の主体をなす。土器型式としては、上山田式・古府式に相当する。主に半隆起線文により主文様を描出する。色調は黄褐色・橙褐色を主体とし、胎土に焼成粘土粒（註6）を多く含み、砂粒をほとんど含まない特徴を有す。そのほかに、特徴的な混和材として黒雲母や金雲母および海綿骨針がある。特に海綿骨針は、出土資料数は少ないが、181・602・607・608・629の各個体に微量含まれる。越前他地域において、現状ではほとんど認められないことから、九頭竜川以北の地域的特徴としても考え得る（註7）。

近畿系土器 近畿系土器には、有文第2群・第3群土器が該当する。出土量は少ない。土器型式としては、船元Ⅲ式に比定できる。主に半裁竹管文により主文様を描出する。色調は褐色を主体し、胎土に荒い砂粒を多く含む特徴を有す。

4 第4群土器の位置付け

第2群・第4群土器は、幅の広い文様帯を配す内湾口縁を有し、貼付隆帯を基本として曲線文様を描出する手法など、型式学的類似度が高い。しかし、胎土・色調が明確に異なることとあわせて、口縁形状（波状・水平）、半裁竹管文の併用の有無やこれと関連する隆帯の断面形、口縁内面縄文帯の有無などの差異が認められる。第2群土器と近似する土器は、船元式土器分布圏内に安定して分布するが、第4群土器類似例は、少ないものの、石川県助生遺跡・同藤木遺跡など北陸地方西部域を中心に確認できる。以上から、第2群・第4群土器に認められる型式学的・分布的差異は、同系統における時間的前後関係ではなく、影響を受けた地域を異にする系統的差異を示すと判断できる。

この第4群土器の出自系譜については、船元Ⅱ式C類や、船元Ⅲ式A類（第2群土器）との類似から、近畿系土器群の影響を受けた土器とも考えられる。しかし、前述の型式学的・分布的差異を重視すれば、中部地方を主体として展開する井戸尻式・勝坂式の影響を受けた北陸系土器の可能性も指摘できる。時間的位置付けについては、後述する本遺跡出土事例や飛騨地域における伴出事例（註8）から、大枠において、北陸系第5群・近畿系第2群土器と同様な時間幅を有し、中期中葉前半に位置付け得る。

5 無文土器の位置付け

無文土器の位置付けは、有文土器の器形および色調や胎土の特徴などと対比し行う。

縄文土器である第13群1類・2類土器は、器形や色調・胎土などから、おおむね有文第4群～第9群土器に対比できる。口唇部に接合部の段を残すもの（190・614）や、半裁竹管状工具による沈線を巡らすもの（629）が特徴としてあげられ、前者から後者への時間的推移もうかがえる。また、工事立会い土坑出土の600は、その伴出状況から、有文第7群土器598・599と一括性が高い共伴遺物と判断でき、時間的にほぼ併行しよう。ただし、第13群2類B種土器の擬縄文を施す645～648は、砂粒を多く含む胎土などから北陸系土器に比定できず、位置付けは保留とする（註9）。3類土器は、胎土や色調も有文第4群～第9群土器と明確に異なり、おおむね後期前葉～中葉の有文第11群・第12群土器に併行する無文土器と考えられる（註10）。縄文施文の胴部・底部片の4類土器は、有文土器胴部片の可能性もある。

A種・B種土器はともに褐色を呈し、胎土に荒い砂粒を多量に含む特徴を有す。A種は、節が斜行する特徴的な縄文であり、B種も縦文・斜位の密な縄文から、それぞれ近畿系（船元系）に比定できる。C種は、斜位の単節縄文で、胎土・色調から有文第4群～第9群土器に併行する北陸系土器に比定できる。5類土器は、4単位波状口縁を呈す鉢であり、複節縄文LRLを施す。胎土・色調の特徴とあわせて、口縁形状が舟形を呈し、器形が古府式系の台付鉢に近似することから、有文第4群・第5群土器に併行する北陸系土器に比定できる。

縦位櫛描沈線文を施す第14群土器は、胎土・色調から有文第4群～第9群土器に併行する北陸系土器に比定できる（註11）。

縦位条痕を施す第15群土器は、晩期に属す可能性がある。

素文土器である第16群1類・3類土器および浅鉢である4類土器は、胎土・色調から有文第4群～第9群土器に併行する北陸系土器に比定できる。179は190・614と同様に口唇部に接合部の段を残すことから、時期的にも近接すると考えられる。2類土器は、その全周する口縁端部刻みなどから、中期後葉大杉谷式土器（有文第10群土器）に併行するとみなされる。蓋である5類土器は、おおむね晩期に位置付けられる。

6 出土状況の確認

本遺跡2区・3区で検出した縄文時代の遺構は少なく、柱穴などのピットを主体とする。また、出土土器も小片少量が主体である。しかし、大形破片でかつ出土量の多い遺構が数例認められることから、これら伴出土器群の内容を再度確認する。

2区では、SP-572・590において、第4群1類土器（153）と同2類土器（152）、および第5群1類土器（157）、第14群土器（191）の伴出事例、SP-515における第13群1類土器（160）と同5類土器（161）の伴出事例が認められる。これらの出土事例は、純粋な一括遺物として認識はできない。しかし、2区下層における中期中葉前半に位置付けられる土器群の集中出土傾向をあわせれば、第4群1類・2類土器および第5群土器は、おおむね併行するものと想定できる。また、これら有文土器と組成をなす第14群土器などの無文土器の一部を確認できたものと推察する。

3区では、工事立会い土坑において、第7群1類土器（598・599）および第13群2類土器（600）の伴出事例が認められる。598～600の略完形3個体は、それぞれ潰れて折り重なっており、一括性の高い出土状況を呈す。特に598・599は、器種やこれに関連する文様帯構成が異なるが、口頭部文様帯の縦位分割や波頂部下の小振りな渦巻文などから、型式学的にも同時性が高いものと判断できる。なお、第4群4類土器（607・608）や、第9群土器（609）などの破片資料が出土するが、これらは土坑埋没過程における流入の可能性が高いものと判断した（註12）。

7 意義と課題

本遺跡で出土した中期中葉前半に位置付け得る有文第2群～第5群土器群は、まとまった資料ではないため、型式学的検討による詳細な変遷過程や位置付けの把握には至らなかった。しかし、従来から越前地域での発掘調査例が少ないこともあり貴重な資料となった。

これまで述べたとおり、主体時期である中期中葉前半の土器群は、北陸系と近畿系に大きく二分する。

以下、土器系統構成のありかたを、該期と前後する時期の周辺遺跡と比較して今後の課題とする。

前代の中期前葉においては、九頭竜川以北に位置する主な遺跡として、坂井平野に立地する坂井町坂井兵庫地区遺跡群（中川2005）がある。本遺跡と同様に、北陸系土器群（新保系）と近畿系土器群（船

船元系)の伴出が認められる。系統ごとの出土量からは、北陸系を主体とし、客体的な関西系という土器群構成が認められる(山本2005)。本遺跡の出土数は少ないものの、傾向として前代と同様であるとみなしうる。

後続する中期中葉後半においては、九頭竜川以北に位置し、まとまった資料が出土した遺跡はない。そのため、越前地域の主要遺跡として、越前町柳川遺跡(山本2004)や、福井市片船遺跡(南1986)をあげる。主な系統として、東海系土器群(咲畑系)と北陸系土器群(古府系)が、おおむね二分する状況が認められる(註13)。しかし、本遺跡においては、出土総量が少ないものの、東海系土器の出土は確認できない。よって、主軸土器を含めた土器構成の差異も想起される。

以上、このように、出土量を含めた系統および系列の土器構成上の差異が、各系統土器の主体分布域との地理的要因による小地域的差異を示すものと想定される。特に、越前地域のように複数地域の影響を受けた多系統土器群が分布展開する地域においては、その可能性が高いと考える。

この想定によれば、北陸系土器を主体とする構成をなす本遺跡出土資料からも、大きくは九頭竜川以北という越前地域内における小地域の存在が予想される。しかし、発掘調査例や資料数の少ない現状では問題も多い(註14)。

今後、資料の増加を待ち、越前地域内における系統内の型式学的差異やその地域性について検討を行う必要がある。(山本)

(註)

- 1) 各群における細分項目については、文様構成や文様要素、地文有無などにより一定ではない。なお、本文における型式学的分類は、遺物総量が少ないこともあり、時間的差異よりも、系統的差異を抽出することを念頭において行った。
- 2) 船元系の各型式内容については、間壁編1971により、以下も同様である。
- 3) 西野秀和編1978による、第3群第1類Aの土器と近似すると考えられる。
- 4) 626の注口土器は、暗黄褐色を呈し、胎土に金雲母と細砂粒を多量に含むことから、搬入品の可能性が高い。
- 5) 北陸系第4群土器のうち、157のコスモス状文に付随する三叉状文のありかたなどがあげられる。
- 6) 焼成粘土粒とは、主に橙褐色・赤褐色を呈す ϕ 1~2mm程度の混和材である。土器の色調と異なるため、素生地(粘土)に混入される段階ですでに一次焼成を受けていると判断した。
- 7) 海綿骨針を含む土器が出土した遺跡は、九頭竜川以北の坂井平野において散見できる。西郷地区遺跡群(斉藤2004 後期前葉~中葉主体)、坂井兵庫地区遺跡群(中川2005 晩期後葉~弥生時代中期前半)、大味地区遺跡群(本多1999 晩期後葉)などがあり、いずれも出土量は少ない。この低い出土割合や能登・加賀地域に近隣接する地理的要因から、これらは、後地からの搬入品の可能性がある。同時に、当地域内で採集される粘土に含まれた可能性もあり、搬入元との型式学的検討、および当地域内の他時代土器についても胎土の比較を行う必要がある。
- 8) 中野山越遺跡(伊田1993)・下田遺跡(大江・中矢1987)・神田遺跡(増子1974)など。
- 9) 擬縄文施文や、口縁端部に面を持ち口唇部がやや肥厚する特徴などから、中期末の土器群や、後期初頭の中津式の可能性も考えられる。
- 10) 越前地域における該期の代表的な遺跡である鳴鹿手島遺跡(工藤1988)出土土器と比較対照した。
- 11) 越前地域においては、中期後葉を主体とする遺跡の発掘調査事例(工藤1985・中森1997)から、主に大杉谷式土器~後期初頭中津式に伴う土器群とみなされるが、胎土や色調および本遺跡伴出事例から中期中葉前半に位置付けた。なお、この中期中葉の樹指沈積を施す無文土器が、中期後葉~後期初頭までその系譜がたどれるかどうかは、別の問題であり、現状では明確ではない。
- 12) 第5群4類土器(607・608)は、文様構成・器面分割が斜行し、古府式古相に相当する可能性がある。文様構成・器面分割が縦位である598・599とは、段階差を認める立場から、破片資料であることも加味して流入と判断した。
- 13) 山本2004において、柳川遺跡出土の有文土器群について、東海系(咲畑系)、北陸系(古府系)、在地系土器を主体とし、若干の近畿系(里木II系)、関東・信越系(加曾利E系・大木系)という系統の整理をおこなった。
- 14) 発掘調査事例および遺物出土量が少ない現状においては、土器系統構成における数量的差異が、小地域内あるいは遺跡差異なのか判断せず、傾向として認識できない。また、中期中葉後半に限れば、註13における柳川遺跡の系統分別において、東海系はキャリバー形深鉢、北陸系は台付鉢を主体とし少数のキャリバー形深鉢、在地系は大形の半精製深鉢が主体という器種により系統が異なる状況を推察した。よって、中期中葉前半の系統構成との対比については、その質的内容が異なる可能性もあり、単純に一視できない。

参考文献

- 大江・中矢1987『下田遺跡』河合村教育委員会
 工藤俊樹1985『右近次郎遺跡Ⅱ』大野市教育委員会
 工藤俊樹1988『鳴鹿手島遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 小森秀三1985『藤木遺跡』加賀市教育委員会
 斉藤裕二2004『西廻地区遺跡群』坂井町教育委員会
 白川綾1997「常安王神の森遺跡出土縄文時代中期後葉～後期初頭土器群の検討」『常安王神の森遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 戸田哲也1993『中野山越遺跡発掘調査報告書』古川町教育委員会
 中川住三2005『坂井兵庫地区遺跡群Ⅱ 遺物編』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 中森敏晴1997『常安王神の森遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 本多達哉1999『大味地区遺跡群』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 間壁忠彦1969「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号 倉敷考古館
 増子康真1974「神田遺跡」『飛騨松岡・神田』萩原町教育委員会
 山本孝一2004「柳川遺跡出土中期中葉土器群の検討」『柳川遺跡』朝日町教育委員会
 山本孝一2005「縄文時代中期前葉土器群の検討」『坂井兵庫地区遺跡群Ⅱ 遺物編』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 南久和1986「第10群土器 上山田式・天神山式期」「第11群土器 古府式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会
 南洋一郎1986「39片粕遺跡」『福井県史』資料編13考古 福井県
 西野秀和1978『高生遺跡』辰口町教育委員会

第4節 石器と石製品

1. 構成と分布

縄文時代の石器、玉作資料、中世の石製品と砥石からなり、総計40点である。

縄文時代の石器の構成を第 表に示す。器種は全て狭義の石器で、剥片や砕片はみられない。石鏃など小形の剥片石器も僅かである。石質は安山岩が中心だが、石鏃はチャート製である。

玉作資料は、荒割 2点、形割 8点、剥片 4点の計14点。研磨や管玉未成品はなく、全て緑色凝灰岩。

中世の石製品は茶臼とバンドコが各 1点、時期不詳の砥石が 5点である。石質は第 表に示す。

3区で全体の約 8割を占めるが、分布は特に集中しない。各区の遺構等から僅かに出土し、散在する。出土した遺構は律令期が中心であり、大半は流れ込み等で混入したものである。

第7表 縄文時代の石器組成表

調査区	石質	石鏃	打製石斧	磨製石斧	石鏢	凹石・蔽石	磨石	計	出土地
1区	遺構内	An	1					1	SK35
	遺構外	An	1					1	
2区	遺構内	An				1	1	2	SD01
	遺構外	An	1			1		2	
3区	遺構内	An	5	1	1			7	SD25 S105 SK66, 69 SP718
		Sa			2			2	
		Ch	1						
	遺構外	An		1	1	1			

	石質	石鏃	打製石斧	磨製石斧	石鏢	凹石・蔽石	磨石	計
兼兼坪江遺跡	An		9	2	2	2	1	16
	Sa				2			2
	Ch	1						1
総計		1	9	2	4	2	1	19

2. 縄文時代の石器

石鏃（第145図950） 凹基無茎鏃で、基部に挾入が作出される。両面に調整され、三角形を呈す。

打製石斧（第9図4、第12図18、第88図597、第97図667～669、第144図940） 第97図667・668は、短冊形を呈す。周辺に調整されるが、右側辺上半に表裏と直交する素材面を残す。側辺中程は緩く湾曲し、刃部が丸みをもつ。第97図669と第88図597は、基部から刃部へ緩く開き、撥形を呈する。第97図669は、裏面と左側面に素材面が多く残り、刃部の作出も不十分である。第9図4、第12図18、第144図940は、側辺中程のやや上位に挾入をもち、分銅形を呈す。いずれも礫面をもつ厚手の剥片が素材。素材の厚みを除去するよう、側辺を中心に調整される。

磨製石斧（第144図941、第137図774） 基部は細く、断面が楕円形で、乳棒形を呈す。第144図941は、敲打して整形後、器体下半を研磨し、斧身が作出される。基端面は周辺から調整される。

石鏢（第137図775・776、第144図938、第144図939） いずれも打欠石鏢。小形で扁平な楕円礫を素材とし、表裏の上下端が一から数回調整される。第137図776は、素材がやや厚手で、表面を中心に調整される。第144図939は、素材の右側中程が緩く凹む。裏面下端は未調整。

凹石・蔽石（第81図493、第144図942） 厚手の棒状礫を素材とし、上下端に敲打痕がある。

磨石（第81図494） 大形で厚手の棒状礫が素材。器体は磨面からなる。

各器種は全て単独個体であり、調査地では製作されていない。他所で石器を製作し、製品が搬入されている。そして、調査地周辺で使用、廃棄され、他時期の遺構等へ混入したと考えられる。また、用途別では、石匙等の工具はみられないが、狩猟や漁撈、土掘、木工といった多様な道具が僅かだがある。

時期は、石斧類や石鏢の形態と組成からみて、縄文時代中期中葉から後期初頭頃と考えられる。

3. 玉作資料

荒削（第145図949） 大形の剥片で、素材の縁辺を多く残す。

形削（第7図3、第145図945～948） 第145図945は板状剥片で、周辺に面をもつ。第7図3、第145図948、第145図947は角形を呈し、下端以外に面をもつ。側辺が平行せず、器体に凹凸や反りがある。第145図946は、側辺がほぼ平行し、角柱に近い形状を呈す。

構成と分布から、調査地周辺で形削等が小規模にされたとも考えられる。また、玉鋸や施溝痕をもつ資料はなく、弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えられる。竹田川上流に緑色凝灰岩の産地があり、坂井平野は玉作資料を出土した遺跡が多く存在する。坂井平野東端に位置する本遺跡も一事例となった。

4. 中世の石製品と砥石

茶臼（第19図86） 石材が笏石で特異なもの。受け皿は円滑に仕上げられ、目は八分画である。下面は丸ノミで整形され、平らなえぐりをもつ。受け皿上面には、目の溝に沿って線状痕が多くあり、目立てによっても考えられる。また、木製の芯棒が遺存し、受け皿は欠損後に漆で補修されている。

バンドコ（第33図136） 平面D字形で上方に口を設ける。前面に上向きで縦格子の窓を四つもつ。また、底部には側面に沿って脚が削り出される。底部内面は丸ノミ、他は平ノミで整形されている。

砥石（第81図492、第88図596、第122図719、第145図943、第145図944） 第88図596は、平面と側面共に略三角形を呈す。端部以外が砥面で、各面は内湾し緩く凹む。第122図719は、扁平な台形を呈す。第81図492と第145図943は、厚手の角形で、第145図943は、右側面が湾曲し反る。第145図943は下端、第81図492は端部以外が砥面。第81図492は、細い線状の擦痕が器体中程で一周するようにめぐる。第145図944は、扁平な板状を呈す。いずれも中砥である。

少量だが、研磨用工具、茶道具、暖房具があり、茶道具から上級階層の存在が推察される。また、1区SE03で茶臼と共伴した越前焼やバンドコの形態から、15世紀後半～16世紀前半と考えられる。（田中）

第8表 石器と石製品の観察表

地区	番号	器種	地点	形態	石質	長さ	幅	厚さ	長さ
1区	9-4	打製石斧	SK35		An	20.3	11.8	5.1	完形
	12-18	打製石斧	266-一括	両側辺の缺入部に潰れ	An	19.3	9.6	3.0	完形
	7-3	形削	SH01		G.T.	3.1	2.3	1.1	完形
	19-86	茶臼	SE03		磨	38.4	38.4	12.0	一部欠
	33-136	バンドコ	16C 表様	底部に礎が付着	磨	11.6	19.6	8.1	上半欠
2区	88-597	打製石斧	N37	器体中央まで調整後、周辺に調整。刃部が磨滅	An	8.6	5.8	2.3	完形
	81-493	閃石・蔽石	SD01 2層		An	11.2	4.9	4.2	完形
	81-494	磨石	SD01 2層		An	24.8	7.5	6.4	完形
	88-596	砥石	M36 包含層一括	長軸方向に右側面は帯状、裏面は線状の擦痕	Sa	12.9	8.1	8.4	完形
	81-492	砥石	SD01 1層	右側面上部に帯状の擦痕が連続してみられる。浄教寺産	Tu	9.0	4.2	4.5	完形
3区	145-950	石鏝	SP718南寄り		Ch	2.8	1.7	0.4	完形
	97-667	打製石斧	SH01西住居床面下層	刃部右半の裏面側が磨滅	An	14.2	5.9	1.2	完形
	97-668	打製石斧	SH01西住居床面下層	右側辺中程に潰れ	An	14.6	5.5	1.5	完形
	97-669	打製石斧	SH01西住居床面下層	器体中央まで調整後、周辺に調整	An	11.3	7.1	1.9	完形
	144-940	打製石斧	PT10 包含層一括	基部に素材面を残す。刃部が磨滅	An	16.4	10.2	3.2	完形
	144-941	磨製石斧	CS 包含層一括	刃部に右上方へ斜行する擦痕。両刃	An	18.0	6.4	4.7	刃部欠
	137-774	磨製石斧	SD25		An	7.1	6.3	4.2	上半欠
	144-938	石鏝	SK69		Sa	6.6	5.2	1.9	完形
	137-776	石鏝	SD25		Sa	7.9	5.6	2.4	完形
	137-775	石鏝	SD25		An	8.3	6.2	2.3	完形
	144-939	石鏝	CT杭北側土坑		An	8.1	6.8	2.0	完形
	144-942	閃石・蔽石	E9 包含層一括	表裏面の中央にも蔽打痕	An	14.4	6.2	5.1	完形
	145-949	荒削	SP753		G.T.	7.3	6.4	2.6	完形
	145-945	形削	B13 包含層一括	両側辺が平行せず、下端面が反る	G.T.	4.4	4.1	1.2	完形
	145-947	形削	B12 包含層一括		G.T.	2.2	2.8	1.4	完形
	145-948	形削	SK02		G.T.	2.4	2.3	1.5	完形
	145-946	形削	A17G 包含層跡部	周辺に面をもつが、表裏が平行しない	G.T.	4.1	3.2	2.2	完形
122-719	砥石	SK03 S-1	表面と両側面が砥面で、他は納磨面	Sa	9.9	5.8	2.7	完形	
145-943	砥石	PT9 包含層一括	表面と左側面に長軸方向、裏面と右側面に短軸方向の擦痕。浄教寺産	Tu	8.9	3.6	3.4	完形	
145-944	砥石	SP1607	端部以外が砥面。表面に長軸方向の擦痕	Tu	6.3	3.9	1.8	上半欠	

第7章 まとめ

乗兼・坪江遺跡の発掘調査成果については、以上の各章で詳細に報告してきた。ここでは、その内容について整理し、要約していきたい。また、いくつかの課題についても若干触れておきたい。

1. 縄文時代

縄文時代の遺構や遺物は2区と3区から少量ではあるが検出されている。2区下層からは縄文時代中期中葉前半を主体とする土器が出土し、柱穴などの小遺構が多く見つっている。住居などの遺構は検出されなかったが、周辺にはこの時期の集落が存在していたと想定される。今回、2区から検出された中期中葉前半の土器は少量ではあるものの、越前地域における土器様相の一端を知る良好な資料となった。3区では、中期前葉や中期後葉、後期前葉、後期中葉、晩期後葉などの幅広い時期の土器が少量ずつ確認されたが、それらに伴う遺構はほとんど検出されなかった。

2. 弥生時代～古墳時代

1区から一辺6m前後を測る隅丸方形を呈する住居（SH-01）が1軒検出されている。住居床面から遺物は出土していないが、住居内覆土や周辺地区から弥生時代終末～古墳時代初頭に該当する遺物が検出されており、住居も同時期のものと推測される。その他からは、2区のSD-01から弥生時代終末～古墳時代初頭を中心とする遺物が一定量出土している。SD-01の上流域に集落の存在が予想される。

3. 飛鳥時代

1区～3区にかけて遺物は一定量出土している。この時期に伴う遺構は2区のSK-21や3区の堅穴住居群がある。2区のSK-21からは1期～Ⅱ期（古相段階）に帰属する土師器・須恵器がまとめて出土している。これまで越前地域でこの時期の土師器がまとめて出土した例はあまりなく、注目される資料であろう。一方、3区から検出された堅穴住居群は前章で大きく2時期の住居の変遷を想定したが、あくまでも同一方位軸をもつ住居群を優先的に同時期とみなしたため、根拠は非常に乏しい。今後の周辺調査とともに再検討する必要があるであろう。

乗兼・坪江遺跡では7世紀に入って突如として集落が営まれることが認められた。そのことは、新たに土地開発（水田開発）を行うにあたり人が移動し、集落が形成されたものと考えられる。前代までこの地域で多数の古墳（横山古墳群）を造営していた在来集団が乗兼・坪江遺跡近辺から、この地に移り住んだのか、それとも在来集団とは系統を異にする集団が新たに編成されて開発を行ったかは現時点では即断できない。しかし、出土した遺物から在地の土器以外に他地域からの土器（畿内系土師器や「段状口縁」（註1）をもつ土器など）も含まれており、他地域からの直接または間接的な影響が窺える。今後詳細に検討していくべき事柄と考えられる。

4. 奈良時代～平安時代

今回、この時期の遺構・遺物が一番多く検出された。2区では掘立柱建物群が、3区からは掘立柱建物群や井戸・溝などがあり、一般集落の様相とは考えにくい遺構が多く確認されている。遺物に関しては8世紀後半～9世紀後半（IV③期～V②期）にかけて多く確認でき、それに付随すべく遺構群の最盛期もこの時期に達するものと考えられる。特に、V期の段階では建物が計画的に配置されたような状況で遺構群が確認でき、公的な施設が存在を窺わせる。また、V期の遺構群と連続して構築されたと考えられるVI期の井戸（3区SE-01）や溝（3区SD-01～04）などの遺構群も、前期に続く公的な施設

の一部と想定でよう。遺物や遺構の検出状況から、VI期の中心的な施設は2区と3区の東方周辺に存在していたものと考えられる。ちなみに、3区から検出された井戸（3区SE-01）や溝（3区SD-01～04）の遺構群（一連のものと考えられる）の性格は不明である。今後これら遺構についての再検討が必要である。

1区～3区にかけて多くの瓦類や鴟尾（679）が出土している。今回、寺院関係施設と考えられる遺構は検出されていないが、おそらく調査区周辺に寺院関係施設が存在していた可能性は高い。その傍証として稜腕（459）や水瓶（461）などの仏具関連遺物が少量であるが出土している。出土した瓦類は、成形技法や胎土などから乗兼・坪江遺跡から直線距離で東方向に約2kmに位置する瓦谷2号窯跡で生産されたものと考えられる。竹田川の水運を利用して運ばれてきたものであろう。

5. 中世

中世に係わる遺構や遺物の多くは1区から出土しており、特に6～20グリットに集中している。おそらく現在の乗兼集落の方向に中世の集落が伸びていたと考えられる。また、遺物は13世紀～16世紀にかけてのものが出土しているが、主体は15世紀～16世紀のものである。1区のSE-03からは大甕を含む多くの遺物が投げ込まれた状態で出土していた。また、焼けた跡のある木製品とともに多量の炭化物も検出され、SE-03を中心とした広範囲（1～21グリット）からも炭化物が出土していた。おそらく集落の広い範囲で火災を受けたものと想定できる。1区からは、茶臼や天目茶碗などの富裕層の存在が窺える遺物が少量であるが出土している。1区の遺構・遺物の出土状況や当地の交通事情などを考えると、1区を含めた場所が興福寺大乗院門跡領の坪江上郷（註2）の中心的な所であった可能性は高い。

以上、今回調査したことの内容を簡単に要約したが、ほとんど触ることができなかった事柄や今後の課題について若干述べておきたい。

3区のSP-218から2個の土師器甕が口縁部を合わせ口にして、横の状態でも出土している。出土状況からおそらく埋納に係わるものと考えられる（註3）。埋納遺構が単独で構築されたのか、もしくは再生の思想のもとに近接する他の遺構との関係の中で構築されたのか、周辺の遺構も含めた構築年代を考慮しながら今後検討していかねばいけない課題である。

今回調査した乗兼・坪江遺跡では、8世紀前半から10世紀前半にかけて構築物が検出されており、これら遺構群が公的な施設の一部ではないかと想定している。検出された遺構群がどのような施設であったのか明確な解答が得られていないが、詳細に検討すべき課題である。また、短絡的に議論するのは危険であるが、天平勝宝六年（754）ごろに成立したとされる桑原荘（註4）との関係も考慮に入れておくべきであろう。その検討材料として、3区のSB-03の柱穴抜き取り跡から出土した「真屋九」の墨書須恵器がその1つとしてあげられようか。今後、乗兼・坪江遺跡周辺の発掘調査が進展していく中で、上記の検討課題が少しでも明らかになっていくことを期待する。（中川）

（註）

- 1) 石崎善久「青野型甕について」『京都府埋蔵文化財論集』第3集1996年
古代の土器研究会編「古代の土器4・煮炊具」（近畿編）1996年
- 2) 竹内理三編『角川日本地名大辞典』18編丹波 角川書店1989年
- 3) 奈良国立文化財研究所 奈良国立文化財研究所報第56冊「平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告」1997年
- 4) 竹内理三編『角川日本地名大辞典』18編丹波 角川書店1989年
小口雅史「北陸地方の荘園近畿地方の荘園Ⅰ」『講座日本荘園史』6 吉川弘文館1993年

原 色 図 版



(1) 調査区全景 (南から)



(2) 調査区全景 (北から)



(1) 2区 SK-21出土遺物



(2) 2区・3区 奈良時代～平安時代出土遺物

圖 版



(1) 1区 調査区西側



(2) 1区 調査区中央



(1) 1区 調査区東側



(2) SH-01 (西から)



(3) SB-01 (西から)



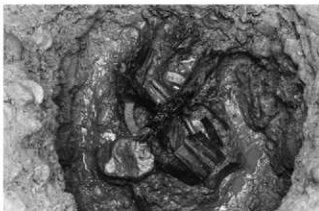
(1) 表土剥ぎ



(3) SE-03 上層遺物出土状況



(2) 作業風景



(4) SE-03 下層遺物出土状況



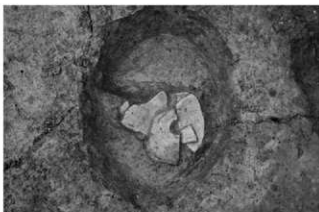
(5) SE-04



(7) SP-170



(6) SK-35



(8) SP-359



(1) 2区 調査区全景



(2) 2区 下層遺構



(4) SP-590



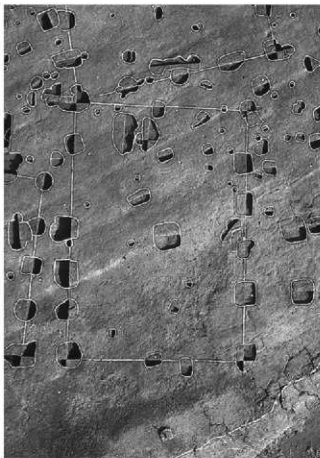
(3) SP-589 遺物出土状況



(5) SP-638 遺物出土状況



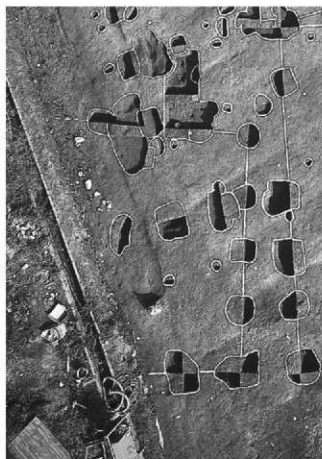
(1) 2区 上層遺構



(2) SB-09 (南から)



(3) SB-08 (西から)



(1) SB-10 (南より)



(2) SK-30 遺物出土状況



(3) SK-21・22・23・24・25 遺物出土状況



(5) SD-01 遺物出土状況



(4) SD-01 遺物出土状況



(6) SD-01 遺物出土状況



(1) 3区 調査区全景



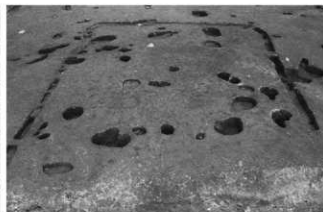
(2) SH-01 土層断面



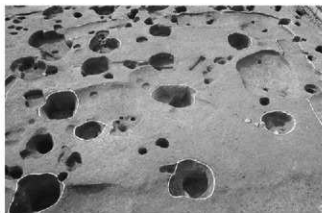
(4) SH-03 (南から)



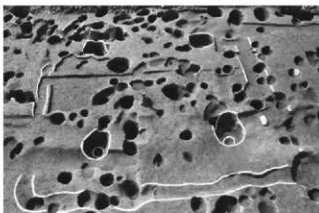
(3) SH-01 (南から)



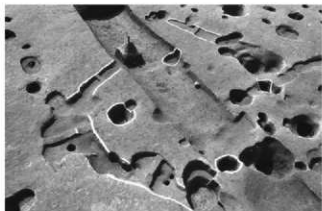
(5) SH-04 (南から)



(1) SH-06・07 (南から)



(3) SH-09 (東から)



(2) SH-08 (北から)



(4) SB-06 (北から)



(5) 3区 調査区北側



(1) 作業風景



(3) SE-01 遺物出土状況



(2) SE-01



(4) SK-03・07 遺物出土状況



(5) SK-26 遺物出土状況



(7) SK-41 遺物出土状況



(6) SK-39・40



(8) SK-34・35 遺物出土状況



(1) SP-248 遺物出土状況



(3) SP-218 遺物出土状況



(2) SP-218 遺物出土状況



(4) SP-1139 遺物出土状況



(5) SD-01 土層断面



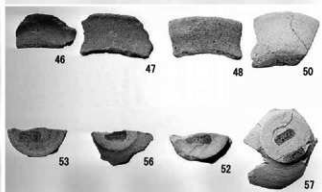
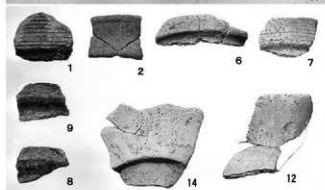
(7) SD-02 土層断面

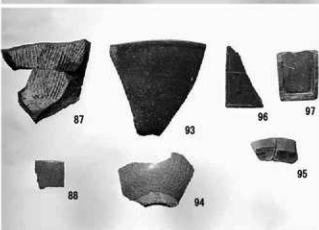
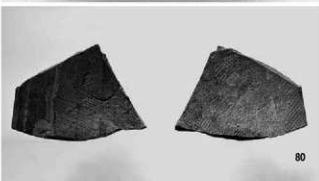
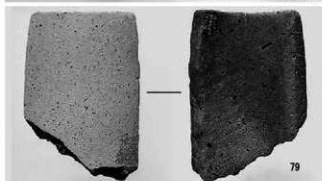
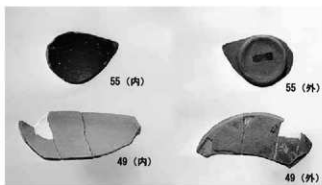


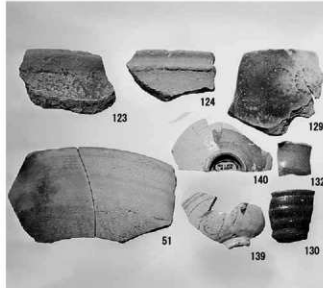
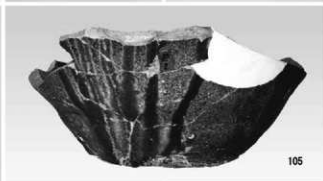
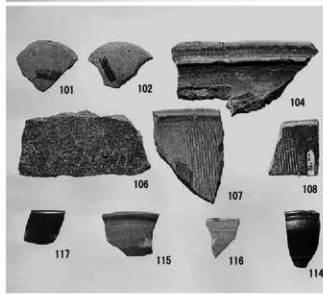
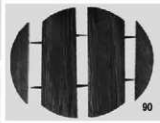
(6) SD-01 土層断面

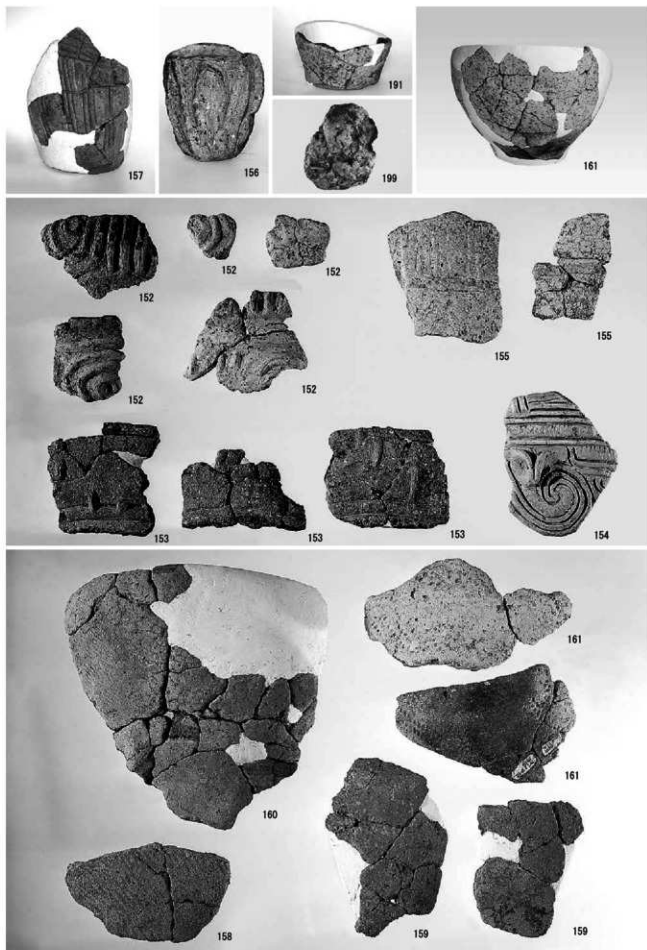


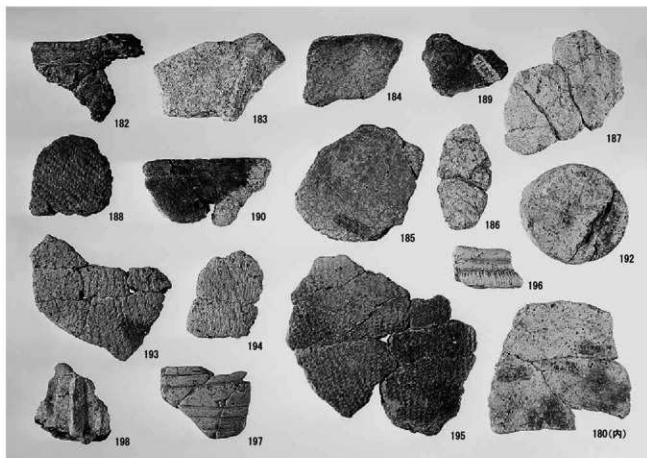
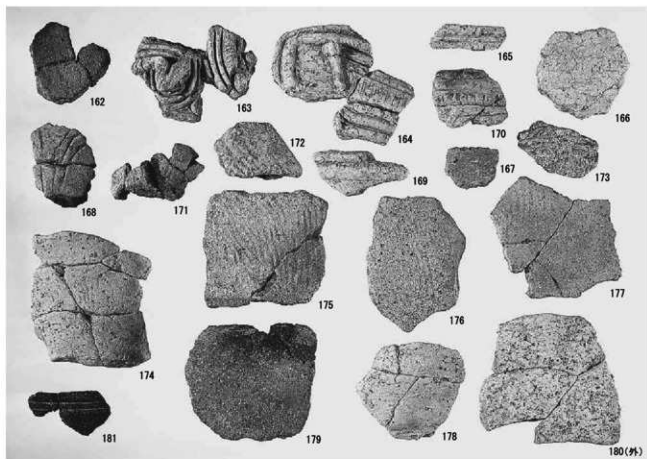
(8) SD-03 土層断面

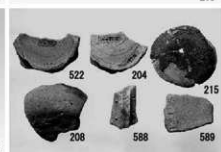
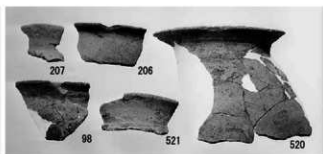














226



231



232



212



234



235

236



237



240



241



243



244



251



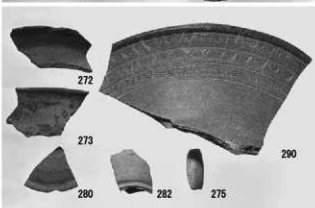
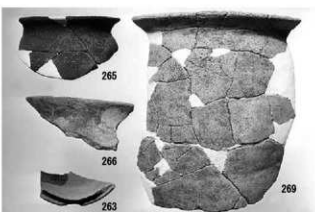
250

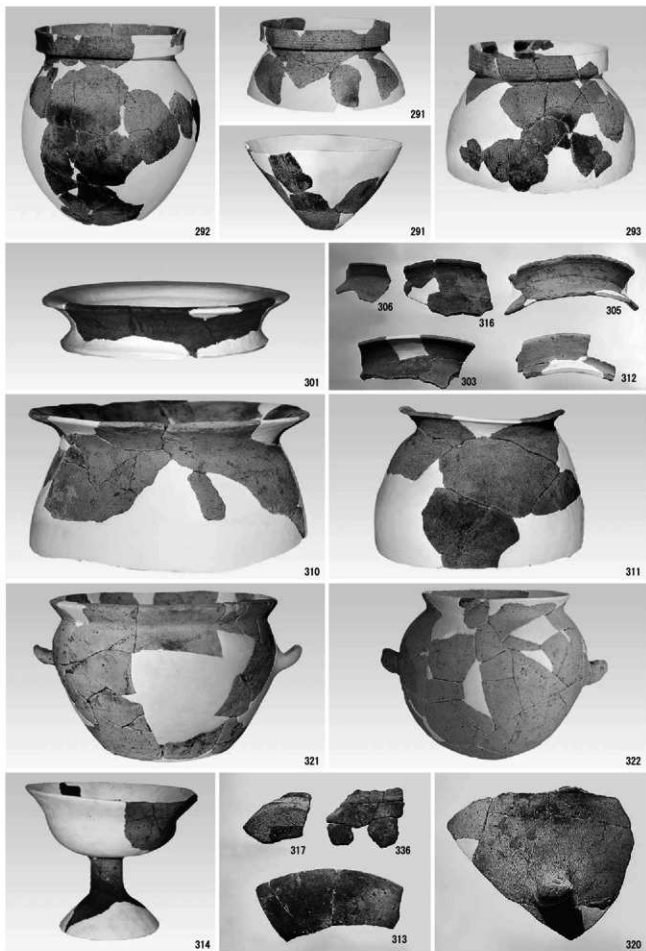


248



257







328



338



339



341



343



351



347



358



360



362



368



348



378



382



383



401



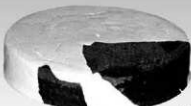
403



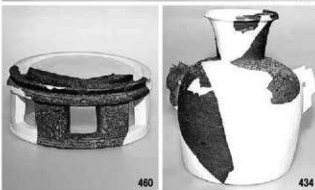
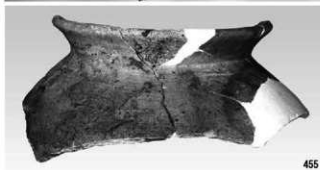
415

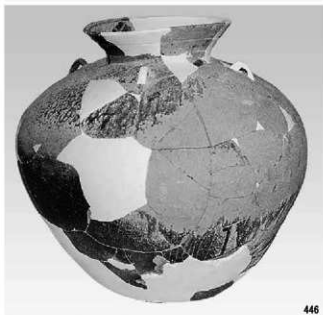


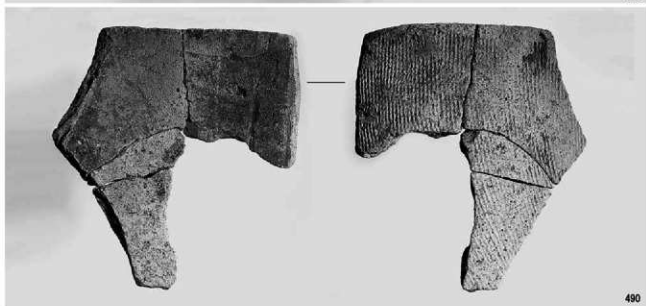
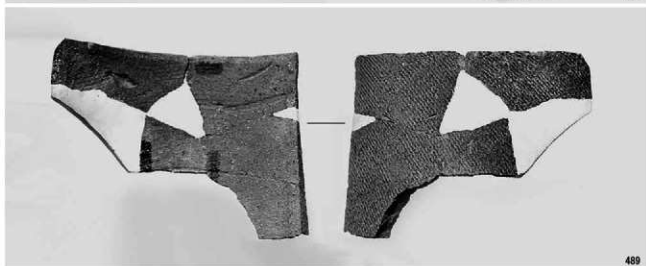
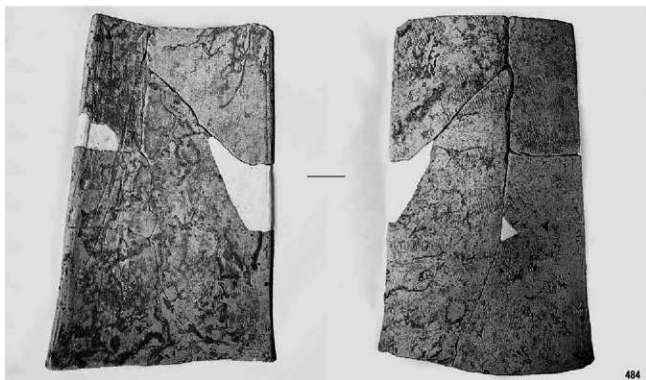
416



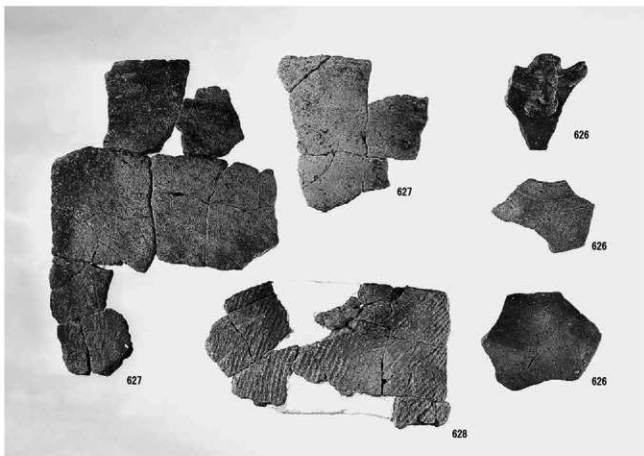
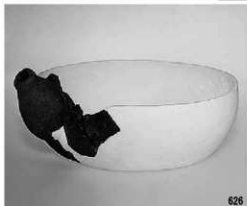
422

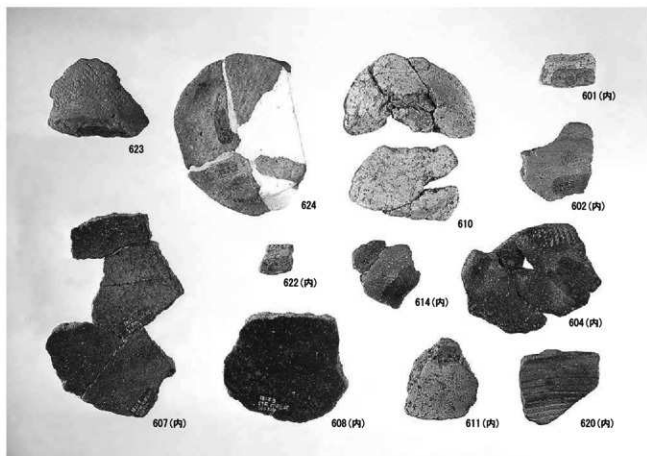
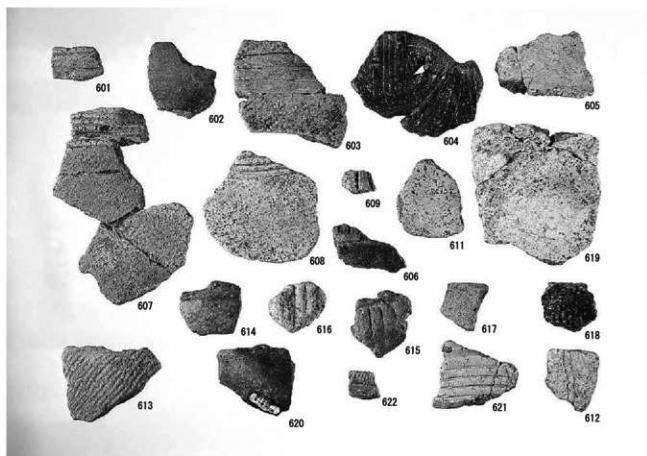


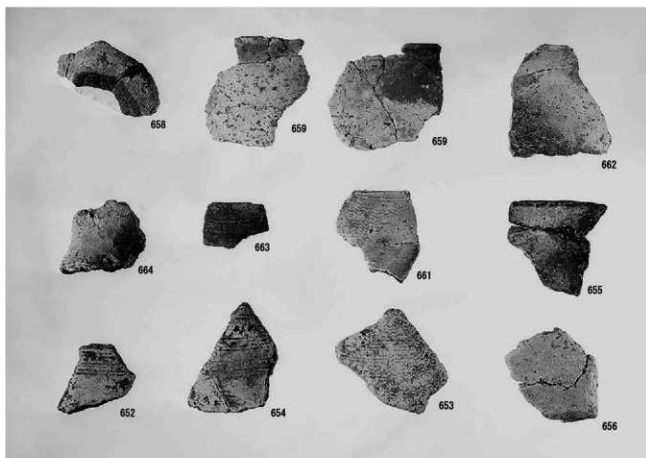
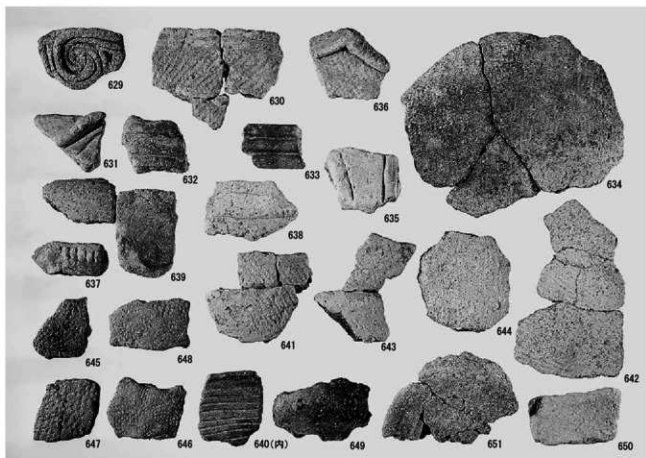


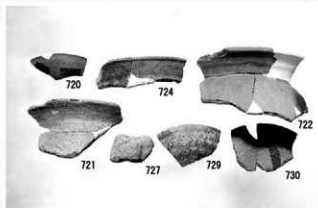
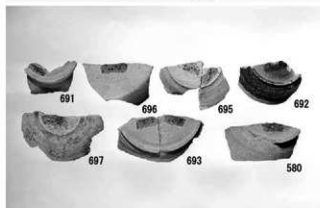
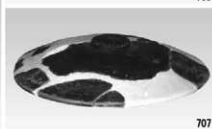
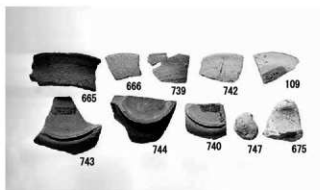


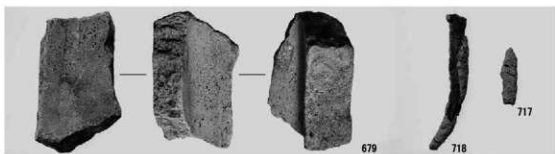


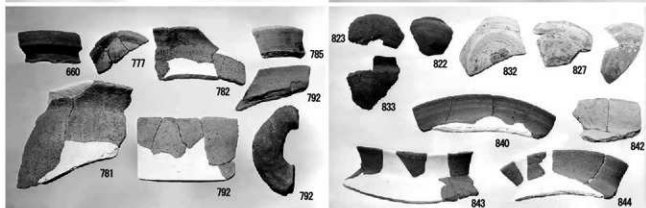
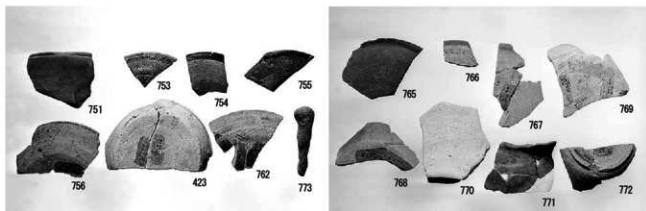


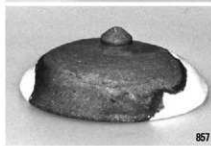
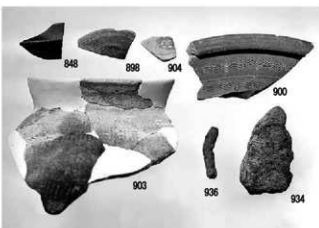
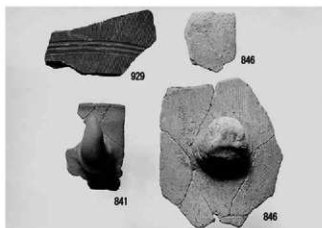


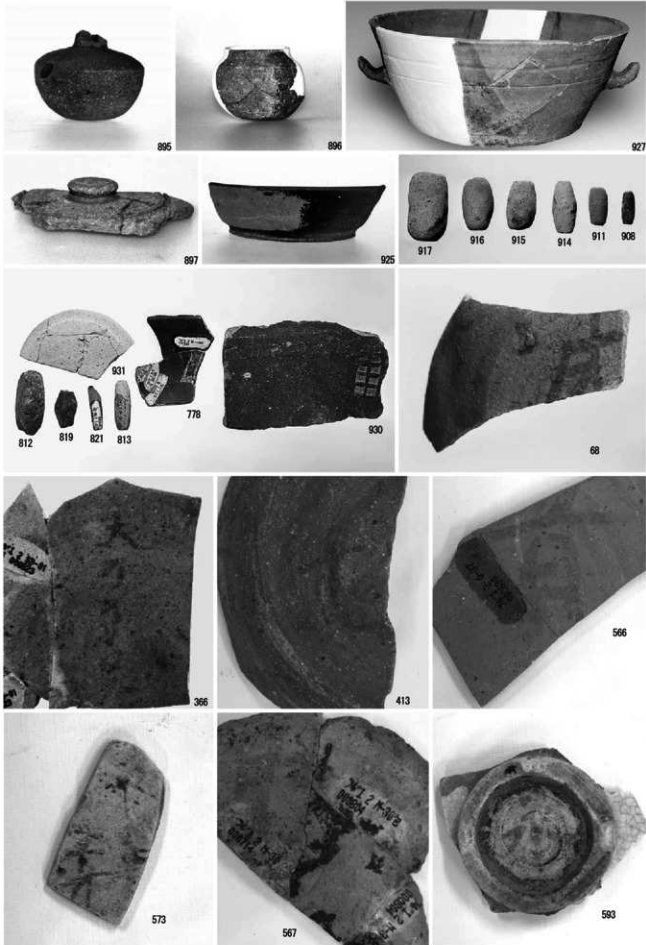


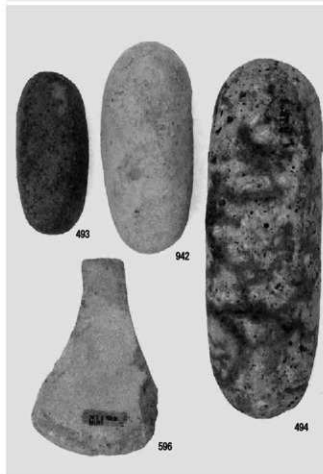
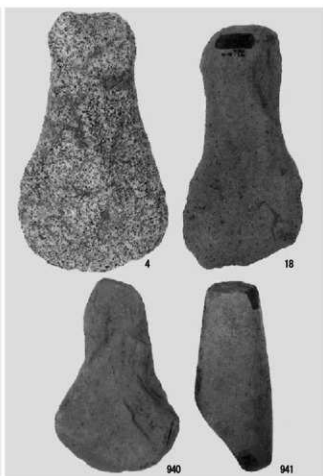
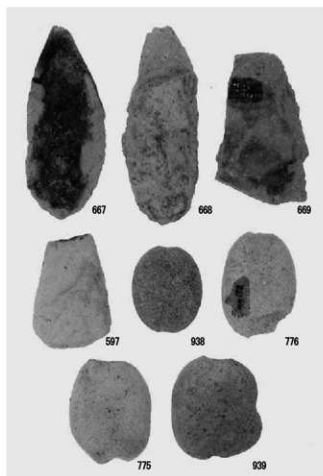












報 告 書 抄 録

ふりがな	のりかね・つぼえいせき							
書名	乗兼・坪江遺跡							
副書名	県営担い手育成基盤整備事業							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第88集							
編著者名	中川佳三・山本孝一・田中勝之							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2006年03月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のりかね・つぼえいせき 乗兼・坪江遺跡	ふくいけん 福井県	18210	13003	36°	136°	19990417	約4,695㎡	県営担い手育成基盤 整備事業
	さかひし 坂井市			10'	16'	～		
	まるおからちよう 丸岡町			20"	30"	20000331		
	のりかね・つぼえちがが 乗兼・坪江 地係							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
乗兼・坪江遺跡	集落等	縄文時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代	掘立柱建物・堅 穴住居・井戸・ 河川	縄文土器・須恵 器・土師器・ 瓦・灰釉陶器・ 緑釉陶器		奈良時代から平安時代にか かけての倉庫跡と考えられ る掘立柱建物や瓦や水瓶な どの寺院関係遺物が出土し ている。		

福井県埋蔵文化財調査報告 第88集

乗兼・坪江遺跡

—県営担い手育成基盤整備事業に伴う調査—

平成18年3月20日 印刷

平成18年3月31日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 株式会社 足羽印刷株式会社

〒910-8231 福井市問屋団地3-212
